
ブランチ・デッドエンド

nekokuti

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブランチ・デッドエンド

【Nコード】

N67930

【作者名】

nekokuti

【あらすじ】

1999年。

軌道上に突如現れた飛行物体が地球の大気圏に何かを落としているのを早期警戒レーダーが探知。

しかし、何を、何の目的で落としているのかは不明であり、主要国はそれを注視することしかできなかった……。

それから10年。

荒廃し敗北にうちひしがれた地球から、異世界に旅立とうとして
いる青年がいた。

1-1 プロローグ(前書き)

nekokutiが管理しているサイト

<http://www.geocities.co.jp/Tec>

<http://www.geocities.co.jp/Tec>

にて不定期連載している小説と同じものになります。

1-1 プロローグ

プロローグ

葉月も末の夕暮れ時。一階が駐車場になっている研究所の周りに、たくさんの人影がよたよたと近づいていた。

ある者は足を引きずり、またある者は大きく頭を振りながら。赤外線感知式の駐車場の照明が灯り、それまでシルエツトだった人々があらわになる。生気のない白い顔、焦点が合わない目、あちこちがほつれ、汚れきった服。

彼ら生屍は一体一体に限って言えば、動きも頭も鈍重だ。だが、その数と損失を省みることのない行動力がその欠点を打ち消していた。問題はその行動の中身なのだが。

ある生屍が研究所の正面シャッターを揺さぶりはじめると、仲間達も次々と真似しはじめた。

無数のうごめく生屍たちの手はシャッターレールから鋼鉄のシャッターを引き剥がした。内側のガラス製ゲートなどひとたまりもなく割れ、彼らはひたひたと生きた人間を求めて正面ホールにあふれ出した。

天井の蛍光パネルが瞬いて、その場の3人が揃って天井を見た。下で何かが爆発したようだった。

一人は白衣にネクタイという堅苦しい格好で、あとの二人のうち片方は地味な色のユニフォームを着た青年、もう片方は無造作ショートの髪型が似合う制服美少女だった。

「こんなことになってすまなかった」

叔父が苦しそうに謝罪すると、一拍おいて耀生はそれを打ち消した。

「仕方ないですよ。それより早くラボに入ってください」

妹の千華も震える声で、「早くこっちに来て」と懇願した。

制御室とぶ厚い強化ガラスで仕切られたラボは、制御室よりも一段床が低くなっている。フィデス製だと一目でわかる謎の機械がところ狭しと並ぶが、二人がいる部屋の中央部だけは綺麗に片付けられて、本来の白い床が露わになっていた。

貴秀叔父さんの眼鏡には、制御盤の緑や赤のランプが映っていた。手元は見えないが、凄まじい速さでキーボードを打っているのは間違いないかった。三つのことを同時にできるくらい頭が良い叔父が、訥々と単語を搾り出すように喋った。

「もう、少しだよ、耀生君。ここで、研究してるのが、フィデスから、盗んだ、量子デバイスだってことは、知ってるだろう」

叔父から何度も聞いた話だ。

「もちろん。もういいですから」

叔父は質問しておいて、まるで返答を期待していないかのように喋り続けた。

「具体的な研究内容までは話してなかったね。もう守秘義務もないだろうから言っておく。今日、ここは放棄命令が出た。とんでもないことだ」

眼鏡に反射していた最後の赤ランプが緑に転じた。叔父はやっと肩の力を抜いた。

「とんでもないことだよ。やっとだ、やっとマクロレベル実験に着手するところまでこぎつけたのに。この装置は一定の条件を再現することで、こことは別の宇宙と物質をやりとりできる。平行宇宙の人類と戦略的な協調関係を結べる可能性がある。これは戦争を転回させる鍵だ。希望なんだ。でも」

もう、遅い。

叔父のそんな言葉を予期したが、千華の悲鳴がそれを遮った。制御室の鍵がかからないスイングドアの向こうに黒い人影が現れ、気休め以外の何物でもないバリケードであるアドバンテック製純水容器（10kg）の山がぐらついた。

千華は叫んだ。

「早く！」

千華にとって、父を少し若くしたような叔父は、父代わりの存在だ。叔父まで失うなど、千華にとってあってはならないことだった。

スイングドアの曇りガラスに、いくつもの顔が押し付けられるのが見えた。生屍が獲物を前にして、しわがれた呻きをあげる。

叔父の背後のディスプレイが灯り、”90.0”と表示された。同時に棒グラフが赤いラインに向かってゆっくりと上昇してゆく。

「耀生君、千華ちゃんを押さえるんだ」

「なんでよ！叔父さん、貴秀叔父さん！」

千華は身悶えして耀生の手を振りほどこうとした。

時々小学生に間違えられるほど幼く見える妹の意外な腕力に驚きつつ、つかむ手に力をこめた。叔父はめったに間違いを犯さない。確かにここに呼ばれて来たのは間違いだったみたいだけど、ほとんど常に叔父は正しい。

「なんの準備もなしに送り出すことになってすまない。ここは包囲されてしまった」

バリケードが崩壊して、動物じみた動きで純水容器の山をかきわけて、損傷の少ない生屍の一体が叔父にタツクルする。

ラボのスピーカーはキン、と甲高い音をたてた。取っ組みあう叔父を囲むように奴らが覆い、たちまち叔父の姿は消えた。

そのとき一瞬の隙をつき、千華が足下のバックパックをつかんで走り出した。制御室の方へ。

「待て！」

呼び止める耀生を無視する千華。

ラボを囲むように配置された円筒形の装置群、その冷却ファンの作動音が急に跳ね上がった。強化ガラスの向こうのディスプレイの数字はゼロに向かって容赦なく進んでゆく。

8、7、6。

妹が走りながらバックパックをかき回し、妹の手にはずいぶん大きく見えるM92JLを取り出して、そして……………2、1、0。

世界はブラックアウトした。

1 - 2 コスプレ集団さん、どこどこですか？ (前書き)

アクターボ：モンスターの出没する荒地

テルミヌス神：この世界では境界の神

エル：地球の尺度で約1メートル

1 - 2 コスプレ集団さん、どこどこですか？

獣道に近い踏み分け道を横切るように、イトスギやレジノールの影が長く伸びていた。右手にはなだらかな斜面が小ぶりな湖に続き、純白の小さな花、リクニスが夕暮れに沈む草原にアクセントを添える。

月光のように淡い金髪を背中の中ほどで結んだ少女を、二人の先導者と一人の後衛が挟むように歩いていた。

少女は誰にもなく言った。

「ここまでくると誰も住んでおりませんね」

「この辺りはもうアクターボ領域の奥地です。このあたりは今世紀中にオムニ教会が浄化に着手することはないでしょうね」

柔らかな表情をした男が答えた。

「そう、でも、それもいいかもね。こんな美しい場所ですものね」

「そうですね、エリアス様。テルミヌスの加護がありますように。にしても、人の手が触れないが故に美しさを保つ。皮肉ですねえ」

ふと、先導者のうち小柄な方が、急に視線を湖に向けた。

「どうしたの、カリカ」

エリアスよりもそう年上ではないだろうカリカは、赤みを帯びた

茶色の髪を短くしている。明るい日差しのもとでならば、肌もよく焼けて茶色がかっているのも見て取れただろう。帝国の民族としては珍しいことだった。肌色に関しては、野外に長時間いたためだろうか。

ふと、カリカは歩みを止め、わずかに目を細めた。

「この、感覚」

肌がぴりぴりするこの感覚。

エリアスも魔術発動時特有の力の感覚に気付いた。ただならぬカリカとエリアスの様子に、男たちも剣の柄に手を伸ばしかけた。そのとき。

ポン、という音と共に物体が宙に現れ、湖に落下した。

自慢できる視力を有するカリカは、その瞬間、きれいな半球の岩の上に中腰で人が立っていたように見えた。

すぐに半球形の岩は水しぶきをあげて水中に没したから、はっきり見たわけではない。

「なに、あれ」

カリカのどこか呆れたような落ち着いた声にエリアスたちも我に返り、湖の水面を揺らす波紋の中心に向かって草原を下っていった。

走るエリアスの背後を、後衛の男たちが大股でついてきた。カリカが一番最後に湖に向けて走り出したのに、一等で岸に到着した。

見下ろす前で、あわ立つ水面を割って黒髪が現れた。波が押し返す湖の縁から一步はなれて、エリアスが問うた。

「大丈夫ですかー？」

黒髪の、若い男だった。とても混乱しているようだ。

「こっち、こっち」

岸に来るように呼びかける。

どうにか混乱から回復したらしい男は、妙に硬い動作で水をかいて、そこで唐突に足が水底に届くことに気付いたらしい。

水を滴らせ最後の数エルを歩くと、男は地面に倒れ伏した。

気持ち悪い。グルグルバットの後のような、いいや、ひどいインフルエンザで寝込んだときのそれに近いかもしれない。ぼんやりした頭でそんなことを考えた。

後頭部は痛いし、動かすと頭の奥が更に痛い。

……ええと、どこだっけか。

身動きして、頬に微風を感じる。これは、ほごりっばい毛布の匂いだろうか。

不意に目覚めた。いままで嗅いだこともないような匂いだったか

らだ。どう表現すれば良いか。藁と、そう、祖父の使い古した帽子のような匂いだ。

頭上で誰かが話している。

「*****」

声の主は知らない男だった。

半身を起こせば、周りは薄暮の野原だった。足下で潰れた草のにおいが漂う。見渡せば耀生の隣と、焚き火の向こうにもう一人見知らぬ人物がいた。

夢、だったのか？

ゆらめく焚き火のささやかな温もりを有難く思った。周りを見渡すと、あれが夢だという考えが正しいように思えた。

研究所、生屍の群れに飲み込まれた叔父、そして、耀生の手を振りほどいて走る妹。

「そうだ、千華。千華が」

茶色の髪をした細面の男が、困ったように眉をしかめた。

「*****」

その男の言葉はまったく理解できなかった。

そのとき、女の声も聞こえた。同じく意味は聞き取れないが。

周りを再度、よく見てみた。少し離れた場所に、あれは女だろうか。人影二つ。何か蛍光を放つものを手にして立っている。

何かを呟いてそのボールを放ると、それはフラッシュして分裂し、頭上を飛び越え、いくつもの光の矢となって消えた。

女のうち髪が短い方が、近づきながら厳しい声で何か言ったが、耀生には理解できない。

水中に落ちた時に、低酸素状態になった？まさか、と疑問を打ち消した。脳に損傷を受けるほど水中にいたとは思えない。これは一体？

急に不安になり、円周率を暗唱してみる。ちゃんと25桁暗唱できることに耀生は安堵した。暗唱する間も、さっき女が放った火花のようなもののせいで、視野に紫色の残像がちらついていた。

ふと耀生が空を見上げると、視野に何かが映った。それは、真っ暗になりつつある湖に映る月と、二つ目の月だった。月齢9日目くらいのお馴染みの月、それはいい。もう一つ、月の斜め下にずっと小さな光の円盤がある。

目をこらす耀生に、柔らかな感じの茶髪男（どうやら白人さんのようだった）が何か言った。少なくとも英語ではないことは、混乱した頭でもわかった。中学に上がるまで10年間も英会話を学んだのだから間違いない。

よく見れば、焚き火に照らされる女はすっごい美人の外人さんだ。歳は俺より少し上か。と、耀生は推定した。

次いで、こいつらコスプレ集団なのかと疑った。気付けばあからさまに、手元には剣と、防具のようなけばしい装備が積んであった。オモチャというには余りにも質感が高いから、社会人コスプレイヤーが結構な大金を投じているのかもしれない。

戦時下の、このご時勢に？俄かには信じられなかった。

思い切って尋ねてみる。

「ここはどこですか」

反応はない。よく判らない言語を話すばかりだ。次に英語を試しても、やはり誰からも答えはなかった。

恐る恐る、といった感じで焚き火の輪の中に現れた少女（お姉さんも美人だと思ったが、この子には”超”を冠するべきだった）も、小首をかしげて、澄んだ声でもう一人の女性に話しかけた。

どうも、この子はおっとり属性っぽい感じだ。

しばらく何事が相談して、”超”の方の少女が「エリアス」と慎重に発音した。よくあるファーストコンタクト物の小説であるシチュエーションだった。

「ヨウ」

自分の胸を指差し、答える。

「トレンチ、*****」

何か余計なことまで言っているようだ。とりあえずトレンチ、と記憶した。

「カリカ」

かなり間を置いて、「ゲント」

いかにも寡黙そうな太眉の男が名前を明かした。この男もコスプレイヤーなのか？見た目によらないというか、なんと云うか。

ゲントは背後の何かをゴソゴソやって、大きな三角錐の金属筒を焚き火に乗せた。三角形の頂点は円く穴が開いていて、やがてそこから良い香りが漂ってきた。

慣れた手つきで筒をひっくり返すと、筒の内側から柔らかい板状のものを取り出した。

「コーン」

トレンチが口に運ぶ仕草をする。食べ物のような。ヨウが目を一瞬離れたすきに、ナンのようなピザ生地のようなしっとりした食べ物のは手のひらサイズに丸め上げられて、中にはハムがはさまれていた。いや、ハムではなかったかもしれないが、同等の何かだ。

どうやら、三角錐の器具は調理道具らしかった。

耀生は昼食をしっかりとれなかったのを思い出し、有難くそれを受け取った。味は期待通りのものだった。余りにも慌てて食べたものだから、喉につまる。

トレンチがカップを差し出して、「アグア」と、ゆっくり発音した。それを飲み干す。トレンチは笑い声を上げた。

一方、女性たちは不審そうな面持ちだし、ゲントはどう考えているのか読めなかった。

とりあえず、アグア＝水。耀生はしっかりと頭に単語を刻み付けた。アグアではなくアグア。

この人たちは、少なくともインド＝ヨーロッパ語族のどこかの出身なのだろう。もっとも、「極めて怪しい」という形容詞で修飾されるようなインド＝ヨーロッパ語族たちだが。

天空の小さな月や、この奇妙な人たちの存在を説明できそうな仮説はないだろうか。頭の片隅で、そう思案しながら食べていた。

いくつも、ある特定のジャンルに分類される小説を読んできたために、容易に突拍子もない仮説がいくつも湧いてくる。その度に打ち消していた。

まさか、そんな。

ふと、背筋に冷たいものを覚えて、背後を素早く振り返る。今まで生屍から無事に逃げてこれたのも、幸運と、なにより気配に対する鋭敏さのおかげだ。いまでは日本中の、いや世界中の誰でも持っているスキル、というか持ってなければ生き残れない、これは属性なのだ。

耀生は一挙動で素早く立ち上がって、「生屍かもしれない。ここ

は危険だ」と、叫ぶように告げた。

やっと警戒を解きかけていたエリアスが、ビクリと身を震わせた。

唐突に緊張した耀生のことをカリカが不審そうに注目した直後、白銀の光の矢が音を立て宙に舞った。ちょうど耀生が振り向いた方向で。

今度は本気で叫んだ。

「逃げろ！」

1 - 3 この旅は死人が多すぎる(前書き)

オーレオール：発光魔法

テルミン結界：ブラインドの魔法

トラクト：抽出体

サンダー：小威力の攻撃魔法

1 - 3 この旅は死人が多すぎる

先ほど仕掛けたトラップが発動するやいなや、全員が素早く腰を上げた。

カリカがすばやくウォルカをブートして、小規模な発光体、オーレオールを召喚する。彼女のてのひらに現れた青白い光球は楕円形になり、次いで光の槍のように、手のひらの向く方向を照らし出した。

まばゆい光芒に照らされた、多数の揺れる双眸が木々の奥にうごめいていた。異形の者、モンスターだ。

「そんな」

エリアスが小さくつぶやいた。

「ブラインドの術をかけていたのに、なぜ私達がわかったの」

「間違ってたんじゃないの。まったく、これだからお嬢様は」

カリカの言葉は厳しいが、さほど険はない。

「まあ、見つかったものは仕方ありませんね。そこがパペットとトロール、私が蹴散らしましょうぞ」

芝居がかった動きで剣を抜いたトレンチ。いつもながら、緊張感
はあまり感じ取れない。

「гент、力を貸してくれ。エリア様はそこでブラインドをかける。なおしてお待ちください。カリカ、テルミン結界を張ればお願いします。では」

走りだしたトレンチの背中に、カリカが言う。

「ちょい待ち。あたしがサンダーで、ちょっと！」

走りながら、гентは召喚したてのオーレオールを中に放り投げた。コロコロ転がり、そこで強烈な白光を放ち続ける。

エリアスの方はブラインドの呪文を唱えていた。

「チツ、仕方ねえな」

森の縁にさしかかる二人の背中をオーレオールの冷たい光で照らしながら、カリカが毒づく。

トルルやパペット、ギガスのようないわゆるモンスター種族は魔術を使えない。そのための知識がないから。また、理解する知力もない。だから”超越した場所”から大きな魔力を引き出せない。

人族やドワーフ、エルフも赤ん坊以外の誰もが多かれ少なかれ魔力があつて、どうしてもいくらか漏れる。だからシレノスをブートすれば人探しの術ができるし、更にはトラップに応用もできる。

カリカは背後で奇妙な衣服を肌張り付かせてクシヤミをしている。ヨウとかいう男が真っ先に襲撃に気づいたことを不審に思った。なぜ、トラップよりも早く気付いた。まさか人型モンスターの一種だろうか。ヨウの間の抜けた表情は、とても人間らしいのだが。

ヨウはモンスターの放つ微弱な魔力をブートなしに感じたのだろうか？だとしたら途方もなく優秀な魔術師ということになる。

カリカは、目の前で啞然としているヨウの横顔を観察した。

「まさかな」

そう言って、再び森の方角に意識を集中した。

そのとき森の奥がざわめき、甲高い鳴き声と木を叩くような音が伝わってきた。音の方向にオーレオールを向けるが何も見えない。

いきなり青白いサンダーが森から湖に伸びて、水面で爆発した。

「うわあ、大きなサンダーですね」

「いいな、私も撃ちたい」

うらやましそうに指をくわえるカリカ。

数分で勝敗は決したらしく、静寂が戻った。始まったときと同じようにモンスターたちは去っていったようだ。人間を襲うなど、よほど飢えていたのだろうに、やけにあっさりとした引き際だった。

「おーい」

トレンチの声だ。

足を引きずったトレンチが森から姿を現した。

「怪我したのか」

彼は返事代わりに腕を高く掲げた。

「来てくれ、ゲントが」

「ゲントが？」

「すまない、俺がいながら。奴は、クソ、とにかく手遅れだ」

そんな馬鹿な、とカリカは思った。あの程度の連中にあっさり殺られるような剣士じゃない。

血のついた葉の下に彼は倒れ、首には途中で折れた木片が刺さっていた。その目は、死に驚いたように見開かれていた。死人には治癒魔法も利かない。アウトだった。

「ゲントまで」

なぜ、こんな雑魚どもに……。口をついて出そうになった言葉を飲み込んだ。例え死んでいても、故人の前で言うてはならないことはある。

カリカの頭上では、生暖かい夜風が木々の葉をざわりとさせていた。

ゲントをそのままにしておいてパペット化させるわけにはいかない。全員で穴を掘ってそこに埋葬した。埋め戻す前に、念をいれてサンダーを穴の底に横たわる仲間に落とした。

まったく、この旅は死人が多すぎる。これで何回目だろう。

「もうたくさんです、撤退しましょうよ」

疲れと心痛ですっかりしょげ返ったトレンチは、うつむいてエリアスに頼んだ。

困ったような表情を浮かべたエリアスはカリカを向いた。まるで絶るように。

少し間を置いて、カリカは言った。

「私は……トレンチに賛成だ」

エリアスが苦しそうに視線をそらせた。

「あなたの父を思う気持ちは良くわかる。でも今回のタスクは異常だと思う。ゲントは私のマークス・ギルドにいたわけじゃないけど、それなりに腕は立つ方だと思う。それがあんな戦いで逝くなんておかしい」

カリカの表情は厳しい。

「そうそう。城からここまで2人も死んでいます。こんな異常ですよ。空から変なやつまで降ってくるし。荷物も持ちきれませんって。

秘蹟の遺物を手に入れる頃には全滅しちゃいます」

エリアスがやっこのことで反論する。

「荷物持ちなら、えと、ほら、この人がいます」

指差されたヨウは意味もわからずにニヤニヤと間抜けな愛想笑いを浮かべていた。

「こいつはヴィア魔道教会か、そうだ。オムニ教会にでも突き出すべきだ」

カリカは冷たく言い放ち、先ほどからの疑問を口に出した。

「ヨウが起きてから直ぐだったな、モンスターがきたのは。そんな偶然があると思うか」

「しかし。なんですか弱腰になって。お父様を放っておいて死ぬにまかせるとも仰るのですか、あなた方は」

「そ、そういうわけでは」

大人しいと思っていた人物が見せた語気の荒さに、エリアス以外の全員がドキリとした。

エリアスの瞳には怒りの炎が燃えていた。荷役夫を失い、荷車も不運なことに車軸が折れてしまった。食料はなくすし、今度はモンスター襲撃。そんな不運のオンパレードにもめげずに、父のために伝説の秘蹟の遺物を追い求めるエリアスは、実は恐ろしいほどの芯の強さを持っている。

カリカはそのことに気づかないほど鈍感ではなかった。むしろ、自分よりも強靱な精神力の持ち主なのではないかとも思い始めていた。

「どうすれば遺跡までついてきますか？ヨウだって、私たちに恩義を感じて、一緒に同行してくれます。そうですね」

いきなり尋ねられたヨウは何かモゴモゴと言っている。

「言葉が問題ですか？では」

おもむろに立ち上がったエリ阿斯は、ベルトに結わえた何かに手を伸ばした。

「エリ阿斯様、まさか」

「エリ阿斯！？」

「これで私たちの言葉がわかるでしょう。超越した場所におわす古の神々よ、汝アテナよ、我マジにバイパスを開きトラクトを活性化させたまえ」

劇的にエリアスの魔力が増幅されて、長い髪が帯電したように逆立った。体表から熱が放出され、足元から吹き上がる上昇気流が甲冑の端からのぞく袖先をはためかせた。

「そんなに慌ててブーツしたらマズイことに」

エリ阿斯が苦しそうに眉をしかめる。わずかに躊躇して、カリカ

も意を決する。

「仕方ないわね。さあ、トレンチあんたも手伝って」

「え、俺も」

「そう、早く」

アテナが管轄するところのサポートの術を立ち上げて、”超越した場所”とのバイパスを安定化させる。次いでトレンチの及び腰のサポートも加わった。

ゆらり、とヨウに近づいたエリアスの手に握られる小さなトラクト。今やそれは鈍く輝いていた。異様な光景に見とれていたが、危険を察知して慌てて逃れようとするヨウ。手遅れだ。彼の背中にトラクトが叩きつけられた。

まるで吸い込まれるようにヨウのTシャツに輝く卵型の物体が溶けてゆき、ヨウは震えながら膝を折って地面に跪いた。

1 - 4 オムニ歴3696年（前書き）

デフレクト：シールド魔法

ディプティック：大威力の攻撃魔法

トエル：地球の単位で約1キロメートル

1 - 4 オムニ歴3696年

「ぐああああ、熱い」

背骨の中を熱い塊が波打ちながら上に這い上がってきた。

「いったい何をしたんだ。答えろ」

普段の彼は決して無礼な口の利き方をする青年ではないが、状況が状況だった。頭の中に無数の笑顔、怒り、悲しみの表情がフラッシュバックしてゆく。

全く記憶にない事柄を延々と指摘されたけれども、どうにも納得できない。でも、皆の無言の期待に背いて「そんなこと知らない」と主張するには勇気が大量に必要。そんな状況にいたことがあるならこの感覚は理解しやすいかもしれない。

あれ、俺は都立高校に通う学生で農民、弟や妹たちが冬を越せるだけの小麦を……戦時下につき7月21日で3年生は繰上げ卒業に……工房に売られる日、最後の昼食を泣きながら食べる弟たちを……はい、父は一昨年他界しましたので保証人には叔父が……汚らしい平民にはもつたいないほどの……奇病は全世界に広まりを見せつつあり……ここは誰で俺はどこだ？。

「何をしたんだ」

「よかった、ちゃんと喋れますね」

エリアスが笑顔で日本語を喋った。

ヨウの表情が引き締まる。

本当に日本語だったか？どうもはつきりしなかった。

「通じる？言葉通じてるのか。いったいあなたたちは何をしたんだ。いや、それよりここはどこなんだ」

「どこって、ヒレンブランド領から30トエル以上西のアクターボよ」

何度か瞬きをして、何を問うべきか慌てて考える。何か、とりあえず聞くことは……そうだ。

「そつだ、あとあの月の右下にあるやつなんですか」

どつやらエリアスの意表を突く質問だったらしい。彼女は驚いたように眉を上げた。

「もちろん凍月だけど。知らない？あの隣にあるのが重月。ここから見えるのはあの2つだけなの」

アクターボ？凍月？なんだそりゃ。

「お前こそどこから来た。なぜ言葉を話せなかった。答える」

エリアスに代わり、厳しい目つきのカリカが問うた。

「どこって、日本だけど。いや、まさかね。念のために確認したい

んですけど、今年って何年でしたっけ」

顔を見合わせるヨウ以外の面々。

「3696年よ。オムニ歴で」

「そしてここはオムニ氏族連合帝国。おわかり？」

挑発的なカリカ。

「その又ッポンというのはなんなのよ。蛮族か？又ッポン族なんて聞いたこともない。標準語を話せないほどド田舎なのかしらね、ボク？」

「ニッポン。どうにも説明できないんですけど。こういうシチュはアニメでは見たことあるんだけどな。こう言ったら信じてくれますか。あなた方の世界とは違う世界から来ました。とか言ったりしてハハ、え、どうでしょ？」

口に出して言うのと恥ずかしい、というかなんだか怖かった。

「何言ってるんだ、お前」

ヨウを囲む呆れたような表情。

「じゃじゃじゃじゃあ、そうだ、俺のバックパックどこいきました」

周りを見回して、それを見つけた。しっかり濡れたバックをひっかき回す。

濡れた歯ブラシ、炭酸が抜けたコーラのペットボトル、小さな目覚まし時計、中国製のグロックもどき、方位磁針、身分証、デジタルカメラ、ウマイ棒、サバイバルナイフ、サバの味噌煮缶詰数個、封が切られた医療キット。

異世界から流れ着いてしまったという、（我ながら眉唾物も甚だしい）説明をしながら、ガサガサと荷物を引っ掻き回す。

つかんだ手のひらサイズの物体を掲げて、「これ、携帯電話。こんなものこの世界にはないでしょ」

開いた携帯をトレンチがのぞく。

「ふーん。なにこれ」

携帯を開くと、有難いことに起動した。内部にまでは浸水しなかったようだ。ディスプレイの中で日焼けした顔で微笑む友人を指差す。

「これは自衛軍の同僚なんです。ああ、これは」

写真を何枚か財布から出した。親と写した写真の端は折れ曲がり、磨耗していた。それを手渡す。

「ずいぶん綺麗な絵だな」

「本当。写実主義派かしら」

別のもっと新しい写真だ。

「ほら、これが俺でしょ。背景が渋谷駅ね。この銅像みて」

去年の渋谷。平和な最後の日々。学校が半年早く休校になって、進学したかった大学も無期限休校になった。そして数えて18歳以上のほとんどが国家の直接指揮をうける身分になった。つまり、ヨウの場合は徴兵されたのだ。

いつから平和は失速してしまったんだろう。どこから、と明確には言えない。それは、少しずつ染み込むように失われていったように思う。

確信を持ってターニングポイントの一つと言えるのは、10年前のあの事件だろうか。あの頃のことは小学校が休校になったのが嬉しかったという記憶しかないけど。

記憶？ヨウは自分の記憶の不整合に改めて気付いた。

「ちょっと待って。俺は……。デニス？なんでこんな記憶が」

トレンチがあごに人差し指を当て、考え深げに告げた。

「転写したんだ。安静にした方がいいよ」

ヨウは腰を下ろした。

「さっき使ったトラクトの元になった人格だろう。人族語が一瞬でできるように作られたトラクトだよ。遺跡で使おうと思ってたんだぜ。あれは言葉が通じないときの備えだったんだ」

少し声をひそめるようにして続けた。

「それにムチャクチャ高価だ。あーもつたいない」

「トラクト？」

「何にも知らないんだな。デニス君に尋ねてみなよ」

いや、まてよ。

記憶を探してみると、その情報はそこにあつた。まるで、まるで、
そう、意識すれば記憶から引き出すことができる円周率、3・14
159265358979323846……みたいなもの。

月についても、理由理屈はまったくナシに、実用的な知識だけ揃
っていた。

凍月や重月は南の低い空に昇る小月。はるか東の彼方では、凍月
と軽月が昇り、逆に重月は見当たらなくなる。西の彼方では凍月が
見えなくなるといった具合だ。同じ地点から見上げれば、常に天空
の同じ位置で輝く小さな銀の円盤だった。

夜空の天頂近くに、オム二人が”モルニヤ月”と呼ぶ月がかかっ
ているのも”思い出”した。これはとてもよく動く月で、2日で天
を一周するのだった。

「記憶が安定するまでしばらくかかるわ。今日はもうお休みになっ
て」

「そうだぞ。もう日付が変わってるしな。ああ、俺も眠いよ。1時
で交代なんて不公平だ。今からみんな寝るんだから、今夜は3時交

代にしましょうよ。ねえ、カリカ」

カリカは非情にも、こう宣告した。

「決まりは決まりでしょ。あんたは夜明けまで頑張りなさいよ」

「そんなー」

「あの、わたしも寝ずの番しましょうか」

エリアスの遠慮がちな申し出を、カリカが一刀両断した。

「あんたも寝る！お嬢様にそんなことさせられないと、トレンチも判っています。そうよね」

「はいはい、そうですよ」

トレンチが溜息まじりに答えた。

ヨウが見ていると、カリカは剣を太腿に挟むようにして横になった。

有難いことに尋問は明日に延期のようだった。疲れきったヨウの瞼の裏に、走り去る最後の妹の姿が浮かんだ。そして、あの世界に帰る術は恐らくないに違いないと考えているうち、驚いたことにあるという間に眠りに落ちた。

水没したはずの携帯電話が健気にもヨウが指定した時間にバイブ

レーションをはじめた。

目覚まし機能を解除していなかったことを呪いながら、ヨウはうつすらと瞼を上げた。

確か、昨日は午前3時半にアラームをセットしたはずだった。誰かがかけてくれていた毛布の中で手探りで携帯を探していると、すぐそこに3つの月に照らされた人影がしゃがんでいた。

カリカが寝ていた場所だった。

人影はゆっくりと両手を頭上に掲げた。

「なに？」

ヨウの眠たげな小声に鋭く反応して人影が身じろぎすると、そいつが両手で握った短剣が月光を反射して光った。

はっとしたように横になったままのカリカが喘ぐ。人影は一瞬でヨウから視線を離し、短剣をカリカに振り下ろした。

「っっ」

半身をひねって短剣をかわそうとしたが、防具がないカリカの肩を鋼鉄の歯が切り裂いた。

襲撃者の第二撃がカリカの掲げる剣に触れ大きな音を立てた。彼女は間髪入れずに襲撃者の足を薙ぎ払おうとするが、両断されたのは雑草だけだった。

襲撃者は着地してカリカと向き合い、その顔を月光が照らした。

「なぜだ、トレンチ」

「クソ、まあいい。全員始末してやる」

エリアスは、半身を起こした姿のまま凍りついている。

漆黒のフードの影で、トレンチの口の片側が冷笑の形に吊り上っていた。突然、彼の背後から飛来した矢がカリカをかすめ、彼女は後ろに回避した。

ヨウはタオルで包んだ自分のグロックを取り出した。マルイのホビーガンと見分けがつかないプラスチックを多用した武器。オモチヤのようだが、装填された 16 発の銃弾は人を殺せる。素早くセーフティーを外したのはいいが、生屍ではない生きた人間に銃口を向けるのを躊躇した。

トレンチの剣を持つ右手が蛍光を放ちはじめ、急激に発光が増した。彼は呪文に続いて叫んだ。

「ディプティック！」

「デフレクト！」

トレンチとカリカの唱和が重なった。

光と熱の矢がトレンチの剣を離れ、カリカの直前でそれた。一拍おいて、遠くに火柱が立ち上る。地響きと衝撃波が数秒遅れで土ほこりをまきあげた。

トレンチが舌打ちをして、再び呪文を唱える。

「無駄だ」

「サンダー！」

さっきのよりもみすばらしい攻撃はカリカの結界に弾かれた。トレンチの額に汗が浮かんでいた。カリカも同様だったが、彼女のそれは苦痛によるものだったかもしれない。

「トラクトを補充する時間があるかな、トレンチ」

カリカの背後では膝を立てた格好でエリアスも呪文を唱え、シールドを展開した。もはやトレンチの側に奇襲効果はない。

「くっ」

彼は何も言わずに背中を向け、森の方に走り去った。

カリカの周囲を覆う球形の光輝が薄れ、続いてウォルカをブートする。デフレクトで消費したMPを補っている暇はない。

カリカは最短にまで圧縮した呪文を唱えると、ありったけのMPを投じて、「ディプティック！」

強烈な光輝が森の深緑の葉を照らし、葉の影が地面を移動した。そして、光輝が到達して葉は蒸発した。数本の樹木が左右に倒れた。

息を整えて感覚を研ぎ澄まします。

カリカとエリ阿斯はトレンチの魔力を、ごく微かに感じた。

「チツ、逃がしたか」

そう言い放って、直後にカリカはその場に座りこんだ。

「血が出てるぞ」

長袖のブラウスに、ゆつくりと広がる紅い染み。

ヨウが肩に手を伸ばす。

「大丈夫だ。治癒魔法で治す」

「そ、そうなのか」

エリ阿斯が手を伸ばした。今度はカリカも抵抗しなかった。

「あなたMPがないじゃないですか。私が」

「エリ阿斯、あなたも少ないでしょ」

「いいのよ、ほら見せて御覧なさい」

エリ阿斯は微笑して手のひらを傷にかざした。

1 - 5 城への帰還(前書き)

セツル：通貨単位

1 - 5 城への帰還

魔力量（MP）は術者の技量・訓練・体調によって変動する。しかし、どの術者にも共通している項目もある。たとえば、回復速度だ。

自然の回復速度は遅々としたもので、通常は一晩寝ても回復しない。それどころかMP大量消費の翌日から翌々日は酷い体調不良と苦痛でまともに魔術を使えない者がほとんどだ。

そうした欠点をカバーし、魔術の連続行使を可能にするのがトラクトだ。

トラクトは大規模な魔術行使後のMP枯渇状態からMPをある程度回復させる。どの程度回復させられるかは、トラクトの値段によってまちまちで、価格は一個でオムニ氏族連合帝国人の月収を遥かに上回る。

オムニ歴32世紀における人族によるオムニ王国建国以後、長足の進歩を遂げたトラクト技術だが万能からはほど遠い。

1週間に2個以上のトラクト使用は、どの製造業者も厳禁しているのが現状だ。もし複数トラクトの使用が可能になれば、魔術戦の様相は大変貌を遂げるに違いないのだが。

「馬はいないのか。馬車とかないの」

ぶつぶつ文句を言うヨウの背中には山のような荷物が乗っかって
いた。

「馬って？車を曳くターパンならいるけど。車は故障したもんだか
ら一昨日路肩においてきたんだ」

「そつだよな、荷車当然あるよな。こりゃあ、たった一人の人間が
持てる荷物の量じゃないと思つたよ」

「そつだろう、あつはつは」

「笑つてるよこの人。なんで俺が全部……」

無理に明るく振舞うカリカは、横目でエリアスを盗み見た。

エリアスはトボトボと一昨日歩んだ道を引き返していた。

ヒレンブランド城に何の成果もなく帰るのが嬉しいはずもない。
領主である彼女の父の命を救うため決行した冒険行は失敗に終わっ
た。

護衛はカリカを除いて死ぬか逃亡し、怪我を負い、もう長い間ヒ
レンブランドに仕えていたトレンチは敵だった。

この旅が呪われているのかと思うほど多難だったのもヤツの仕業
に違いない。それがわかつて、悲しみの感情しか湧いてこなかっ
た。

今朝のこと。

「陰謀の匂いがする。ここは城に帰還すべきだ」

カリカが重い口を開いた。本当はエリアスにこんなことは言いたくなどなかった。

わずかな期間ではあったが、旅立った当初は絶対に気が合うはずもないと考えられたカリカとエリアスは予想外に気が合うことを発見していた。

誰だって命を預け合った戦友には、容易に友と呼べる絆が生まれる。彼女たちの場合も同じだった。

エリアスだって無論のこと馬鹿じゃない。領主である父の命を救うかもしれないチャンスを潰そうとする者がいることが露見した以上、引き返すべきことはわかっていた。ただし、感情が理論に屈服するまで紆余曲折を強いていただけだ。

「トレンチが……」

エリアスが唇をかんだ。彼はもう10年近く城の警備主任として働いてきた。俄かには納得できないのかもしれないかもしれない。彼の離反は決定的だった。エリアスはついに折れ、城に引き返すことになった。

「とにかく急ごう。そら、キリキリ歩けよ」

カリカはヨウを肘で小突いた。落ち込んだ時、容易に解決できない悩みがあるとき、単調な作業に没頭するのは効果的な対処だということを彼女は知っていた。

これはできれば回避したい試験前なんかに発現することもある。もつとも、後者のそれは単なる怠け心からくるものだ。

状況に流されて荷物持ちになっているヨウ。だけどどこか楽しげに見える。

あまり眠れなかったカリカとエリアスは疲れた様子だが、ヨウはそうでもなかった。絶え間ない生屍の脅威のもとで生きてきた彼にとって、そういったストレスがないらしいこの世界は一息つける場所に思えた。

人間の適応力とは強力なものだ。魔法などというファンタジーなものが存在する世界も、実際に足で歩いてみると、確固とした現実を感じられた。

まるで、日本の北関東の穀倉地帯のように平野に点在する木々の群落、そして服に引つかかる背の高い雑草の海。ただし、樹木の葉は日本における深緑ほど濃くはないように思えた。

肌に触れる空気は乾燥していて、とても過ごしやすい。

橋も架かっていない川や丘陵を越え、やっと人家が見えてきたのは夕方もとつぷり暮れた頃だった。

それでも、一度通った道だから、行きに比べれば遥かに早く道に戻ることができたようだ。

民家といつても、製材されていない丸太を組み合わせた粗末なものだ。窓もなくひっそりと静まっている。家屋の隙間からチラチラとゆらめく明かりが漏れていた。

ある比較的大きめの平屋建ての建物の前で止まる。

「これは宿チエーンなんだ。行きでは泊まらなかったけど、ガイドブックによれば魔道教会と魔術同盟公認らしい」

「ああ、そう。なんでもいいよ、もう。休ませてくれ。疲労回復魔法とかないの」

ヨウの泣き言にカリカは答えた。

「あー、安易に期待するヤツいるんだよな。特に金持ちの腐れボンボンとか。普通に魔術師に頼んだら、回復魔法に幾らかかるか知らないだろ」

「かなり高いんだろうな。でも一日中これを担いでたんだぜ」

宿屋のエントランス、と言うべきか通路と言うべきか判断がつかねる場所にどすんと荷物を下ろした。

靴を脱ぐ習慣はないようだ。ここはヨーロッパ文化圏っぽいから充分予想していたことだけだ。

「相場はそうだな、大体250から300つてところかな」

ヨウが記憶を探ると、標準的な夕食を外でとった場合、1セツル（通貨単位）もしないらしいことがわかった。

「じゅめんなさい、じゃあいいです」

そりゃあ、銭なしの身の程をわきまえておりますとも。そう、皮肉でも言つてやるうかと思案していると、そのときエリアスの緊張を孕んだ声がヨウの注意を引いた。

「車がない？誰が持ち去ったのですか」

領主の娘を前にして、背中を丸めるようにした男が恐縮したようにしている。

「へえ、あんた様方の連れいう旦那がたが村長のとこさきなすつて引き取つていきなりました。懇懃に修理のお礼いつてたそんです」

「旦那つて、どのような方でした」

「どのようなつて、教会の魔術師の方々が着なさるような外套でしたねえ」

「エリアス、車がないのか」

カリカが宿の親父に向いてたずねた。

「その連中はアクターボから来たのか」

「へえ、そのようで」

伝えるべきことを伝えたと言わんばかりに、親父はカウンターの裏にそそくさと戻っていった。

「トレンチか。旦那方ってことは、あたしたちはずっとあいつの仲間達に狙われていたんだな」

「そうなりますわね」

輸送手段がない。ヨウは、酷使されズキズキとうづく手と腰を意識した。いちおう、確認してみた。

「ってことは、この荷物は明日も手持ちになるのかな」

「そうなるな」「そうなりますわね」

エリアスまでシンクロレスポンス！？。ヨウは明日の試練を思つて身をすくめた。

ターパンとかいう使役動物はなかったが、屈強な村の青年を貸してくれた。村長の好意だ。

とはいえ、締め切られた民家の窓や、母親が守ろうとするかのように抱きかかえた子供たちの視線を観察する限り、好意は計算から導かれたものようだった。

わざわざその点についてカリカに意見を求めるまでもないし、エリアスにはもつとするべきではないだろう。これではまるで、あらゆる悪事に手を染めた西部劇の保安官のような扱いだつた。

城主、つまりは貴族とはそれほどまでに恨まれる仕事なのだろうか？

一晩休息してカリカの肩もだいぶ良くなったらしい。今日は歩みに合わせてちゃんと腕を振っていた。治癒魔法恐るべし、といったところか。

とはいえ、治癒するのは肉体だけで、破れた衣服が元通りになるほどファンタジーではなかったので、密かにヨウは安心していた。

道中は割とあっという間に過ぎていった。

植物の知識はあまりないからわからないけど、道端の小さな花は普通のタンポポのようっていて実はディテールが異なっていたし、地面の石畳でエサを探す蟻も体節が普通のと違った。そして南の空には、常に変わらぬ位置から2つの小月が見守っていた。

高校では理系を選択していたから、植物学者や動物学者が見たら卒倒するほど面白いものだらけなのだろうということは推測できた。できる事なら今の立場を代わってやってもいい。

生屍がないのは結構なことだけど、何の因果でこんなことに、と嘆息したいところだった。

1 - 6 敵、出現（前書き）

トリプティック：オムニ帝国でも最強の攻撃魔法の一つ

1 - 6 敵、出現

丘陵に続く晩夏の木々は豊かに葉を茂らせて、街道に日陰を投げかけている。

カリカはそちらを指差し、ヨウに告げた。

「あの丘を越えたら城に着く。立ち木が邪魔してなかったらもう尖塔が見れるだろうな」

「尖塔、ねえ」

距離的には、あと十数トエル程度らしい。荷物もだいぶ負担が減ったし（保存食は節約する必要もないので大部分食べてしまった）、村の青年が半分持つてくれている。

当の青年は村の境を越えた辺りから眼に見えて寛いでいるように見えたが。

村の境界内で厄介ごとを起こさないか監視していたのかもしれない。

人影疎らなアクターボに隣接した村に比べ、領主の城に近づくにつれ人家と、往來を行き来する人は増えていった。

とはいえ、ヨウの目にはここの生活水準は正直ひどいものに映った。

一体何を生活の糧にしているのか不明の若者が、胡坐をかきなが

らヨウたち一行をぼんやりと眺めているのに頻繁に出くわす。

「あのさ、カリカ」

「なんだ。というか、お前なんでタメ口だ」

「大して歳変わらないじゃん。せいぜい25歳、でしょ」

彼女は歩みを唐突に止めた。

「あのなあ。19だよ、19。レディーに向かって逆にサバ読むってありえないだろ。ったく」

ヨウは19に見えねえ。という感想を胸に秘めた。まあ、白人は早熟だからな、と心の中で納得した。

「じゃあレディー様、質問。今から挙げる単語で聞いたことあるのがあったら教えて下さいませでございませよーか」

「ふん、はいどうぞ」

「地球、生屍、フィデス、それに電気、石炭、蒸気機関、飛行船、原子、細菌、進化論」

「うーん、ないね。エリアス、聞いたことある？」

首を振るエリアス。

「ふーむ。じゃさ、ケプラーの、いやこれじゃだめか。地動説、万有引力、微分・積分、羅針盤、三角関数」

「羅針盤くらい知ってる、水に浮かべるあれだろ。他はよく聞き取れないぞ。お前がいた異世界では、そのチドウセツってのは何に使うんだ？」

カリカはあからさまに無知をさらけ出した。

一方、エリアスが唇に人差し指を軽く重ねて視線をさまよわせる。

「確か、私の家庭教師が三角関数という言葉を使っていたと思います。それがどうかしましたか」

「そっか、いやなんでもないです」

ヨウは青空に浮く積雲を見上げ、ひどく人口密度が低い感じなのに、この世界の住民がこれほど貧しいことを納得した。

同時にあの恐ろしくも懐かしい世界が急に遠くに感じられた。少なくとも、科学知識のレベルは中世並みと考えたほうが良いだろう。それにしても、なぜ彼女たちは俺の”異世界から流れ着いた”という怪しさ満点の説明を、なんでもない事みたいに聞き流せるんだろう。

まあ、とにかく一歩前進だ。気をとりなおして質問を続けた。

「世界にはオムニ帝国の他に国ってあんの」

「ああ、あるよ。アクターボに割拠する蛮族を除けば、一つだけ。テクサカ……」

カリカは最後まで言うことができなかつた。

熱気で乾燥した道の先に、塵気楼のように現れた者たちの魔力を感知したからだ。周囲がすつつと薄暗くなる。太陽を雲が遮ったわけでもないのに。

「これは……人払いの術」

ブラインドの術を改造した魔術が発動していた。これ使われるところ非合法活動ありと言われるほど、犯罪者御用達の不吉な術だった。しかも、この遠距離で有効な術を使えるとなると、数人の魔術師が協力しているか、相当な使い手か、どちらかだろう。

「みんな、このまま進むよ」

「でも」

と、エリアス。

「まだMPは空ではありませんか。もし刺客だったら太刀打ちできませんわ」

「だったらこうするまでさ」

カリカは緑のトラクトを手に取ると、おもむろに胸の谷間に押し付けた。ゆっくりと結晶体が皮膚に沈みこんでゆく。カリカの手を握ってエリアスが言う。

「なんて無茶なことを。後悔しますよ」

トラクトの利用は計画的に。使用制限を越えた分はそれだけ術者の命を削ってゆくといい。

片頬をひきつらせ、くいしばった歯の間から搾り出すようにカリカがこたえた。

「後悔はいつものことだ」

ヨウは二人に何も声もかけられず、トラクトが背筋を駆け上るあの感覚を思い出して、ただ背筋を震わせた。

「あんのー、ではこれにて失礼します」

そのとき、荷物持ちの青年が乱暴に荷物を放り出して一目散に逃げ出した。

ヨウの足下に三角錐形の調理器具、通称コーンが転がり出て耳障りな金属音をたてた。

ヨウに背中を向けたまま、不自然な早口でカリカが言う。

「あんたも逃げていいわよ」

恐らくは睫毛を伏せがちに、目をそむけながら。

ヨウは内心、頭を抱えた。それはないだろう。

ゲームなら、ここはデッドオーアライブの分岐点フランチに違いない。こ
ういう場合、卑怯者には死亡フラグがスゴイ勢いで立ち上がるのが

セオリーというものだ。

ちょっと黙り込んで、ヨウは決断した。そして適切な言葉を選ぶと努力して、あきらめた。どんな表現にしようとも、何れにせよ赤面モノのアナクロニズムなのだから。

「姫君と自称レディーを放って行くわけにはいかないな。まったくセーブできないリアルってのは辛いね」

「自称は余計だ」

そして、ヨウからは見えない位置で、カリカとエリアスは揃って小さく笑みを浮かべたのだった。

とはいえ、俺になにができるのだろう。

ヨウは、先ほどまでのうるさいほどの蝉の声が消えていることを唐突に意識した。

「お迎えに参上しました、お嬢様。さあ、こちらに」

そう洪い声で語るのはコントレーラス。ヒレンブランド家の治療師として長い間勤めてきた専属魔術師の男だった。

「その男を拘束なさい、コントレーラス」

ニヤニヤしてコントレーラスの傍らに立つトレンチを指差し、エリアスが厳しい声で命じる。

コントレーラスは無視した。

「さ、手荒な真似はしたくないのですよ」

「お黙りなさい。どういふことが説明なさい」

「ずいぶん成長なされたようですね。結構、ご説明さしあげよう。あなたのお父上はもう充分に統治に励んでこられた。しかし、余りに長すぎた。そう思う者が城内にいた、そういうことです。聡明なお嬢様ならこれでおわかりでしょう」

「私には死んで欲しくないのよね。父を身罷らせ、ヒレンブランドを女の私に継承させて、あなたは法に従い後見統治する。しかる後に私も始末する。違う?」

「よくあるストーリーでしょう。歴史上、繰り返されてきたこと」
指を鳴らすと同時に数人の剣士が突進してきた。カリカは叫ぶ。

「こいつらは捨て駒だ。魔術を使うな」

カリカは素早く剣を抜いた。

いまをおいて他にはない。俺は成すべきときにそれが出来る。そのはずだ。

「どけ、カリカ。俺がやる」

意外そうにカリカは振り返った。

ヨウは、水に濡れてから未だに分解整備していないグロックを手に取り、ちよつと不安を感じつつも両手で支えて引き金を引いた。違法コピーの過程で様々な派生型が生まれている銃だが、どれも暴発事故を防ぐために引き金のスプリングは重くしてある。普通はそれでいいのだが、焦りに身を焦がされるような状況では不便に感じた。

からのペール缶を叩くような音と同時に襲撃者の甲冑にポツポツと黒い穴があき、その場に倒れ伏した。

二人目、三人目。四人目はエリ阿斯と重なっている。射点を確保しようとして移動したそのとき、四人目が爆発した。

「なっ」

驚愕の声をあげるエリ阿斯に、剣士の腹を背後から突き抜けた光の矢が突き刺さった。

彼女は両手足を広げた格好で、後ろに吹き飛ばされた。銀色の繊細な彫刻が刻まれたエリアスの剣が手から離れ、地面を転がってゆく。

「エリ阿斯！」

ヨウは地面に叩きつけられた格好のまま身動きもしないエリ阿斯に駆け寄った。

腹部は防具に守られていない。護符の金糸が縫いこまれた衣服は焼け焦げて、断面は燻る炭のように赤くゆらめいていた。

正視しがたいほど、腹は全体が赤黒く変色していた。

「馬鹿者めが」

コントレーラスがトレンチを冷たい目で見下ろした。

「あの娘は生かすと言ったであろうが。領主の次でなければならぬのだ」

「しかし……」

功を焦り、むしろ大事な商品を傷つけてしまったトレンチはうなだれた。

「もうよい、お前はトラクトを使え」

トレンチは慌てて緑のトラクトを胸に押し当てた。

「来る」

慌てるトレンチを無視し、コントレーラスは短く詠唱する。

「デフレクト」

暗灰色のフードを被ったコントレーラスの周りに、薄い血の色をした結界が形成される。

トレンチは詠唱をはじめたばかりだ。

その瞬間、カリカの攻撃魔法の詠唱が完成した。

「トリプティック（三連の碑）！」

真っ直ぐ突き出した剣から太い光輝が伸びる。

三つのモノプティックの光束が重なり合った、強烈な攻撃魔法だ。

コントレーラスのデフレクト結界にトリプティックのビームが直撃した。

それは硬質な音を放ち四散、それたビームの熱い流れがトレンチをかすめた。

まるで鳥類のような短い悲鳴があがると、トレンチが燃え上がるのは同時だった。遅れて到達した爆風が吹きすさび、トレンチの体から炭のかけらが飛び散る。

爆風が収まったときには、彼の体は街道に伸びる黒い染みになっていた。

「トリプティックか。礼を言う。大強度の攻撃魔法に私のデフレクトが耐えられることを証明できたのだからな」

無傷のコントレーラスが哄笑した。

ヨウの放った銃弾も、全弾が彼の足下や背後の見当違いな場所で土ぼこりをあげるばかりで効果はなかった。

目の前のムカつくオッサンは余裕の口調だ。

「ふむ、お前のそれは何だ。実に品のない音を立てるものだな。まあいい、あとでゆっくり調べてやるわ」

コントレーラスのデフレクトが消え、すぐさま詠唱がはじまった。

「ヨウ、サンダーだ」

カリカの体当たりで息が詰まった。

直後、コントレーラスが掲げた掌から、指向性の電撃のようなものが走った。

サンダーだ。

一瞬前までヨウがいた場所に着弾する。地面に触れていた腕と尻に、何かに叩かれたような痛みが走る。

「はははは。どうした傭兵よ。お前に人助けしている暇があるかな」
カリカは低く呻き、ベルトから最後のトラクトを手にとった。トラクトが彼女の掌の上で震えていた。彼女の指も、体も。

「自殺行為、無駄なことだ。私に命乞いをした方がまだ可能性があるというものだぞ」

「どうだかな」

彼女はトラクトを胸に、いや、もっと上に運び口に含むと、意を決して飲み込んだ。太いそれは喉の奥で詰り、気道がふさがる。

一瞬、そのまま窒息するのではないかという恐怖が彼女の心臓を締め付けた。だがほどなく、トラクトは体内で溶け、吸収され、小さくなっていった。

「なんと思いつたことを。無駄だと言っているだろうに」

苦笑するように、コントレーラス。

通常は飲み込むようなものではないらしい。

今やカリカの顔色は濡れた蠟のように病的な白さを呈していた。足元もおぼつかない。

荒い息遣いで、呪文の詠唱に入る。彼女は割れそうに痛む頭で再びウォル力をブートする。

敵の姿が何度も霞み、そのたびに瞬きをして霞を追い払った。

「デフレクト」

再び、コントレーラスの周囲に淡い赤の結界が生まれる。

「受け止めてやろう。お前の最良の攻撃を」

余裕の哄笑が混じる。

恐らく無駄だ。カリカにもわかっていた。

ヤツのデフレクトは、何か未知の魔法技術で強化されているみたいだ。そんな技術を独りで究める才能があるなら、魔術同盟や魔道教会にいくらでも教授の職があるだろうに。権力の階梯を登るのも容易いはずだ。なぜ小さな領主の座を狙ったのか。

絶望のなかで最後のトリプティックを放とうと身構えたそのとき、何かを手にしたヨウがカリカの前に走り出た。

1-7 ノイマン効果

絶望的だった。

エリアスはぴくりともしないし、カリカは今にも倒れそうだ。そして、まだMP充分な敵。

さつき陳腐なヒロイズムから、この場を逃げなかったのは間違っただ選択だったのだろうか。

ヨウの心臓がうるさいほどに胸を打ちつける。

思わず一步、後ずさった踵に何かが当たった。

これは、コーン。

唐突に、一時期流行した第二次世界大戦が舞台の小説の内容が蘇った。

まさか、不可能だ。しかし。

カリカの体表に魔術発動時特有のゆらめきが現れていた。

躊躇している時間はなかった。ヨウはコーンをつかんでダッシュした。

カリカに叫ぶように頼む。

「コーンを投げる。これを打ち抜くんだ」

大きくスイングして、コーンが宙を飛んだ。

同時に、ヨウの撃てという叫びが響いた。

引き伸ばされた時間のなかで、ヨウはその場に伏せ、コーンはコントレーラスめがけて大きい開口部を頭にして飛ぶ。

シールドにぶちあたったその瞬間、カリカの放ったトリプティックのビームがコーンを包んだ。

コーンは強烈な光輝に飲み込まれた。

刹那、コントレーラスのシールドは内破して、同時に太陽の陰りは消え去った。

人払いの術者が消えたのだ。

トリプティックの遠雷のような残響に驚いた鳥たちが、周囲の森から飛び去った。

炎が収まった後には、広範囲に散らばった赤黒い煤以外に、人がいた証拠はどこにも残っていなかった。

産業化以前のヨーロッパの城というものを見たことがないから比較のしようもないが、城は時代性を考慮してもなお、驚くほど何もなかった。

ガラスのはまっていない石造りの窓、絨毯はどこにもないし、あ
るのは頑丈そうなオークの家具がいくばくか。そんなものだろうか。

「コントレーラスを倒したあの日から3日が経っている。その間、
ヨウは客人としてもてなされていた。」

窓からは気持ちのいい木の香りと、もはや慣れっこになった堆肥
のような臭気が漂ってくる。

城を囲む城壁は大部分が石造りになつてはいるが、一部は荒削り
の木の杭で代用されていた。人口は、目に見える限り彼方まで合計
しても、実家があった立川市を構成する一つの町にも及ばないに違
いない。

コツコツとノックの音。

「どつぞ」

ノックの主は、歩けるほどに回復したカリ力だった。

「どつだ、昼一緒にとらないか」

彼女は両手にトレイ一杯の料理を抱えていた。オーク材のテーブ
ルに料理を並べると、さっそく果実酒を差し出した。

ヨウはそれを大人しく飲む。実は、城に到着した夜、生の水を飲
んでひどく後悔していたからだ。

ヨウが未成年であることを指摘する司法組織は、手の届かない遙
けき彼方だ。特に問題ないだろう。

「エリアスの調子はどうだい」

「まずはあたしの心配をしろっての」

カリカは怖い顔をしてみせた。

「その調子なら問題ないだろ」

ヨウは笑みを浮かべてアルコール度数が低い果実酒を口に含んだ。

カリカも皿に載つたいいい香りのする狐色のコーンに、塩辛いハムを挟みながら楽しげに喋る。

「ああ、そこいらの傭兵と一緒にするなよ。私は打たれ強いんだ。ところでエリアスだけど、お前のくれた合成抗生物質とやらが効いたみたいだ。教会の魔術師も驚くほどに回復してる」

領主であるエリアスの父も、コントレーラスが滅びてからは快方に向かっているらしい。

ヨウもコーンを頬張りながら答える。

「エリアスに治癒魔法を使ったのか。そうだよな、あの傷じゃ普通助からない」

「そうだな。まあ、それにあいつはもともとメトセラ処置を受けてるからな」

「メトセラ？」

一拍の間。

カリカは不自然に話題を変えた。

「そうそうそう、ところで、ヤツを倒したときのアレはどうやったんだ」

「最後のアレか」

「そ、あたしの2回目のトリプティック。1回目より間違いなく弱かったのに、なんでヤツの薄気味悪いデフレクトを貫けたんだ」

「そうだな、大量の奇跡を主原料として、ちよっぴり科学をふりかけたんだよ」

「どういうことだ。はぐらかすな」

ヨウはいちばん柔らかそうなコインを一つ手に取り、カリカの前でそれを丸めた。

カリカは困惑したようにパチパチ瞬きした。

「俺が投げたコインの形を思い出してくれ。こんな三角錐をしてるだろ」

「そうだな」

「さしものヤツのシールドも、音速の5倍に達するメタルジェットには敵わなかったんだ。つまり、こいつはノイマン効果を利用した

成形炸薬弾の弾殻ってわけさ」

意味がわからずに小首を傾げるカリカに微笑みかける。

これから俺はどうなるのだろう。未来はわからないけど、この世界で俺ができることもありそうだ。

いや、今はよそう。傷だらけの美女と食事できるチャンスなどそうそうない。このイベントはこれで楽しむべきだ。次のフラグが立ち上がるまでのうたかたの幕間劇だとしても。

こうして、ヨウの選択ははじまったのだった。

2 - 1 休息日に神々は訪れ…… (前書き)

では、セーブファイルをロードしよう。

2 - 1 休息日に神々は訪れ……

ヒレンブランド城下の複雑な路地は、城から放射状に延びた大通りにつながっている。

大通りは石造りの建物や背の高い建物が連なり、賑わいをみせていた。

ただし、いつもこれほど賑わっているわけではない。もうすぐ、”休息日”がくるからだ。

ハム魔術同盟の休憩室。周囲の長椅子に何人かいた先客が、休憩室に入ってきた二人組に無遠慮な視線を向けていた。

それは仕方ないだろう。なにしろ、入ってきたのは近頃噂の城の客人なのだから。

「エリアス、わかるかな」

ヨウは部屋の入口を気にしていた。買い物を頼んだエリアスが、自分たちを見つけられるか心配したのだ。

「ああ、入口に”休憩室”って書いてあるから大丈夫だろ」

「ふうん。そっか。じゃ、大丈夫だな」

「文字が読めなくて不便だな、ヨウ君」

「何ニヤニヤしてんだよ。読めないのは教師が悪いからだ。きつ

とそうだ」

ヨウはこの世界の言語を使う上で日常会話には困っていないが、文字がほとんど読めなかった。そこで、領主のご好意で静養している間、カリカが文字を教えてくれていた。

既に発音がわかっていているから、アルファベットをマスターすれば文字を書くのにさして苦労しないだろうと想像していたけど、間違っていた。この世界の単語のスペルは英語と同じで面倒な癖があった。

ドイツ語みたいに規則正しかったら良かったのに。ヨウはそう愚痴をこぼしたかった。

「みなさ〜ん」

淡い金髪の少女が両手に器を持って近づいてきた。

「床、段差ありますよ」

ヨウは腰を浮かせて警告した。

ガツ。

「キャ」

余りにも予想通りに、エリアスは段差につま先を取られる。

「おっと」

すかさずエリアスの肩を支えた。

「あ、ありがとうございます」

「大事なくてよかったです」

会ったばかりの頃は知らなかったが、彼女は言わずもがなの、あの属性の持ち主だ。

誰でも助けたくなくなる人だからなあ。守られてきたんだろうな。でも、守られすぎちゃってこんな属性をゲットしちゃったんじゃないのかね。

「これ、あなたの」

「ども。悪いねエリアス」

「ヨウさんも」

エリアスは飲み物を手渡してきた。

「ありがとうございます」

容器には緑色のドロツとしたゲル。カリカが平気で口にすることを確認してから、ヨウはそっと飲んでみた。

「……………旨いかも。」

あれ？

「エリアスさんの分は？」

「いえ、わたしは」

なんだ、ダイエットだろうか。

「三つ持てなかったんだろ、エリアス。そういうのはメイドがしてくれから」

「ええ、実はそうなの。給仕の方はどうしていたかしら」

カリカが言ってるんじゃないかなければ、嫌味ととられかねない発言だ。

「給仕はお盆使いますから気にしないで」

なぜかヨウがフォローした。

我ながら思う。優等生的なあたりさわりのない発言だな、と。

ヨウは自分の堅苦しくてなかなか打ち解けない性格にちょっと嫌気を感じた。そして、ふと気付いた。カリカだけは平気なんだよな。

そのカリカがやたらと大きな声を出した。

「そうだ、ヨウの分けてもらいなよ」

「と、と、とんでもない！結構ですわ」

そんなに強く否定されるとちょっと傷つく。

ふと気がつけば、カリカは楽しそうにしている。なに余計なこと
言っていないやがるか。

カリカの都合で引つ張り出されたわけだが、カリカはどうやら”
休日”の仕事の打ち合わせをしたいらしい。そのついでの市内見
物だった。

「休日なのに仕事すんのか」

なぜかカリカは浮かない表情だ。

「まあな。休息するからこそ傭兵が必要なのだ。今回は外郭塔の
守備にしたよ」

どういうことだろう、傭兵が必要だとは。移植された記憶を探っ
てみると、年4回の行事らしい。春分、夏至、秋分、冬至。そうい
えばもうそろそろ秋分のはずだ。

「ヨウさん、休日には、超越した場所におわす十三の神々は現
世に姿を現すのです。そのために魔術師は力を失ってしまいます」

「魔法が使えなくなるんですか」

エリアスはうなづく。

「1日だけです。そして、モンスターの活動も盛んになるので、
城壁内に人が集まるのです」

「それに、テクサカが妙な動きをしないと限らないしな。実際、
以前休日に奇襲されたこともある」

「ええ、3645年と3660年ですね」

「ふーん。だから傭兵が必要なんだ。なるほど」

「まず奇襲なんてありえないけどな。あつたとしてもここから遠い国境地域のことだし、あたしたちには関係ない」

なぜかカリカは何か気になることを抱えているように思えた。見回せば、あちこちで数人ずつ、傭兵たちがなにやらヒソヒソしている。

「ヨウさん、明日は一緒に神々自身の光臨を見ましようね」

「え、ああ、はい」

神を実際に見れる？いくらファンタジーな世界だからって、神が現れるとは。

「楽しみですね」

興味深い経験になるだろう。

ヨウたちの遥か頭上では、そろそろ秋の気配を感じる高い空に、凍月が白々と浮かんでいた。

2 - 2 あなたは、不死ですか？

エリマスによると、この一月で城内の雰囲気はとても良くなっているらしい。

領主はともかく、次期領主の可能性もあるエリマスはすっかり健康を取り戻した。

封建社会では領主の世襲が安泰なのは何より有難い神の恩寵なのだろう。

例の事件のあと、城内のコントレーラス派の粛清の嵐が吹き荒れた。早朝暗いうちに、何人もの使用人がヒレンブレンド領を追放（というか夜陰に紛れて逃亡した）されたと聞く。その影響で、城内には新人の姿が多くなっていった。

「ほら、もうすぐ始まりますよ、エリマス様」

そう明るく告げたのは、先代のメイド長が去った後にそのポジションに抜擢された中堅メイドのノエ。そう呼ぶのはエリマス以外の者だけ、エリマスは律儀に姓しか使わない。

「あら、もう?？」

「こちらにお飲み物も置いておきますね」

「ありがとう、アリセア」

ノエ・アリセアは何年もエリマス付きのメイドをやってるらしい

のに、エリ阿斯は他人行儀だった。

「明かりを消しますから、ニシミヤ様もバルコニーへお早く」

蝋燭の明かりがフツと消えて、窓から差し込む月明かりが足元を照らしていた。因みに”西宮”は名字だ。

「では私はこれで」

エリアスの部屋から早々に辞去しようとするノエ。

「アリセアも今日はもういいわ。休息日を楽しみなさい」

ばかに長大な飾り扉の前で、ノエは一礼して去っていった。

「さあ、どうぞ」

「ありがとうございます、エリ阿斯さん」

「もう、なんで”さん”付けなんですか。城外のときみたいにエリ阿斯”でいいのですよ」

「そ、そうかな。いや、でもここはあなたの実家なわけだし、なんか呼びつけにせずらくて」

「御気になさらないで」

「じゃあ遠慮なく」

名前を呼びつけにしていると言われて悪い気はぜんぜんしない。

誰でもそうだろう。特にこんな美人に言われたら。

半円形のバルコニーは、早くも肌寒くなりかけた夜風がよく通る。

この高い位置からは城下の街路を行き交う人影がよく見えた。いや、行き交ってはいいない。多くは夜空に視線を向けているようだった。

「もうすぐです」

「本当に神様が？」

「ええ。月をご覧になって。ほら、今」

オムニ教会の鐘が鳴った。

凍月の背後から何か、白いものが湧き出し始める。

「あれは……」

月の左右からゆっくりと広がる白いもの。

「あれが光の翼です。十三の月におわす神々が羽を伸ばしておいでなのです」

エリアスの指差す重月からも、純白の翼が伸びていた。それはまるで、そう、まるで蒸気のように純白の何か。目をこらすほど、それは小月から排出された蒸気のように思えた。

だが、ヨウの故郷でも見慣れた普通の月から白いものは出ていな

かった。

「大月には神様はいないのですか？」

「ええ、もちろん。あの月は境界の神テルミヌスの家よ。天球の一番外側で結界を張る役割を果たすのが大月。その向こう邪神”アイ”の領域なの」

「天球の向こう」

「そう。大月は天球の表面を28日毎に巡回して、天に開いた穴を、そうね、点検している」

「天に開いた穴つてのは、つまり……星のことですか」
何を当たり前のことを、と思われたらどうか。

そんな思いをよそに、エリアスは嫌な顔一つせずに答えてくれる。

「正解です。天球の向こうは白熱の炎に満たされているわ」

そこまで言って、エリアスはいかめしい表情をした。

「ヨウさん、あなたはオムニ教のことも帝国も知らなかった。あなたは」

「エリアス、あなたも俺を”さん”付けで呼ぶんですね。ヨウでいいですよ」

エリアスは微笑んだ。

「あ、失礼しました」

二人の声が重なった。

「俺は……」 「ヨウ、あなたは……」

表情で先を促した。

エリアスはためらいがちに質問した。

「あなたは、不死ですか」

「え？」

「その、だから、あなたは神々が遣わした”救世主”ではない、か、と」

エリアスの語尾は小さくなって途切れた。

「なんでまた俺が？ エリアスみたいに魔術も使えないし、何もできないし」

「でもモンスターではありませんし、無から出現したでしょう。だから」

「消去法で、俺のことを神が地上に放り出した天使だかメシアだかそういう存在だと思ったのですか」

なんてこった。

「違うのですか？あなたはてつきり超越した場所、稲妻の走るという天界にいらしたのだとばかり思っております」

「以前話した通り、俺は地球の日本と呼ばれる地域から飛ばされてきたのです。叔父が研究していたマシン、それはフィデスという悪い奴らから分捕った部品で作りました。叔父はそれを人類の勝利のために作っていたのです。しかし、色々な偶然が重なって、俺がこの世界にくるハメになったんです」

エリアスは一拍おいて、こう尋ねた。

「この世界はお嫌いですか？」

なぜそうなる。ヨウは困惑しつつも答えた。

「いえ、素晴らしい世界だと思います。生屍もいませんし、いや、モンスターや魔王はいるんですよ。でもあちらよりかなりましです」

「そうですか、ではこの世界を見捨てて天界に帰ったりはいたしませんね？」

「もちろん帰れません。ええと、天界ではないですよ。申し訳ありませんが救世主でもありません。人間です、ごく普通の」

「本当に？」

エリアスの持ち上げられた眉が疑問を無言で伝えていた。

「本当です。実際、魔術も使えませんし」

「ただの人間でしょうか。あなたが現れたとき、確かに魔術の波動を感じました。それに」

まあいいわ、とでも言うように軽く肩をすくめる仕草をして言う。

「来年。ヨウには言ってもかまいませんわね。ええ、そうに決まっている。来年の春分、敵の油断について、オムニ氏族連合帝国は“アニバーサリー”を発動します」

「アニバーサリー？」

「そうですね。3697年、来年は魔王率いるテクサカとの長い戦争が始まって100年目なのです。来年こそ邪神の目論見を崩すため、我が国はテクサカに侵攻しようとしています」

「なんだか、エリアスが戦争なんて単語を使うのは奇異に感じます」

ヨウは辛うじてそれだけ言った。

「そうですねか？こう見えても私は辺境領北部タイル防衛軍の将校なんですよ。正確にはヒレンブランド連隊の連隊本部付大尉です。意外でしょうか」

「え、ええ。ああ、すいません。でも連隊ですか。3000人を従えているんですね」

軍人さんだったとは驚いた。そういえば、エリアスは偉そうな人

とも会っていたしなあ。

「い、いえ。3000人なんて。連隊といったら1000人なのです。それにわたくし、お飾りさんみたいなもので、だから連隊本部付、なのです。だから、魔術師だけど魔術大隊には所属していません。わたくしの従兄弟が指揮をとっています。……ヨウは戦に強い女性がお好みですか。その、カリカみたいな」

「そんなことないですよ。というか、エリアスは正規軍、カリカは傭兵なんですよ。個人的戦闘力はともかく、本格的な戦力としては正規軍の方がよっぽど強いですよ」

「正規軍？ヨウはわたくしの知らない単語をよくご存知ですね」

「そうですね……では、エリアス。オムニ帝国の軍隊は、常に定数が維持されていますか？」

「定数というのは動員後の人数ですか？なら、違いますよ。連隊の兵は平時には傭兵として自らを養います。わたくしのような将校も半給になるので、普段は別の仕事をしています」

「そうなんだ」

少し遠い目をしていただろうか。実際は、この世界の軍事制度について物思いしていたのだが、沈黙をどう捉えたのか、エリアスはこう言った。

「ヨウは邪悪なテクサカの魔王を滅ぼすために遣わされたのではないのです。では、何のために……いやだ、ごめんなさい。違うんです」

彼女は失礼にあたる質問だと思ったのだろう。ヨウはおどけて言った。

「いいんですよ、どうせ俺は無駄飯喰らいの役立たずですよ」

「違うんです。ごめんなさい。なんでこんな話をしてるのかしら、わたくししたら。せつかくの休日なのに」

この世界についてずいぶん詳しくなつたと思っていたのに、こんな基本的なことを知らなかったなんて。1カ月近くこの世界で暮らして、戦争中だなんて誰も言っていなかった。ただ、邪悪なテクサカ、凶悪な魔王という表現は、慣用句のように使われていた。

もはや戦時が普通になっていけば、ことさらそれを意識もしなくなるのだろう。しかし、100年続く戦争とはどんなものなのだろう。

ここでの戦争に、少しでも故郷の戦争と似たところがあるならば、それは心胆寒からしめる現実だろう。思い起こせば、思い当たることだらけだ。

垢じみた衣服を大事そうに着る民衆、木組みの粗末な家々、やたらという傭兵、目を瞪る驚異的な攻撃魔法……。

そうか、ここは戦争が生活の一部になつた世界だつたんだ。

2 - 3 歴史講義（前書き）

歴史講義

2 - 3 歴史講義

この数ヶ月でずいぶんエリアスとは打ち解けてきたと思う。領主のお嬢様自ら貴重な時間を割いてくれるのだから、申し訳ないやら有難いやら。

その気持ちに少しでも答えようと、ヨウはエリアスに対し友人のように振舞うことにしていた。

歴史を学ぶなら教会。ということ、ヨウはエリアスに連れられてヴィア魔道教会に顔を出すことになった。どうやらハム魔術同盟とは別系統の魔術組織らしい。

4階建て程度の高さの塔が立つヒレンブランド・オムニ教会の敷地内によりそうようにして、ヴィア魔道教会の建物があった。

付属の教会墓地は真新しい白い墓石が処狭しと並んでいる。

遠くから見ていたうちは気付かなかったが、教会の敷地に足を踏み入れる頃には教会に来たことを後悔しはじめていた。

何だかひどくバイアスがかかったご都合主義的歴史が披露されると確信したからだ。

なぜそう言えるかって？

「あのー、エリアス、これ教会だよ。なんか邪教の神殿っぽい

「ただけど」

「邪教、という単語が耳に入ったのか、そばにいた神官らしい男が立ち止まって振り返る。」

「じゃーきょうの夕食は何にしましょうか！（ヨ、ヨウ。あなた正気ですか。こんなところで。邪教は邪神アイを信奉するテクサカでしょ）」

「そう、ささやくエリアスの頬は引きつっている。」

「ヨウは心から反省した。」

「じゃーきょうはお肉がいいな（エリアスごめんなさい。違って、そういう意味ではなくて！）」

「うさんくさそうに、庶民に変装したヨウとエリアスを交互に睨んだ神官が立ち去った。それを確認して、ヨウは教会を再度見上げる。」

「でもさエリアス、この壁一面の白骨なに？」

「モンスターの骨に決まっていますわ。中央に埋め込まれてるのは大型のモンスター種族、ギガスの骨です」

「両サイドのオブションみたいなのは猿、じゃないね」

「ええ、トルルですね」

「不気味な骨の祭壇。オムニ教の教会と知らなければ、間違いなく極めてヤバイ邪教崇拝者の巣窟だと勘違いするところだ。」

本当にここでまともな話を聞けるのだろうか。疑問に思えてきた。

正面扉が重々しく鳴ってうつろな音が響いた。明るい室外に慣れた目が、ゆっくりと薄暗い室内に暗順応してゆく。

ヨウは感嘆の声をあげた。

「これはすごい」

「嬉しくおもいます」

エリアスの口調はいつもより堅苦しい。

「エリアス、まだ怒ってますよね。ほんと失礼しました」

「本当に反省しているのかしら」

どこかいたずらっぽく怒るエリアス。

「本当ですよ。この壁画の素晴らしさも」

科学技術が発達していないからといって、芸術を生み出す工芸技術が劣るわけではない。そんなことはわかっているつもりだったけど、この細密な壁画には驚いた。

「でも、あれは何でしょうね。城の食堂にもあったけど」

斜め上45度上を指差す。

そこには、ゴージャスな額縁に小太りなオッサンの肖像画が。

「何って……オムニ教の始祖に決まってるじゃないですか！」

「ああ、ですよ、やっぱり」

偉大なるマオ様や將軍様じゃあるまいし、こういう肖像画を飾る心はヨウには異質に思える。つつい、こつ言いたくなった。

「イエスキリストはこいつに比べれば相当美形と言えるなww」

そんな不敬な考えを知らぬが仏、エリアスの解説がはじまった。

ヨウはあわてて入口付近の壁に正対する。

「入口から歴史が綴られています」

オムニ歴、つまり聖暦0年がオムニ教が出現した年だった。

「いきなりで申し訳ありませんが、この時代のことは、実はよくわからないのです」

ヴィア魔道教会の守衛がいなくなるのを確認すると、エリアスは饒舌に説明をはじめた。

「2000年頃、”分裂”によって天人と人の系統が分かれまし

以後、人は更にナチュレとリモデルドに分裂したのです。このナチュレが人族の直接の祖先です。各地に残る聖遺物はこの時代の末期のものだと言われています。」

小さな人間が天を見上げる絵が描かれている。

「あるとき、天人は幽界に潜む邪神アイにナチュレの居所、つまりわたくしどもの世界を教えました」

”アイ”と言うとき、エリアスは汚いものを見たかのような口調になった。

次の壁画は、天も地も赤く染まっている。

「アイは天空から人々を脅しました。そのとき、リモデルドは脅しに屈し悪魔の手先としてみじめなモンスターとなることを自ら選択しました」

リモデルドの体が右から左に向けて変形する様子が描かれている。それは人に似た姿からおぞましい化け物への変化だ。

「天人にも故郷を思う気持ちかわずかとはいえあったのでしよう。

彼らの一部がオムニの神々に助けを求めましたが、全ては遅かったのです。」

地上は焼かれ、13の神々のお力によってアイが天の向こうに追いやられた時には、常々神々を軽んじてきた罰か、ナチュレは彼らを偉大たらしめていた力を失っていたのです。」

そして、アイの放った毒は大地と空気に呪いをかけ、人族以外の異形の者を生み出す元となったのです。

アイは穢れた天空の向こう側から必死でわたしたちの祖先を攻撃しました。

しかし境界の神テルミヌスが十三神の指示に従い大月の姿をとって世界を守ってくれたので、無数の穴はあきましたが世界は守られました。

その名残りはいつでも見ることができます。星々です」

それから1000年分の空白は、人族や人に似た姿形の存在が相争う光景が広がっている。

近くに寄ると、油彩だろうか、ひび割れた塗料が小さな山脈のように盛り上がって塗られていた。

そして、次の場面では3174と輝くローマ数字から発する光が地上を照らしている。

どついつ寓意がこめられているのか。

「3174年、スリミア大教国の教化兵团、つまり今の教兵ですね。彼らがオムニ王国を建国しました。スリミア以外にも幾つか国があったようですが、今でははつきりしません」

「このあたりで炎系、治癒系、防御系魔術が誕生して、わたくしたちの生活はより安全で豊かになりました。

そして35世紀半ば頃、エルフ女王クワナを中心にとまった三氏族連合軍と人族軍が不幸にも激しく戦いました。もちろん今は皆仲良くしていますよ」

壁画の中で人に向かって剣を構えるのは、街でも何度かみかけたことがあるエルフ族やドワーフ族なのは明らかだ。

「いよいよテクサカが登場します。邪神アイの一の腹心、魔王エルモと、彼の爛れた妾姫サイン。

3585年、魔王は傲慢にもわずか数人を従えて帝都スリミアに乗り込み、聖遺物アルトゥリ・ムンディを差し出すよう求めました。

もちろんオムニ教会はこれを拒絶しました。当時は今のような要塞教会もなく、アルトゥリ・ムンディは全ての民衆の前で、むきだしで偉容を誇っていたそうです。

事件以後、聖遺物は要塞教会の奥に隠されました。致し方ないことですよ、ヨウ」

「はい。すると、魔王エルモは得るものもなくすぐ帰ったわけですね」

「ふふ、そうですね。でもそれで大人しく引き下がるわけがありませんでした。魔王ですからね。

3597年、突如として魔王率いるテクサカ軍が当時の辺境に現れ、帝都目指して侵攻をはじめました。これがいまでも続く聖戦、オムニ・テクサカ戦争です」

「テクサカというのは……………」

「テクサカは魔王の手足として貢献する悪魔の国です」

恐ろしい風体のモンスターの群が、人族の兵士を圧倒する様が描かれている。そして、周りから異形の者が人族に駆けつけてくる。

「そして、それまで人族と反目しあっていた異形の者たちは真の信仰に目覚め、時に3605年、主要四氏族が協力してテクサカに当たることになりました。」

これがオムニ氏族連合帝国の成立です。あとは説明するまでもありません。偉大なる神に見守られ、わたくしたち帝国軍は勝利に勝利を重ねて今に至るのです」

最後のほうは、エリアスの息づかいは興奮したように荒くなっていった。あのおしとやかで落ち着いたエリアスはどこへ……………」

「あと一息で邪悪な企てを阻止できます。そうです、勝利の最後のページは、わたくしたちが記すことになるのよ!」

ヨウは驚いてエリアスを見た。

「よく……………わかりましたです」

1世紀もの間、オムニ氏族連合帝国は勝ち続けた、と彼女は説明した。

しかし、ヨウは言い知れぬ恐ろしさを感じていた。あのエリアス

を狂女のようにさせるこの戦争は、他の人々の精神にも食い込んで、じくじくと血を流し続けているに違いない。

いや、ひよっとしたら傷口は化膿して毒素を撒き散らしているのかも。だとしたら、病んだ精神の見る大勝利は、本当に額面通りのものと言えるのだろうか。

急に、天井の高い魔道教会の室内が涼しくなった気がした。

そして、目の前に立つエリアスの上気した頬を、冷えた指先で包んでやりたいと、ヨウは思った。

2・4 トラクトの原料って(前書き)

城において、ファンタジー世界の暗部がまたもや少しだけ、その尻尾を垣間見せた。

2 - 4 トラクトの原料って

貧しいけど素朴な住民が、都会の喧騒に疲れたあなたの魂を癒します。冒険と出会い、別れ、そして友情。時には愛。それがファンタジー世界の王道というものでは？

そんなことを考えながら、ヨウは手元の羊皮紙に練習がてら、学んだことを書き留めていた。

書き留めるといっても、ただたどしい単語ばかりの羅列に過ぎないのだけでも。

「ここでも戦争か」

思わず溜息がでる。

気分が落ち込むのには、部屋の暗さが一役買ってるような気がした。昨日までは、蝋燭の明かりの下で字の練習をするのは、一種独特の静謐な雰囲気があって、気に入っていたのだが。

コンコン。

廊下を渡る足音が、ヨウの部屋の前で止まり、ノックされた。

「ヨウ様、燭台に不都合はありませんか」

その幼く聞こえる声は、新入りメイドさんのものだった。

「ああ、お願い」

失礼します、と小柄な女の子が蠟燭の束を提げて現れた。

「いつも悪いね」

少女は驚いたようにヨウを見て、すぐに視線をそらせた。

「ヨウ様くらいです、私たちなどに丁寧に接してくださるのは」

「そんなことないだろう、エリアスなんかいつも丁寧語を忘れな
いじゃん」

確か、そうだったはずだ。違っただろうか。

少女はどこか悲しそうに微笑んだ。

最初はものめずらしく感じた使用人たちのことも、慣れとはおそろしいもので、次第に空気のように感じられる。

「きみ、いつもどうして蠟燭が短くなるのがわかるの」

「ええと、その、それが私の役目ですから」

「役目だとしてもすごいよ」

「そんな」

褒められるのに慣れていないのか、頬を赤らめる少女。

「私は前にお勤めしていたお屋敷でも火の番をしていました。それでなんとなくわかるんです」

「ふうん」

どうやら彼女は何年もこの作業をしているらしい。いったい、何歳から蠟燭の炎ばかり眺めているのだろう。

「ねえ、少し教えて欲しいんだ。俺はこの世界のこと何も知らないから。難しいかな」

まずは、ええと……そういえば知らなかった。

「きみ、名前は何ていうんだい」

「ア、アルティマです」

アルティマは、なにか言いたそうにしている。手振りで言うように促した。

「他の方は私達の名前など気にしません。ヨウ様くらいのものです」

「そうかな。そういえば君の名前、よくある名前なのかな。城の外でも聞いた気がするよ」

「はい。よくある女の子の名前です。”最後”という意味です」

「そうなの？」

アルティマはわずかにうつむいた。

「もうこれで最後の子になりますように、願ってつける名前です」
そんなことって。少子化の時代に生まれたヨウには、そんな名前を付けるセンスが理解できなかった。

でも、思いなおす。日本にだって、スエやタエという名前があった。そんなに昔の話じゃない。これ以上赤ちゃんができませんよ
うに、という願いを子に押し付けてもしようがないだろうに。

「わたし、もう行かないと」

「ごめん、仕事の最中に呼び止めちゃって。でも、こんな夜更けまで起きてるのは俺くらいのものでしょ。仕事切り上げる前に、この世界の農業手法について教えてくれないか」

「のうぎょうしゅほう？申し訳ありません。難しい言葉はわかりません、ヨウ様」

アルティマは申し訳なさそうに、ぎゅっとエプロンを握っている。背後の扉を方をチラリと見る動作をした。

「そっか。じゃあアルティマや他の子供たちが行った学校は何年制だい。学校制度について教えてくれないか」

「.....」

うつむくと、アルティマは静かにぼろぼろ涙をこぼした。鈍感にも、ヨウは今頃になって使用人を困らせていることに気付いた。

「あ、ごめん、悪いこと聞いたか、聞いたよね」

「ぐすつ、わたし早く下に行かないと。おこられるんです。それに集めた蠟燭の芯を抜いて、溶かして、新しい蠟燭を作らないといけないんです。うう、だからごめんなさい。せつかく聞いてくれたのに役に立てなくて」

そういうことか。もう夜も更けているのに大変だな。

「いや、いいんだよ。邪魔して悪かったね」

「ううん、わたし達の役目はご主人様がそうしろと命じた人の役に立つことですから」

少しだけ、笑顔が戻りかけたアルティマは、次の言葉を聞いたとたんに無表情になった。

「こっちも失礼があったら申し訳ない。せつかくトラクトでこの言葉や一般常識を転写したはずなのに、かなり無知で役立たずなんだ。デニスって言うんだけど、こんなとき、このトラクトどんだけ安物かって……どうしたの」

「ヨウ様、ひどいですっ」

身を翻して、アルティマは部屋を出て行った。

「なんだろう。地雷、踏んだかな」

妹以外の女の子をはじめ泣かせてしまったという衝撃から、その独り言は自分で想像したより、ずっと弱々しく響いた。

「酷いね、そりゃ」

カリカは肉が突き刺さったナイフをヨウに向けて言った。ちなみに、この世界にフォークはない。

「前から、アルティマってどこか懐かしい雰囲気のある子だと思っていたんだ。けどどこっこの思い込みで無遠慮に色々聞いて悪かったかもしれないね」

「いや、そうじゃなくてね」

「うん？」

ここは街のいつもの大衆食堂。まだ午前中なのに誘い出して、困った時のカリカ頼みとばかりに、昨日の夜の事を相談していた。

「あーあ。やっぱり知らなかったか」

ふう、と溜息をつくカリカ。

「そうだな、ヨウはさ、トラクトをどうやって作るかしてるか」

「そりゃ、そこらの工房で……えと、どうするんだっけか」

カリカは窓の向こうをぞんざいに指差した。

「あっちのエド爺さんのピュアセレクト工房知ってるよな。さっ

き通った時、荷車があつた。積荷は人間だ」

「人間？まさか、死んだ？」

なにを馬鹿なことを、とでも言うようにカリカは首を振る。

「生きた人間。死んだ人間は役に立たない。もっとも、工房を出る荷車が運ぶのは死体だけだな」

事もなげに彼女が言ったことが意味をなすのに一拍以上必要だった。

「つてことは、トラクトの原料は生きた……」

「そ。別にドワーフでも他の氏族でもいいんだけど、数が多いから。やっぱりメインは人間ね。貧乏人もいっぱいいるし」

でも、カリカもエリアスもトラクトを何個も使っていたはずだ。そして、ふと思ひ出した。

トラクトはとても高価だということ。

「回復に使うトラクトは、若い肉体の持つ生気の結晶なんだ。生気はあたし達魔術師の体内で魔力の補充になる」

「まさか、あの結晶はそんなものだったのか」

辛うじてそれだけ言えた。

「あらあらヨウくん、ショックだったわけ、よしよし」

ヨウの頭に差し伸べられた手を払いのけ、苛立ち紛れに言い放つ。

「やめてくれ、考えてるんだから」

しばし経過して、ヨウは重い口を開く。

「悪かった、イライラして。やっとわかったよ。魔術で使うトラクトは、つまり人間の命そのものだ。だから高価だ。でも、一人の命にしてはいくらなんでも安すぎるだろう。生活費数が月分しかないじゃん」

「そんなことない、多分、売る決断をした本人にとってはな。あたしの家も貧しかったからわかるよ」

人間の命がそんなに安いなんて。貧しい兄弟のため、口減らしに望んで志願する若者の気持ちは想像することもできなかった。

「魔術をサポートするトラクトの全てが人間を元になっているわけじゃないけどな。ただし、お前が使った転写トラクトは人間の頭から特別に取り出したものだ」

「転写、か。それって、コピー元はどうせ破壊されるんだろ。じやなきや高価なはずない。アルティマの親類にも恐らくそういう境遇の人がいたんだ」

「多分な。ひよつとしたら、その親類はデニスって名かもしれないぞ。って、お前泣くなよな」

よほど悲しげな表情をしていたらしい。

ヨウが言い返さないでいると、カリカのからかうような笑みが戸惑いと共に消えた。

「ヨウのいた世界ではトラクトはなかったんだよな。でも、農奴や小作人が辛いのはどこでも同じだろ？こればかりは時代が過ぎて人が変われど不変だって、教会も教えてるし」

それで全ての不公平が我慢可能だともいうのだろうか。きっと、マヤの神殿で供物に選ばれた子も、名誉なことだと己を無理やり納得させていたのだろう。

心臓を抉り取られるその瞬間まで。

「そんな公式見解があつていいのか！少なくとも俺のいた世界じゃ違ったよ」

カリカは、油の浮いたスープの波紋が遠くにあるかのようにじっと見つめた。

「うん、そう。なんとなくそうかもしれないとは思ってた。ヨウ、あんたは元の世界を嫌ってるようだけど、あたしには嫌うほどとは思えないんだ。こんど、小作人が不幸じゃないというヨウの故郷、その話をしてごらんよ」

「あの地獄の話を知った。なんだか、いま地獄に果てはないような気がしてきたところだよ」

「そうか、ここだけが地獄じゃないのなら慰められる話だな」

カリカは内心に皮肉を感じたのか、疲れたような微笑を浮かべた。

「あたしの弟も売られた。妹は14で結婚したけど、もう便りもないよ。はは、嫁き遅れの姉と違って、あいつは堅実だったからな」

まだ幼いといってもいい齡で結婚するのは、社会が三つの要因のどれかもしくはいくつかを抱えている場合だけだ。

一つは環境が良い開拓地が近くにたくさんあるとき、もしくは技術的ブレークスルーや画期的な食料源により、限られた土地でより多くの人口を養える展望が開けたとき。最後は……人口の消耗が激しくて補充が必要なときだ。

そんな社会では血筋を絶やさないう、できるだけ多くの子をするのが最適の繁殖戦略になる。教育を施して大切に子育てする時代じゃない。そして、母親が若ければ、例え寿命が短くても子供が成人するまで親が生き延びる可能性も高くなるというわけだ。

高出生高死亡。まさしく発展途上国の典型だった。

「そうか。ところでなんでこんな話しになっただっけか」

「さあ。ところでさ、あたしはそろそろ城からおいとましようと思ってる。教練所に近い場所に魔術同盟の紹介で部屋を借りた」

「え、カリカが城を離れたら、俺の無駄飯喰らいぶりが際立つちやうじちゃん」

「知るか」

「だよね」

二人して笑った。

「そうそう、今夜、城主様に御礼に参上するから、そのあとお前の部屋に寄る。よく片付けておけよ。あと、その女の子を困らせないように、早めに蝋燭は補充しておけよ」

「いつもきれいだろ。俺の故郷の話を知りたいなら、今ここでもいいけど」

「いい、いいよ。午後は買い物があるから忙しい」

カリカは勢いよく席を離れ、さっさと立ち去っていった。

ヨウはその後ろ姿を見送った。

「……………にしても、片付けね。勤勉なメイドがいるから必要のないのに、何を言ってるんだか。」

どこか不自然なカリカの態度だった。

2 - 5 すいません。あなたはサポート対象外です

カリカが城を去る気であることは、意外とショックだった。

いよいよ、ヨウも自分の食い扶持を自分で稼ぐ決意を固めなくてはならない。いつまでもヒレンブランド領主の寛大さにつけこむわけにもいくまい。

「俺にもできること。でも何ができるのかねえ」

前の世界では、ヨウは高校を繰り上げ卒業した自衛軍最下層の兵士だった。

兵士といっても、やっていたことは若干の座学以外は、ほとんど生屍化する前に死体を処分するという陰鬱な仕事だけだった。

自分が何のスキルもない若造に過ぎないのはよくわかっていた。

唐突に第二次世界大戦を舞台にした小説の内容が頭に浮かんだ。鋼鉄の生産能力が限られた日本に、ダクティル鑄鉄の製造技術を伝授して歴史を変える、というミニマムな歴史改変小説があった。

高コストで高い技術が必要な黒心可鍛鑄鉄や鋼鉄に頼らずに、鋼鉄の靱性を有する鑄鉄が大量に生産できる。史実で 1948年に開発された技術だった。

この技術をファンタジー世界でも応用できるだろうか。いや、ダクティル鑄鉄製造には微量のセリウムかマグネシウムが必要だったはずだ。

「高純度のマグネシウム……ないよな、この世界に」

この魔法世界に必要なのは20世紀の技術ではない。まずは17世紀の科学革命を経る必要があるだろう。

そんなことを考えていると、メイドが気を使って自室に夕食を持ってきた。

もうそんな時間かと驚いた。知らずに長いこと考え込んでいたらしい。

給仕をするメイドの後ろから、アルティマが獣脂ランプを携えてついてきていた。

何か声をかけたかったけど、無表情な彼女の顔は、話しかけられるのを拒絶しているように思えた。

メイドたちが去ってほどなく、蝋燭のゆらめく光が安定し、ヨウは借り物の机に向かった。

今はなんでもいいから何かをしたかった。

「やはり数学か。数？はともかく基礎解析とか思い出せるかな」

この世界では高価な羊皮紙に、覚えている限りの公式を記入してゆく。

高校物理で学んだ基本的な運動方程式や、生物、地学の主要な知識。

表がいつぱいになると、紙を裏返して更に細かい文字で書き込む。疲れた目をぎゅっつつぶると、奥の方がじんわり沁みた。

ヨウは伸びをすると、小さな机の引き出しを開けた。

何気なく、電源を切ったままの携帯電話を取り上げ、慣れた動作で開き、電源を入れた。

圏外なのは当たり前、わかっているんだけど、2ギガバイトのマイクロSDに記録された故郷の断片を確認したくなったのだ。

幸いにも電池はまだ切れていない。

Please wait...の文字が表示され、小さな砂時計が回転した。

起動した携帯の画面の中では、辛抱強く時計が時を刻んでいた。

もはや意味のない数字の羅列。

着信履歴を呼び出し、一番上の発信元に何気なく電話をかけた。

どうせ誰も出はしない。というか、出たら怖いだろう。

中継アンテナを懸命に探す携帯、その小さなスピーカーから、かすかにサーツというホワイトノイズの音が漏れる。

と、そのとき、ドアが小さくノックされた。

トン、トン。

携帯を机に置いた。

僅かに眉をしかめ、すぐに来客予定の人物を思い出した。

ああ、カリカが来たんだな。

「どうぞ」

そこに現れたのは、エリアスだった。

フェルトの質素な貫頭衣が顔を半ば隠してはいたが、口元だけで彼女だとわかる。貫頭衣を着ても、この城の者なら誰だってエリアスだと見破れただろう。

そういう意味では、お忍びで来るにしても、意味のない偽装ごっこだといえた。

「はじめてですね、この部屋に来るなんて」

「え？もうバレましたか？」

「それはもう」

エリアスはフードをめくり上げ、顔をあらわにした。

「こころなしが顔色が悪いようだった。

「やっぱりお忍びでないとまずいのですかね」

ヨウの問いが聞こえなかったのか、エリアスは思いつめたようにヨウを見つめる。

彼女は足音もなく椅子に座るヨウの横に来ると、黙って机を観察した。

「それ、なんですか」

「ああこれ？」

びつしりと公式や定数が書かれた羊皮紙をエリアスは指差していた。

「この世界で役立つ知識を忘れないうちに書き出していました。いつまでもプラプラ城にいるわけにもいきません。

困ったことに、いまさら教科書の内容をほとんど忘れていることに愕然としていますよ」

「では、思い出したのですね」

ほとんどかすれたようなその声は、事実を確認するかのよう響きだった。

「あなたが我らのもとなつかわされたのは神のご意思ですか？」

話がとんでもない方向に行こうとしていることを悟ったヨウは、慌てて否定した。

「とんでもない。前にも言ったように俺は人間です。向こうで学んだ、こちらでも役立ちそうな知識を思い出そうとしてたんですよ」

エリアスはゆっくりとヨウが言ったことを繰り返した。

「人間、ですか」

首を小さくかしげて、言う。

「本当にそうかしら」

「それってどういう……」

エリアスは電磁誘導の法則を記した辺りの公式を指差してこんな事を口走った。

「この羊皮紙の記号、これは呪文ですね？あなたは古代の魔術を知っている。

これは、解読されていない古代文書の文字にそっくり。魔術の教授ですら完全には使えないのよ。普通の人間が知っているはずはないわ」

「さあ、本当の力をみせてください。それとも本当に自分のことがわかっていないのかしら」

「俺は本当に」

エリアスは聞いてないようだ。

「これで思い出すと良いのだけれど」

エリアスの魔力が高まり、燐光のような光が腕から発する。風がまきこり、重いフェルトの服の合わせ目がはためく。

「いまウォルカをブートしています。次に”超越した場所”とのバイパスを開いて……」

エリアスは挑むような視線でヨウをみつめていた。

「何してる！」

エリアスがはっとして振り返った。

たったいま扉に半身を滑り込ませたカリカがいた。

いつも着ている傭兵御用達の派手な色彩の戦闘服ではなく、珍しいものを身にまとっていた。町娘が着るようなヒラヒラした羊毛製のワンピースだ。

「エリアス、あんた……」

「なんでいるの、カリカ。とっくに城から出たはずじゃないの？」

「ど、どうでもいいだろ。それより、あんたそれ、攻撃魔法じゃない。MPは大して使ってないみたいけど」

エリアスは苦いものを食べたような顔をする。

「仕方なかったのよ。私はヨウの正体を確かめなくてはならないの」

そのとき、ヨウは机の上の携帯電話のスピーカーがバリバリとくぐもった音を立てているのに気付いた。

……これは？。

カリカが何か唱えると、彼女の周りにも光輪が出現した。同時に携帯電話の雑音の音色が変わった。

魔法の発動前に電磁波が出ている？

思ってもいなかった現象に遭遇して、ヨウはまじまじと目の前の美しい魔術師たちを凝視した。

ヨウの携帯電話は古い第三世代携帯だ。その使用周波数は2GHz帯だったはず。

ヨウは、短期間だけ自衛軍での座学で学んだことを思い出していた。

教官いわく。

フィデスどもは高度な技術を駆使したナノマシンを日常的に使っている。連中の隠れ家からはナノマシンの動力源に使う2・4

GHz帯の電磁波がときどき漏れている。

連中は携帯型電子レンジのような機械をつかって、飢えたナノマシンに高エネルギーの電磁波をたっぷり与えているからな。簡単に言うと非接触型の充電器みたいなもんだ。

それを探知するのに特別な装置はいらぬ。お前達も使っている携帯電話でも充分に警報機として役立つ。

フィデスの圧倒的な技術力に、自衛軍の装備はほとんど役立たずだった。

ヨウが徴兵された時点で、自衛軍はフィデスに対してほとんどレジスタンス活動しかできないまでに落ちぶれていた。

軍事技術に限らず、科学技術の格差が30年でもあれば、もはや技術的に立ち遅れた陣営に勝利などありはしない。

遅れた者に唯一可能なのは、ベトナム戦争時のベトコンのような遊撃戦かテロだろう。

まあ、立ち遅れた側の物量が圧倒的に多いならば、また話は別だが。

魔力を放出して互いを牽制するエリアスとカリカ。一触即発の危機的状況だった。

なんとかしなくては。

ヨウは選択した。

机の筆立てからペーパーナイフをつかみとり、ポケットにすべりこませた。

対峙するエリアスとカリカの間飛び込み、両手のてのひらを二人に向けて突き出す。

「やめるんだ」

その気迫にたじろいだように、魔術発動時特有の光輝と熱気が薄れた。

そして、落ち着いた動作でペーパーナイフを手にとると、あまり鋭いとはいえないその刃で掌を切りつけた。

ペーパーナイフが音をたてて床に落ち、ヨウは傷を押さえたまま手を胸元に引き寄せた。

啞然とするエリアスとカリカ。

「な、なにやってんだ。どうかしてるぞ」

「ああ、本当に。自分を傷つけるのがこれほど難しいなんて思わなかったよ」

苦笑いしたかった。なんて滑稽なことをしてしまったのか。

ゆっくりとてのひらをのぞき込むと、思いのほか深い傷口から、暗赤色のものがあふれ出た。

「い、ちちち」

「見せてみる」

エリアスは突っ立っている。

「ヨウ、自分で治して。あなたは治せます、必ず」

カリカはそんな彼女を信じられない、という目でにらんだ。

「こいつは魔法を使えない。わかっているだろう、エリアス」

エリアスは首を振る。

そして、ヨウがおもむろに語りかけた。

「ふたりとも、聞いてくれ。君らには俺を治せない」

二人は顔を見合わせた。

「この世界の誰にも無理なんだ。俺に治癒魔法は効かない。証明してみる。でもその前に、その机の上にある機械をとってほしいか」

滴り落ちる血が、床に広がってゆく。こんなに思いきり切れるとは、ペーパーナイフ恐るべし。

カリカがヨウの手にしたペーパーナイフをもぎ取ると、代わりに携帯を差し出してきた。無事な方の手でそれを受け取ると、「カリカ、俺に治癒魔法をかけてみてくれないか」と願い出た。

「ああ、もちろん。あんたもいいよな、エリ阿斯」

エリ阿斯は厳しい表情でうなづいた。

カリカが水神 ウォルトをブートし、治癒の呪文を唱えた。

いにしえより伝えられた術式は言葉で示す必要はなかつたが、大抵の魔術師はもっともらしい呪文を口に出す方を好んだ。カリカにとっても、呪文を唱える方が精神が集中できるため、好んで唱えていた。

カリカがヨウの傷口にかざした手が淡く光る。同時に、ヨウが右手で握る機械が小さくザザと鳴った。

しばらくすると、おや、というようにカリカの表情に微妙な変化がみえた。

「……………おかしい、手ごたえがない」

魔術の術者に必ず戻ってくるフィードバックが感じられなかった。

「そんな。治癒が効かない。というより手ごたえがぜんぜんない」

次にエリ阿斯が試すが、ヨウの傷口はそのまま。

いや、よく見れば血が凝固しかけていたが、これはごく普通に生体に備わった止血作用だ。魔術は関係ない。

ヨウは静かに言った。

「魔術は効かないんだ。本当に」

「なんで……」

「俺の体にはこの世界の人間、ひよつとしたら動物にも備わっているかもしれない”人工的な”治癒機序が存在しないんだ」

「？」「？」

二人の頭上に大きなハテナが浮かぶのが目に見えるような気がした。

例えば通常の止血作用では、血小板が傷口にあつまり、フィブリンを放出して止血する。同時にマクロファージが傷ついた細胞や雑菌を排除する。

次いで細胞成長因子が放出され、傷口を新しい細胞が覆ってゆく。

これが一般的な動物にみられる傷の天然の治癒過程だ。人間も然り。

一方、治癒魔法とは……

「これは俺の推測だけど。部分的には証明できたと思う。」

この世界では、極微の機械たちを俺以外の全員が飼っている。恐らくね。

それは、普段はなにもしていないんだろう。

ただし、治癒魔法をかけた瞬間、小さな召使いが傷口でサイトカインや細胞成長因子を誘導して、本来不可避的な炎症反応を経ないで肉芽細胞を成長させているんだと思う。

君たちの使う魔術のうち、すくなくとも治癒魔法に関しては、魔術でもなんでもない、これは魔法と見紛わんばかりに発達した科学のなせる技だ」

魔術師から放出されるマイクロ波は、体内の召使いたちを目覚めさせるトリガーであり、また活気づかせる動力源でもあるのだろう。

携帯を持っていなければ、でなければフィデスの驚異的なテクノロジーと関わっていないければ、こんな事に気付きもしなかったに違いない。

そこではたと思に至る。

魔術師とは、この世界にはるか昔からビルドインされている物質操作システムに、彼らが体内で飼っているナノマシンを通じてアクセスできる特殊能力者のことなのかもしれない。

ということとは、魔術師の操る術式は、必要なシステムを起動させる一種のアクセスキー。そう言えるのではないか？

「いずれにせよ、これでわかってもらえましたか？俺は神のご加護を受けていません。超越した場所からパワーを引き出すこともできないようだし。」

それでも俺が天界の使いだとしたら、あなたたちの神ってのは随

分と嗜虐的ってことになりますよ」

カリカとエリアスは黙っていた。

「どうやら、俺は神の奇跡のサポート範囲外のようです」

しばらくして、カリカが過剰に顔を近づけてお願いしてきた。

「ヨウ、あんたあたしたち以外にはそのこと、言わないようにね。約束して」

その迫力に少々圧倒されつつ、うなづく。

「……わかった。あ、それはそうと、やっぱりこの手が痛いんだけど、どうしよ?」

血圧がかからないように、心臓より上に持ち上げた腕の傷を見えるようにした。

エリアスがさかさず申し出る。

「治療効果抜群のオムニ教会印の聖油ならありますわ。さっそく傷口にぬりましょうか」

カリカが目をむいた。

「ちょ、エリアス。……ま、いいわ」

エリアスはヨウの不敬な発言に罰を与える気らしい。

良き信徒としては仕方のない反応だった。

カリカは黙ったまま、横目で哀れむようにヨウを盗み見たのだった。

エリアスが個性的な懲罰の準備をするあいだも、ヨウは静かに考えを追っていた。

そういえば、数カ月もこの世界で暮らすうちに、俺の体も自然界に溢れているだろう目に見えない機械たちをたっぷり取り込んでいたはずだ。

それなのに俺の体内にはナノマシンが巣食っていないようだ。なぜなのか。

いくつかの仮説は立てられるが、どれも検証するには大掛かりな検査機器が必要だろう。

ヨウの大胆な推測の連鎖は、オムニ教会謹製の聖油が傷口に触れた瞬間、どこかに消し飛んだ。

そして、帝国の版図で最もしみる薬を付けられた哀れな犠牲者の悲鳴が城に響いたのだった。

2・5 すいません。あなたはサポート対象外です（後書き）

あなたは神の奇跡のサポート対象外ですww

3 - 1 メトセラの子（前書き）

登場人物：

ヨウ 荒廃した日本からやってきた元高校生。戦時体制下のオムニ氏族連合帝国に来てしまった不運な子

エリアス ヒレンブランド領の領主の娘

カリカ 結構凄腕の傭兵。若くして魔術が使える女性で傭兵という稀有な存在

コントレーラス ヒレンブランド領を乗っ取るうとして失敗

リレントレス アムール領を乗っ取るうとして成功

パレティーナ 帝国内部で暗躍する女

3 - 1 メトセラの子

「ああ、聖油の既成概念が崩れた」

どんな概念だったかと問われても困るが。

「ふふ、そうでしょう。私達の世界には傷口に聖油を塗る、という表現もあるんですよ」

「なんだそりゃ、まるで毒扱いだな」

三人は声をあげて笑った。

それにしても、”私達の世界”、か。

エリアスの口ぶりでは、まるでヨウのような怪しさ満点の来訪者が、帝国各地よく現れるんです、と言っているようだ。

意外なことに、彼女は適当な布片を細長く縫り、テキパキと手の傷を覆ってくれた。

こんな作業が器用にできる女の子など、滅多にいないだろう。

やはり、一応とはいえ軍人さんだから、応急手当の知識もあるのだろうか。

いや、応急手当の知識だけではない。性格的にちょっと天然属性があるからそうは思えないけど、彼女の博識さたるや相当なものだと思っ。

ヨウの両足の間に屈んで世話をしてくれるエリアスの形の良い頭を見下ろす格好になった。

淡い金髪から漂ういい香りのせいでいくぶん顔を赤らめつつ、ヨウは尋ねた。

「あのさ」

「はい？」

ヨウを見上げるエリアス。

ああ、こんな角度で女の子にみられたことないよ……。

齡相応の煩惱に悩まされつつ尋ねる。

「まだ俺を神からの使いか何かだと思っているのか」

エリアスは黙ったまま、キュツと応急の包帯を結んだ。てのひらに痛みが走る。

「ええ。あなたがこの世界と帝国に何か良いものをもたらしてくれると信じています。そういう意味では、今でもオムニ神からの使者だと思っています」

束の間黙って、彼女ははっきりとした口調で言った。

「なぜなら、あなたが最初だからではないからです」

古くは32世紀のこと。もちろん、聖曆（オムニ歴）での話だ。

500年ほど昔にアケチという神の遣いが現れたという記録をはじめ、1世紀に1人程度の割合で、帝国のどこかに流れ着く男女がいるそうだ。

最も新しい”遣い”は、3630年に現れた。目撃者の話では、見たこともないほど大きく、檣楼も、帆すらもない鉄の船に乗って現れたらしい。

船首と船尾が削り取られていたためにその船は直ぐに沈んだが、たった一人だけ生き残った者がいたという。

アクターボの果ての海岸でのことなので、その男は蛮族に捕らえられた。

帝国領内に連行された時点で、男は瀕死の状態だった。

実際、言葉も交わせぬままに男はその後すぐに斃れたという。

エリアスが話を進めた。

「当時ヒレンブランド連隊が沿岸地帯のアクターボ浄化に参加していたの。」

そして、偶然にも捕虜になっていた彼に会う機会があった。名前は忘れたけれど、ヨウと同じ黒い髪と瞳をしていたわ。

彼は蛮族に捕まったために何も伝えることもできず天に召されたのですが、神の成すことに意味はあるはず。

わたくしは、ずっと彼の悲しげな瞳のことを忘れられずにいました。末期の息の合間に語ろうとした、不思議な響きの言葉が今でも耳に残っています」

その場にいるエリアス、ヨウ、カリカの三名の間に短い沈黙が流れた。

どこかの通路を歩む歩哨の帷子の擦れる音がかすかに漏れ聞こえてくるだけ。

この世界の夜はとても静かだった。

「そうだったのか。俺だけじゃないのか。しかし……いや、それより、ちょっとわからないことがある。確か、今年はおム二歴3696年だったはず。だよな」

カリカは重々しく頷いた。

「そうだな」

「3630年ってことは66年も前の話だろう？ エリアスのお父上の体験談なのか？」

「え、いえ、その」

エリアスの視線が泳ぐ。そして、意を決したように、というか諦めたように彼女は顔を上げた。

「私自身が会いました」

カリカが軽く肩をすくめた。

「まさか、だって66年前……」

「ええい、もう。私は106歳なのよ」

「いやいやちよつと待て。」

「そんな馬鹿な。だって」

エリアスの表情が全てを物語っていた。

「メトセラ？確かそんな単語を聞いた。それか」

指先を膝において、神妙に頷くエリアス。

「そつか。造られた奇跡ってわけか」

「カリカには、わたくしから口止めしていました。だって、その、おかしいでしょ。こんななりのおばあちゃんがいたら」

ヨウが反射的に否定すると、エリアスは幾分リラックスできたようだった。

なるほど、エリアスが使用人にも妙に他人行儀なのもわかるような気がした。

エリマスにとってはどうということはない10年は、年頃の娘たちには長い長い時間だろう。

少女たちは成長して、やがて結婚する。子を身ごもり、親しくしていた友人は次第に生活に疲れ、エリマスを離れてゆくだろう。

それはとても辛いことだ。

どうせ離れてゆくものならば、はじめから表面的な付き合いに止めた方が気が楽だろう。エリマスが城のメイドたちにどこか冷淡というか、他人行儀なものもそこらへんに理由があるのかもしれない。

にしても、人為的な命の延長ができるとは恐れ入った。ほとんど不死と言えるほどの。

いや待てよ、その驚くべき魔法にもやはり”原料”が必要だろう。

ヨウが思っていたよりも、遙かにこの中世的ファンタジー世界の闇は深く、そして密かに葬られた悲劇はそれこそ無数にありそうだった。

カリカと、100歳オーバーの美少女エリマス。恐ろしい子。

ふと窓から吹き込んだ夜風のせいだろうか、彼の背筋にゾクリと悪寒を走らせたのだった。

3585年、治癒魔法の研究の結果、寿命を延長する魔術”メトセラ”が完成。貴族など富裕層を中心に利用が進んだそうだ。

当初は貴族の世代交代と資産の相続に悪影響があると懸念されたが、メトセラ処置をすると繁殖能力を失うことが判明し、相続にまつわる問題の半分は解決したかに見えた。

だけど、そう簡単に資産家が財産を手放すはずはない。いつまでも若いままの親世代は資産を抱え込み続けた。

エリアスのお父上もそうだったが、貴族の子弟は子を早めに成してからメトセラ処置を受けたそうだ。

ヒレンブランド当主はメトセラ処置を受けた最初期の世代で、その治世は1世紀以上にもなるという。

エリアスは子がないが、貴族の間ではよくあることで、子が娘で家督相続の優先順位が低い場合は若いうちにメトセラ処置を受けることもあるらしい。

もちろん非常に高価な魔術だし定期的な再魔法も必要なため、エリアスのような立場にでもない限り不老不死の秘術を受け続けるのはとても難しいことだった。

この数十年で、ヒレンブランド家においては、残念なことにエリアスよりも相続順位が高い兄弟が全て悲劇の最期を遂げてしまった。

よって将来、エリアスがヒレンブランド家領を継いだとしても、彼女の代でお家は途絶することになるだろう。

相続にまつわる準サリカ法を精一杯拡大解釈しても、エリアスと遠い血縁関係にある貴族階級がヒレンブランド家を継ぐのは難しそ

うだった。

こんな具合に領主継承の正統性が乏しいからこそ、あのコントレールに狙われたのかもしれない。

エリアスの命はヒレンブランド家にとって貴重なものだったが、彼女の代で滅びることを半ば予期した上で、エリアスのお父上は彼女の行動の自由を寛大に認めていた。

一種の罪滅ぼしの念もあるのかもしれない。自らの娘を、まるで剥製にされた愛玩動物のように、時間という名の牢獄に閉じ込めたのだから。

そして、自らは困難な統治に身を投じていた。

そのために領主自らは体を壊しても尚、エリアスだけは統治者の表向きの顔として、城下の者の多くに愛されるいわばマスコットとして、天衣無縫な振る舞いを許されていたのだった。

3 - 2 ヨウの旅立ち（前書き）

オムニ歴（聖歴） 3696年晩秋になりました。

3 - 2 ヨウの旅立ち

来るべき大侵攻作戦”アニバーサリー”を控え、帝国全土に慌しい、地に足がつかないような雰囲気を感じられた。

10月はじめに”第21代スリミア領主にして第4代人族王にして第9代帝国皇帝ドゥーガル・トータル・スリミア”の命令により帝国執行令が発せられ、ヒレンブランドも含めた全ての領主に”兵よ集え”の号令が下されていたからだ。

ヒレンブランドにも西方の帝国都市同盟からの武器商人が訪れ、甲冑や武器の商談が進められていた。

ヒレンブランド連隊の武器掛将校が中心となって、武器の定数購入や糧食の備蓄、傭兵の雇用契約が行われていたが、それらに要する軍事費の大部分は都市同盟からの借りに頼っていた（開戦間際になれば、領内に戦争税が課せられるだろう）。

そのためか、肩で風切って歩く商人たちは貴族以上の有力者の風情だった。

そんな風雲急を告げる帝国の片隅で、ヨウはこの世界にいくつかなの変革をもたらそうと奮闘していた。

事の発端は鍛冶屋のオヤジのぼやきだった。

「鉄さえあれば、余所者の強欲商人なんかから武器を買わなくて

もいいたがな。連中からバー・アイロン買うときに、付帯条項で”この鉄で武器を製造・販売しない”って決まってるんだ。バー・アイロンの製法がわかればなあ”

鉄さえあれば。

数日後、エリアスを引き連れてヒレンブランド領主と会見したヨウは、一つの肩書きを手に入れていた。

それは、”オムニ氏族連合帝国辺境領北部タイル防衛軍ヒレンブランド連隊本部付武器掛少尉”というものだった。そして、はじめての任務は「領内での兵器生産計画の推進」であった。

そして早くも11月には、鍛冶屋の隣の建物を買い取り、慎ましやかな”ヒレンブランド工廠”が誕生したのだった。

領主はダメで元々と任せてくれたのかもしれないけど、ヨウは本気でこの世界の役に立つつもりだった。

これほどの信頼に報いなければダメ人間の烙印を押されても仕方ないだろう。

インハウジング、それはつまり内製化のことだ。もといた世界ではアウトソーシングという言葉があったが、その反対語と思えばよい。

外部から買っていた鉄の内製化といっても、まずは鉄のことを何も知らない。ヨウは博学な方だったけど、それでも限度がある。

まず、ヨウはこの世界の武器製造技術と総合的技術レベルの研究をはじめることにした。

具体的に何をするのかと言えば、”放浪”だった。

この奇妙な世界のことを薄く広く知らなければ何から手をつけられないのかもわからないからだ。

帝国の農業には改良点がありそうだったし、おいしいパンすら作れない小麦の成分にも興味があった。

とりあえず、大学があるという帝国都市同盟の大都市クワナには行ってみたいところだった。

ヒレンブランドに比べれば先進地域の都市の工業や財政、物流の流れ、商業のありかた。

実際にみなければ分からないことだらけだ。どこに改良点があるかなど、わかりはしない。

ヨウの旅立ちの日、ヒレンブランド連隊の傭兵を厳しく鍛え、一部では”給料を受け取って無許可離隊をしないでかす不埒な傭兵をとことん追跡し捕縛する鬼女”と恐れられるカリカが姿を見せた。

相前後して、エリアスも姿をみせた。

領内外の商事移動許可証をくれるために来てくれたのだった。

「これをお使いになれば、どの検問でも通過できるはずです。そ

れに、魔道教会と魔術同盟の公式宿泊施設も利用できます」

とのこと。

一方のカリカも屈託なく笑顔で送り出そうとしてくれた。

「準戦時体制だからな、気をつけるよ。あたしらはあたしらで頑張って戦争するからさ、必ず帰ってこいよ」

「ああ、もちろん。というか、むしろ君らこれから戦争するんだから、自分の心配しろって」

「アハハハ。そうだった」

三者三様の挨拶ののち、ヨウはすっかり冬の装いとなった城壁の外へと旅立っていった。

いつか必ず、またここで会おうと心に誓って。

3 - 3 冷え性の女性、パレティーナ（前書き）

パレティーナの登場。

実は素足のように見える極薄ストッキングを着用。

腰にはホカロン貼ってます。

3 - 3 冷え性の女性、パレティーナ

東部辺境のアムール領。

こけた頬、顎にはヤギヒゲを生やした男は、コントレーラスと人相が良く似ている。

彼はアムール領の新領主リレントレス。

彼は衝立の奥に向かい話しかけていた。

アムール城の執政室に近い広間、そこは城の最上階に近く、風通しは良い。

そこには冷たい風が容赦なく吹き込んでくるにも関わらず、やけに短い革のタイトスカートから長い足をむきだしにした女が、偉そうに足を組んでいた。

女は冷ややかに言った。

「帝国軍の陣容はわかった。報告書は確実に届けよう」

リレントレスは小さく頷いた。

「良いか、手筈通りに進めれば問題はない。帝国軍は壊滅する。そして、我らが平和をもたらそう。ところで。あなたの軍隊に不足はないか。どのような資源であろうと整えるぞ」

「有難いが充分だ、パレティーナ。先日物資の加工が間に合っ

ておらんが、来年の年明けには定数に達しよう。安心して欲しい」

「そうか。もし不足があれば、”箱”を使うが良い。必要なものを届けよう。……さて、そろそろ失礼しようか」

パレティーナが組んでいた足を解くのを、リレントレスは安堵の気持ちで眺めた。

それが普通の女なら嬉しいところだが、その女に限っては別だった。

「さらばだ」

背を向けて歩み去ろうとしたパレティーナは、急に立ち止まるとリレントレスを振り返った。

困惑するリレントレスに構わず、手近のテーブルに小さな板状のものを置いた。

パレティーナは落ち着いた歩みでバルコニーの縁まで歩き、ふと立ち止まると、事もなげにそこから飛び降りて姿を消した。

くぐもった遠雷のような音が急速に遠ざかり、さっきまでパレティーナが居た部屋に静けさが戻った。

リレントレスは額の汗を拭い、テーブルに残された板を手にとった。

それは、いつもの真紅の薬だった。

魔力を増強するという怪しげな薬。

確かに効果はあった。だが、信用しきれない。それも無理はないだろう。連中は全く以って信用という概念とは対極にいる存在だ。

リレントレスは、渴望した末に手に入れた今の地位が恐ろしく思える瞬間があった。

何十年も辛苦に耐え、やっと訪れたビッグチャンス。それをモノにしないでは男がすたるというもの。

だが、そんな強気な思いも、なぜか夜も更けると衰えることがあった。

自分のしていることが、帝国の4氏族にとって災厄以外の何物でもないのではないかという思いが離れないのだ。

リレントレスは、感情的になっっている自分に気づき、自らによく言い聞かせた。

「あいつらの指示は完璧だった。次も悪いようにはならん」

そのはずだった。

だが、あいつらの企てが完璧なら、なぜコントレーラスの企ての方は失敗したのだろうか？

この疑問をパレティーナに尋ねるべきだった。

しかし、あいつらが口にする答えというものを信用できるものだ

ろっか？嘘つきの語る真実は真実なりや？

惑わされるだけだろう。

自分が踏み込んだ道の先はどこに繋がっているのだろうか。

パレティーナの消えたバルコニーに立つと、リレントレスは真紅の薬を強く握り締めた。

3・4 豆で達者で窒素固定(前書き)

旅を続けるヨウ。

いくつかの世界を変えるヒントを得る。

3 - 4 豆で達者で窒素固定

このあたりでは、小麦の種を秋にまき、小さな種子は春の訪れを待つ。そして、冬の数ヶ月を幼穂のまま過ごし、4月頃に出穂・開花する。6月には収穫だ。

ヨウはイラスト付きで小麦の生長過程をノートに記した。

言語学習のために取り込まされたトラクトの人格が理解を手伝ってくれた。

彼、デニスは元々農民だったため、容易に小麦の全成長過程の姿を脳裏に描くことができた。

真冬にする麦踏みの凍える寒さ、指先の痛み、乾いた麦わらの香り、そういった記憶が次々と蘇った。

農民たちの農機具や脱穀装置、石臼の構造や調理の方法。

どれも物珍しく、動力は大抵人間が担っていた。動物はせいぜいターパンを利用する程度で、機械化などないに等しい。

ヨウの実家は農家ではなかったが、この世界の農業が非効率的なのは充分に理解できた。

かといって、すぐに何か改善できるのかといえば、NOと言わざるを得ない。

骨身を惜しまず働く自営農や、更に働かなくてはならない小作人・

農奴たち自身が、少しでも楽に働けないかと四六時中考えているというのに、彼らの数世紀もの改善の歴史をヨウが簡単に凌駕できるはずがなかった。

旅の途中、農家も兼業する宿屋の親父から聞いたところによれば、地球で18世紀に開発された輪栽式農業のようなものはまだ広まっていないらしい。

じゃがいもという優れた根菜類は存在しないし家畜もあまりないので、中世ヨーロッパで見られたような三圃式農業よりも更に遅れた農業技術にしか達していないようだった。

ライ麦のような夏穀、小麦に代表される冬穀の交互栽培や堆肥の施肥は広まっているが、この世界に家畜が少ない以上、牧草地の設置と夏穀・冬穀とのローテーション栽培は実現しそうになかった。

また、史実ヨーロッパとは異なり、畜力による農耕に代わって、帝国では安くて大量にある人的資源が農業に投入されている。

この農業スタイルは、黒死病流行以前の西ヨーロッパや、もっと言えば東アジアの労働集約的農業に通じるものがあるように思えた。

宿の親父いわく。

「遅くても5年に一回は農地を休ませないと土地が痩せてうまく小麦が育たねえんだ。」

ほら、最近キナ臭いだろ？小作人も集まらん。だから来年の休耕を今年にしたんだ。俺が宿の経営に専念できるようにな。

宿なんかぜんぜん儲からないが、このところ商人連中がよく泊まってくれるから助かってるよ」

丸々とした頬をテカテカさせている親父を見ると、言葉とは裏腹に宿屋の方がけっこうもつかっているんじゃないかなと思うが、そんな感想を飲み込んで聞き役に回る。

親父は店の商品のワインを何の躊躇もなく自分で飲みながら、農業の辛さをぼやいていた。

「休耕しないで何か栽培できればいいんだがなあ」

不快な酸味がある薄いビール（だと思う）を小ジヨッキからチビチビと口に含んでいると、隣の席でいい感じにほろ酔いの男たちが何でもいいからツマミもってこいと店員の子を呼び止めていた。

「姉ちゃん、リップパー3人前ちょうだい」

リップパーとは、鶏肉の燻製をほぐした食べ物だ。

「えーと、塩エンドウなら直ぐ用意できますけど」

「あんなの馬の餌だろう。それしかないのか。まあいいや、エンドウくれ」

「……………エンドウ豆？この世界にも豆はあるようだ。」

「豆か」

根粒菌。

窒素固定。

クローバー。

うん、いけるかもしれない。

ヨウは何事かメモすると、手製の羽ペンを鞘に戻した。

メモ帳には、オムニ文字で小さくこう書かれていた。

” Nitrogen fixation agriculture
all methods ” (英語に翻訳)

これがオムニ氏族連合帝国を変えることになるとは、神ならぬ宿
のオヤジは知る由もなかった。

4 - 1 愚帝は戦争がお嫌い（前書き）

登場人物：

ヨウ 荒廃した日本からやってきた元高校生。戦時体制下のオムニ氏族連合帝国に来てしまった不運な子

エリアス ヒレンブランド領の領主の娘

カリカ 結構凄腕の傭兵。若くして魔術が使える女性で傭兵という稀有な存在

ドゥーガル・トータイル・スリミア 第21代スリミア領主、同時に第4代人族王、現在の帝国皇帝

サクス・ブランク 皇帝の側近のひとり

リレントレス アムール領を乗っ取るうとして成功

パレティーナ 帝国内部で暗躍する女

アルギラ・フォートハート 帝国都市同盟の代表者

フェニックス・ブラッド・デラー 先の侵攻作戦の功労者にして英雄。アニバーサリー作戦の総司令官

将軍A・将軍B 帝国軍高位軍人

4 - 1 愚帝は戦争がお嫌い

都市クワナを代表する商家フォートハート家。

クワナは都市国家のなかでも最大規模の総人口100万を誇っている。

ここでは、直近の1世紀における無数の商家の合従連衡と淘汰により、市内にひしめきあつた商家の数は激減していた。

今ではクワナを経済的にも政治的にも独占するのはフォートハート家であつた。

これは、不死化の負の側面による当然の結果ともいえた。昔なら、極めて優秀な商家のトップといえど年老い、その財産を先代より優秀とは限らない後継者に譲って死んでいった。

そして往々にして、先代に劣る経営者は家業を潰してしまつたものだ。

現代では、いつまでの最優秀の経営者が君臨するのだから、商家が強大化するのも当然といえた。

しかし、メトセラ処置が普及しはじめた数十年、多くの貴族たちの間でも見られたのと同じ不死の弊害が富裕層にも波及しはじめた。

優秀な商人はいつまでも老いることなく権限を握り、その辣腕で帝国の富の多くを有するまでになっていた。

その資産は各地の不動産や専売特許、領主たちへの貸付などから成り、総残高は帝国GDPの2倍にも達すると見積もられていた。

フォートハート家はその筆頭だ。

フォートハート家当主アルギラは中肉中背で髪を七三に分けた地味な男だった。

齢の頃は40代だろうか。いや、もつと若いように見える時も、はるかに年老いているようにも見えた。つまり、年齢不詳だ。

いつもグレーの地味な長衣をまとい、同じ色の瞳で全てを監視していた。広大な帝国領各地に私有地を有し、その資産規模は現皇帝のスリミア家を遙かに上回るとの噂だった。

アルギラの館、それはクワナのほぼ中心部に位置し、オムニ教会よりも僅かに小さな石造りの建物だった。

華美でもなんでもない茶色の建物で、教会の建物の豪華さとは比較にもならない。

しかし、劣っているのは外見だけで、実は地下水脈に届くほどに巨大な地下空間が広がっているのだが。

この日、アルギラは重要な会議でお隣のクワナ・オムニ教会の大晚餐室に呼ばれていた。

表向きは、ドゥーガル・トーマイル・スリミア皇帝がクワナの視察にいらしたのを歓迎するため、ということになっていたが、実は皇帝自らがフォートハート家のご機嫌を伺いにきたのだ、というの

がクワナ市民の見立てだった。

クワナ人のようなやつ、と帝国各地で悪口を言われるだけあって、この都市の市民はすれっからの現実主義者ばかりなのだろう。

クワナ・オムニ教会司教を退出させ、ドゥーガル皇帝とアルギラはそれぞれの側近だけをお供に相對していた。

至つて普通の容貌のアルギラに対し、皇帝はお世辞にも美男とは表現できなかった。

いや、むしろ露骨に悪人面だ。肉体年齢は二十歳そこそこだったが、誰もがうらやむ永遠の若さも、この容貌では台無しだった。

あまり利口そうでない顔をした皇帝は、眠そうな目つきで右手でつまんだワイングラスを眺めていた。

アルギラは平板な口調で都市同盟による、来るべき対テクサ力戦への戦争協力の数々を列挙していた。

「多くの農民が本業から手を離しておりますが、来年の小麦の収量は80万を達成しましょう。我が商会にお任せ頂いております軍用口糧の調達は予定通り可能であります。心配すべきは、非正規の業者が出没しておるとの声、我が都市同盟の各所から上がっており、苦慮しております次第であります」

ふと、ちらほらとニキビの跡が残る口元を歪め、ドゥーガルはグラスを揺らしながら眠そうに言った。

「ああ、ふむ、そうか。よろしい。大いによろしい。食べ物がない
くては戦にならんからな」

「おっしゃるとおりで。願わくば、正規業者の特許状を持たぬ不
良商人の取り締まりがあれば、より帝国のお役に立てましょう」

ドゥーガルは小さく小指を振り、側近に頷いてみせた。

「アルギラ議員、しかと承った。他に心配事はあるかな」

それらの回らぬ様子のドゥーガルに、アルギラは深々と頭を下げ
てお礼の言葉を述べた。

たいていの場合において、およそ感謝という言葉を知らぬ地味な
大商人は、皇帝の愚鈍ぶりにだけは感謝していた。

今年96年の小麦生産量は、実際のところ帝国全国で92万。対
して来年の見積もりはたったの84万。

他のあらゆる穀物においても、主に荷役用ターパンの飼料が大量
に備蓄されている関係上、民需用は必ずや逼迫するだろう。

アルギラは内心でニヤリとした。

クワナにおける各種農作物の先物・現物取引で巨額の利益が約束
されたも同然だからだ。

途方もない成功の果実が目の前にぶら下がっているという、この
”お預け” 感覚が、アルギラには他の何よりも甘美な満足を与えて

くれた。

睡眠欲を含め、どんな欲望ですら、満足の度合いは成功の果実に遥かに劣った。

唯一の心配が皇帝の独自裁量権による市中への物資放出や取引制限だったが、皇帝がこの調子なら心配なからう。

アルギラは安心して皇帝への評価をそのまま留めた。何しろ担ぐ御輿は軽いほうが良い。

もしそれが重くなれば……その君主は長生きすまい。

「さて、次は借款の利率の件でございますが、市中でも物価の騰貴もいちじるしく、我が都市同盟の金融ギルドが申すには現行の利率では少々経営が苦しいとの……おや、これはお疲れでしたか」

ドゥーガルは軽くいびきをかきはじめていた。

アルギラは控えめな微笑みを浮かべ、愛すべき軽い御輿を気遣って声量を抑えた。

「されば、文官の方。詳細は既に文書にございますので、御裁可のほどを。では我々はこれにて」

成功の果実は、いよいよアルギラの手元に転がり込もうとしている。彼は大きいなる満足感とともにこの感覚を味わっていた。

アルギラが慇懃な態度で大晚餐室を辞去すると、小さく咳払いの音が。すると、ドゥーガルの瞼がゆっくりと開いた。

咳払いしたのは、ドゥーガルの側近サクス・ブランクだった。遠目には細身に見えるが、それは身長が高いためで、実際サクスの横に並べば大抵の者は強烈な威圧感を感じるだろう。

金髪碧眼で小ぶりな顔の輪郭。サクスが皇帝だと説明されれば、誰もが疑わないだろう気品ある顔立ちをしている。

「ハゲタカは去ったか」

「はい」

サクスの低く落ち着いた肯定の返事。

ドゥーガルはグラスを押しやり、人差し指できつい襟を緩めた。

「悪徳商人め。この戦争を望んだのも連中なら、儲けるのも連中だ。さっきのしたり顔を見たか。不作の報告すら連中は誇らしげに”達成”だそうだ。まったく度し難い利己主義者め」

「ええ、まあ仰る通りで」

「なんだ、ひとりで落ち着きやがって。お前も悪口に参加しないか」

「悪口などと品のない表現は感心いたしません。悪口ではなく、事実を列挙している、と表現なさればよろしいのに」

ドゥーガルはククク、と耳障りな笑い声をもらした。

「お前の表現は独特だ。実に悪くない。事実を列挙するならば、かくして腐れ商人はますます富み、借金漬けの国はシシカバブのように美味しい部分をこそぎ取られてゆくわけだ」

度重なる戦争と無理な領土拡大の結果、この半世紀にわたって借金は増え続け、国の資産や徴税権までも商人連中に奪われつつあった。

農地の豊かな部分は大資本の傘下に入り、困窮した農民はタダ同然の労賃で農場か、もしくは戦場に狩り出される。

小作人や農奴にとっては、農場でゆっくり死んでゆくか、モンスタースターの戦いで命を落すか、そのどちらかの道しかないわけだ。主戦論が市民レベルで幅を利かせるのも、理解できる気がした。

絶望に満ちた毎日より、一時の恐怖で済むなら、戦争もアリなのだ。

「できれば私がこの手で始末したいところです」

サクスは長い右腕を胸の前に掲げ、指を曲げ伸ばしした。

ドゥーガルは唇をへんの字にゆがめた。

「とはいえ、アルギラを始末したところで何も変わらん。やつの死の報を喜ぶ同業者はごまんというだろう。やつのライバルの台頭に力を貸すなど御免だ」

サクスは溜息をもらす。

「まことに仰る通りで」

「それにヤツよりももっと消したい男もいる」

「不死鳥、ですか」

フェニックス・ブラッド・デラー。

先の西方戦役の英雄だ。誰もが納得する戦歴と勲章の数々、そして人々を魅了するカリスマ性ある話しぶり。彼の弁舌はまるで水のように心に染み渡り、水のように透明で意味がない。

実際、ドゥーガルはフェニックスが議長を務める”神の階段”という結社の演説を聴いたことがある。

フェニックスの自信に満ちた身振りや郷土愛に訴える弁舌は、確かにドゥーガルの心の奥底を流れる国家と氏族への同胞愛をチクチクと刺激した。

冷静に聞けば陳腐な単語の繰り返しなのだが、ただの単語に力を持たせることができる男が稀にいるものだ。フェニックスがそれだった。

「フェニックスがいなければ、戦争を回避する道もあつたかもしれないのだが」

眉間に皺を寄せるドゥーガル。

いけない大学生のような外見だが、これでもドゥーガルは60歳、過去15年にわたって帝国を統治してきた。

そして、15年前の西方戦役以来、帝国は戦争から遠ざかっていた。

多くのアルギラのような商人や軍人、傭兵や好戦的な民がいくらか戦争をわめこうとも、ドゥーガルはのらりくらりと避けてきた。

実際のところ、先の西方戦役のせいでガタガタになった国内経済を建て直し、借金を制御可能なレベルで安定させるために、戦争などする余裕は一切なかった。

だが、フェニックスが国中で招待されて演説して回ったためか、今や朝野は開戦一色に染まっている。

フェニックスの結社に豊富な資金を流している者が誰なのかは、ずいぶん前からわかっている。アルギラと、ヤツの金持ちなお友達がスポンサーだった。

また、最近はその頭の痛い拡張主義者に加え、新たな邪魔者が増えていた。

数年前、苦労して育ててきた諜報組織が壊滅して以来、スリミアに協力的だった十指に余る有力領主が次々と不幸に見舞われてきた。

先日には、ついにアムール領領主まで失ってしまった。

諜報組織の壊滅と領主の交代劇の裏には、通底する強固な意志の

手触りがあつた。

これは直感だ。だが、ドゥーガルには、これまで磨いてきた政治的皮膚感覚をないがしろにする気はまったくなかった。

歴史をひもとけば領主はもとより皇帝といえど、謎の病死や事故死、もしくは精神障害による強制退場が頻繁にあつた。

特にメトセラ処置が現れてからは、まともな死に方をする貴族の方が少数派になっているほどだ。

しばし無言だったサク스가、わずかに感情を見せた言葉をかけた。

「お気をつけなさいませ」

「わかっている」

わかりすぎるほど判っていた。不死になって以来、時間という利点は若年者を見捨てた。

不死者の退場は、専らそれを願う不死者の子息の親殺しのためといわれている。

そして、ドゥーガルの息子は40歳。そろそろ下克上を意識する年頃だった。

子は親を殺し、子は親に殺される。古からの権力者の通弊とはいえ、現代のそれは余りにひどいものだった。

それでも………帝国を次代に譲るわけにはいかない。

20年も前から、帝国の軍備維持経費と戦争の被害は、戦争から得られる収益を上回っている。

それでも、もはや軍需産業そのものが既得権益でがんじがらめになってしまっている帝国は、戦争から抜け出せなくなっているのだ。それはあたかも麻薬のようだった。

ドゥーガルが帝国を去ったら、帝国の軍備は更に膨れ上がって、恐らくテクサカにも勝利できるだろう。その前に経済が破綻しなかつたら。

しかし、その先は？ ダウン寸前のボクサーのように、フラフラになりながらも敵にもたれて屹立する巨人、それが帝国だ。敵が消えたら自らもまた、倒れるしかない。

敵を見失った帝国は、身内に敵を見つけ出すことになるう。

つまり、テクサカ出現前の氏族同士がいがみあう分裂時代の再来だ。

ドゥーガルは嘆息したかった。

進むも地獄、退くも地獄、どうすればよいのだろうか？

何か、全く新しい状況が訪れないだろうか？ 全てを解決できる何かか。

「そんなことあるわけない、か」

そう独りごとちると、薄っすらと笑ったのだった。

4 - 2 無名キャラクターの宴

戦争を終わらせるための戦争。

これは、英雄フェニックス・ブラッド・デラーが帝国全土に広げているスローガンだ。

彼の行くところ聴衆の人だかりができ、地方の小領主たちは感涙にむせび、沿道の村々の子供たちは英雄を目の前にしてガチガチに緊張して花束を渡す。

そして、フェニックスは流れるような自然な動作で子供を抱き上げると、子供達に豊かな未来を約束するのだ。

地平線の彼方を指差し、将来子供たちが戦場に狩り出されない平和な世界の礎になろうと呼びかけ続けた。

戦争のない世界、オムニ教の御旗の下に統一された世界、もはやいかなる脅威にさらされることもなく、無限に広がる可能性に満ちた未来を共につかもうではないか！

そんなフェニックスの周りには、何人もの甲冑を身に帯びた男たちが付き従っていた。甘い蜜に引かれる昆虫のように。悪く言えばゴミの周りのハエのように。

將軍A及び將軍Bもそうした取り巻きだった。

とりたてて武功もなく、魔術も下手。だけど昇進が遅いのを気にする自尊心だけは豊富に備え、武功がないのを現皇帝の弱腰のせい

だとわめき立てる連中だった。

更に、この使えない將軍たちの性格には、強烈なコンプレックスまでも追い討ちをかけていた。

彼らは後継者の誕生が遅れたために双方ともメトセラ処置を受けるのも遅れ、メトセラ処置を受けた時点での肉体年齢で外見が固定されていた。

そのために、容赦ない老化の影が將軍たちにはみてとれた。

片方は太りすぎで太鼓腹を突き出したハゲ、片方はガリガリに痩せた酷い口臭持ちだった。

ところで、使えないのはこの將軍たちだけではない。

実際のところ、惨めな失敗に終わった15年前の西方戦役でおめおめ逃げ帰ってきただけのフェニックスにも武功などなかったのだ。

しかし、彼には爽やか弁舌があった。

彼の舌にかかれば、無策ゆえの突進を勇氣と呼び、兵の無駄な死は帝国の誉れ、敗退は敵を誘い込むための天才的な戦術的後退になった。

將軍A、Bともに、そんなフェニックスの幻の威光にコロツと騙されているクチだが、彼ら自身はフェニックスを利用してやっている、内心ほくそ笑んでいた。

そして目論み通り、彼らはまんまと対テクサ力戦の2個軍の司令

官に納まることに成功したのだ。総兵力213個連隊22万3600人の大軍団を率いる名誉が与えられたのだ。

だが、人間というものは現に持っているものに加え、さらに新たに得られるという保証がないと、現に持っているものすら保有しているという気分になれないものである。

將軍A、Bは帝国西部の宿营地でたちまち角突きあわす間柄になつてしまつた。

相手側の連隊の物資補給状態を羨み、精強な連隊が配備されたのを嫉妬した。

やがて輜重に当たる民間業者を密かに襲い、物資を横取りするようになった。

將軍Aは將軍Bの武器庫に密かに工作部隊を忍び込ませ、いざという時使い物にならぬよう武器に傷をつけた。將軍Bは將軍Aの司令部にスパイを送り、熟練した職業軍人の副官に毒を飲ませた。

將軍同士の応酬は次第に激しさを増し、ついには連隊同士の流血沙汰がおきた。上司の心を読むに敏な士官が先走つた結果だつた。

これにはフェニックスも激怒した。

下手すると帝国等族議会の追及を受けかねなかつた。

それは、テクサカに勝利した歴史上最大の英雄として政界に進みやがて終身皇帝になるという巨大な野望を温めるフェニックスにとつて痛手であつたのだ。

事態沈静化のため、將軍A Bは責任を全て上昇志向が強過ぎて先走ってしまった若い士官たちに押し付け、処刑してしまった。

魔術師であり、貴族の子弟でもある士官を処刑したことで、その士官の親を決定的に怒らせ、幾つかの連隊が母国に帰ると騒ぎが起きた。

こうした様々な問題に悩まされつつも時は過ぎ、4月がやってきた。

將軍Bの指揮下にはヒレンブランド連隊980名が配置され、西方地域のアクターボに待機していた。

そして、エリアスとカリカも開戦の刻を静かに待っていた。

4 - 3 罪状は”神への冒瀆”（前書き）

狂信者というのは恐ろしいもんです。

とりわけ強大な権力を有する宗教などが、非公式な武力を有することもよくあること。

誰かにとって不都合な事実を主張する者が、そつした力に潰されることも、またよくあることだった。

4 - 3 罪状は”神への冒瀆”

春が近づくにつれ、慌しい町の空気は次第に不安と興奮の奇妙な混交物に取って代わりつつあった。

もはや誰も知らぬものもない対テクサカ戦争……誰が言ったのか、”戦争を終わらせる戦争”が始まるうとしていているからだ。

この数ヶ月はあらゆる商人や物流業者が激しく国中を動き回っていたおかげで、この世界の基準ではちょっと変わった顔立ちをしたヨウも特段注目を浴びることもな旅を続けることができた。

残念ながらこれからはそうもいかないだろう。

必要な軍需物資はとくに前線の集積所に送られるかして、この大都市クワナを通り過ぎていった。

時折走り抜ける伝令任務の兵隊がいるくらいで、町の通りはすっかり人影が少なくなっていた。

見たところ仕事もせずにプラプラしているヨウはあからさまな不審者になってしまいかもしれなかった。

この半年近い間、戦争準備に追われるファンタジー世界をうろつき回った結果、貴重な羊皮紙でできた手帳はびっしりと新たな見聞やアイデアが書き込まれていた。

商事移動許可証とヒレンブランド印の紹介状のおかげで見て回っ

た場所は工業を中心にあらゆる産業分野に及んでいた。

ギルドの規制や秘密の壁はあったものの、実物の機械仕掛けを見学する機会は極めて豊富にあった。

クワナ大学の有難い援助のおかげであった。

中世ルネサンス期の大学もかくやと思える柔軟な頭脳を持った御仁が、驚くべきことに何人もいた。

ヨウの示す腕時計や空のペットボトルに感嘆の声をあげ、親切にもオムニ教会に通報されぬように様々な助言をもらうこともできた。

大学の教授の中には、数学や歴史学、魔法学、修辞学など20余りの学問分野に精通した人々がいて、ヨウの周りに群がった。

中には金銭を提供しようとする者もいたため、有難く頂き、幾つかの高校物理レベルのヒントを提供したこともあった。

微分記号や積分記号を使って数学を伝授したため、もしこの世界でこんな演算子をみかけたら、それはヨウの仕業ということになる。

天体運行の現実や万有引力の法則、アルファベットの英語発音の読み方も、なぜか歴史学や紋章学の教授が卒倒するほど喜んでくれた。

学ぶうちに、この世界にもたらせる知識や発明品もかなり見えてきた。

例えば印刷技術やソロバンだ。ソロバンがあれば、暗算に頼ることなく大きな数字を計算できるだろう。

また、商業簿記についてはよくわからないけど、帝国の商人が使う計算方式は呆れるほど効率が悪かった。

この世界ではアラビア数字はみかけなかったが、ローマ数字に似た表記法は存在していた。

ヨウが以前から思っていたことで、誰でもそう思うだろうが、ローマ数字の4と6は？と？になり、紛らわしい。

しかも、ローマ数字は大きい数字の表記が余りにも苦手だ。アラビア数字での9はローマ数字では？だが、3999はMMMMCIXCIXという長つたらしいものになってしまう。

一方、帝国の表記法によれば、長い歴史の間に幾つかの減算則が取り込まれたらしく、地球のローマ数字ほど面倒ではない。

例えば66000はLXVI*M と表記されていた。Lは50、Xは10、Vは5、Iは1、Mは1000に対応するため、 $(50 + 10 + 5 + 1) \times 1000 = 66000$ となる。

これではこの世界の帳簿はさぞかし難解だろうと同情してしまった。

学問の府では多くの学者を大混乱に陥れてしまったヨウだったが、彼の教えた知識は静かに広がっていった。

その革命的な知識を発表したのが著名なクワナ大学の先生だったことが良かったのか、地球の知識はゆつくりとだが帝国全土に広がっていった。

新しい表記法もしかり、商人の間で爆発的に流行していた。

アラビア数字は一度覚えれば簡単だったし、あらゆる徴税吏や会計士も、数字の扱いには頭を抱えていたのだ。

幾人かの学者は一躍時代の寵児となったし、アラビア式計数法に適した新しい帳簿を開発した実業家は大金をせしめた。

そういった者の中には、いつかヨウが自分の知識の代価を取り立てるようになるのではないかと恐れる者もいた。

全ての基本的な発想がヨウからのものであるならば、当然、発明や特許の正統な権利がヨウにもあるはずだ。

ヨウにとっては、それらは中学高校で当然のように得られる知識だったし、地球では重要でもなかったために、それでカネを取ろうとは考えていなかった。

しかし、疑心暗鬼にかられた教授のひとり、ついにヨウをオムニ教会に告発してしまったのだった。

罪状は”神への冒瀆”。つまり、昔からいいように利用されてきた密告するための陳腐な呪いの言葉であった。

4 - 4 時代錯誤の侵入（前書き）

その日、宿に帰るために暗い通りを歩くヨウは、少し遅れて足音が追いかけているのを悟った。

早足で歩くと、複数の足音も早くなる。

ヨウは、何も気付いていない演技をしつつ、逃げるチャンスを探っていた。

そして、とある路地にさしかかるや、やおら全力で駆けた。

背後の男たちもついてくる。

十字路に出たヨウのすぐそばの壁にボウガンの矢が命中し、火花を散らした。

左右どちらに行くべきか？

たった一瞬だが躊躇して、一方を選択した。

果たして、怪しい男たちから逃れることができるのだろうか？

……ちょうどその頃、パレティーナは密談を終え、クワナの町を散策していた。

4 - 4 時代錯誤の侵入

夜の大陸上空を飛翔する影。

3つの月に照らされた雲海が途切れ、青白い月明かりが闇に潜む影を束の間ではあるが照らし出した。

つややかな金属の外皮をまとったそれは、地上のどのような鳥よりも疾く空を翔る。

やがて、地上に近づいたその物体は、数度ちらつきを見せてから再び闇に溶け込んだ。

低い風切り音が寝静まった地上に響いたが、それを気に病む物好きな住民は誰もいなかった。

厳しい農作業で疲れきった農民たちは深い眠りの中にあつたからだ。

然るべき伝達事項を手短に伝えたと、私はアルギラに背を向け、執務室のドアノブを回した。アルギラの好奇心に満ちた視線が背中あたりをさまよっているのが感じられた。

ドアを開けると、アルギラの私設衛兵が飛び上がるほど驚いて立哨の定位置に戻るの同時だった。

ひょっとして、鍵穴から中をのぞいていたのだろうか。

衛兵の汗が伝った横顔を一瞥すると、外套を波打たせ薄暗い石の通路を足早に進んでいった。

あの衛兵の驚いた顔を思い出して、思わず忍び笑いがこぼれた。

私をその道の女か何かだとも思ったのだろうか？そうかもしれない。

あのいかにも堅物のアルギラの部屋に最優先で招かれる女など、確かにそうはいないだろう。

通路の半ばにある部屋の一つから商館の従業員が顔を出し、私と目が会つと小動物のように瞬く間にドアの奥に隠れてしまった。

そんなに怖いかねえ？

帝国の標準的体格からすれば、彼女は長身で豊満なアマゾネス、という表現がぴったりくる目立つ女性なのだが、あまり自覚はない。

そもそも、黒系のリネン・アーマーとクロテンの毛皮製コートと見紛うような外套を着ているような女は帝国中探しても（たぶん）いないだろう。

いや、まあ、ひょっとしたら特定の趣味を持つ集団が時々着用しているもおおかしくはないかもしれないような服装かもしれない。

リネン・アーマーからはみ出さんばかりの胸元は、ヒールが石畳を打つたびに悩ましげに揺れている。

基本的には慎ましい女性がほとんどのオムニ氏族連合帝国では、もはや目の毒に近い。

陰鬱で巨大な建物の裏口から外に出ると、夜はまだ浅く、帝国有数の大都市の中心街は残業帰りの官吏や商人が何人も通りを行き交っていた。

ちょっと立ち止まって考える。そして、ぶらぶらと大通りを城壁に向けて歩いていった。

時間はまだあるし、ちょっと羽を伸ばしたい気分だった。

ふと酒場の前を横切ると、酔った男たちが飲み物の入った杯を掲げてウイंकしてきた。

たまにはこの人族の食事もいいかもしれない。酒場の入口をくぐろうとすると、ぶ厚い胸板の男が入口の傍で彼女を止めるように手を挙げた。

「さて、その格好はなんだ。ここで営業はできん、他所にいけ」
営業つてなんだ。

「わかったわよ。っていうか、営業ちがうから」

「なんだ、妙な訛りしてるな。エルフ族か？」

顔からつま先までじろじろ眺める男の視線は実に無遠慮だ。

「ほーお。ぐふふ、そうだな入ってもいいぜ、でもこれを頂かな

いとな。いちおう決まりなもんでね」

男の親指と人差し指が小さな円を描いている。その万国共通の意図に、私は遅ればせながら、やっとこの男が言わんとしていることを理解した。

私はとても汚い捨て台詞を吐いて酒場を立ち去った。

まったく、これだから人間集団というやつは。

背後からは、失望したような数人の客からのうめき声が追いかけてきた。店番をののしるような声も混じっている。

逃がした魚は大きいのだよ、でももう戻ってなんかやらない。

もうここは大通りの外れ、確か大学があるあたりだ。私は通りを横切ってもと来た道を引き返そうとして、それに感づいた。

何事か叫ぶ若い声と、金属が触れ合う音。

その瞬間、路地の暗がりから若い男が後ろを振り返りながらパレディーナめがけて突進してきた。

「ぐほあー！」

私が身を引くと、若い男は私のブーツのつま先につまづいて派手に転んだ。

男のポケットから、何かが転げ落ちて地面を転がってゆく。

パレティーナは半ば馬鹿にした口調で言う。

「何よあんだ」

そついい終えた刹那、防衛機序が立ち上がり、体から意識が遊離するような感覚を覚えた。

意識の反応速度では感知できない短時間のうちに視界が灰色になり、ボウガンの矢が形の良い胸を指して刻々と迫るのをスローモーションで確認した。

体内の戦闘時反射機構が生体神経線維を流れるのろまな活動電位を追い越して、左腕を人間には不可能な速度で矢に突き出した。

ゆっくりと矢がてのひらを貫通し、運動エネルギーを失ってゆくのを感じられた。

視床下部ではインプラントからホルヒネ様ペプチド前駆物質が堰を切ったように放出された。脊椎では、同時に痛覚ブロックが実行に移る。

襲撃者は4人。うち武器を構えるのは2人。

1人は路地の向こうで通行人の監視に当たっている。

もう1人は指揮者のようだ。

視野の片隅に、”オムニ教修道士・所属不明”と敵の識別情報が

スクロールする。

戦術プログラムが右手にステルス銃を握らせ、その威力インジケーターが”致死”にセットされるのをぼんやりと意識した。

その次の瞬間には、襲撃者3人は特に外傷もないのに次々と糸が切れた操り人形のように倒れ伏す。

遠方にいる監視役も意識を失い、索敵システムがオールグリーンを宣言すると、ようやくパレティナーの意識に肉体が戻ってきた。

「くそ」

痛みはないが、左手は見るも痛々しい状態だった。多少の悪態もでるといふものだ。

見下ろせば、何の脈絡もなく襲撃者に追われていた若い男が、肩膝をついて立ち上がるうとしていた。

「いてて」

単に転んだだけで”痛い”とのたまうとは、なんたる皮肉か。こっちは手に風穴が開いているというのに。

何だか急に腹が立った。

その幸運な男は、背後を振り向いて啞然とする。襲撃者は皆、小汚い路地に倒れていた。

「あいつら、どうしたんだ」

男は私を見上げていた。なかなかカワイイ顔立ちをしている。

「あなたが助けてくれたんですね」

そして、私の左手に突き刺さった矢に気付いて更に啞然とした。

私は戦術プログラムがこの若い男、というか少年に近い青年だろうか、こいつを始末するという決断を下す前に、この場を立ち去ることにした。

人通りは少ないとはいえ、そのうち誰かにみつかるだろうし。

「ちよつと待って。あなたは誰です」

片足をかばうようにして追いつがる少年を振り切るように大股で歩く。

左手のむずむずする感覚はリペアー機序が働いている証拠だ。

すぐに傷口から押し出された矢が地面に落ちた。

地面で乾いた音をたてた矢のそばに何かが落ちている。金属でできた円筒、その一端は透明な物質で覆われている。

ハンドライト。

いまさっきの戦闘では小揺るぎもなかった心臓の脈拍数が跳ね上がった。

ゆっくり屈んでそれを拾い上げると、脇についているボタンを押した。

白銀の光線が虚空に伸びる。

やっとこれだけ言えた。

「……………お前は何者だ」

私の緊迫した低い声に驚いて、青年は目を丸くした。

「何者かと聞いている!」

私の大声に呼応するかのように、遠くから犬の鳴き声が届いた。

青年はためらいがちに答えた。

「ニシミヤ ヨウです」

「ニシミヤ……………」

その響きは異質な感じがした。

なぜこんなところに明らかかな技術文明の所産があるのだろうか。

見たところ新しい製品のようにだった。

帝国の技術水準からは明らかに数世紀はずれた代物だった。

「あなたの名は？」

「は？ああ、私は」

考え込んでいた私は、意表を突かれた。

「サイン」

ん？

「ああ、ごめん間違った。パレティーナ。パレティーナだから少年は疑わしげに眉をひそめた。

「普通、自分の名前を間違えますかねえ」

うう、鋭い質問だ。

「……………あ、もう帰らないと。失礼」

私はハンドライトを少年に抛ると、一目散に駆け出した。

少年は、去り行く奇妙ないでたちの女の背中が見えなくなるまで立ちつくしていた。

参考資料：BD「軍事技術（前書き）」

ブランチ・デッドエンド BD世界軍事技術概説

参考資料：BD | 軍事技術

BD世界の軍備において、重要な相違点は二つ。

魔法の存在

騎馬の不在

である。騎馬がないことで、戦闘上戦術的にとりうる手段は減少していたが、魔法がそれを補って余りある戦術的技法を帝国軍に提供している。

帝国軍魔術連隊の一般的な作戦行動

魔術師200人、歩兵800人から成る連隊を例にとる。

帝国軍の魔術師は、移動時には歩兵に囲まれ、左右を二人の歩兵に守られた三列縦隊の形をとることが多い。

そして、見晴らしの良い遮蔽物のない場所を選び、布陣することになる。

なぜなら、攻撃魔法はモンスターの攻撃範囲の遥か彼方から、アウトレンジ攻撃が可能だからだ。

魔術師は二人一組で行動する。

一人は防御専門、一人は攻撃専門だ。魔術師個人の適性によって役割が分担される（それが理想だが、往々にして貴族が攻撃魔法を担当する）。

魔力容量は大きいほうが良いに決まっているが、小さくても強力な攻撃魔法を放てる者は攻撃向きである。魔力容量が大きい者や魔術の発動・消去が短時間でスムーズにできる者は防御向きといえる。

それは性格と同じで、人数分だけ個性がある。

通常、魔術師2人に歩兵8人の割合でサポートしている。

また、4氏族の一つフェンリルはあまり社交的ではないが、古い協約に基づき戦時には通信兵として従軍する。基本的に脆弱な存在であり同時に頭数も少ないため、一個大隊に一人の配置がせいぜいというところだった。

?会敵

テクサカ軍を構成するモンスターは、勇猛果敢ではあるが唯一有効な戦術として突撃しかできないと言ってよい。

個々のモンスターは腕力や体格で勝るものも多いが、貧弱な武装とほとんどないに等しい防具しかなくては帝国軍に勝つのは難しいだろう。

モンスターの武器は、棍棒、時には帝国軍から奪った剣、たいていは生身の腕をふるうのみ。

この時点で、魔術師はモンスターの単純な突撃がどの方向からくるか見極め、指揮官は魔法攻撃の射界から歩兵を移動させる。

通常、布陣した時点で射界を確保しているため、歩兵の退避は最低限ですむ。

そして、射撃命令を待つことになる。

?遠距離攻撃

魔法の種類にもよるが、遠距離魔法攻撃の射程は約1000mといわれている。

しかし、上下の発射角度がわずかでも狂うと遠距離攻撃魔法は敵の

頭上を跳び越すか、遙か手前の地面をえぐるだけに終わるため、一般的には500m以内まで敵をひきつけることが多い。

魔術師は、モノプティックを代表とする遠距離攻撃で攻撃する。このとき、防御専門の魔術師も一回だけ攻撃魔法を発動させることが多い。

防御魔法の魔力消費は攻撃魔法に比べ少ないため、単発の攻撃魔法発動後も魔力に余力があるからだ。

次に二つの選択のうちどちらかをする。

一つ目、第二撃を放つ。

二つ目、トラクトで魔力補給。

どの選択をするかは魔術の強度、魔術師の魔力状態にもよるため一概にはいえない。

いずれにせよ、魔術攻撃の後には防御の順番が来る。背後の魔術師がシールドを張り、攻撃専門の魔術師を含めた二人の魔術師を守ることになる。

? 近距離攻撃

サンダーのような近距離攻撃魔法が使われる場合もあるが、通常は攻撃を終えた魔術師がデフレクトを発動し防御体勢に入る。

歩兵は魔術師の両サイドを離れ、前に出る。魔術師同士の配置は1・5エル（約1・5メートル）程度のため、8人の甲冑を装備した歩兵が密集隊形をとることになる。

歩兵の一部はスリングを用いて投石を実施する。

この投石攻撃は意外と強力で、1kgの石を時速100kmで撃つことができる。

ボウガンと異なり弾道は放物線を描くため、最大射程は400m程度とかなり長い。

弓兵も放物線弾道を描く矢を放つため長射程で、200m程度まで威力を有する。

最も敵が接近してから活躍するのが、クロスボウである。

クロスボウの矢は短いが故に直進安定性に欠け、放物線弾道の射撃ができない。

つまり直接照準の直線射撃しかできず短射程である。

弓・投石は歩兵の扱いが難しく、クロスボウは射程が短いために、現在では次第に廃れている。

また、飛び道具そのものが魔術師の領分である遠距離攻撃の対抗物となり得るため、貴族に将校が敵視している。

よって、飛び道具の発達が妨げられている状況だった。

？防御

槍ぶすまを形成し、敵の突撃を受け止める。

【相手が人間サイズのモンスターの場合】

歩兵は4人ずつの二列隊形をとり、前列は槍を水平に構え、後列は槍を上から斜め下に構える。

【相手が大型モンスターの場合】

歩兵は4人ずつの二列隊形をとり、前列は膝を立てた格好でしゃがみ槍を下から上に構え、後列は槍を水平に構える。

これは、頭上からのモンスターの攻撃を受け止めるためである。

また、歩兵がパビスと呼ばれる方盾を構えるケースもあるが、重さを嫌って携行しない場合が多い。

1小隊あたり4人の魔術師がいるため、1小隊に2個の戦力単位ができることになる。

この2組はなるべく近接して互いを守るうとする。

?反撃

前衛の部隊が敵の攻撃を受けている間も、後方の魔術師は攻撃魔法を射撃している。

敵に十分な損失を与えると、後方の歩兵が逆襲に転じ、前衛の魔術小隊と合流する。

防御に徹していた魔術師は回復に努め、

攻撃魔法の準備ができ次第、防御専門の魔術師が結界を解き、攻撃専門の魔術師が攻撃魔法を放つ。

そして、すぐに防御魔法を発動し、二人の魔術師は守られる。基本的にこの繰り返しになる。

一方、反撃に転じられない場合には、多数の魔術師がリング状に連なる円陣をつくる。

結界に守られた陣内には少数ずつしかモンスターが侵入できないため、劣勢の場合によくとられる戦術である。

円陣で守る間に、味方の救出を待つことになる。

?追撃

全てがうまくいった場合には、魔術師・歩兵は追撃をはじめ、森の中では遮蔽物が多く魔術の効力が削がれるため、深追いは危険とみなされている。

優秀な指揮官は、魔術師を敵中に取り残されてしまう事態を最も嫌う。

歩兵を全て失い、敵が魔術師を包囲した場合、長時間結界を張り続けることができないために魔術師までも失うことになる。

敵の数が多く防衛戦の場合には、歩兵の比率を増やすべきである。

騎兵のような兵種が存在すればその移動速度と突撃力で救出も可能かもしれないが、騎馬が利用されない世界では徒歩が移動速度の限界であった。

よって、重包囲下の魔術師の救出は困難といえる。

補足：

騎馬はいないが、ターパンと呼ばれる使役動物は存在する。

ターパン以外の大型哺乳類は帝国に存在しない。また、個体差はあるが、ターパンの一部がアクターボにおいて制御不可能な混乱状態に陥ることがある。

これを一般に”モンスター化”と呼ぶ。事実、混乱したターパンの多くは人を襲うようになるため処分が必要である。

魔術連隊の中には、遠距離攻撃専門の”火炎制圧旅団”や”攻撃魔法大隊”を備えるケースもあつた。しかし、この30年余りのうちにそのような及び腰の遠距離攻撃に頼るのは”魔術連隊の恥”と思う指揮官が増え、実戦において活用された例は多くない。

また、魔法に戦力の多くを頼るようになってから、昔栄えた高度な戦術は次第に失われつつあつた。

テクサカに対して量的にも戦力的にも優勢になってから、勇氣と迫撃を重んじる傾向がますます強まっている。

自信と過信の区別をつける指揮官が少なくなるなか、いちど敵中に包囲されたら致命的な打撃を被る危険性は高まっていた。

装備

36世紀末にテクサカと遭遇して以後、帝国の軍事技術は対モンスター集団戦に適応した軍備をもつようになった。

それ以前は、異形の者と呼ばれた人間に近い肢体と技術を有する氏族か、等族内の反乱鎮圧が主な戦いであったために、現代の帝国の装備とは若干異なっていた。

昔は現代と比べると、

槍が長い（4〜5エルもの長さがあった）

弓兵や投石兵、剣士の比率が高い

魔術師の比率が低い

という特徴があった。

また、傭兵制度もさほど発達しておらず、軍隊の規模も比較的小規模だった。

また、対モンスター戦闘は、テクサカ出現以前は小規模かつ偶発的なものであり、戦闘の規模はせいぜい数十人規模であったため、個人の技量がものをいった。

モンスター集団戦への移行はテクサカ出現以降の現象である。

歩兵

・武器

2エル〜2.2エル程度の槍が主要な武器。

使用する鉄素材の量も少なく、傭兵でも比較的容易に手に入る武器であった。

当時は武器を全て領主のような雇用主が購入することはなかった。経済的余裕がない傭兵に貸与する武器だけは領主がそろえる必要があった。

当然、武器を貸与した場合には傭兵への給金が減ることになる。

傭兵の他に正規軍とも言うべき志願兵や職業軍人士官もいることにはいたが、その割合は低かった。

歩兵は、槍を失った場合には、剣や棍棒で近接戦闘を戦うことになる。

そのため、0.5〜1エル程度の剣を帯ていた。

金属を使う必要がない棍棒は安価だったために多くの貧しい傭兵が装備していたが、それを使う事態にならないように皆が祈っていた。モンスターと棍棒で殴りあうなど、悪夢そのものだったからだ。

BD世界にもフレイルと呼ばれる連接棍棒や戦斧、スリング、弓が存在したが、既に廃れていた。

技術的に難しいか、魔術師の技能と重複する技術だったかしたためだった。

傭兵の中には”合成弓”と呼ばれる高価な弓を持つ者もいた。

合成弓は弓本体の背中側、つまり円弧の外側に動物の腱などの柔らかく伸縮性に富む素材を用い、反対側には動物の角や硬い木材などの素材を用いた。

地球のモンゴル軍やトルコ軍も持っていた強力な弓だったが、BD世界では以前のように使われていない。

クロスボウも同様に廃れている。

・防具

テクサカ以前は矢や槍のような鋭い武器による攻撃を想定した防具を使用していた。

代表的なのは、人族が用いたチエイン・アーマーだ。これは製造しやすい鉄のリングを連ねたもので、鍛造・鑄造技術が低くても製造できた。

刀剣類への抵抗力は高く、柔軟性もあつたために広く用いられた。だが高度な鉄器を持たないテクサカが相手の場合、刀剣よりも棍棒による主に横方向からの打撃への備えを優先することになった。

高度な武具による腹部への突きや切り込みを想定しない、腕当・帽子型頭兜・胸当など上半身に集中した防具が用いられた。

中には木製鎧や毛皮製鎧もあつたが、それでも棍棒からある程度身を守ることはできた。

また、敵と見間違ふことがないため、紋章を防具に明示する決まりもなく、自由な防具を選べたため、歩兵の防具は多種多様な寄せ集めになる傾向があつた。

魔術師

・武器

儀礼的に細身の片手剣を身に着けている以外は、特に武器は持っていない。

最強の武器は自身の内に宿る魔力と魔術の技量なのだから、空手なのを誇る魔術師にとり必要ない。

ただし、魔術発動時に各個が攻撃魔法の指向方向を示す棒を用いるケースが多い。

カリカやエリアスもそうだが、剣をその用途に用いる者がほとんど

である。

・防具

「魔術師」貴族の子弟」という図式がほぼ成り立っているため、豪華な防具を揃えている。

少数派ながら傭兵の魔術師もいるが、彼らは危険な前衛部隊に配属されることが多い。

お仕着せの装備というものはない。

傭兵魔術師はアクターボでの護衛や警備任務で戦慣れしており、装備も使い込んでいるため、美しさや華麗さを重視する傾向がある貴族の魔術師よりも実戦的な装備を有することが多い。

防具の基本形は、薄い鍛造鉄板で覆われた甲冑である。

アイロン・アーマーやプレート・アーマーと呼ばれている。

これは重量が20kgもあったが、それだけに防御力も高かった。

鉄が貴重品のBD世界では、言うまでもなく価格もかなり張った。

テクサカ出現以前にはチェイン・アーマーが防具の主流であったが

% 8

参考資料：BD「百年戦争（前書き）」

オムニ・テクサカ戦争の略史と軍の編成について

参考資料：BD | 百年戦争

オムニ・テクサカ戦争の略史と軍の編成

当初の見込みを裏切り長く続く戦争は、今や100年戦争とでもいうべき持久戦の様相を呈している。

この戦争の過程でオムニ氏族連合帝国（Clans alliance empire of Omni。以下”帝国”と称する）は、“異形の者達”との連合と国内の中央集権化をなしとげた。

魔術戦の技術力と軍制は長足の進歩をとげ、帝国軍の戦力は戦前とは比べ物にならないまでに成長した。

だが、軍拡の影の側面である、戦争という消費活動への経済資源の過度の投入による経済構造の偏りが目立ち始めていた。

4世代にわたる戦争は、世代を経るごとに政治的活動の延長戦としての節度あるそれから、聖戦としての狂信的様相を強く帯びるようになってきている。

歴史

戦前：

アクターボの果てからやってきた奇妙ないでたちの男女が、オムニ教会及びオムニ王国に対しアルトゥリ・ムンディの調査研究の特権を願い出るが拒絶される。

戦争初期：

テクサカとの初接触。

王都スリミアを目指し、オム二王国を囲む広大なアクターボから押し寄せるモンスターの大規模攻撃でオム二王国は滅亡寸前に。しかし、人族を含む主要四氏族が連合して迎撃にあたり、テクサカ軍の攻勢をすんでのところで挫折させた。以後、国内の行政改革と氏族内の政治的統一が推進されるが、その過程で数多の弱小領主が淘汰された。

戦争中期：

オム二帝国は積極的なアクターボ浄化を行い、勢力圏を拡大していった。
”内”と”外”を峻別するようになった帝国の拡張は、アクターボに住む蛮族にとっては悪夢そのものだっただろう。

ここでいう”蛮族”とは、四氏族と似通った外見的特長を有する種族の帝国外における共同体を指す。

人族はあまり熱心に同化を試みなかった（特にその蛮族が人族と同系統でない場合）が、出生率が四氏族で最も低いエルフ族に限っては、一人でも多くの同族の同化を図った。

各氏族の同じ外見的特長を有する集団を”等族”と呼んだ。

人族において蛮族の同化が行われた例を分析すると、蛮族の人口が多く、ある程度の軍事力を保有する場合にはほぼ限られていた。

一方、一般的に”モンスター”と呼ばれる種族は四氏族以外のアクターボに住むメガファウナ（大型動物）を指す。

つまり、アクターボに住む、体重が人と同等もしくは上回る生物は、全てモンスターと言える。

また、この世界においては、馬・牛など人よりも体重が重い陸棲生物はターパンを除き、あらかた絶滅している。

散発的にモンスターとの戦闘は起きていたが、魔術を行使できる小軍事勢力に封土を与え、防衛・開拓にあたらせるといふ領主制度の発達により、小規模なモンスターとの戦いではオムニが大抵勝利していた。

一方、テクサカ側は魔王エルモ及びサイン自らが親征することで、大規模なモンスター兵力を集中させ、敵を撃破する”戦力集中ドクトリン”を多用するようになっていた。

テクサカは、概して知能が低いモンスター種族を有効に指揮運用するために、魔王自らが親征する必要があったのだ。

多数の領主から成る帝国軍は、小部隊による”浸透戦術ドクトリン”を多用し、大きな2部隊しか運用できなかったテクサカ軍を翻弄できた。

初期の弱体な帝国軍は、テクサカ軍の明らかな欠点を逆手にとり正面对決を避けたのだった。

このような賢明な戦い方は、帝国軍が大規模化し、勝利の伝統を”勇氣”と”敢闘精神”のたまものだと妄信するようになるまで、徐々にゆくことになる。

この頃から、帝国では歩兵主体の連隊からの変化がみられた。

魔術連隊がはじめて編成され、組織的な魔術戦闘の最大部隊編成単位となった。

各時代に現れる少数の才能ある魔術師がメトセラ処置により時代を越えてストックできるようになったため、連隊の魔術師は増加した。帝国の連隊は魔術師を中心とした運用と編成にゆつくりと変化し、実質的な個々の連隊戦力は時間の経過とともにオムニ優位に転換していった。

連隊は最大部隊編成単位として自己完結的な組織戦闘力を維持し、独自に継続的作戦行動が可能だった。また、兵站・給与などの面でも独立した一つの単位であった。連隊を帝国軍に拠出できる領主は、大領主といってもさしつかえない存在であり、連隊の拠出は貴族の一つのステータスでもあった。

戦争後期：

帝国における魔術師のストック自体は万を数えるまでに増加し、魔術師を中心とした編成の魔術連隊は3696年現在180個を数えるまでになっていた。

戦争中期に創始された連隊制度であったが、その編成規模は時代とともに大型化している。

近年の一個連隊は魔術師200人、歩兵800人から成った。1連隊の定数は1000人と考えてよい。

多くの場合、補給は各連隊と契約した業者が担当し連隊と行動を共にしていた。

補給部隊に関しては兵と民間人の差がはっきりしないため、時には補給部隊も戦闘に巻き込まれることがあった。

一般的に、魔術連隊では魔術師20人、歩兵80人ごとに士官2人が指揮に当たった。

大隊は定数200〜250名であるので、士官2名から3名が指揮にあたった。

大隊本部には大尉1名、中尉1名、軍曹2名、武器掛将校1名、従軍神官2名、交霊師1名、鼓笛手2名、旗手1名、従者1名、治療師1名、縫工手2名が付随した。

炊事掛は各小隊の軍曹が兼任しており、武器掛将校が食料配分を決定した。

1大隊は2中隊、1中隊は5個小隊より成った。
1個小隊約20名のトップは少尉に相当する魔術師がついた。
1小隊あたり4人の魔術師のうち3人が戦死・負傷した場合、小隊は戦力を失ったと判定される。なぜなら、魔術師は2人一組で行動し、片方が防衛系の魔術で攻撃をサポートするからである。
基本的に歩兵の役割は、近接戦闘時に魔術師を守る護衛としての機能を期待されており、攻撃の主役はあくまで魔術が担っていた。
歩兵は剣を使う剣士だけではなく、槍兵・弓兵も含んでおり、兵種比率は時代を下るごとに槍兵の割合が増していた。

上記の連隊は戦時に必要に応じて編成される傭兵的な性質が強かった。

実際、歩兵の多くは傭兵であつたし、魔術師も平時は自分の領地経営をしたり、魔法スキルを生かした仕事を持っていた。

魔術師の数が増えるに従い、魔術技能を有する治療師は増加していた。

なぜなら帝国の医療水準が低いため、治癒魔法は社会にとって必要だつたからだ。

治療師たちは、平時の主要な報酬源である診療報酬を維持するため、多くは魔道教会や魔術同盟に加盟し、一種の同業者組合を組織し報酬のデフレを防いでいた。

魔術が使える傭兵も同業者組合を組織し、高給の傭兵として戦時には帝国軍で活躍していた。

この100年で普通の歩兵連隊の比率は減少し、徐々に魔術連隊に再編されていた。

とはいえ、帝国軍の量的拡大に引きずられて量的には拡大し、聖暦3696年現在では歩兵連隊は46個に達している。

戦時に容易に編成可能なため、歩兵連隊は専ら輜重護衛や治安維持

後方警備に用いられている。

また、オムニ教会に属する教兵連隊も13個存在し、それぞれ13神に因んだ部隊名を与えられている。

この神名を与えられた13個連隊の編成は35世紀に基本が完成していたが、全ての連隊が定数を満たせるようになったのはごく最近のことである。

帝国の内憂

オムニ帝国では、メトセラ処置者が急増していた。

法の抜け穴が悪用され、王族や魔術師はもとより神官・官僚や富裕な商人までが不死化していた。

魔術師のトラクト使用量も増加、不要不急な魔術の行使に相当割合が流用されていた。

トラクト生産量増加に伴い、人身売買は一つの産業として軍需産業と並ぶ発展をみせた。

不死化のデメリットとして、組織の新陳代謝の停滞が指摘されて久しい。

事実、メトセラ処置を受けた貴族や豪商の資産は相続による資産の分散が失われ、天文学的な数字に達した。

貧富の格差は増大し、不満を持つ民衆の反乱が天候不順の年に特に心配された。

人種の専横

また、アクターボ開拓地の多くを囲い込み、主要四氏族のうち最も成功している人種は、他氏族のアクターボへの膨張を妨害するよう

な行動をとることもあった。
そのような人族の専横により、帝国内部の結束も次第にくらつきを
みせていた。

新たに帝国に編入される辺境は次第に貧しくなっており、領土拡大
に要する戦費と辺境領からの収益の収支は悪化している。

そのため、アクターボの浄化と辺境領への編入はペースダウンして
いる。

3670年頃までに、ある程度の先見の明か人口を有する蛮族は帝
国に吸収同化された。

いま残っている蛮族は、意固地になって同化を拒む変わり者集団か、
もしくは浄化する価値もない荒地を占有しているかのいずれかと考
えて間違いないだろう。

人口増加率は漸減しているが、これは

?アクターボ浄化の停滞

?農業の不振を主因とする死亡率の上昇

?トラクト生産による人命損耗

が主因と考えられる。

37世紀末の時点において帝国は四氏族の合計300を超える大小
領主から構成されており、そのうち独自に連隊を編成するだけの力
がある大領主は120余りである。

帝国の防衛分担金の負担額は連隊の編成により軽減される特例があ
るため、ある程度大きな領地を治める領主や虚栄心が強い領主、も
しくはケチな領主は、独自の連隊編成を推進した。

また、辺境領は帝国税の減免項目が多いため、帝都の官僚に賄賂を

渡し、”辺境領”のまま格上げされたくない領主もいた。ヒレンブランド家もそうだった節税意識の強い家系といえる。かつて領地替えにより辺境領に隣接する今の地域に転封され、以後アクターボ開拓事業を継続したことにより広大な領地を有するに至っている。

また、ヒレンブランド領は独自の連隊を一つ持っていることから、有力諸侯の一つであることは疑いない。

テクサカ軍

テクサカには、帝国周辺部の蛮族をはじめ、帝国の圧制を逃れんとする四氏族の亡命者が流入していた。

テクサカは帝国出身の軍関係者を自軍に登用することで魔王自ら親征せずともモンスターに高度な軍事行動をまかせられるようになっていた。

とはいえ、軍事制度は帝国に大きく遅れをとっており、容易に差は縮まりそうにない。

また、テクサカ軍には魔術師がおらず、単位兵数当たりの戦力では帝国に遥かに劣っている。

一般に、正面きつての対決ではテクサカ軍4に対しオム二軍1の戦力が拮抗すると考えられている。

帝国にいれば、魔術師はハイソサエティに分類され、生活に困らないため、魔術師のテクサカへの流出はみられない。

更にテクサカでは魔術によるメトセラ処置が禁じられていることが、帝国から魔術師が流出しない理由だろう。

アニバーサリー作戦（3697年戦役）について

オム二・テクサカ戦争100年目のこの年、戦争を終結させるための攻勢、アニバーサリー作戦が発動した。

・参加兵力

魔術連隊170個

教兵連隊7個

歩兵連隊36個（全部隊が補給線の護衛にあたる）

総兵力 213個連隊 22万3600人（補給部隊含むと約31万人）

帝国のほぼ全兵力を投入した乾坤一擲の大勝負であった。

近年の帝国軍の拡大にテクサカが追従できていないのは明白だった。魔術戦技の向上と量的拡充により、あれほど恐れられたテクサカといえど今や圧倒可能とみなされた。

帝国の歴史の最も輝かしいページが、いま勝利の確信と共に開かれようとしていた。

> i 1 3 8 4 1 — 1 9 2 6 <

Fig. 1 帝国軍の拡大（教兵連隊を含む）

* 3605年以前はオムニ王国のみ

* 3697年度計画で帝国直隸魔術連隊2個を新設。また、各領累計で6個を新設。

* 3697年、新規に戦時編成された歩兵連隊30個は、全部隊が帝国防衛のために残置された。

5 - 1 NF農法（前書き）

登場人物：

ヨウ 荒廃した日本からやってきた元高校生。戦時体制下のオムニ氏族連合帝国に来てしまった不運な子

エリアス ヒレンブランド領の領主の娘

カリカ 結構凄腕の傭兵。若くして魔術が使える女性で傭兵という稀有な存在

ドゥーガル・トータイル・スリミア 第21代スリミア領主、同時に第4代人族王、現在の帝国皇帝

サクス・ブランク 皇帝の側近のひとり

リレントレス アムール領を乗っ取るうとして成功

パレティーナ 帝国内部で暗躍する女

アルギラ・フォートハート 帝国都市同盟の代表者

フェニックス・ブラッド・デラー 先の侵攻作戦の功労者にして英雄。アニバーサリー作戦の総司令官

將軍A・將軍B 帝国軍高位軍人

「はい。エンドウ豆、もしくは同類の豆類を栽培して欲しいのです」

「そうですか。豆。いや、農民たちも不思議がっておるようになってな。ただでさえ人手が足りないのに豆など育てられぬと申してます」

教会の会議室は絨毯の敷きつめられた立派な作りの部屋だった。

蹄鉄型の会議卓は黒くつややかな光沢を放ち、その表面には天井に彫られた知識神アテナが映っていた。

この部屋で会談する二人は、お互いに会議卓の最も遠くなる端に座っていた。

ヨウは、オムニ教会の審問官に要らぬ疑いを持たれない様に、慎重に言葉を選んだ。

「確たる理由を説明できれば良いのですが。オムニの神々は私のような卑小な人間に、有難くも啓示を授けなされたのだと思います。そうとしか思えません。啓示に従えば、小麦とライ麦の連作のあとの休耕地に豆を植えることは、必ずや次の栽培作物に良い影響をもたらすでしょう」

オムニ教会の重そうな高位僧服をまとった老人は、痩せた指を組んであいまいな返事をした。

「そうですね」

「私が教会領で最初にNF農法をお勧めするのも、それが神の耳元に最も近くでお働きになる皆様方にこそ、最初に新農法の恩寵がもたらされるべきだと考えたからです。それが神の御心にかなうことだからこそ、と」

「なるほど」

「また、休耕地を雑草だらけにするよりは豆だけでも栽培した方が土地の有効利用につながります。豆はターパンの食料にもなりますし、食用油脂も得られます。枝葉は優れた肥料にもなりましよう。また、施肥もあるには越したことはありませんが、これまでより少なくて豊かな小麦の実りがあるはずですよ。また、休耕地は秋冬にはほうれん草を栽培することもお勧め致します」

「来年の小麦の実り次第で最終的な評価させてもらうのは変わらんが、ふむ、何とか説得してみましよう」

「有難く存じます」

しかし、高校1年の頃に、ヨーロッパにおける輪作の理由を世界史の教師が何気なく説明していたことを思い出したのは、我ながら大したものだと思う。

ヨウの勉強スタイルは、学校では全力で勉強に集中して宿題も済ませてしまい、帰宅後は好きなことをするというものだったからこそ、そんな雑談程度の知識まで覚えていたといえよう。

産業革命期のノーフォーク農法。この農業手法では、クローバー

など牧草とカブやジャガイモの飼料栽培によって、連続して土地を利用することが可能になったことは有名だ。

科学的には、クローバーなどによる空気中の窒素固定が地力の回復を助けるのだ。

豆類もまた、クローバーと同様に窒素固定能力が高い。

もちろん「窒素固定を豆科植物で代用する」などと無用なことは口の端にも出しはしない。

怪しい黒服連中の襲撃で命を狙われて以来、ヨウはとても用心深くなっていた。

再び命を狙われる危険はあったが、ヨウはあえて新農法を教会にも売り込んでいた。

教会領は大資本の私有農地に次ぐ広大な作付面積を有していたから、新農法が効果をあげれば教会のネットワークで急速に全国津々浦々に新農法が伝播するはずだった。

大学にも新農法を検討してもらっていたが、農地に収入を依存していない大学と、農業生産が即収入に直結する教会や農業資本家では取り組み方が違った。

そのため、既に一部有識者の間では著名人になっていたヨウの提案したNF農法を真っ先に取り入れてくれたのは大学ではなかったのだ。

まあ、それに、オムニ教会が新農法で利益を得れば、一種の賄賂

にもなるだろうという目論みもあった。

春の新緑が芽吹き出した頃、ヨウは大都市クワナを離れることにした。

懇意にしてくれたヒレンブランドにも、そろそろ恩返しするべきだ。6月の小麦収穫期が過ぎてから、ヒレンブランド周辺の農地でもNF農法を試してみたかったし、いくつか思いついた事も試したかった。

あの地を製鉄業の中心地にできたら十分な恩返しになるだろう。

早く帰りたい。

最初に流れ着いた場所に”帰る”というのは不自然かもしれないが、エリアスやカリカと出会ったあの場所は、ヨウにとって、いつの間にか”帰る場所”になっていた。

5 - 2 フェニックス

ここは帝国西方のアクターボ、あちこちに森林がこんもりと茂る平原が広がっている。

新緑の平原のあちこちに、何か黒っぽい染みのように見えるのが、中央軍集団の宿営地だ。

宿営地にズームしてみよう。

演壇に上った人物が何か演説しているようだ。

「帝国軍の同胞諸君」

「私はここに、この壮大なる軍の誉ある使命を宣言しよう。その使命とは、いにしえよりアクターボに挑み、絶え間ない浄化の炎を燃やしてきた祖先らが胸にたぎらせてきたそれと同じものだ。その使命とはこうだ、”この西方の地は、今日よりオムニ教と四氏族の最も新しい橋頭堡たるべし！”」

聴衆は静かに、興奮を抑えて耳を傾ける。

「幾世紀もの間、不安に満ちた過去の時代、四方から押し寄せる嵐が、神々の加護する帝国の力強い腕で打ち砕かれてきた。

祖先から引き継いだ浄化の炎はテクサカと、魔王のしもべであるモンスターの超えられぬ壁となろう。我らが征く目の前のアクター

ボは、我ら偉大なる四氏族の幸福と平和につながる策源地でなければならぬ。

祖先たちがかつて使命を成し遂げたように、祖先の誰もが誇れるほどの勇気をもって、我らにそれができる」

「そうだ！そうだ！」

「本日、このときを以ってはじまる戦役がどれほどの意味を持つかについては、後世の歴史家がいつの日か正確に記述することとなる。」

神々の望む道を塞ぐものに災いを。我らがその火付け役とならん。諸君らの腕で、頭で、胸で燃え盛るそれこそが、神の御手から授かった聖なる炎である！」

「そうだ！そうだ！」

「我々が歴史を作るのだ。このフェニックスに力を貸して欲しい。オムニ教万歳、帝国万歳、四氏族万歳！」

「万歳、万歳、万歳！」

ヒレンブランド連隊は、中央軍集団の双翼を担うB軍団に配置されている。強力な攻撃力も持つ優秀な連隊だからこそ、攻撃の中核を担う中央軍集団に配置されたのだ。これは名誉なことだった。

「なあ、エリアス。聞こえるか？」

我らが総司令官閣下の有難い説教などお構いなしのカリカ。

「いいえ、あまり聞こえませんか」

「だよなあ」

「でも、いちおう聞いておかないと」

エリアスは歯切れが悪い。

誰かが見えないところから、わざとらしく咳払いした。それはおそらく、職業軍人のグッドマン男爵だ。

「ふん、こんなクソみたいな演説、耳がおかしくなる」

背後のグッドマンが見ていることを確信しているカリカは、背後に向かい卑猥な意味のフィンガーサインをつきつけた。

「はしたない……」

「いいのいいの。たぶん喜んでるんじゃないのか」

1人の人間が大声をはりあげても、それを聞き取れる群集は、せいぜい数千名。軍隊でも同じことで、戦場において有効に命令を傳達して、指揮官の手足のように動かせるのも、せいぜい1000名程度だ。だからこそ、一個連隊は1000人前後なのだ。

遠くで歓声があがり、次いでモノプティックの炎が天に向け放た

れた。その合図ではじめて、遠く離れた聴衆にも長い演説がついに終わった事が伝わった。

「お、盛大、盛大。景気良くいこうってことか。あれならオムニの神様にも良く見えるだろうな」

どこか神に失敬な感じがにじむ話しぶりに、エリアスは怪訝そうな表情をした。

「まあ、そう怒るなって。早死にするぞ」

「あなたって人は。でも、死ぬにしても戦争でつてのは悪くないかも」

「お、おい、冗談だからな」

慌てる様子を眺め、エリアスは吹きだした。すぐにカリカも。

「わかってます。でも、中央軍集団は先鋒ですから激戦になるでしょう?」

「ああ、今から楽しみだよ。相手は魔王のどちらかだからな」

楽しみだ、と断言したのに、カリカの表情が一瞬曇ったのをエリアスは見逃さなかった。

半時間後、進発式を終えたヒレンブランド連隊は、ゆっくりと二列縦隊で進軍しはじめた。

まだひんやりとしたそよ風が渡る草原をこうして歩いてみると、大の大人がこんな良い天気の日になにをやっているのだらうという気分になる。この100年でいくつもの戦闘に参加してきたが、いつもこの考えは離れなかった。

もちろん領地出身者ばかりから成るヒレンブランド連隊の誰一人にも傷ついてほしくないし、勝たなくてはならない。だけど。エリアスはそんな想いをカリカにだけさりげなく伝えてみた。

「あんたそんなこと考えてたのか」

カリカの呆れたような口調は、なにがしかの感嘆も含まれていた。

「よく戦争だったのに、悠長に構えてられるな。 齡の功か？」

「もう、それは言わないって約束したじゃない」

かわいらしく怒るエリアス。

「ごめん。それにあたしだって、こんな日和には木陰で寝転んでいたいね」

「あなたはヒレンブランドでも寝転んでばかりいたじゃない」

苦笑まじりの指摘に、カリカは肩をすくめた。

旗手が先頭を歩き、次いで前衛部隊、その後ろを歩くのが上位の士官たちだ。他の魔術兵は、小隊の魔術が使えない歩兵たちと共に後方についてきていた。

エリ阿斯は、さきほど引っかけたことを質問した。

「ああ、凄まじい勘の良さだな」

「あっさり認めるのね」

「まあな。どっから説明するか。そうだな、実は、妙な噂を聞いたんだ」

「噂？」

「ポンゴワサー連隊にあたしの仲間がいる。奴がテクサカの斥候を捕まえたらしい」

「まさか」

エリ阿斯は目を見開いた。

「だろう？あたしもそう思ったよ。でもホントなんだ。低脳モンスターにそんなことできるはずない。奴が言うには、斥候は帝国出身のドワーフだったそうだ」

「裏切り者」

エリアスの静かな口調には、怒りがこもっていた。

「そうだ。で、そのクソドワーフは”亡命者”と名乗った。今頃は教兵連隊の審問官が挽肉にしているとは思っけど、そいつ、亡命者がテクサカ軍にたくさんいると口走ったそうだ」

「そして、モンスターの軍勢が帝国軍を粉砕するとも」

その不吉な言動が耳に入ったのか、前列の魔術師が帽子をいじるふりをしてカリカたちを盗み見た。

「ブラフでしょう?」

「多分な。いや、わからない。実際、そのクソだが勇敢なドワーフはトロールやパペットと一緒にいるところをみつけた。そいつは地図と命令書を飲み込んで、歯を全部叩き折っても吐こうとしなかった。そこまでして守りたい秘密があったってことになるんだが」

この明るい日差しに満ちた草原も、テクサカの斥候に見張られているのだろうか。エリアスは周りを見回したい欲求をこらえた。

エリアスも父のもとに届く情報、もっともその多くは政治的なものだったが、報告書を目にする機会はあった。その中に、帝国の保護を離脱した反乱者についての記述も。

この10年に限っても1万人、もしかすると2万人もの帝国人民が行方不明になっている。そんなことをカリカに知らせても意味はないから、エリアスは口をつぐんだ。それに悲観論がクチコミで広がっては士気にも影響する。

むしろ快活な響きを意識して、「でも、モンスターは魔王の命にしか従わないわ。ドワーフがトロールに襲われずに一緒に行動するなんて聞いたこともない。でしょ?」

続けて、「ましてトロールを従わせるなんて無理。わたくしたち中央軍集団が魔王率いるテクサカ軍2部隊をやっつけければ勝てるは

ずよ。多少のはぐれモンスターが側面から襲ってくるかもしれないけれど」

エリアスはカリカの表情をうかがった。

カリカはこう見えて慎重な面もある。ヨウと会った遺跡探検を立案してカリカを雇ったのはエリアスだった。ハム魔術同盟で有名になりつつあったカリカを選んだのも、彼女の戦歴を確認してのことだ。

蛮勇だけでは傭兵の命は短い。年齢の割りに輝かしい戦歴は、カリカが馬鹿ではないことを示していた。そもそも、魔術を使う上で血統的素質があっても、頭がアレでは魔術師になどなれない。

「うーん、そうだな、15年前の西方戦役までは魔王率いる2個部隊が相手だった。でも違ったら？魔王エルモとサインが何か新しい邪法を編み出したのかもしれない」

100年前からの幾つもの戦いの、おぼろげな記憶。時代や場所は違えど、いつも魔王親征の2部隊だけがテクサカ軍と同義だった。

平たく言えば、魔王自ら率いる2部隊だけしか、テクサカ軍は動かせない。

ただ、どうやってか、魔王は10万ものモンスターをひとつの部隊として自在に操れるのだった。司令官の手足のように動く10万の軍勢。これは、帝国軍から見れば悪夢のような敵の利点だった。

しばし沈黙して、硬い声でこれだけ言った。

「そんなはずないわ。そんなはず」

いつもなら10代の少女そのものの横顔は、カリカにはとても年
老いて映った。

参考資料：BD「フィデスとのファーストコンタクト」(前書き)

生屍^{ソフ}惨禍とフィデスの救援。

1999年～2009年の略史。

参考資料：BD「フィデスとのファーストコンタクト

1999年

ミサイル防衛用の早期警戒レーダーが、軌道上に突如現れた飛行物体を探知。その飛行物体は地球の大気圏にごく小さな何かを投下していた。

しかし、何を、何の目的で落としているのかは不明であり、主要国は注視することしかできなかった。

人類固有の財産たる地球の垂直的な領有範囲は、1967年の”宇宙条約”により”特定の国家による人工衛星最低軌道以遠の空間の領有を認めない”がゆえに、衛星軌道の外側の宇宙空間が含まれていなかった。

この年、人類以外存在による地球近傍空間の利用実態が明らかになったため、国際連合では人類という一つの種族としての領有域の設定作業に着手した。

ひとつの案としては、探査機ボイジャー1号が毎秒17キロの速度で太陽系から遠ざかるのに合わせ、人類の活動領域とすることが提起された。この”ボイジャー境界”案が採用されれば、人類の領有域はボイジャーが踏破した太陽を中心とする直径300億キロの球形になる。

ただし、ボイジャーの所有国であるアメリカが新宇宙法においても主導的役割を果たすのを快く思わない中・露はこの案に反対の立場をとっていた。いくつかの宇宙利用国が政治ゲームをしているうち

に、致命的な事態が人類を襲った。

8月21日。

世界中で死者が蘇るといふ不気味なニュースがみられる。火葬文化圏である日本では大きな混乱は起こらず。

8月29日。

日本全国の小中学校及び高等学校の無期限休校が指示される（短期間で解除された）。

9月。

欧米の主要国では国家非常事態が宣言される。蘇った死者たちは多くの国で”ゾンビ”と呼称された。日本においては”生屍”と呼ばれるようになった。

のちに、生屍発生の主犯と思われる飛行物体および蘇った死者たちを”ソワー”と呼ぶこととなる（日本では生屍の呼び名が一般的）。

2000年

戦術核兵器を用いたソワー汚染地域の浄化がアメリカ・ロシアを中心に活発化。

ソワー感染者の行動の詳細な分析により、ソワー化の感染経路が判明。また、ソワー化した死者には血液成分に変異がみられることがわかった。

ソワー化するのは人間だけで、人間以外の霊長類にも感染しなかつ

た。

同年、国連安全保障理事会は低汚染地域の代表である日本を常任理事国に選定。

混乱の続く欧米諸国に代わり世界の安定化を強く求められる。しかし、高度に発達し緊密化していた世界貿易は前年比 - 50%以上という危機的な状況にあり、世界経済の悪化に伴い日本経済も大打撃を蒙っていた。

去年地球近傍空間をフライ・バイしたソワール飛行物体の撃墜・捕獲が幾度も試みられたが、人類が利用できる化学反応ロケットでは、ソワール飛行物体に接近することすらできなかつた。

2001年

在日・在ドイツ・在韓米軍の大部分が帰国。

地球上では少なくともキロトン級の核爆発が数百回も確認されていた。もはやアメリカ・ロシアの中央政府は、軍による核兵器の正確な使用数すらわからなくなっていた。

核の冬により、世界の食糧生産は大きなダメージを被った。世界の餓死者数は億単位に及び、死者は十分に破壊しない限り起き上がり生屍になった。

死体を破壊するのにもマンパワーと燃料が必要なため、食糧不足と行政システムの崩壊で統制が崩れた途上国では容易にソワール対策は

進まず、次々とソワー惨禍に飲み込まれた。

食糧不足とソワー惨禍拡大に端を発する北朝鮮の暴発により第二次朝鮮戦争勃発。100万人単位の韓国人難民が北九州を中心とする日本海沿岸に漂着していた。

東シナ海を渡り中国沿岸を目指す、避難民を満載した大小様々な韓国船籍船を、中国海空軍は容赦なく撃沈していた。よって、ますます多くの難民が日本を目指すことになった。

中台戦争・東チモール紛争・パキスタン・インド戦争・第二次湾岸戦争・エチオピア・ソマリア戦争など、無数の中強度戦争が勃発。

日本にとって最も重要だったのは、もちろん第二次朝鮮戦争だった。

北朝鮮軍は、占領地の一般市民を人為的に生屍化して韓国軍に突入させるという非道な戦術を使用したため、テレビ放送やインターネットが機能している世界のごく一部から非難された。

こうした非常事態のなか国民の期待を背負い、4月26日、第一次小泉内閣が成立した。

小泉内閣は行動力を発揮し、海上自衛隊の部隊行動基準を改定、自衛隊法第95条に定められた「武器等の防護のための武器の使用」を根拠として、武器の使用を明確に任務とすることを決定した。

また、特別会計に見られる国会予算審議から隔離された国庫財源の情報開示を通じた歳出改革、道路公団や郵政の民営化など構造改革を押し進めた。

一方、全体としては小さな政府を目指しつつも、重点的な戦略的政策目標実行のために総理大臣とそれをサポートするブレイン集団を設立、一種の中央集権化による（特に義務的支出である教育・福祉・医療等の）政策決定の迅速化を図った。

これらの施策により、とりあえず日本近海における領海侵犯の実力による排除が可能になった。

韓国船籍船は以後大部分が日本にたどり着けず、逆に濟州島の臨時韓国政府に入管法違反者の送還がはじまった（法務省は難民と認めない判断を下した）。

60万ほどの濟州島の人口は、大量の避難民流入により短期間で200万にまで膨れ上がり、飢餓島と呼ばれるまでになる。

以後、止むなく中国に韓国系避難民が向かうようになったため、激怒した中国政府は（自らの行いを棚にあげつつ）日本の行動を「避難民保護を謳う難民条約違反」とし、国際連合難民高等弁務官事務所（UNHCR）に通報。

ソワール惨禍によりニューヨークの国連ビルは放棄され、国連機能は大きく低下していたため、日本政府が深く追求されることはなかった。

2002年

中国に進出していた日本企業が中国政府に接收され、国有化。日本経団連は外務省を通じて強く抗議したが、アメリカの後ろ盾のない

日本の抗議など雑音として無視された。

日本はアメリカに頼れないことを知り、二次産業の国内回帰を推進した。自由貿易体制の崩壊は決定的な状況だった。

中国政府は、海外からの直接投資が消滅したことで不況に陥り、ソワール惨禍対策の失敗もあって共産党の威信は傷ついていた。中国政府は過去にも成功してきた” 自国民の愛国心を刺激” する古典的な人心操作を実施した。具体的には、チベット自治区における大弾圧と台湾侵攻である。

台湾を吸収合併した中国軍による日本領先島諸島の領海空侵犯が多発。アメリカ第7艦隊が極度に弱体化している今、日本人は盲目的な平和主義が軍国主義と同じくらい危険な思想であることを思い知りつつあった。

2003年

南北アメリカ大陸の国々のソワール被害は比較的大きく、あのアメリカ合衆国すら州政府ごとにばらばらになるまでに落ちぶれていた。

経済活動は物流が停止したために最悪の状態で、燃料・食料の不足によりアメリカ・カナダ・メキシコでは冬の間合計1億人が失われたと推定されている。そして、死者の多くはソワール化した。

ヨーロッパでは比較的ましな状態だったが、中東・アフリカ・南米諸国はひどい有様になっていた。

この年、日本の失業率は空前の15%に達する。救済策として、失

業者の臨時公務員としての雇用事業はじまる。

原油価格は主要大量消費国がソワ惨禍により凋落したために大きく下落、1バレル1000円（ドルは原油決済通貨としての機能を失っていた）という超低価格に。

日本において核武装案が国会を通過。アメリカから入手した原爆の設計ノウハウを応用して2ヶ月で小型原爆を製造、同時に水爆の基礎設計・製造に着手、半年程度でメガトン級水爆の保有にこぎつけた。

2004年

欧米諸国の凋落に伴い、知的財産権の保護をうるさくわれなくなった中国では、欧米諸国の特許を徹底的に無断使用するようになる。小火器の分野でもそれは同じであり、末端価格で2〜3000円の小銃が大量に輸出されるようになる。日本でも銃の保有は事実上公然のものとなりつつあった。

日本海沿岸では、ソワ惨禍に飲み込まれた朝鮮半島からポルトビープルがあいかわらず流れ着いては地元住民を恐怖に陥れていた。

日本の主要な輸出先が失われたことで国内経済は悪化の一途をたどっており、失業者が止むにやまれず強盗や誘拐に手を染めていた。

2005年

日本国憲法改正。同時に徴兵制の導入。

日本国憲法第13条

すべて国民は、個人として尊重される。生命、自由及び幸福追求に対する国民の権利は、公共の福祉に反しない限り、立法その他の国政の上で、最大の尊重を必要とする。

日本国憲法第18条

何人も、如何なる奴隷的拘束も受けない。又、犯罪に因る処罰の場合を除いては、その意に反する苦役に服させられない。

野党はこの2条を盾に徴兵制導入を非難したが、自民党主導の改憲が強行された結果、徴兵制は導入可能になった。

防衛庁は防衛省に格上げされ、初代防衛相には石破氏が就任。この頃から各種兵器の国産化が成果をあげはじめる。大威力水爆、長距離弾道ミサイル、軍用輸送機など。

もともと国産化率が高かった日本の兵器産業は、核を用いた兵器システムをも有するバランスのとれた兵器体系の創出に短期間で成功していた。

日本国民の多くも、さすがに以前とは世の理が大きく変貌していることに気付いていたため、大きな反対はないまま新憲法が施行された。

2006年

ソワー顆粒の遺伝子コード解析が終了。

ソワー化した人間の死体は、血液中に増殖したソワー顆粒と名付けられたミトコンドリア様の機能を有する多機能運搬粒子によって、生きていたときと同じように動くことができる。これを展開型ソワー顆粒という。

ソワー顆粒は、まるで小さな工場のように化学物質を製造し、崩壊する死者の肉体を維持する。顆粒の一部は神経系にとりつき、その機能をサポート、摂食行動を制御する。

ほとんど万能に見えるソワー顆粒だが、分裂できるのは比較的新鮮な死者の肉体に限られる。つまり、骨だけになるまで腐敗した死体を動かすのは無理だし、通常は腐敗過程のごく初期の死体しかソワー化できない。

ソワー顆粒は、空気中では耐乾燥性の形態に変化し、空気中を漂い死者に寄生する。死者の体に最初の1粒のソワー顆粒が進入したとして、約24～100時間後には死者をソワー化させる。

ただし正常な免疫システムを有する生きて人間の体内では白血球に食われ死滅する。これには例外があり、特に免疫の弱った者や、人工的に免疫を弱めた者には、生きていても感染することがある。エイズ発症者の多くは、ソワーに生きてまま感染することになった。

生きてまま感染した場合、生前の記憶が残ることがあるが、その知性は5歳児以下の水準まで低下するため一般的なソワー感染者と区別はできない。

ソワーに噛まれたり、彼らの血液を摂取した場合、ソワーの血や唾液中に大量に含まれる展開型ソワー顆粒が生きている人間をも迅速

にソワー化させてしまうことに注意しなくてはならない。

また、ソワーの活動可能な期間は未だ解明されていない。

捕獲した個体を観察中だが、継続的に養分を与えた場合、少なくとも数年は活動することが判明している。また、長期にわたり活動したとしてもソワー個体の知能が向上することはない。

2007年

自らをフィデスと名乗る異星人の艦隊が月衛星軌道上に出現。

苦境に喘ぐ地球人類に援助をしようと申し出る。

ただし、その代価として異星人が信仰する宗教（カニバリズムを重視する血液信仰宗教）の布教許可を求めらる。

生屍惨禍に悩む国家にとって、食料・防衛・電力などを無償提供するという申し出は断りがなかった。

地球上の生き残っている多くの国家が援助を歓迎したが、一方ではフィデスこそが生屍の出現とそれに伴う騒動を引き起こした犯人そのものであると信じる集団が異星人排撃運動をはじめていた。

フィデスは自らの潔白を主張したが、その出現のタイミングが余りにも良過ぎるために疑惑を打ち消すことはできなかった。

フィデスという種族は濃い空気が苦手なため、主な居住地をヒマラ

ヤヤアルプスの高山地帯に設けた。彼らの最大の居住地はペルー領内のアンデス山脈に建設された。

異星生物学者によると、フィデスは地球よりも重力小さく空気も薄い寒冷な惑星に適応して進化した生物と推定された。

だが、フィデスは自分たちの宗教以外の事柄にはほとんど触れず、情報公開にも否定的だったため推測でしかなかった。

フィデスは物質的援助と抱き合わせで信仰を押し売りする宣教師であることがはつきりしはじめていた。フィデスは、地球人の改宗者に特権を与えていた。

フィデスは改宗者と非改宗者の間の対立を組織的に煽り、分裂した人類勢力の双方に武器援助を施した。

フィデスは、宗教的犠牲を出せばだすほど、信仰心を煽ることができることを知っていたのだ。

近世ヨーロッパの宣教師や、近代ヨーロッパの狡猾な分断主義的植民地経営手法を参考にしたとしか思えない、人類の心理を知り抜いた戦略だった。フィデスは実際に、人類の過去における悪しきテクニクを知っているのかもしれない。

ところで、フィデスの教典によると、神の姿はフィデスの肉体と相似形だと考えられている。よって、地球人の改宗者に無料でフィデスそっくりに改体できる特権を与えた。

哀れなまでに醜い人類の肉体から解脱し、僅かとはいえ神に近づく

チャンスを与えたつもりだったが、改体を願い出た地球人はごくごく一握りであった。

フィデス神官は、意外に改体希望者が少ないことに困惑したのだった（実際のところ、フィデスの肉体はぞっとするほど醜いため、極度のマゾヒストでない限り改体する者はいない）。

2008年

フィデスが提供する食料（何かの食用動物の血液成分を脱水した暗赤色の餅のようなもの、もしくはその加工品）の製造工場が各地に建設されていた。

貧困地域の住民たちは、命を永らえることができるならばどんな残飯でも有難く頂戴するまでに落ちぶれていた。

だが、廃墟のアメリカ合衆国でサバイバル生活を送る独立心の強いアメリカ人や、ジハードを宣言した数億のムスリムたち、粘り強さが身上の英国人、危機になると団結する日本人、伝家の宝刀人海戦術で対抗するロシア人や中国人は容易に屈服するものではなかった。荒廃したシカゴ近郊において、旧アメリカ製の水爆を用いた人類側レジスタンス組織による自爆攻撃。各地で反フィデス運動の狼煙が上がる。

フィデスは軍事力を用いて反乱鎮圧を図るが、人類側の古くから根付いた宗教組織と住民の多くがレジスタンス活動を全面バックアップした結果、フィデスは高度な技術を持ちつつも苦戦した。

フィデスの外見

フィデス布教者（彼らの社会において、布教に当たる神官は高位の役人でもあった。そして、神官階級は256階層に細分化している）を拉致することに多くの地下組織が成功。

フィデスたちは肉体的には脆弱で、腕力も弱く、言葉は不明瞭で、わずかな苦痛にも耐えられない軟弱な生物だった。身長は1.5m程度、体重40キロ程度。

たった一つだけの（日本のアニメキャラクターのように巨大な）眼球は、大きな外見とは裏腹に弱視ぎみで、視野も限られている。近赤外線は見えるが、人間のように色を区別したり精細な画像を認識したりはできない。

嗅覚はなく、黄色く変色した安っぽい合成ゴムのような皮膚には、古くなったスーパーボールを彷彿とさせる臭い脂が染み出している。

性別はなく、生殖方法は不明。

肺は吸気と排気がバッチ処理ではなくワンスルー処理なので人間の肺より効率が良い。そのため大気が薄い高山地帯でも容易に呼吸ができた。

腕は一本だけしかなく、不器用極まりない三匹の地虫のような黄色い指は、人間の肘にあたる部分から植物の根のように生えている。

肘の先には柔らかい棒状のヘラのような腕が伸びて指に干渉するため、あらゆる作業が人間の手のように効率よくはできないのだった。

足は三本、蟹股に生えており人間のようには走ることは無理。

足の付け根に位置する口から食べられる食料は、ねとついた血餅だけ。

足を折り曲げ、座った状態で食事をするのだが、手は口に届かないため、足の先をうまく利用して食物を口に押し込む。

食物を取り入れる口と排泄口が共用のため、フィデスの口に排泄物のカスがこびりついているのが頻りに観察できた。また、味覚は苦味に相当する感覚だけしかない。

皮膚が耳の代わりに果たしているが、あまり鋭敏ではない。

電磁波を送受信する器官が体内にあるため、フィデスは数十キロ離れた仲間と交信できた。ただし、交信は宗教的儀式以外での使用がタブー視されているため日常的に用いられることはない。

体幹部の繊細な骨のネットワークが送受信機の役割を果たしている。また、胴体の半分以上が空洞になっているため、フィデスの体重は見た目ほど重くない。

脳に相当する神経接ネットワークは、いびつな体幹部の中央に納められている。体幹部は格子状のひ弱な骨で守られているだけなので、人間がちよっと強くフィデスの胴体を殴ると脳が破壊され死亡する。

ちなみに、突然強い光を浴びせたり、逆さまに地面に置いたりしても驚いて死ぬ。

上記の情報は直ちに地下組織のスポンサーである各国政府に報告され、フィデス用の兵器開発に役立てられた。

2009年

信仰心篤い異星人フィデスは、奇妙なことに生きた人間を好んで殺すことはしなかった。

フィデス自身の声明によると、「潜在的信仰層保護も信仰者の務め」らしい。人類が付け入るスキは充分にあったのだ。

人口密集地に対するフィデスの直接的攻撃可能性がほとんど見込まれないことが明らかになると、先進各国は協調してフィデスに対抗するようになった。

最初から激しくフィデスに抵抗していた中国・ロシア・イスラム諸国は対フィデス戦のノウハウをネットで公開した。

国連安全保障理事会において、主要国はフィデスの地球からの退去とボイジャー境界内での全活動の停止を全会一致で採択したが、フィデスはその声明を無視。

人類とフィデスの争いは次第に激しさを増し、一般市民の生活にも戦争の影が忍び寄っていた。

日本では富士山の頂上にフィデスの建設隊が降下し、そこに日本周辺における布教活動の拠点を建設していた。

8月末、東京をはじめ関東甲信越および東海地方には避難勧告が発

令され、日本の首都機能は大阪に移転した。

一部の生屍駆除部隊や研究施設が稼動していた東京近辺と筑波学園都市にも撤退が指示された。

9月1日、富士山のフィデス基地に水爆飽和攻撃を実施。

茨城県ひたちなか市、長野県飯田、静岡県牧之原、千葉県館山市から複数の短距離戦術核ミサイル（核出力2Mt）が発射された。

同時に通常弾頭の各種ミサイルも投入された。200発の通常弾頭のダミーミサイルと24発の核ミサイルのうち、たった3発がフィデス防衛網による迎撃をかいくぐった。

幸運にも、その3発のうち一つが核融合爆弾であったため、富士山の頂上部分と共にフィデスの基地は半壊した（巨大な金属製のフィデス基地には大きな破口がえぐれて、溶けた形のまま凝固していた）。

爆発の閃光は関東地方全域で観測された。栃木県宇都宮市でも、南西の空にゆっくりと広がるマッシュルームを目視できた。

放射性降下物は夏期の南風によって中部日本と関東地方を汚染した。また、避難勧告にも関わらず避難しなかった交戦区域及び放射能汚染区域の住民数百万人が被災した。

中華人民共和国は4つの軍閥に分裂、上海、広州、重慶、天津といった大都市を自らの手で浄化するハメになっていた。数年前のアメリカと同じく、こうするしか手段が残されていなかった。

北朝鮮では、占領した南朝鮮で大量発生した生屍の駆除に失敗、ついに北京軍閥に自国領の核による浄化を依頼する事態になった。

ロシアと東欧は核爆発でクレーターだらけになった。生き残った市民は急造された地下シェルターに退避して反撃の時を待っていた。

自らの手で自らを焼く業火が荒れ狂い、地上は耳を覆いたくなる苦痛の悲鳴に満たされた。

そして同時に、頭上遙かの軌道上ではフィデス高位神官たちがその瞬かない瞳で、人類の苦境を観察していたのだった。

5 - 3 帝国亡命者（前書き）

テクサカ軍将校アケチ・リーオ : 帝国亡命者

5 - 3 帝国亡命者

「アケチ上級ノード、納品書にサイン願います」

濃い赤色の前髪に半ば顔が埋もれた糧食係がクリップボードを指し出した。

ここは天幕で覆われただけで、日没後の涼しいを通り越して寒い外気にさらされ放題の司令部。アケチは1万の軍勢の指揮官だった。

彼は、資材節約のために木片で代用されている納品書に、繊細な字体で名前を記した。

「ここに来るまでのあいだ、煙霞偽装は完璧だったか？」

糧食係は数度まばたきして答えた。

「は、はい。みな木炭を使っていますので煙は目立ちませんでした」

「いや、ここから数トエル遠方からはどう見えた」

アケチの口調は静かだったが、叱責されたかのように糧食係の若いエルフは耳の先まで赤くなった。

「ウイスパー川から当地までの間で、野営地の存在を示す兆候は一切見つけられませんでした」

「そうか、ありがとう」

糧食係が退出すると、アケチの口元がわずかにほころんだ。

ここまでのところは諸族の寄せ集めなのによくやっている。もうすぐだ、そう、もうすぐ。

アケチは新緑が映える平野を見下ろした。明日にはここを帝国軍が通行するはずだった。

リーオ・アケチは子供の頃から異端者だった。

辺境の貧しい人族の家に生まれたというだけで充分に人生を不公平だと嘆く資格があるが、彼の場合は困った事に、その変わった苗字が呪いの烙印の役割を果たしていた。

彼の実家の玄関先からは、険しく切り立った山がそびえていて、巨大な山体の日陰になる農地は常に痩せていた。

雪を頂く山頂から流れ下る水は、清冽だけど凍る寸前の冷たさ。その急流は一年を通じて減ることがないため、流れを利用した粉ひき小屋を経営することでもなんとかリーオの家族は食いつないでいた。

小麦の粒を粉にすると、その体積はひどく縮んでしまうから、村人たちは粉ひき小屋の経営者を憎んだ。もちろんどの粉ひき小屋で製粉しても同じように体積は減る。それでも憎まずにおれないのが、貧しさが心を蝕むことの証左だった。

金貸しと粉ひきが、帝国社会でことさら蔑視されるリスクな職

業であるからこそ、アケチ家がその家業を営むことができたのだ。
た。

とはいえその暮らしぶりは貧しく、父親は酒に弱いのか僅かな酒で効率的に酔っ払っては些細なことで子供たちを殴った。

幸運にも、父親がさして酒を飲めないアル中だったせいかりーオはトラクトの原料になることもなく屈強な青年に成長した。

そして、その立派な体格が警戒心を刺激したのか、家業の継承権を確保したくて仕方がない長兄に半ば追い出されるようにして村を去った。

貧乏子沢山の例証のように兄弟は大勢いたし実家を次ぐのは基本的に長男の役割だったから、実家を去ることに彼自身は異論なかった。

だが、寡黙でなにを考えているかわからないと兄弟たちかわも思われていたリーオは、その沈黙を不満と誤解され、しまいには排斥されたのだった。

寡黙だが決してお粗末な知性しかなかったわけではなかったため、リーオの故郷から最も近い都市の夜店で仕事をみつけるのにさして時間はかからなかった。

中心街に集中した近隣諸領の常駐公館において、一応は警戒するふりをしなくてはならない警備兵が小腹をすかして夜食を欲していることを察知し、働いていた夜店の販路を拡大するなど、年若い商人には見あわない働きもみせたほどだ。

あとから振り返れば、リーオの人生が明るい将来を夢見せてくれたのは、この時期だけだった。

その年の夏、ひどい待遇のため慢性的に歩兵が不足している軍隊の強制徴募隊に拉致されるまでは。

傭兵よりも安上がりで、死んでも僅かな遺族保証金すら払わずに済む若者を、軍隊が町中からひっさらってくるのはよくあることだった。

逃げようとすれば即座に背中から斬りかかるのが役目の下士官に監視されながら、しぶしぶアクターボ浄化作戦に従事するうち、ここでもリーオは頭角を現しはじめた。

はじめは力任せに剣を奮うしかなかったリーオは、古参の契約傭兵から剣の手ほどきを受けると見違えるほどの剣技の発達をみせた。

小隊の魔術師も的確に行動し、パペットやギガスが出現しても落ち着いて槍を構えるリーオを可愛がるようになった。

小隊長を任され、8人の歩兵を率いるようになった2年後、リーオはどこにそんな才能が眠っていたのか、志願兵として士官になっていた。

貴族でもなんでもないので魔法が使えない歩兵士官だったが、彼は持ち前の統率力を以って、選民思想が強く扱いつらい魔術師をも指揮するようになった。

軍隊で飯を食うようになって12年後には、連隊長にまでのしあがっていた。

平民の出自ゆえに差別されてきたのに20代半ばで連隊長になれたのだから、その能力のほどがうかがえた。20代で結婚し、領主の館近くの地所に家庭を築いた。

末席とはいえ貴族の娘と結婚したのだが、家庭は安らぎをもたらしてはくれなかった。

妻は出自を鼻にかけ、しかも中途半端なヒューマニストであるがゆえに、市民から嫌われるリーオの妻であることを恥じてもいた。

なぜ市民は彼を嫌うのか。軍隊の存在意義は給料を払ってくれる者、つまり領主の利益を守ること。

軍隊は往々にして強制徴募に手を染め、アクターボでモンスター相手に歩兵を使い潰す。時には通行税の額を誤魔化す都市に圧力を加え、不満が爆発して蜂起した村を焼き払い……そんな調子だから軍隊の高級指揮官が市民から恨まれるのは当然だった。

一般市民に恨まれ、同僚の貴族や魔術師には煙たがられ、領主は非道な命令の遂行を求め、家庭では妻がゴミでも見るような目つきでリーオを睨む。

それでも彼は彼なりの超然とした愛情で妻を愛していた。

そのためもあるが、何より彼の子供の存在から、リーオは家庭で声を荒げたこともほとんどなかった。

妻はリーオの受動的態度を見下していたが、リーオは喧嘩の絶えない家庭にだけはしたくなかった。不遇だったリーオの幼少時代の

ような悲惨な状況を家庭に持ち込むことだけは絶対にしたくなかったのだ。

しかし、あの希望に満ちた日々は終わってしまった。

あの日以来、彼の心に見えているのは帝国の死だけだ。彼から全てを奪った帝国に、その社会に復讐することだった。同じく狂ったような怒りを燃やす同志は大勢いる。

怒りは体力を消耗する。

仕事を終え疲れきってベッドに倒れこんだあと不幸にも寝入るまでに時間がある場合、ふと考えることがある。復讐が終わったら、自分はどうしたらよいのだろうか。

そんな鬱々とした夜が明けると、二度と余計なことを考えずに済むように、過去のことを思い出さずに済むように、彼は疲れきるまで働き続けるのだった。

過去を振り返る暇も、未来を心配する暇もない。今は、並び立つ魔王エルモとサインの期待に応えなければならぬ。

作戦成功の暁には、帝国の最期をこの目で見ることだろう。

5 - 4 本番前の余興だ（前書き）

オムニ軍本隊がテクサカ領に迫る。

5 - 4 本番前の余興だ

「俺たちは斥候だ、こらえろ」

「しかし」

ドワーフにパペットの男が抗議の声をあげようとした。それを、豊富なヒゲが生えた……いや、正確を期すなら、ヒゲに手足が生えたようなドワーフは小声で制した。

「落ち着くんだ。斥候の任務は連中の監視だってことはよく分かっているだろう。俺たちは手出しできないんだ」

エルモから施されたセンチア処置から間もないパペットは、得たばかりの知性、そして感情を制することに苦労していた。

ほとんど骸骨のような外見のパペットは、オムニ帝国の常識では知性のないモンスターに過ぎない。しかし魔王自らの魔術により、彼は言葉のないボンヤリとした感覚だけの世界から引き上げられた幸運な者の一人だった。

「小隊長、あんたにとつちゃパペットだけどさ、俺にとつちゃ仲間だよ。助けてくれよ」

ドワーフの小隊長は苦虫を噛み潰したような表情だ。

「今のは聞かなかったことにしておくぞ。いいか、テクサカでは俺たちは皆仲間だ。パペットだろうが他の誰だろうが関係ない。お前はいま、俺をオムニの連中と同じだってぬかしたんだ。わかるか」

小隊長の言葉を噛みしめるのに少し時間が必要だったようだ。パペットはたっぷり10秒は黙ってから、地面を向いて頭を小刻みに揺らした。これは、パペット流の恥ずかしさを現す表現だった。

「すいませんでした小隊長、俺、間違ってたみたいだ」

「構わないさ。サガン、お前がこいつについててやれ」

浅黒い肌の人族がパペットの肘をつかんだ。

斥候隊は隠密行動が基本だ。命令を全うすることが困難になる可能性が少しでもあれば、敵に自らの存在を教えるのは軍法違反だ。

しかし、知性を得てあまり時間がたっていないパペットが我を失うのも無理はない。眼下で展開される光景を目にすれば。

そこには、センチア処置されていない普通のパペットの集落があった。集落といっても、知性のない薄汚れた黄色いパペットが数十人集まっているだけなのだ。

そんな無害なパペットがちが幸せそうに地の精を体一杯に吸収する、薄気味悪くも平和な光景に闖入者が現れた。オム二軍だ。

オム二軍本隊が進軍する経路を離れ、主に食料を求めて周辺を嗅ぎ回っていたのは、オム二氏族連合帝国軍・北部タイル都市連合拠出連隊。つまり都市の浮浪者や食詰めた無宿人をかき集めた、明らかにゴロツキ成分過多の軍隊だった。

そんな品のない歩兵を従える魔術師は、やはりというべきか品が

ない男だった。

メトセラ処置で何歳だかは不明だが、おそらく金持ち相手に違法トラクトの製造でも請け負っているクズ貴族というのが有力な線だ。その証拠に魔術師はゲハゲハと笑いながら無駄にサンダーを放ち、パペットたちを干からびた麦藁のように燃やしていた。

斥候隊の割と近くを過ぎったサンダーが大気の緊張を高め、ツンとした奇妙な匂いが空気中に漂う。

右往左往するパペットに数人のオム二歩兵が槍を突き立て、いい余興だとばかりに追い立てた。魔術師の命令で、その哀れなパペットたちは手近な木に打ちつけられた。傷口からは血も流れない。なにしろパペットたちは死んでいるのだから当然だった。

魔王様が統べるテクサカの民が忌み恐れるオム二帝国。

斥候の小隊長は、かつての自分が一度は所属した国を恥ずかしく思った。なぜなら、こんな痴態が恐ろしい無知と不信からくる野蛮さだと、今やわかっていたからだ。

眼下では木にくくりつけられたパペットがむなしくもがき、それに歩兵たちが嘲笑を浴びせていた。

自らの力を存分に奮えるのはさぞ楽しいだろう。魔術師たちがそれぞれの呪文を詠唱し、ウォルカをブートしていた。派手な攻撃魔法の準備だ。

小隊長がヒゲと長髪で半ば隠れた目をつむった直後、閉じたまぶた越しでもはつきりとわかる程の閃光が走った。次いで轟音が響く。

彼の傍らでは、知性あるパペットが涙を流していた。

小隊長がパペットの肩に手を置いた。斥候隊の数人のメンバーも、小隊長とほぼ同時にパペットに触れた。

「オムニ帝国は無知なだけだ。そうだ、彼らには不運にも魔王様がいらっしやらなかったんだから。」

彼らはアクターボの、いや、突然変異原の真実を知らない」

パペットは小さくうなづいた。

「わからない、わからないけど、俺たちは仲間。」

わかってるのは、こんなことは間違いだってことです」

「そうだな」

じわじわと吐き気を感じた小隊長は、こみ上げたものをやっつとこのでこらえた。この時ばかりは自分の表情が豊富な毛で隠されていることを有難く思った。

「このことと同じような悲劇がテクサカ边境で無数に起きているはず。もしテクサカがオムニに蹂躪されたら……そんなことは考えるのも恐ろしいことだった。」

5・5 魔王サイン(と、エルモ)(前書き)

その頃、テクサカの魔王城では……。

5・5 魔王サイン（と、エルモ）

「コチラ アケチ イチ ヨリ オクル テキ アルファー グ
ン ゲンザイ イチ ハ ウイスパー カワ ナンポウ ジュウゴ
トエル」

アケチ・リーオ別働隊からの突然のポピュロス通信に、サインは眉をしかめた。おそらくポピュロス通信に慣れていない通信兵なのだろう。

送信相手の顔と名前が必要な通信には熟練が必要なだけで、悠長に訓練する余裕はない。ただでさえテクサカに魔術師は少ないのだから、ちよつとくらいおつちよこちよいでも厳しくして辞められたらかなわない。

まるでアルバイト店員の管理に悩む店長のようだが、通信を受け取ったのはテクサカ軍司令部ではなく、魔王本人であった。

サインは魔王なら魔王らしくビシツと苦言を呈しようかと迷い、結局こう返した。

「コチラ シレイブ オクレ」

どことなく嬉しそうな感情がこもっているような通信がサインの頭の中に再び届く。

「テキ ブラボー オヨビ チャーリー ハ アルファー コウ
ホウ ニテ ツウジョウ タイレツ カンカク ニテ ツイジユウ
プランヘンコウ アラバ オクレ」

「オクル プラン ヘンコウ ナシ タダシ ツウシン アイテ
コタイ カクニン ヲ ゲン ニ セヨ オワリ」

こうした通信ができるのはフェンリルだけだ。オムニ帝国では商人が重要な情報をやりとりする場合や軍隊でも活用されてきたが、テクサカにおいてはフェンリルが積極的に活用されてこなかった。これも帝国亡命者がもたらしたテクサカの変化の一部というわけだった。

サインは仕方なく黒革のタイトスーツをギシギシいわせてベッドから起き上がった。

まだ朝も早い時間だし、昨夜は作戦会議に忙しく就寝が遅かったからまだ寝ていてもよかった。しかし、（主に胸元が）きつい魔王用コスチュームを脱がずに寝たせいで体の関節が抗議の声をあげていた。とても再び眠れるとは思えなかった。

仕方なく起きることにしたサインは先ほどのアケチ・リーオからの報告を文書で従者に手渡し、フィジカルノマシンが寝ている間に掃除してくれるおかげでいつも爽やかな口に、給仕が持ってきたパンを押しこんだ。

城の近くから湧き出る泉の冷たい水を収めた水差しは、表面に汗をかいている。グラスに清冽な水を注ぎ、ゆっくりと飲み干した。

サインに贅沢する趣味はなかった。朝食も実に質素なものだった。

食事の貧弱さとは対照的にゴージャスなボディと豊かな金髪を有するサインが、唯一カネをかけているのは衣服だ。

だが、テクサカ・オム二両国を隔から隔まで探したとしても、さほど多くの種類の衣服を買い集めることはできないだろう。しかも一着ずつが非常に高価だ。

産業が余りにも未発達であるがゆえに、衣服はとんでもなく高価な商品なのだった。

軍司令部に顔を出したのはまだ早朝と言っても良い時間ではあったが、エルモが既に入室していた。

おはよう、と月並みな挨拶すらない。この数世紀の間に、そんな挨拶はもう必要なくなっていた。相手の表情だけでなんとなく体調がわかるし、そもそも体調が悪い日などまずあり得ない。忠実なナノマシンがせつせと体の中で働いているのだから。

見渡す司令部にはエルフ族が多くみてとれる。テクサカ各地から送られる情報をフェンリルが受信し、その内容を通信記録台帳に書き写す。その記録を基に、幾人かのノードが重要な情報を選んで魔王に伝達するのだ。

昨夜からのオム二軍の動向報告ののち、エルモは重々しい口調でサインに喋りかけた。

「いよいよだ。連中をここで迎え撃つ」

太い指で地図の一点を指す。

赤くてもじゃもじゃの髪をした大きなベイビーといった風情のエ

ルモに、サインはうなづいた。

「ええ、今日中に我が軍の先頭に立つて出発ね。いえ、昼前に出るべきかしらね」

「そうだな、兵たちに食事をとらせた後にしよう、うん。いや、それにしても」

「なに？」

「こころもち声を落としてエルモがいう。」

「いや、サインあんた落ち着いてるな。この10年計画してきた戦争計画がはじまるうってのに。俺は眠れなかったよ」

昔むかしのその昔、サインがほんの30歳の小娘だったとしたら、エルモのように百歩譲ってもブサイクな男と同じ部屋の食うを呼吸するのにすら抵抗があっただろう。

しかし、信じられないほど長い時間をエルモと過ごした結果、サインはエルモの心をよく知るようになっていた。そして、エルモは悪いやつではない。

サインは軽く微笑んで、エルモを安心させた。

「私だって怖いわよ。でもこれまで嫌になるほど何度も軍を指揮してきたじゃない。そしていつも生き延びてきたわ。今回だって生き延びるに決まってるじゃない」

「そうだ。生き延びるだけじゃない。勝たなくては。勝たなくて

は世界が滅びてしまう」

「そうね」

アルトウリ・ムンデイ。手に入れなくてはならない。

サインは天井を見上げ、口元を引き締めた。

今回の戦争は、この世界の本当の魔王に立ち向かう最後のチャンスになるだろう。そのチャンスを失うことだけは、あつてはならなかった。

オムニ軍は、テクサカの玄関先まで迫っていた。

5 - 6 決戦前夜

フェニックス・ブラッド・デラーが総司令官を務めるオムニ氏族連合帝国侵攻軍は、前進する斥候からの報告により、敵軍が迫っていることを知った。

デラーは全軍をゆるやかな丘陵がつらなる平野に集結させ、敵の到着を待った。敵はかならずや正面からの突撃を凶るはずだった。

突撃の勢いを少しでも削ぐために防柵や堀の掘削に着手しようとしたが、事はデラーの思惑通りには進まなかった。

デラー子飼いの部下たちは戦功に焦り、かつての彼がそうであったように、他者を出し抜いて戦功を挙げようとする者ばかりだった。

追隨者が崇拜者に似るのは当然だろう。そのため、防柵造りのような防御策に僅かの労力も割く気がなかったのだ。

合戦を前にして、一部の将校が羽目を外して酒に酔って魔法を使った喧嘩をしたり、勢い余って小部隊を引き連れて魔王軍に接近を試みたりする軍法違反者が大量に湧いて出た。

戦意が高いのは有難いが、かつて勇猛をもって伝説となったデラーが、魔王軍の接近を座して待つことを批判する若手将校まで現れた。

そういった者達はデラーが年老いて牙を失ったか、と噂した。

人一倍自尊心が強いデラーは、当然ながら「私が臆したというの

か！」と激怒した。

その後の綱引の結果、血気盛んな連隊長に率いられた3個連隊が”神聖威力偵察軍”を編成し、デラーの本隊から離れて別行動することになった。

3個連隊なら勝敗を決する決定的な戦力量でもないし、積極的な総司令官であるというデラーの体面も保てる。しかも面倒な押し強い愚かな指揮官を厄介払いできる。一粒で三度美味しいはこのことだった。

侵攻軍は南・北・中央の3個軍集団より成る。過去の戦訓に基づいて決定された編成である。

過去の例からも、テクサカ軍は魔王率いる2個軍を中心とした密集突撃戦術をとるはずであった。あまり戦術というものに重きをおかない傾向があるテクサカ軍は、数に関しては脅威だったが、予測しやすい敵でもあった。

今回の戦いでも先の西方戦役と同様、魔王が直接指揮する2個軍を中心とする魔王軍が突撃し、その塊状の2個軍の周りを、はぐれたモンスターどもが散兵のように取り囲む隊形をとるだろう。少なくとも、皇帝の周りを雲霞のように取り囲む高級将校の想定ではそうなっていた。

戦いが始まれば、もっとも激戦に巻き込まれるのは中央軍集団だとみられている。

それゆえ、ここには精強をもつて名高い大領主の拠出した連隊で占められている。中小領主や都市国家出身の連隊の場合、臨時雇いの傭兵の質が低く、しかも将校レベルの訓練も行き届いていないことが多いためだった。

この中央軍集団に、総兵力213個連隊22万3600人のうち半数の100個連隊が集中している。この精鋭100個連隊は魔王軍の突撃をがっしりとうけとめることが期待されている。

中央軍集団のやや後方に両翼を成す”北方軍集団”及び”南方軍集団”の2つの軍集団が控える。

帝国軍の両翼部分は前回の西方戦役時よりも強化されている。これはデラーが強硬に主張した編成上のポイントであった。

デラーによると、前回の西方戦役でオムニ帝国がその勝利を徹底できなかった理由が、魔王直隷の2個軍を包囲・殲滅する任を負う両翼の兵員不足であったからだ。

「私に充分大きな翼が与えられていたならば、魔王軍は全滅していただろう」

これはデラーが西方戦役から帰国したのちに語った言葉である。

「我に秘策あり。アニバーサリー作戦を授け給え」

デラーの執拗な要求はついに通り、オムニ帝国はほぼ全軍を乾坤一擲のアニバーサリー作戦に捧げることになった。デラーの野望が叶うのも目前と思われた。

一方、テクサカの魔王直隸軍は各種種族から成る軍隊……いや、軍隊というのは正確ではないだろう。

オムニ帝国ではモンスターと呼ばれる者たちの半ばは自発的にではなく、強制的に魔王の支配下にいるのだから。半ばは戦奴であり、半ばは老若男女から成るレジスタンスの性質をも持っているのだ。

まあ、形はどうあれ軍事力なのだから、軍隊といえるのか。

その日、魔王の使い龍は金属の外皮をきらめかせ、恐ろしい咆哮とともに地に降り立った。龍の両腕からほとばしる白炎が地を焼き、緑豊かな岡の頂上は焼け爛れた。

主の到来に備え待機していたテクサカ軍首脳の面々をも、龍の熱風は容赦なく襲う。周囲の短い雑草は、焦げ臭い熱風で激しくはたいていめている。

甲高い龍の咆哮は次第に低く鎮まってゆく。近くから観察すれば、龍の外皮は年月を経てくすみ、あちこちに小さなへこみがある。それは、使い龍が幾星霜の時を経た存在であることを暗示していた。

奇妙な呪文のような文字が描かれた龍の腹部に開口部が開く。すぐに黒のレザーーツと真紅のブーツ、そして白いベルトというシンプルなものにも威厳を感じさせる魔王が姿を現した。

一人の人族の男が前に進み出た。

「お待ちしておりました、サイン様」

少し遅れて現れたエルモにも、男は深く頭を下げた。

「出迎えご苦労様。状況に変化は？」

「は、前回のポピュロス通信から変化ありません。全軍、準備が整っております」

小高い岡からは、日差しに照らされた平野が広く見渡せる。そこには数十万のテクサカ軍が灰色の絨毯のように布陣していた。

その兵たちの全てが、天空より舞い降りた二人の魔王に注目していた。

今や時は満ちた。

テクサカは凶悪なオムニ氏族連合帝国と戦うのだ。今まで、そしてこれからもテクサカを守り導いてきた魔王と共に。

最初はかすかに、やがて地をゆるがす歓声が魔王の周りを満たした。

陳腐だが重要なデモンストレーション……古めかしいAP、大気圏航空機でさっそうと天から降下する支配者。その役回りを完璧にこなし、魔王一行はテクサカ軍首脳や各種族の代表者と挨拶を交わした。

今は戦時下だが、そんな形式はもろなくなったりはしない。

様々な雑事をこなし、エルモとサインはティーブレイクを楽しんでいた。

戦争において、兵士が移動ばかりしていて戦闘などめつたにないのと同じで、魔王の仕事もハカリゴトを巡らしてばかりいるわけではない。

「ああ、いい紅茶だ。夕陽が沈む草原で紅茶をすするってのも、なかなか味わい深いものだな」

「そうね」

「どうしたんだサイン。まだ確認事項が残っていたか？」

サインの視野の片隅では、インプラントが表示する情報が次々とポップアップしては消えていた。

「うん……いえ、いま片付いたわ。兵たちが”傀儡化優先命令”に従っているか調べていたの。命令履行率99・986%、満足できる数字みたい」

「そうか。まあ、今から何かトラブルたとしてもどうしようもないけどね。」

君もAIには異常時だけ報告させた方がいい」

「でも、あのでっかいギガスが傀儡化から抜け出して背後から襲ってこられたら大変じゃない」

エルモは肩をすくめた。

「君を襲う？そんな自殺行為に及ぶギガスがいるとは思えないね。身長5エルの奴だって、俺たちの防衛機序の手にかかれれば人族と変わらないよ」

「そうなんだけどね」

そう呟いて、サインは左手の甲をさすった。そこが数ヶ月前のオムニ領内での任務でサインが怪我を負った場所であることを、エルモは思い出した。

「気になるのか？」

「まあね。不確定要素があるのは気に入らないわ」

明らかかな技術文明の産物を持っていた少年。あの少年を眠らせて拉致ってこなかったことを、サインは今更ながら後悔していた。

「その気持ちはわかるよ。今回の作戦は、オムニ帝国の連中が今回も俺たちが昔の作戦行動に沿った行動をとると予測するだろうという前提から成り立ってる。」

テクサカが2個軍しか動かせないと思い込んでいるという前提だな。それが崩れたら、俺たちは負けるだろう」

「そうかしらね。連中は兵力22万でしょ。正面からの決戦で勝てるかもしれない。それに今回は少しだけど攻撃魔法も使えるわ」

エルモはゆつくりとティーカップを置いた。

「連中の魔術は年を経るごとに強化化してる。それに今回は俺た

ちと連中の兵数差は5倍足らずだ。押し負ける可能性はかなり高い。俺のAIの勝利確率を話したろ？」

「こっちは魔術が使えないからね。基本的な武器はなんとかそろったけど、オム二兵に半分でもたどり着くかしら。ああ、胸が悪くなる」

背もたれに体をあずけたサインが大きく溜息を吐いた。

「突撃しないわけにはいかないよ。今まではそうしてきたんだ。テクサカ兵らしくないとところをみせれば、作戦が崩壊しかねない」

「私達がもつと戦術に詳しくければこんなことにはならなかったのにね」

「それは言っても仕方ないことだ。俺たちは軍人じゃなかったからな」

アマチュアの軍隊を組織して、過去数世紀オム二帝国と戦ってきた。エルモやサインが長い眠りについて寿命を先延ばしする間、テクサカは自分で発展し、自分で社会制度を整えてきた。エルモやサインは、テクサカという国家造りのアウトラインを描いただけだった。

「なんだか魔王に祭り上げられちゃったけど、それを利用したのも今から考えるとなあ」

「あ、ごめんエルモ。話はここで終わり。あんた考えすぎるとどんどん暗くなるんだから」

「それも仕方ない。俺の性格だからね」

いつしか辺りはすっかり暗くなっていた。天幕が引かれた仮設司令部の前では、大きなたいまつが赤々と燃えている。暖かなオレンジ色の光が踊ると、サインのティーカップの影も踊る。

「冷えてきたわ。あの中に戻りましょう」

様々な種族から成るが共通して屈強な体つきをした衛兵たちも、魔王に従ってぞろぞろと移動した。

サインは歩きながら星が瞬く夜空を見上げ、あの冷たくて空っぽな空間のことを思い出した。

「あそこにいた頃、こんなことになるなんて想像もしなかった」

「……」

エルモは無言で同意を示した。

オムニ帝国との決戦は、明日にも始まるだろう。

5 - 7 激突（前書き）

決戦がはじまりました。

5 - 7 激突

一般に火砲大量投入前の戦場は実に静かであったといわれている。

敵に突撃をかける際には鬨の声をあげるものだが、敵の隊列まで走りながら声を上げ続けることはできない。重い甲冑に身を包み、長い槍を持っていれば、大勢がたてる荒い息の音が戦場に満ちる唯一の音ということにもなり得る。

剣戟や苦痛の呻き声は鉄砲の射撃音に比べれば静かなものなので、戦場から少し離れればそこで戦闘が行われていることを聞き逃すことも容易にあり得た。

いま、テクサカ領東部境界の緑の平野にオムニノテクサカ両軍が対峙している。

帝国軍の編成については割愛するが、テクサカ軍については少々説明が必要だろう。

旧来のテクサカ軍で兵力の主役であったモンスター種族……パペツト、トロール、ギガスがおよそ80万。彼らは灰色の簡単な防具に身を包み、それぞれがきらめく金属製の武器を手をしている。

テクサカ軍はこれまで傀儡化した兵に最低限の装備しか与えられなかったが、この15年の戦間期にテクサカ奥深くで新設された精錬工場や武器工場が良質の鉄器を量産していた。

珍しく長い戦間期のおかげだった。

そして、防具も黒光りする金属製。体の要所を覆うだけだが、攻撃魔法着弾時の微細な破片にある程度抗しうる。

軍編成面でも同じくらいの変化があった。

これまでは魔王の”傀儡化”によつてがむしやらに戦ってきたバ―サーカーのごときモンスター種族は、少数のセンチア処置を施された同族指揮官に率いられるように改められた。同時に小隊編成も取り入れられ、戦闘の役割分担がある程度可能になっていた。

これらの改革は帝国からの亡命者の力によるところが大きい。

戦術・戦法を一から独学した魔王に戦術の基本を教え、テクサカ軍にすっかりとした戦術という骨格を与えたのも亡命者の仕事だった。

亡命者が行った改革はそれだけではない。

古くからテクサカに居住する人族・ドワーフ・エルフ（と、少数のフェンリル）と違い、亡命者である彼らはテクサカの防衛をより真剣に考えていたのだ。

亡命者は煩雑化した補給活動や通信などのサポート業務に加え、知的な行動が命を左右する斥候としても活躍していた。また、亡命者を中心に将校階級にあたる”ノード”を形成している。

魔王直隷軍の前衛に守られた本隊には、主にオムニ帝国から逃れた市民から徴募した軍隊が組織されている。

彼らに魔術師は少なかったが、魔術師1人につき 100人の歩

兵が宝物のように魔術師を護衛していた。帝国軍がこれまではテクサ力軍に向けてきた攻撃魔法をその身に食らい、その威力を味わう日が来るのを心待ちにして。

上記のような亡命者部隊に加え補給部隊を合算すると、総兵力は100万近い。

補給は帝国軍に劣らず重要だ。いくら傀儡化技術がかけてあるとはいえ、飢えてイラつけばテクサ力のモンスターは味方同士襲いはじめる。それゆえ、80万ものモンスターを従えられるのはごく短時間なのだった。

打ち鳴らされる銅鑼の音も怒号のような突撃命令もなく、魔王直隸の2個軍は一斉に突撃を開始した。

対する帝国軍までの距離は約3トエル。これは帝国軍の攻撃魔法の射程ぎりぎりの距離だ。

今からは時間との競争になる。なぜなら、一秒でも早く帝国軍の隊列に斬りこまなければ、手も足も出せないまま魔王軍は一方的に撃ちすくめられるから。

中央軍集団の後ろの高台から戦場を見下ろす位置にある帝国軍司令部からは、矢継ぎ早に伝令兵が走り回っている。軍用の折りたたみ机を縫うように走る彼らの多くは少年と違ってよい年齢だ。

円陣を組んだ3、4個の椅子に囲まれているのはフェンリルの一団で、役割は帝国軍の通信兵だ。実体の薄い体は半ば空气中に溶

けた水飴のように、歪んだ像を透かし見ることができる。

遠く離れた総司令部や帝国等族議会それぞれに、同じ内容の開戦報告を送信しているところだ。

そして、目立つ赤マントに黒の軍服を着用したフェニックス・ブラッド・デラーが血走った目で司令部に陣取っていた。

実際に決戦がはじまっていたいま、彼は民衆向けのアジテーションで装う泰然自若とした態度も、政財界の要人向けの無意味な微笑みも忘れていた。そのどちらもがいつもの神通力を失っているためだ。雄弁など、ここでは勝敗に何の関係もない。

苛立った声音でフェニックスが参謀の言葉を反復する。

「魔王軍先鋒は1000エルだと？」

「はい。あと200秒でモノプティックの初回斉射に移ります」

「うむ。しかし勇猛で鳴る3個連隊がああもあっさり消滅するとはな」

フェニックスがいつているのは、敵前での偵察任務を負った”神聖威力偵察軍”のことだ。戦術的には全く無意味なことだが、うるさい若手将校を黙らすためにフェニックスが許した作戦だった。

既に何度も同じことを聞いていた参謀は無表情のまま。余計な火の粉を被るような真似をするほど馬鹿ではない。

「しかし、あの3個連隊が……」

参謀はかすかに眉をひそめた。総司令官の精神状態が少しばかり心配になってきたのだ。

「勇猛で鳴らしたあの……」

「デラー閣下、我が軍伝統の勇猛果敢さで身命を散らしたスパイスフル伯は、身を以って我らに神のご期待に沿う振舞いを示したのです。今度は我らが範に従う刻ですぞ」

実際のところ、”神聖威力偵察軍”などというご大層な名を冠した部隊は何の成果を挙げるでもなく壊滅した。

それはそうだろう。たった3個軍で魔王軍の300エル手前までノコノコと飛び出していったのだから。

確かに当初は成り行きを注視する魔王軍の慎重さに助けられて、痛烈な攻撃魔法を魔王軍前衛に放つことができた。

しかし幸運もそこまでだった。”神聖威力偵察軍”の魔法攻撃が一段落したと見てとった魔王軍の一団が突進して、3個連隊の3000人を瞬く間に引きちぎってしまったのだ。

人の身長のはあるギガスが太い腕で歩兵をつかみ宙に放り投げた。トロールは巨大なハンマーで兜ごと頭を粉碎した。モンスターに包囲された魔術師はデフレクトを張ったはいいが敵中に孤立した。

デフレクトは物理攻撃を退けるが空気はある程度通す。結局、魔術師たちは煙でいぶされ、結界が破けたところでなぶり殺しの目にあった。

逃げ惑う兵たちが次々と薄気味悪いパペットに捕らえられて手足が引きちぎられ、食べつくされた。3000人を招待しての死の晩餐。

フェニックスは3個連隊が壊滅するのを指をくわえて眺めるしかなかった。

「そうだ、彼らの傍らではスパイスフルをはじめ、3000の勇敢な戦死が見守っている。各員臆するな。我らは魔王軍の突進を阻む神聖なる壁となるのだ」

フェニックスの独演が終わった瞬間、中央軍集団の最前列からまばゆい閃光が放たれた。それは中央軍集団の2万人近い魔術師が放つ攻撃魔法の、最初の一撃だった。

どよめきが帝国軍に走る。

遙か南北方向では、遅々とした動きながらも芥子粒のように小さな北方・南方軍集団の軍勢が方向転換する。

彼らの任務は、中央軍集団が魔王軍を受け止める間に魔王軍を包囲することだ。彼らの走る速さに作戦成功の鍵があった。もちろん、中央軍集団の頑強な抵抗力も忘れてはならないのだが。

数千条ものモノプティックが、遠雷のような地響きで司令部まで震えさせた。

攻撃魔法の咆哮は休みなく続き、一拍おいて魔王軍の前衛が走る辺りを薙ぎ払う。土ぼこりと共に、モンスターどもが軽々と宙に吹

き飛ぶ。

着弾地点では焦げ臭い匂いが充満するが、モンスターたちはまるで気に介するそぶりもみせず走り続ける。攻撃魔法の一斉射撃が繰り返され、やがて全ての小隊が射撃を終えた。次は攻撃担当の魔術師による各個射撃に移る。

既に300エル程度にまで接近した魔王軍の前衛に、散発的なモノプティックの閃光が降り注ぐ。攻撃魔法が直撃したモンスターはあつけなくバラバラに爆散し、着弾地点の周囲のモンスターが絶叫をあげる。地面の土や刃物のように尖った小石が突き刺さったのだ。足の速いギガスが防柵にとりつき、それを地面につきささった杭ごと引き抜こうとする。それを阻止すべく、ギガスの鋼のような肉体に歩兵たちが槍を突き刺す。

幼い子供が悪夢に見るような恐ろしげな形相をしたトロールが投槍を放つ。放物線を描いた槍や石つぶてが降り注ぐ前に、多くの魔術師ペアはデフレクトを張り巡らせた。

同業者にあとになってから臆病者と陰口を叩かれる危険をあえて犯す魔術師は少ない。モンスターの攻撃がゆるむと直ぐにデフレクトを解除してサンダーを放って反撃する。

サンダーは直進性が悪いという欠点があるわけだが、至近距離のモンスターを攻撃する分には同士討ちの危険は無視できた。

魔術師の魔力が回復するまで、彼らを守るのは歩兵の役割だ。歩兵は魔術師の前面で長大な槍を掲げてモンスターが振り回す刃物を防いだ。

魔王軍の装備は西方戦役時よりもずっと改善されていた。武器も力任せに叩きつける棍棒よりもマシなものになっている。

オムニ帝国で流布している”発明の才に乏しいテクサカ”というイメージは、もはやあてはまりそうにない。

中央軍集団が攻撃に押され、中央部がお椀のように弓なりに歪む。

切り、突き、叩きつける血生臭い戦場に、次々と帝国軍歩兵が斃れてゆく。死者数ははるかに魔王軍が多いはずだが、屍を踏み越えて迫る魔王軍の迫力を見れば、誰もが現時点では魔王軍有利と判断するだろう。

前衛部隊はほぼ魔力を使い果たしている。第二列と投入すべきころあいだ。

「防御体制をとれ」

フェニックスが命じるまでもなく、各小隊の防御担当魔術師の周りに歩兵たちが集まっていた。傷つき疲れた彼らが堅固なデフレクトに守られるチャンスは逃すはずはない。

中には、デフレクトに包まれた瞬間に愚かにもモノプティックを放つたらしく内部がまばゆく輝いた次の瞬間、内破するデフレクトもある。デフレクトの中で術者が死んだのだ。

このような不幸な行き違いによる自滅は、周囲にも災いをふりまく。

デフレクトの中での暴発事故は、通常のモノプティックの攻撃力をはるかに上回る爆発力を示すからだ。

大爆発が周囲の小隊を巻き込んだ。

デフレクトが一種の密閉容器の役割を果たして強烈な圧力波を生み出し、術者が死ぬと同時に爆轟となって周囲に広まった。ヨウならばそう解説したことだろう。

最初の一斉射撃から魔力を温存していた第二列が第一列のデフレクトの間を縫い前面に進出、魔術師が危険に身をさらして攻撃魔法を放つ。この危険な切替局面で、帝国軍の後方から強烈な攻撃魔法が飛来した。

中央軍集団付属の攻撃魔法大隊の一斉射撃だ。

トリプティックの三条の光輝が魔王軍に降り注ぐ。

こうした支援にも関わらず、少なからぬ数の第二列魔術師が踊りかかるモンスターに叩きのめされていた。ペアの魔術師が慌ててウオルカをブートする間に、数十体のパペットによってずたずたに切り裂かれる。

中央軍集団を食い破ろうと迫る魔王軍は、頑強に抵抗する帝国軍と入り乱れた乱戦となっていた。

いつしか魔王の陣も前線に接近、その両サイドから包みこむように北方・南方軍集団が迫る。

戦闘開始から2時間後、北方・南方軍集団の兵10万のほとんどが作戦計画通りに魔王軍を挟みこむのに成功した。

戦場は帝国軍司令部から直接見れないほど広域に広がり、通信兵からの膨大な報告に応じて司令部の作戦展開図に連隊を抽象化した駒がおかれた。

司令部で混乱した情報に耳を傾けていたフェニックスは次第に興奮してきた。100万近い魔王軍のほとんどが、帝国軍の包囲に落ちようとしているからだ。これほどの大勝利は空前絶後のものだ。

ほとんど包囲の網が閉じようとしているのに、魔王軍は中央軍集団の突破を諦めていない。魔王軍の動きによって、彼らはますます帝国軍の包囲に落ち込んでいるというのに。

勝利を確信したフェニックスのもとに、恐ろしく良いタイミングで腰巾着の将軍たちから祝いの言葉が届いた。軍用通信網を私用に使うのは厳禁のはずだが見過ごされた。

「デラー閣下、将軍Aより」勝利は閣下の手中にあり」との連絡です

「デラー閣下、将軍Bより」大勝おめでとございます」との連絡です

フェニックスのもとに、司令部の要員から次々に祝いの言葉が贈られる。

なかには、「今も無数の将兵が命を落としているのになんとした不謹慎さか」と表情を曇らせる司令部要員もいたが、当然ながら少

数派だった。

己が帝国中から歓呼の声に包まれて政界の階段を駆け上る様が見えているかのように、フェニックスはニヤニヤと相好を崩している。いつもの仮面はどこかに消えてしまったようだ。

「帝国の強き腕に敵う者なし。我らの……」

フェニックスが上機嫌でいつもの説法をふるいはじめたそのとき、緊迫した声音の報告が舞いこんだ。

「閣下よろしいでしょうか。いえ、急を要するかと判断しました。報告は次のようにはじまり、途中で途切れています。

”コチラ ホヘイ ダイ 113 レンタイ カンク ユウセイ
ナル テキ ノ コウゲキヨ”以上です」

「なんだと？ はぐれモンスターの仕業じゃないのか」

真面目そうな将校は苦しそうに眉根を寄せている。

「申し上げにくいのですが、はぐれモンスターが襲ってきただけで通信が途絶えることはないと思われます」

「思われるのは結構だがね、別の考えかたもできるだろう。フェンリルが通信に失敗しただけという説明が最もありえると私は思うね」

不快なことを臆面なく口にする将校にむかい、フェニックスは冷酷そうな表情で告げた。

「しかし」

フェニックスは既に通信担当の将校に背中を向けていた。

「引き続き状況確認に勤めてくれたまえ。私はもつと重要な仕事があるのでね」

「そう、例えば我々を勝利に導いたりする極めて重要な仕事かね」

フェニックス信者の一人が聞こえよがしに言い放つと、周囲の数人から嘲笑が漏れた。

将校の表情から苦しそうな影が消えて無表情になった。

ただ番号だけで呼びあらわされる歩兵連隊は帝国本土との間の補給線護衛任務についている。歩兵第113連隊は帝国軍本隊が最後に残置してきた連隊だから、司令部からわずか10トエルしか離れていない場所だった。

このような重要な情報を無視するフェニックスが英雄足りうるのか。少なくともフェニックスたちに嘲笑された将校はもはや英雄の話信じてはいまい。

中央軍集団第2軍で奮闘するヒレンブランド連隊は兵の1割が永遠に失われ、更に1割が傷を負っていた。幸いというべきか、失われたのは専ら歩兵であることが救いではあるが、連隊の戦力は大きく毀損していた。

この時点では近隣の小队の生き残りをかきあつめた臨時編成の中队になるまでに損耗していた。

ヒレンブランド連隊の傭兵ばかりから成る第101中队（傭兵小队は100番台を割り振られていた）にカリカがいた。

近接戦闘でもしたのか、彼女の片手剣は血に染まっていた。

攻撃魔法だけで片付かない戦いなどカリカはあまりしたことがない。さすがに頑健な傭兵といえど手足が重く感じられた。

「最初からヤバイ配置だと判ってましたよ、姉御。あからさまに傭兵小队ばかり第一列なんだから」

そういう男のむきだしになったリネン・アーマーには血痕ひとつないが、苦しそうな息遣いをしている。

「將軍様の意向だから仕方がない。いいからここで大人しくしているよ」

カリカはそういうと部下の頭を、そつと半身に開いた甲冑に乗せた。

最近ではカリカよりも年下の傭兵が増えてきているために”姉御”などと呼ばれているわけだが、いまカリカと話していた男も少年と違って良い年齢だった。トロールの巨大な棍棒にアーマーを叩きつぶされて、表面的にはなんともないが内臓がやられていた。

アテナをブートしてカリカが治癒魔法をかければこの男も助かる

かもしれない。しかしカリカにそのつもりはないし、死にゆく男も命を助けてくれとカリカに懇願する空しさを悟っていた。

カリカの放つ攻撃魔法がもっと多くの仲間の命を救うことになる可能性は大いにあるからだ。魔力を浪費するわけにはいかなかった。

もともと、目前で繰り広げられていた魔王軍の猛攻はやや遠くに去っている。あちこちに死んだり死にかけていたりするモンスターが折り重なって倒れていた。

戦闘開始から4時間、魔王軍は包囲されていたが頑強に抵抗している。今回の戦いにおいて、魔王軍は少数ながら魔術師を戦闘に投入して帝国軍を翻弄していた。

そのために帝国軍は、玉ねぎの薄皮を剥くように敵の総大将がいる本陣に苦心惨憺しつつ迫っている。

カリカのイメージカラーである明るい赤色で塗装されたプレート・アーマーは、ところどころ暗い色の赤で汚れている。

ふと息苦しさを覚えて甲冑を指で探ると、みぞおちのあたりが大きくへこんでいた。いつできた傷かはまったくわからない。

カリカは自分の耳もとを死神がかすっていくような戦慄を覚えた。彼女とさっきの部下の運命を分けたのは単なる偶然だったのだろう。

胸に当たるへこみは、いちど不快に感じると耐え難いものに見える。

プレート・アーマーを貝が開くように蝶番を支点に開け、内側に着用したリネン・アーマーの胸元を確認する。どうやら怪我はしていないようだった。

汗が染みたりネン・アーマーは重たく濡れていたが体を撫でる焦げ臭い風は生暖かく、体は奥から燃えているようだった。

ふとある人物が目に残る。

ハム魔術同盟でも見知った魔術師の一人が焼け焦げた倒木に座っている隣に、カリカは足をかけた。

「どう、休憩はとれた？ もう一発モンスターにかましてやろうじゃないの」

魔術師は弱々しく答えた。

「カリカあんた元気だな。トラクトをもう一回使うつもりなら止めといた方がいいぞ」

「使わないよ。でもモノプティックをお見舞いするくらいはできるぞ」

「俺はパスする。あんた一人で行きな」

「はいはい」

肩をすくめるカリカに視線も向けず、魔術師はコテンと横になった。よほど疲れているらしい。

手近にいる歩兵を委細かまわずせきたて、カリカは前線に一步を踏み出した。そのとき、法螺の音が聞こえた気がした。

耳を澄ませて数秒、気のせいかと思った直後、背後がカツと明るくなった。次いで轟音が追いかけてくる。

「攻撃魔法だな。同士討ちか？」

誰かがつぶやく。

「違うぞ、ほらあっちでも攻撃魔法だ」

あちこちで人が宙に吹き飛ばされ、あるいは松明のように燃えていた。

「ちくしょう、後ろから敵だぞ」

恐怖に満ちた断言を誰がしたのかわからないが、カリカはそれに心の中で同意した。口では違うことをいつていたが。

「黙れ！ 各員武器をとれ、休憩は終わりだ」

かすかなだがはつきりと、遠くから地響きと鬨の音が聞こえる。

なぜかはわからないが、敵は魔王直隸の2個軍だけではなかったのかもしれない。カリカには思い当たることがあった。

「落ち着け、敵の悪あがきだ。我らの勝利は目前だぞ」

カリカが嫌いなフェニックスならいかにもいいそうな台詞である

ことはわかっていたが、いわずにはおれなかった。部下というよりはむしろ、自分に信じさせたいことだったのかもしれない。

地平線に視線を転じると、数トエル東の森と草原の境目あたりに動きがあった。そして、閃光が網膜を焼いた。円形の何かが急激に膨れ上がる。

カリカはとつさにテルミヌスをブートする。こんなことは並の魔術師には離れ業だが、カリカはエリ阿斯ほどではないが並より早くデフレクトを構築することができる。

カリカがデフレクトを自分の周囲に張ると、周囲が焼け爛れるのはほぼ同時だった。

「くっ」

シールドの外側が白く輝き、熱い空気が烈風となってカリカの頬をかすめた。リネン・アーマーのすそがはためき、圧力に一瞬よるめいた。本当にぎりぎり之間に合ったのだ。

危なかった。それにしても、かなりの遠距離なのにこの威力……トリプティック？

心臓が痛いほど脈打ち、自己主張していた。

炎を壁が晴れたとき、地面はカリカの立つ足元を除いて焼け、すぐそこにあつた焼け焦げた倒木は衝撃波で位置を変えていた。

指向性が高い攻撃魔法の通り道になった場所にいた不運な帝国軍将兵がそこいらじゅうに転がっている。前線に近い場所でこの威力

なら、近くで食らった者は跡形も残らず吹き飛んだに違いない。

傭兵の後方で及び腰の戦いをしていた貴族の子弟も、これで戦場の空気をたっぷりと味わえたことだろう。

そんな皮肉を感じられることにカリカは今更ながら驚いた。

傭兵という仕事は実際のところあまり人死ににでくわすことはない。仕事しているあいだ、人を殺しまくっているわけではぜんぜんない。ほとんどの時間が待機と訓練といっても良い。

カリカにとり、今回の戦役のような大戦争ははじめての経験だというのにこれほど心が平静な理由がわからなかった。

これが運命論ってやつなのかな。

戦場に身を置いた者は等しく運命論者になりやすくなる。

肩を並べて戦う戦友の右隣が矢傷で死に、左隣が一生不具になるような傷を負ったりするのを経験すれば、生き残った者が自分の力だけで生き残ったのだと考えはしないだろう。

周囲の多くの兵は呆然自失の状態だった。

このままでは、次の瞬間に我さきに逃げてもおかしくない。敵に背中を見せれば、帝国軍20万は戦力としての価値を失い、壊乱するだろう。

デフレクトを解き、大きく息を吸う。

「聞け！動ける者は密集隊形で円陣を組め。攻撃魔法はすぐに息切れする。ここに集まれ！」

パペットと化したかのように空虚な目をした男女がカリカの方を向く。

カリカの足元から声がした。

「かつこいいつす」

「え、あえ!?!」

飼い主を見上げる子犬のように、少年兵が驚くほど近くにしゃがんでカリカを見上げていた。

「超かつこいいつす」

「そ、そう、ありがとう。っていつかずつとここにいたの?」

「危うく消し炭になるところを助かりました！」

確かに、とつさに張り巡らせたシールドがなければ、この少年もただでは済まなかっただろう。

「あの、ところで申し上げにくいんですが、その」

なぜか頬を赤らめ視線を泳がせる少年。

「なに」

「その……」

少年の視線がちらちらと胸元に。

カリカは改めて自分の状態を目撃した。リネン・アーマーの肩紐がずれて、彼女の形が良かったわかな実が「Have a nice day!」と半ば顔を出していた。

何事もなかったかのようにそつと乱れを直し、彼女はたずねた。

「……みたよね？」

「(Good job)」

親指を立てる少年。

「小麦色の乳リボファ！」

後ろ回し踵を食らった少年が高速スピン。よろよろとカリカを囲むように集まりはじめた将兵が、少年の惨状に一步あとじさった。

観衆に混じる三兄弟、あからさまに田舎に居場所が見当たらず傭兵になった風情の歩兵がつぶやいた。

「勇敢な少年だったな」

「ああ、だが馬鹿だ。もうちょっと黙っていればいいものを」

「でも隊長殿ってさあ、あの慌てぶりじゃ処女だよな」

光速で振り向くカリカ。

「うるさい聞こえてるぞ！トリプティックをくらいたいなら前に出る」

三兄弟は瞬く間に人ごみに消えた。

まったく。クールなイメージが台無しじゃないか、ちくしよ。こついうふざけた扱いはひよっこ時代だけで充分だったの。

カリカは真つ赤になって下唇をかんだ。

「べ、別に恥ずかしくなんかないんだからね！」

と、どこかから野太い声。

「……」

カリカは無言のうちにウォルカをブートした。

リーオ・アケチの復讐は大詰めを迎えていた。

魔王軍を包囲し、あわよくば並び立つ魔王自身を捕らえる事を夢見る帝国軍は、背後から襲われて狼狽した。

一部の部隊は素早く混乱から立ち直りはしたが、残念ながら司令部の発する矛盾する命令が混乱をひどくしてしまっただよっだ。

ポピュロス通信は軍事的に大変な利点もあるが、逆にトップダウンで全てをコントロールしようとする場合に混乱をまきちらすこともあるのだ。混戦状態の前線にいる連隊が、正反対の方向に呼び戻される例もみられた。

リーオ・アケチ別働隊の精鋭1万はわずか1個連隊が薄く配置された帝国軍の補給線を断ち切り、踏み均された道を可能な限りの速度で進軍してきた。

落伍する者は森に姿をくらすように指示してまで先を急いだ。

魔王軍と帝国軍の会戦から数時間が経過、昼下がりの時間帯に別働隊は帝国軍の背後を突いた。

帝国軍の兵が警告を発する前にトリプティックの一斉射撃を食らわした時にリーオが得た快感は、例えがたいものだった。

敵の最も厚く兵が配された中央軍の背後を突いた瞬間に、勝負は決まったも同然だった。

華奢な体つきをした下級ノードのエルフ副官は嬉しさを隠しきれない様子だ。

「アケチ上級ノード、決まりましたね」

何が、とは聞き返さない。

「その通り。我々は最もフェータルな局面を切り抜けたようだね」

「では作戦案のままに進行ですね」

リーオはあごを指先でつまんだ。

「ああ。このまま敵アルファを横隊のまま押しつづす。敵総司令官が混乱した戦場を逃れるのは難しいだろう。第二段階は慎重に見極める必要があるが、敵司令部を逃がさないように動けば基本的に問題はないだろう」

そして、第三段階で二重同心円型包囲網をかぶせて敵を一網打尽にする。

魔王軍本隊の反対側に位置する敵ブラボー及びチャーリーまで完全に包囲することはできないだろう（主に徒歩という機動力がネックとなって）。

だが彼らが逃げ散ればテクサカの圧勝になる。敗残兵の狩りなら散兵戦術をとらせたトロールがうまくやってくれるだろうから。

「アケチ上級ノード、観測班より通信です。」我が先鋒は敵アルファ軍を突破しつつあり”です”

リーオのあごをしごく動きが止まる。

「そうか。敵は思ったより弱っているようだ」

リーオは副官に視線を向けて命令した。

「本隊に送信。」送る、敵アルファ弱体化、プラン2を妥当と認む”だ”

副官が復唱するのとはほぼ同時に、指示まれるまでもなく一体のフエンリルが輝きを増した。誰もが身近にいる別働隊の司令部ならではのコンビネーションの良さだ。

リーオはこれまでの訓練の成果に満足した。

魔王に送ったプラン2の提案は、より徹底した殲滅の要求だった。リーオのような軍人の才覚を充分に認めて重用してくれる魔王ならば、まず間違いなく聞き入れてくれるだろう。

皮肉なものだ。四氏族が心底恐れる魔王の方が帝国の誰よりも他人を信用するというのは。

謎の多い方々ではあるが、魔王は臣下にかしずかれることが苦手だし、とりたてて贅沢もしない。帝国貴族の大部分よりも友達にしたい存在だった。

リーオの唇から軽く苦笑がもれた。軽く頭を振って目の前の課題に集中した。

プラン2は、敵アルファアの抵抗が小さかった場合に、魔王軍本隊と別働隊の双方が協働して一重包囲をとる作戦だった。

前提として、敵アルファアに煩わされずに魔王軍本隊が機動する必要があった。この作戦が成功した暁には、敵の9割を殲滅できるだろう。

さて、忙しくなるぞ。

彼は猛烈にあごをしごきながら、部隊に下す命令をすさまじい速さで組立てる作業に没頭した。

6 - 1 敗北の報（前書き）

敗北の報が銃後にも伝わった。

6 - 1 敗北の報

オムニ氏族連合帝国のはるか西方の地で大敗を喫した帝国軍。その報はポピュロス通信で瞬く間に帝国全土に広まった。

季節は初夏にさしかかりつつあり、ぽかぽかと暖かい。それなのに、帝国人民の多くは外に出るとモンスターに襲われるんです、といわんばかりになるべく家から出ないようにしているようだ。

帝国北部の都市……ヒレンブランド城下でも通称”ウイスパー川西岸の戦い”が目下、最もホットな話題となっている。

もつとも、ごく一部の僻地の農民やアクターボに暮らす世捨て人などは世間のニュースに疎いたため知らないかもしれない。

他にはそう、部屋に引きこもっているばかりの人間とかも。

「おつ、お久しぶりヨウの旦那。もう昼だつてのに欠伸なんかして。また徹夜？大変ですねえ。」

ええ、その件で先日頼まれた酢酸の納品にあがました。硫酸はまだかかりそうですね。

ああどうも、こちらに領収印を。どうも。

いやあ、それにしても本当に世の中どうなっちまうんでしょうかねえ」

ヨウは明るい日差しが降り注ぐ玄関先の眩しさに目をしばしばさせながら、のんびりとたずねた。

「……え？なんかあつたんですか？」

最近懇意にしている問屋のオヤジが怪訝な表情をつくる。

「何って、うちの姫様が行ってる例の合戦ですよ。まさか知らないわけではないでしょう」

「ええ、まあ。で、その合戦ってどっちが勝ったんですけ？」

オヤジがあまりに時代遅れな質問に驚いてあぐりと口をあけた。

「ヨウの旦那、からかつてるんで？」

オヤジはヨウの姿を頭の前からつま先まで確認して、どうやら本当に知らないと信じることにしたらしい。手垢だらけの前掛けをもてあそびながらいう。

「いつも小屋にこもってないでたまには外に出ないと。城壁の下の物乞いですら一昨日には”ウイスパ―川西岸の戦い”のニュースのことを知ってましたよ。旦那も軍人さんだから知らせはきたでしょう」

ヨウの胸に不吉な黒い疑念がわきおこった。

「まさか負けたんですか？ヒレンブランド連隊はどうなったといってました？」

オヤジが情報を握っている者特有の、少しばかりもったいぶった

態度をとる。

「いやまあ、うちの連隊がどうなったかというレベルじゃないですよ。」

大敗も大敗、史上最悪の負け戦ですからね、なにしろ。22万の帝国軍のほとんどが死ぬか捕虜になっちゃった。

生き残ったとしても、アクターボを渡って帝国まで無事に帰れるとはとても思えませんね、あたしゃあ。

あたしの取引先に息子さんを3人も軍隊に入れてる男がいるんですがね、もう何て声をかければいいのかわかりませんでしたよ。」

剛毛に覆われた太い腕に血糊でもついているかのように、オヤジは前掛けで手を拭った。

「で、エリアス、いやエリアス様は無事なんですか？」

オヤジはこころもち声を落とした。

「風の噂ですがね、どうやら魔王軍に捕まっちゃったようですよ。せっかく領主様もお元気になったのに、また跡継ぎ問題でゴタゴタするんでしょうかねえ。」

いや、それ以前にテクサカ軍が帝国にどんどん迫ってるらしいですよ。世の中どうなっちゃうのか。」

そうつぶやいて、オヤジは盛大に溜息を吐いた。

”ヒレンブランド工廠” といえば立派な煉瓦造りの建物を想像するかもしれないが、実際のところ掘っ立て小屋より若干マシなあ

ばら屋に過ぎない。

この建物に強い雨風がふきつけてもパタリと倒れてしまわないのは、隣の鍛冶屋が支えになっているからではないかと、ヨウは考えていた。

連棟の建物だから、隣にはドア一枚でアクセスできる。ヨウはノックもそこに鍛冶屋のオヤジの作業場に飛びこんだ。

「アインブロックさん！アイン……失礼」

ちよつとしたスイカ並みのでかさの乳を持って余していること有名なアインブロック婦人が、夫から慌てて離れるのを視野の端に捉えつつドアを閉めた。

しばらくして再びノックすると、不機嫌そうな呻き声で入室を許可された。

「ヨウ君よ、最悪のタイミングでのご登場ありがとうございます」

「本当にすいませんです。悪気はなく……」

「まあいい、で、何か用か？」

アインブロックは帝国の北国人の間でよくある名前だが、彼は南国人のように浅黒く日焼けしていた。鍛冶屋特有の赤外線焼けかもしれない。

腕と上半身だけみれば、ドワーフのように太く逞しい体つきをしている。身長が人族として平均的な大きさだからまだいいものの、

夜道で出会ったらドワーフと間違えても無理はないだろう。

ヨウはいまさっきの間屋との話をアインブロックに伝えた。

「やっぱりまだ知らなかったのか。そうじゃないかと思っていつ気付くか賭けをしていたんだが、俺の勝ちだ」

「何やってんですか。勝ったんならいくらかキックバックしてくださいよ」

「いやなこつた。それにお前さん、俺のヨメさんを見ただろう。俺の貸し借りノートにきっちり貸しとしてつけとくからな」

「そんな借りどうやって返せばいいんですか。それより、テクサカに負けたって本当ですか」

アインブロックの片眉が上がった。

「そうらしいが……本当に知らなかったのか。あんたずっとこもりっぱなしだったからな。少しは外に出ろよ」

ヨウは頭をかいている。

「夢中になっちゃって」

「夢中になれるものがあるのはいいことだな。それはそうとうちの姫様、消息がつかめないらしいぞ。」

城付きの連絡将校がケツでも蹴っ飛ばされたような勢いでスリミアの総司令部に確認に行ったらしい。領主様はかなり焦っておいでのようだな」

かつてお会いした際の印象では、領主であるエリアスの父親は極めて理性的かつ公平な人物に思えた。慌てふためく様はちよつと想像できなかつた。

「ところでヨウ、あんたもいちおう将校扱いだつて言つてたよな。城に顔を出さなくていいのかよ」

「あ……そうですね」

ヨウは何事か考え込んでいた。

城でひよつとしたらエリアスやカリカの消息をつかめるかもしれない。それにおあつらえ向きにちよつとしたお土産もあることだし。プレゼンの機会として、帝国軍の不幸はひよつとすると俺にとって良い巡り合わせかもしれないな。

ヨウはエリアスの危機だというのに、かるく笑みを浮かべた。

ヒレンブランド城の謁見の間、といえば高い天井とそれを支える太い石柱、シャンデリアなんかもあると想像するかもしれないが、それは幻である。

金持ちのオムニ教会でもない限り、数学を応用した優美で高い天井構造などお目にかかれないし、シャンデリアは高度なケイ酸塩加工技術……即ちガラス工芸がなくては作れないからだ。

極めて地味な謁見の間には、メトセラ処置を受けているにも関わ

らず短期間で老けたように見える領主フレート・ヒレンブランドがいた。

その対面にはヨウを含む数人の将校が用意された椅子に腰掛けている。

領主の話は長かった。

侵攻軍に参加しない将校とはいえ、ヨウ以外の全員が軍事作戦についてはある程度知っているだろう。ということは、領主は専らヨウのために長々と説明してくれたのかもしれない。

領主は病に冒されていた去年の今頃そうであったような、ひどく青白い顔で説明する。

「……以上が、ターパンを乗り継いで持ち帰ってもらった情報だ。質問があるかな」

将校が顔を見合わせ、その一人が領主に質問する。

「領主様御自らのご説明いたみいます。我々は軍人として呼ばれているので言葉の装飾を取り払わせて頂きます」

領主は小さくうなづいた。

「皇帝の勅命による動員と仰いましたが、当領の抛出はいかほどになりますか？」

「要請員数は1200、15日以内だ」

ヒレンブランド連隊の数を上回る数字に、将校たちはたじろいだ。

「しかし、当領の連隊配属の将校はまだ誰も戻っておりません。戻るのがいつになるのか、まだ誰にもわかりません。

休養期間も必要でしょう。新たな連隊にどれだけの魔術師を編成できるのか。せいぜい数十人でしょう」

「いや、魔術師は考慮せずともよい。スリミアの総司令部の判断では、先の戦いから帝国本土に帰還する者は期待しないよう指示があった」

「まさか。彼らのほとんどが本当に……」

謁見の間にしばし沈黙が下りた。

「なれば、歩兵だけで新たに1200名を編成せよと仰るのですね」

魔術師なしの歩兵連隊など、補給線の護衛や治安維持には使えろがモンスターとの戦闘になど使えない。魔術師のいない帝国軍など、肉と野菜のないスープのようなものだ。つまり白湯だ。

ヒレンブランド連隊は、帝国辺境領北部タイル軍として、周辺領連隊と連合し新たに北部第2軍を編成する。総兵力は紙切れ一枚で集めた歩兵が6000名余りの予定。

ヨウの隣に座る補給担当の尉官は疲れたように静かに頭を振っていた。正規軍も傭兵も出払っているというのに、まともな歩兵が集まるわけではないと考えているのだ。

皇帝の帝勅により、帝国全土で必要なだけの市民を徴兵する権利が与えられた。半ばおおっぴらに行われてきた強制徴募にお墨付きが与えられたわけだ。

帝国防衛のために残置された30個歩兵連隊を中心に、35万の歩兵から成る防衛軍を今後15日以内に組織する。帝国臣民の20人に1人近い膨大な数だ。

補給担当将校がおずおずと手を挙げた。

「ちよつとよろしいでしょうか。新たに徴兵する兵の武器・防具の手当てに問題があります」

”問題がある”とはまた、控え目な表現だった。実際のところ、武器はわずか、防具はほとんどないはずだった。

「どうやって戦えばよいと仰るのですか」

「既に帝国東部辺境領では歩兵が散々に打ち破られつつあるとの噂を耳にしております」

「では、我らが参じたところでテクサカ軍を押し留めることは困難だろう」

「ごもつとも」

「帝国800万の民が団結すれば必ずやテクサカを打ち破ることが……」

口々に話しはじめた将校たちに向かい、領主が咳払いをする。そ

して、おもむろにヨウに視線を向けた。

「皆しずまるのだ。我らにも勝ち目はある」

勝ち目はある。帝国軍の敗北をある程度予期するかのような表現は不吉に響いた。

「武器掛少尉、ヨウ・ニシミヤのことは知っているだろう」

将校たちが一斉にヨウに視線を向けた。将校たちの多くは、うさぐさくさいモノに対する目つきでヨウを観察している。

「彼の考案した新しい武器が対テクサカ防衛戦の切り札となる。そう私は確信している。」

新しい武器による新しい戦術については、餅は餅屋という。ほかでもないあなたがたに開発をお願いしたい」

当然ながら、領主の言葉に反論が相次いだ。ヨウはその一つ一つに応える代わりに、つい数時間前に領主と打ち合わせたパフォーマンスを披露することになった。

人を騙すようで気分は乗らなかったが仕方がない。

「ニシミヤ少尉」

領主の視線を受け止めたヨウは、ベルトに差したグローックを手にとった。そして、部屋の隅で鈍い光沢を放つ装飾品のプレート・アーマーに向かって2発発射した。

将校たちの足下を薬莖が転がる。

乾いたパンパンという音と同時に鳩胸のようになった胸甲に穴があいた。部屋には火薬の燃えた匂いが漂う。

ざわざわ。

ギャラリーは不安げにヨウの手の中にある黒い物体に視線を向ける。

「今のは魔術か？」

「でもなんか違うね？」

ヨウが答える前に領主が答えた。

「違う。魔術ではない。ニシミヤ少尉は魔術師ではないからな。単なる人の技だ。威力は見ての通り。この”銃”を少尉が我々にもたらしてくれる。

わかるか、もたらしてくれるものの一つにはテクサカに対する勝利も含まれる。全ての歩兵が少尉の武器を持ったと考えてみたまえ」

もちろん、今ヨウが手にするような火器を製造することなど絶対に無理だ。しかし嘘も方便という考え方もあることだし、黙っていることにした。

そもそも、将校たちを説得させるためにヨウとの打ち合わせを申し出たのは領主の方だった。

「ニシミヤ少尉はフェンリルを用いないポピュロス通信をも実現すると約束してくれた。

フェンリルでなくても我々全員がお互いに状況をやり取りできるようになる。どういう潜在的な意味があるか、考えてみて欲しい」

将校たちは半信半疑の面持ちだ。

「だから、だからだ。今から諸君らにはニシミヤ少尉の新兵器開発に協力してほしい。

とはいえ皇帝の命令には服せねばならない。諸君のうち今から読み上げる者は、本日から兵の徴募に当たってもらう。それ以外の者は少尉の指示に従うこと」

将校たちは顔を見合わせるばかり。たたみかけるように領主は背中を押す。

「先日、スリミア・オムニ教会に対テクサカ防衛の勝利の御宣託があつた。我らの最終的な勝利は確実だ。

だが勝利への道筋は決して平坦ではなからう。信仰は時に試練によつて試されるのだ。試練には我らの最上の献身をもつて答えようではないか！」

― 昨日のこと。

ヒレンブランド領主と面会したヨウは大荷物を手にしていた。警護役が大いに警戒するほどの巨大でなんだか酸っぱい匂いがする物体。怪しさ満点だ。

中身はレモンと紙の筒、銅線、亜鉛板、銅板、鉄釘、それに銅線を紙で巻いた手製の電線、そして厚紙製の板。勘の良い人ならわか

るかもしれない。

ヒントはマルコーニ。

そう、火花送信機&受信機だ。

電源は半分に切ったレモンを10個直列でつないだ（起電力推定9ボルト）の電池。

電池から供給される電気は釘と銅線から成るコイル（バーアンテナ）に流れこんで、コイルは電磁石になる。

そして、鉄でできた接点を離れた瞬間、接点間に高電圧が発生し火花が散る。

この火花は電波バーストとなって送信機から放射状に電波が発信されるのだ。

中学3年でアマチュア無線4級をゲットしていたヨウでも作れる簡単な仕組みだ。もっと難しいのはスピーカーだったが、とりあえず元いた世界のイヤフォンで代用している。

受信機そのものは長大なワイヤーアンテナが必要である点以外は送信機とほぼ同じ構造だから製造は難しくはない。もっとも、銅線はこの世界では高価なものだから製造コストはかなりのものだ。

こんな原始的な無線装置だが、地球においも20世紀初頭までは最新の装置だった。

実際、タイタニック号が沈没寸前に放った救援無線も（出力は違

うが)同じような火花送信機だったし、日露戦争でバルチック艦隊発見の報告も艦載火花無線送信機によるものだった。

エリアスやカリカを助け、彼女らが守ろうとしていたものを守るために、ヨウに何ができるのか。それを考えたとき、テクサカの魔の手からオム二帝国を守ることが、この世界でヨウにもできる唯一のことだと気付いた。

あてもなくエリアスたちを探してオム二領西方のアクターボをさ迷い歩くわけにはいかない。あっさり死ぬのがオチだろうから。

それより、彼女らの帰る場所を守るべきだった。だから、領主のもとを訪れた。

はじめはヨウの持ち込んだ装置の効果に半信半疑だった領主は、無線装置がうまく作動すると目を見開いた。

この装置の持つ潜在的な軍事的・経済的可能性に気付いたのだらう。

送信できるのはモールス信号のような長短の信号だけだったが、応用方法はいくらでも考えられる。

ヨウとしてもこの未完成も甚だしい装置を持ち込むには勇気が必要だった。

だが、いま勇気を示さずにいつ示せばよいのかわからなかったのだ。できれば鉛蓄電池が出来てからの方が良かったが、硫酸が予定

通り入手できなかったのだ。

幸いにも、ヒレンブランドの領主はとても柔軟で実用的な知性の持ち主のようだった。

他の予定をキャンセルして領主はヨウとの面会に数時間を費やし、ヨウのする説明に熱心に耳を傾けてくれた。

無線通信、火薬製造、製鉄。

どれ一つとっても実現には困難が伴う。

主に資金面で。

資金面の問題はカネのあるところに掛けあつて引き出すしかない。教会は論外だから、当然ながらヒレンブランド領主のもとを訪れることになった。

「ふむ、ニシミヤ少尉、その”黒色火薬”がそなたの主張どおりの性質を有するとすれば確かに武器への応用が可能だろう。だが、その”硝酸カリウム”とやらをどうやって手に入れるのだ」

ヨウは領主の示す記憶力の素晴らしさに舌をまいた。

一度言っただけの聞きなれない単語をいとも簡単に覚えてしまうのだ。メトセラ処置によって肉体的には若いままだという点を差し引いても、実に侮れない人物だった。

「土硝法という手法を用いる心積もりであります。この方法では、硝酸カリウムを人間やターパンの排泄物から得ることができます。」

必要なのは……失礼しました、品のない内容になってしまいました」

領主は手を振って先を促した。

「は、排泄物から染み出した硝酸カリウムを抽出するには、大きな寸胴鍋と熱源、そしてたくさんの人手があれば可能です」

「本当にそれだけなのか？何か特殊な魔術が必要ないのか」

「製造過程ですさまじい臭気にさらされるので、匂いに耐えられる作業員を探す必要はありますが」

領主は笑った。

「まあ、それは心配なかるう」

「硝酸カリウムが手に入れば、あとは木炭と硫黄を配合すれば完成です。まずはこのような」

ヨウは領主に提示した銃を示した。

「小銃ではなく、私がいた世界では”大筒”と呼ばれていた”先込式鍛造砲”を造れましょう」

「ふむ……それは少尉がいう”技術的な問題”のためか」

「はい。鑄造法が存在しない以上、鍛造しかありません。小銃の製造は次の段階になるでしょう。」

もともと、帝国の優秀な刀剣の製造技術があれば、火縄銃ならば製造可能かもしれません」

「で、カネと人手があれば少尉の世界の技を我らも使えるというのだな」

ヨウはちよつとばかり考えてから正直に答えた。

「はい、現実ではありませんが、先ほど申し上げた技術に関してはこの世界でも再現できると思います」

「ははは、そうか。少尉、そなたは交渉事には慣れていないようだな。私のもとに儲け話を持ってくる山師連中は決して”できると思う”とは言わないよ。

わかった、少尉の提案に賭けてみよう。いや、感謝するのは早いぞ。提案の発起人として、少尉にはこれから苦労してもらわんといけなからな」

「は、はあ」

「今は確かに大変なときだが、だからこそ物事を大きく進めるには良い時期かもしれん。

それにな、皆が困っている時の方がカネには困らんものなんだ。いや、本当だぞ」

人形のように機械的にうなづくしかないヨウ。

「まず帝国軍の大敗北からひとかけらの果实をもぎ取らせてもらおう。

2日後、将校を集めた善後会議がある。少尉にはそこで一芝居打ってもらおうことにしよう」

領主は銃のグリップをつまんでヨウに差し出した。

「こいつが効果的だろう。魔術師は力を信奉するものだ」

ヨウに異論はなかった。

6 - 2 わたし、壊れてしまった？（前書き）

エリアスとカリカは戦場の混乱のなかでどのような運命をたどったのだろうか。

6 - 2 わたし、壊れてしまった？

見渡す限り屍で埋め尽くされた光景。

血でごわごわになった雑草がわびしく風に揺れている。

折れた旗、地面に突き刺さった槍、そして苦しそうに曲げられた指の形のまま突き上げられた腕。それらを真っ赤な夕陽が照らしている。

初夏の陽気のせいで早くも傷みはじめた死体が放つ匂いでむせ返るような濃密な空気に満ちている。

口元を何重にも巻いた汚らしい布と鉄兜のせいで、グール（食人鬼）のごとき容貌をした者どもが死体の間を這い回り金目のものを探している。

グールの一人が死体をひっくり返すと、赤い甲冑に身を包んだ魔術師が現れた。

喜び勇んで、高価そうな甲冑をはぎとろうと甲冑の継ぎ目に刃物を押し当てた。

ブツリ、と音を立てて甲冑が蟹の甲羅のように割れた。

勢い余って刃物が死体のわき腹を引き裂いたが、何の注意も払わなかった。既に死体なのだから気にする必要もない。

「う……ん」

グールの動きが止まる。

彼は血脂で薄汚れたゴーグルを額にずらすと、赤い甲冑の女魔術師を念のために蹴飛ばした。

女はまたうめいた。

「おいどうした？」

同僚が死体に足をとられながら集まってくる。

「ああ、なんか生きてるっぽいな、これ」

「ふうん」

どうでもよいと言いたげな口調だ。

「うちのノードは生存者は捕虜にするように命令したぞ」

「でも面倒だろ。どうせ捕虜にしてもすぐ死ぬさ。ほら、この剣で心臓を刺してやれよ」

同僚は回収品でいっばいの背囊から細身の剣を取り出した。

「そうだな」

「いんや待ってくれ！」

太った男が息をきらせて割りこんできた。

「良く見せてくれ。ほうほう、べっぴんさんじゃなのよコレ。おっひよお」

「……そいうかい」

見下ろせば、血で汚れたりネン・アーマーが女魔術師の形の良い胸に貼りついている。

薄気味悪い太った男が奇声をあげる。

「うっひようっひよ。ほひょー！オラがもろた」

「もらってどうすんだよ」

「ひよ？決まってんべ。おもちゃおもちゃ、うっひよ。

腸抜いてから塩まぶすとけっこう保つんだあ。オラア穴だけありやいいからよお」

「……」

黙りこくる男たち。やがてその中の一人がこういいだした。

「ノードの指示に従おうか。俺たち二人が担いでこいつを運ぼう」

「ああ、手伝うよ」

「ひよ？なんだい、つまらん。気んもちエエんだどお」

太った男は死体の隙間で千鳥足のようになりながら、他の獲物を

求めて去っていった。その姿が小さくなった頃、男たちはささやきを交わした。

「あいつも亡命者なんだろう？」

「そうらしい。あまり喋ったことないけどね。あいつ、なんで帝国にいれなくなったんだろう？」

「なんかヤバイことでもやらかしたんじゃないのかね」

「だな」

「しかし、世の中には変なやつがいっぱいいる」

「まっただくだ」

男たちはこのとき、死体から金目のものを漁るというきつい仕事ではついぞ感じたことがない戦慄をはじめて覚えたのであった。

有難く思うべきだった。帝国が示したことのない温情を示すテクサカに対して。

これまで尋問目的以外に捕虜をとったことなど記録にないし、捕虜をとること自体が軍務の範囲外のことだった。処罰の対象になつてしかるべきだとすらみられていた。

なぜなら捕虜をとれば、その役立たずのための糧食が必要になるからだ。

それなのに……。

こんなステキなお食事まで……。

おいひい……。

噛みとった肉のかけらを飲んだ。

プラチナの長い髪が顔にかかり、その表情は見えない。

アクターボに大量に生息しているメガマウスは、その外見はともかく肉は旨み成分たっぷりで美味だ。問題はメガマウスが有毒種である点だ。

人の身長ほどの大きさがあり、肉もたっぷりあるメガマウスを地元民は絶対に食べない。これの血液に含まれるある種のアルカロイドが意識障害を誘発し、しかも摂食習慣性まで有するからだ。

大量に食べない限り問題はないのだが。

一方、このマウスは簡単にいくらでも捕獲できる。余計者の敵軍捕虜の食料として最適だった。メガマウスには実は今回に限り役立つ、ある利点もある。

将校ばかりが閉じこめられた牢は岩を削った洞窟に、頑強な鉄の柵を設置したものだ。

だが、いくら頑丈とはいえ、人の手では壊せなくとも魔術師ならば牢そのものを破ることは難しくないだろう。

なのに捕虜たちの誰も牢を破れなかった。

例のヤバイ肉のせいだ。

魔術師たちは生かさず殺さず、メガマウス中毒でぼんやりと壁をみつめたり何かを呟いたりしている。

エリアスも同様だった。

鉄柵の下に設置された小さな出し入れ口から食事が放られるやいなや、牢の全員が肉を争って引きちぎった。もはや腹が減っているのか否かはどうでもよかった。とにかく例の肉を飲み下し、胃に詰めることしか考えられなかった。

総勢20万を超えた帝国侵攻軍のうち、生き残っているのはわずかに3万だった。そのうち魔術師は1万。デフレクトに逃げたおかげで、歩兵よりも生存率が高かったのだ。

歩兵は捕虜になったいま、野外の雨風を申し訳ばかりに遮る粗末な天幕の下で蚊に悩まされている。

一方、魔術師が多い将校は尋問に備えて頑丈な牢に小入れにして収容されていた。

敗北から約3週間、ついにエリアスに尋問の順番が回ってきた。

眠りから目覚めるときと同じように、夢つつつの段階から徐々に

覚めるのに似ている面もある。が、大いに異なる面もある。

ある瞬間に、突然短時間だけ正気に返ることがあるのだ。それがメガマウスによる意識障害からの回復期の症状だった。

なにかしら。ひどい匂い。

それがエリアスが最初に感じたことだった。

口の中もひどい味で、何か泥でも食べさせられたかのよう。

「おい、4番が正気に返ったぞ」

エリアスは痛む首を回して声の主を探った。視界はぼんやりと霞んではつきりせず、船酔いのような猛烈な吐き気が襲う。

「はいはい、4番ね。オル、あっちに連れてって」

ドワーフにしては高身長、オルという名らしい男がエリアスの腕をつかんで引っ張った。

硬いベッドから転がり落ちる。

「いちやあ、そんなにひっぱりやないて（嫌、そんなに引っ張らないで）」

オルはあまり我慢強いタイプではないらしい。こう即答した。

「チツ、黙れ売女。キリキリ歩け」

力がはいらずにガクガクする足は次第にしつかりと地をつかむようになって。それでも歩くという簡単な作業がとても難しく思えた。どこまでも続くようなトンネルを抜けると、明るい空間に出た。

あまりの明るさに目がくらみ、片手で光を遮った。

「お目覚めかな」

どこかで聞いたことがある声。

ゆっくりと光に慣れたエリアスは、眩しそうに部屋を見渡す。

そこは緑色一色の部屋で、鉄鉾が打たれた頑丈そうな鉄扉がエリアスの背後に一つ、向かいの男の背後に一つあった。

「そこに座らせろ」

ドワーフがエリアスを軽々と持ち上げ、椅子に落とした。

そのときになって、足首と手が鎖で結ばれていることにはじめて気付いた。

「君の所属と氏名をいいなさい」

「……デラー総司令？」

「いいか、君の所属と氏名だ」

フェニックス・ブラッド・デラーが机の向かいにいた。こぎれい

な服を着て、髪はしっかりと梳かしつけられている。

「辺境領北部タイル。ヒ、ヒレンブランド連隊……いったいどういうことでしょうか」

エリアスの頭を覆う霧が吹き飛ばされた。そして、なぜフェニックスがここにいるのかという当然の疑問を感じた。

「どういうことですか。我々は捕虜になつたはず。総司令、あなたなぜここにいるのでしょうか」

デラーは聞き分けのない子に対するような苦笑い含みの声色でいう。

「命令だ。早くいいなさい」

「お断りします。我々が捕虜になつた時点で帝国の規定する法の埒外にあります。捕虜になつた際の古い法はテクサカには適用されません」

デラーははじめてエリアスの顔を直視した。

「捕虜になつた際の法はテクサカにも適用する。

一般的には反乱軍捕虜ですら自らの名は名乗る義務がある。

なあ、頼むよ、私は君たち将校を我が国に受け入れるか、それとも矯正収容所に送るか選別しなくてはならないのだよ」

我が国。

エリアスは無表情になつた。

「テクサカとの間にはいかなる国際法も存在しませんし、いかなる習慣法もありません。あなたが先ほど指摘した義務は単なるガイドラインでしょう」

「なに！」

エリアスはデラーと視線も合わそうとしない。

「あなたの忠誠心はどこにあるのかしら」

椅子が引っくり返った。

「貴様！」

デラーの両脇で成り行きを眺めていた男女が口を挟んだ。

「デラー 収容所顧問、まあ落ち着いてください。彼女は混乱しているのですよ」

恐ろしく美形のエルフ男性と恐ろしく巨大な人族女性は、和やかな笑顔をみせた。

「あなたの仰るとおり、テクサカとあなたがたの国との間にはいかなる国際法もありません。

よって、あなた方の処遇の決定権は我々にあります。

さて、そこで質問です。あなたの名前を仰ってくださいますか」

「……エリアス。エリアス・ヒレンブランドです」

「所属連隊と同名なのね」

大柄な女が確認する。

「ええ。帝国北部辺境、ヒレンブランド領第一継承者です」

「なるほど」

美形の方が何かを紙片に書きこむ。

「正直に答えてくれましたね。我々の情報とも一致しています。さて、我々は歴史的な経緯から敵対関係にあります。

しかしその関係が必然的なのかをじっくり考えて頂きたい。そのための基礎となる情報を提供したい」

エリアスは黙っている。

「あなたには選択肢があります。どの道を選ぶにせよ学んで頂きますが、それを自主的に行いたいならば、テクサカは亡命者としてあなたを受け入れます」

デラーが割りこむ。

「安心するがいい、テクサカから帝国に出国するのは自由だ。

まあ、帝国の余命がそう長いとは思えんがな。それよりも、いまテクサカに貢献する道を選んだ方が利口だぞ。帝国はいずれテクサカの一地方になるのだからな」

呆れて声もでないエリアス。

「あなたは……」

「テクサカでは信教の自由が保障されているから、オムニ教を捨てる必要もない。魔王様の御慧眼よ。」

「そうだ、こう考えればよい。帝国において、四氏族持ち回りで選ばれる皇帝を我々は頭上に載りてきた。つまり帝国とテクサカはある点では非常に似通った政治体制なのだ。」

「どちらでも良いではないか。よく感覚を研ぎ澄ませて時代の風を感じてみたまえ」

「そう言い放つと、デラーは片目をウィンクしてみせた。何を暗示しているのかはわからないが、エリアスの胸中に残ったのは吐き気だけだった。」

「エリアスはデラーを無視し、裏切り者の両脇に座る男女の瞳の中を見通そうと試みた。」

「大柄な女がエリアスをみつめて小さく頷く。」

「デラーへの敵意が、急速に帝国に対する羞恥心が変わってゆくのが感じた。こんな男が総司令だったのだ。ずっと軽蔑してきたテクサカの方がはるかにまともではないか。」

「承知しました、亡命しましょう。何か宣誓書でも必要ですか」

「いいえ。ただし戦争が落ち着くまで出国は制限させていただきます。なお、宿泊施設はこちらで用意しますよ」

「なぜか大柄な女は微笑んだ。何かイタズラでも企んでいるかのよう。」

エリアスを口説き落として彼と同じ裏切り者にしたのがよほど嬉しいのだろうか、ニヤニヤとした気持ち悪い笑みをはりつかせたデラー。

その肩を美形男が軽く叩く。

「さすが稀代の英雄フェニックスですね。今日はもう12人も転向しましたよ。」

これで魔王様もお喜びになるでしょう」

「うむ、そうか？ いやいや、私は一人のテクサカ人民として微力を尽くすまでだよ」

と、きわめて上機嫌。

席を立ち、入ってきたのとは別のドアをくぐるとき、エリアスは帝国侵攻軍の司令官を一瞬だけ見た。そして、諦めたように小さく瞑目した。

滑稽というより哀れなものですね、フェニックス。あなたはまた不死鳥のように華々しく蘇るつもりなのかしら。あんなに一生懸命になって、利用されているだけなのに。

大柄な女がエリアスの鎖を引いて歩く。

「明日早朝、本日分の亡命者はまとめて”宿泊施設”に移動します。今から浴室に案内しますから、その管理者の指示に従ってくださいね」

「ふふ、ひどい格好でしょう」

そう自嘲するエリアスに対し、女は肩をすくめた。

「仕方ないわよ。それよりメガマウスの毒を抜かないとね。あんな扱いをしなくてはならなかったことは私達も残念だわ。さあ、清潔になったら、次は食事なさい」

「わかったわ」

食事。

エリアスは自分のどこかほの暗い奥底から、メガマウスを食らいたいという熱望がこみ上げるのを自覚した。同時に、薄暗い牢獄でむさぼった灰色の肉の記憶が蘇った。

戻りたい。

あのお肉をいっぱい……。

エリアスは我に返った。

そして、自分が一瞬だが抱いた欲望に鳥肌が立つ思いがした。あの汚らしい肉を食べたいなんて、考えるのもおぞましいことだった。

頭ではわかってはいても欲望そのものを消すことはできない。エリアスは自分のどこかが永久に壊れてしまったのではないかという恐ろしい予感に囚われていた。

6 - 3 魔王城によつこそ！

体を清め、やっと人心地ついて案内されたのは窓もない広い部屋。壁は鉄か何かの金属でできているらしく、つやつやと輝き、天井はどんな魔術的な仕掛けなのか蛍光を放ち続けいてる。

テクサカへの亡命を決意した者はあまり多くないのかもしれない。

その部屋には20名程度しか亡命者がいなかった。ここ数日分の亡命者が集められたにしては余りにも数が少ないように思えた。

教兵連隊の魔術師からは転向者が出るとは思えないし、思い切った行動はとらない者も多かったのかもしれない。

などと考えていると、長い赤髪の女性が背中を向けて何かを食べているのに気付いた。

日に焼けた肩、首筋にわずかにのぞく刺青。

カリカだ。

「カリカ？ カリカ・フローレス？」

「んー？」

振り返った彼女は、さっきの食堂で支給されたコーンをかじっていた。

「あ、エリアス。生きてたのか」

あまりに直裁な表現にちよつと引き気味に答える。

「え、ええ。あなたも元気そうでよかった。それ、食堂から持ってきたのね」

「まあね。正確には盗んできた」

「また、あなた……」

エリアスはカリカの悪い癖に呆れた。

なにくわぬ顔でしつとりとしたテクサカ製のコーンを口に運んでいる。よく観察すれば、カリカは胸に包帯を巻いていた。帝国軍では滅多に見ないほど真っ白な布だ。

「ああ、これが。なんだか知らないうちにわき腹が切れてたんだ。いちおう治癒魔法までかけてくれたみたいだ」

と、片腕をぐるぐる回す。もう痛みもないようだ。

「わざわざ治療までしてくれたのね」

「テクサカ人が何考えてるのは知らないけど、まあ貰えるものはもらっておかないとね」

カリカがウインクする。

「にしても、あのエリアスがねえ」

ニヤニヤするカリカ。

「何です？」

「よく矯正収容所の方をチヨイスしなかったなあと思っただけ」

エリアスはこころもち頬を赤らめる。

「いいじゃない、どっちにしる帝国に帰れるみたいだし。せつか
くなら敵をよく観察できるように亡命するって騙しただけよ」

「わかったわかった。わたしも同じだよ」

「どうだか」

腕を組んでジト目でにらむエリアス。

「あっはっは」

視線はどこか何もない天井をさまよわせている。

エリアスもついつい天井の辺りを見てしまう。

「………というのはいいとして。エリアス、お互いにあの日からの
ことを話そうぜ。わたし、合戦の最後の方から記憶が全然ないんだ
よね」

久しぶりに再会したエリアスとカリカが先の決戦での活躍話に花

をさかせたり、その後ヤヴァい肉でトリップしていた時の記憶に震えたりしているうちに、彼女らはいつしか眠りに落ちていた。

そして朝。

エリアス以外にも、ほとんど全員が既に起きていた。隣を見ればカリカもむっくりと上半身を起こす。

二人は顔を見合わせて、強烈な内なる欲求に眉をしかめた。何も言わずとも理解した。あの肉のせいだった。

「あによヤバにきゅのちえいで」

「ちよつとカリカ、かちゅぜつが……あれ？」

後遺症と戦う亡命者たち。

びんぽんぽんぽん。

突然の大音声に亡命者たちはビクリとした。

「あー、あー。こちらは収容所運営委員です」

その音は、壁の天井近くに設置された箱の中から響いていた。

「亡命者の皆様、おはようございます。食堂に食事が出来ておりますので、皆様お誘いあわせのうえご集合ください。ぴーんぽんぽんぽん」

始まったときと同じく、音声は突然に止んだ。

「なに、今の」

「まあいいじゃない。朝飯食いに行こう」

二人は連れ立って食堂に歩を進めた。

食堂にはオレンジ色の飲み物と目玉焼き、コーンに煮豆というメニューが準備されていた。

カリカはすかさずテーブルに載った誰かの分のコーンを手に取り、当然のように齧った。

「やっぱり帝国のよりうまいわ、これ」

テーブルには白いクロスがひかれ、テーブル中央には見たこともない果実がボウルに盛られている。

「これもいただき」

「やめてよ、カリカ。テクサカ人に田舎者呼ばわりされるわよ」

「なにをいうか、これも敵補給線に打撃を与えるためよ。むぐむぐ」

どこからか、「俺のコーンがないんだけど」と不満を訴える声が聞こえるが気のせいだろう。

亡命者全員が席につくと、奥の扉が開いた。

大股で長身かつ豊満なボディの若い女性が入ってきた。カリカよりも長身で、ちょっと天然パーが入った金髪がひどく眩しい。白くつややかな肌は、まるでエルフ女性のそれのようだ。

容姿だけでも充分に人目を引くが、もっと特徴的なのはその服装だ。なにやら皮製の黒光りするそれは、甲虫のそれに似ている。

女はこう発言した。

「亡命者のみなさん、お食事しながらお聞き下さって結構ですよ」

その声は、さっきと同じように壁の箱から聞こえた。

「後ろの方も聞こえますね。はい、では自己紹介します。えー、わたくしサインと申します。

以後お見知りおきを。仕事は収容所運営委員長と魔王をやっております」

誰かが拳手した。

「ところでお嬢さん、最後の方がよく聞き取れなかったよ」

「あ、失礼しました。収容所運営委員長と魔王をやっております。本業は魔王です」

「……」

部屋中に魔術発動時特有の力の感覚が沸き起こった。

サインとかいう女が注意する。

「いちおう警告しておきますけど、本収容所では民間人がみだりに魔術を使うことは禁止されていますから。そこ、攻撃魔法は厳禁です」

サインが指差す先にいる、いかつい魔術師が表情を歪めた。

「こんな狭い空間で火炎系魔術を放つたらみんな焼け死にますよ。でも」

芝居がかった動きで両手を広げてサインは続けた。

「どうしても試したければ仕方ありませんが、わたしのシールドは破れませんよ」

ヒュツという音と同時に、サインのまわりに淡い赤の結界が形成された。

防御魔術発動時のテルミヌスをブートする気配はぜんぜん感じられなかった。

「またメガマウスの肉にかぶりつきたいならどうぞ」

サインの自信に満ちた態度。

部屋に満ちた力の感覚が薄れてゆく。

「どうもありがとう。さて、ここからは本業の魔王としてあなた達に語ることにする」

サインの口調は歯切れ良く断固としたもの変わった。

「あなた達に、これから歴史の真実を教えます。すぐには納得できないかもしれないけど、それでも信じてもらわなければならぬ。学ぶことはたくさんあるから、何日か魔王城に缶詰になる。そう覚悟していてちょうだい」

「魔王城だと」

驚愕の声があがった。それもそうだろう。魔王城といえば、誰もが子供の頃から恐ろしげな絵本の挿絵でみてきた、地獄の底のような場所のはずだ。

「そこで俺たちを食うんだろう！」

「食われるだけじゃない。きっと化け物にされてしまう」

ざわつく亡命者たち。

「俺はそんなところには行かないぞ！」

サインはきれいに整えられた眉の片方を意味ありげに上げてみせた。

「あらそう？ でも残念ね。ここはもう魔王城だもの」

「はあ？」

「ここはテクサカを中心、魔王城”サジタリウス”の内部なのよ」

壁がかみついてくると恐れているかのように、亡命者たちは恐々と周囲に視線を振っている。

「恒星船サジタリウスによっこそ」

コウセイセン。その聞きなれない単語の意味はエリアスたちにはわからなかったが、自分たちがモンスターの胃袋の中にあるようなものだということは悟ったのだった。

6 - 4 バードガースの地獄（前書き）

帝国内にて一斉に反乱が勃発。

どうやらテクサカがウラで糸を引いているらしい。

刻々と迫るテクサカと、身中の敵に挟まれた帝国に勝利の道はあるのか？

6-4 バードガースの地獄

テクサカ軍は補給物資の蓄積が戦時消費量7日分に達するのを待ち、モンスターの再傀儡化を実行した。

食料がそれしかないのなら、7日目以後はどうするのか？

敵地に糧を求めるしかない。

このように現地徴用に頼る補給計画は、夏季だからこそとれる戦略だった。

オムニ帝国各地で初夏に収穫される小麦を当てにしているわけだ。

このような現地徴用は鉄道発明以前の戦争ではごく当然のものであり、テクサカを批判することはできない。実際のところ、地球の第二次世界大戦においても自前で十分な補給ができた国は一部の先進国だけであった（厳密に言えばアメリカだけでもいえる）。

一方の帝国はどのような状況だったのか。

テクサカ軍が西部辺境を占領下におけば、商業都市クワナヤスリミアも敵の直接的な脅威にさらされる。

この危機感が帝国にはびこる非効率の弊害をいくらか剥がし、多くの商家がドゥーガル皇帝の示した戦争税に理解を示してくれた。

まあ、もつとも戦争を望んで火中の栗を拾うよう企んだのは帝国の豪商たちなのだから、相応の代償を支払う義務があるだろう。

帝国行政府がなかば商人を脅すように、30年建て利付き長期債権の放棄と新たな短期債の発行を強行、更には帝国等族議会が議決に基づき臨時教会税、戦時統制に伴う穀物取引税の復活など、100以上の要求をつきつけたのだった。

商人特有の損得勘定からすれば、既に投じた資金を回収するためにも帝国のこれ以上の敗北は望んでいなかった。

多額の金を帝国に貸し付けているフォートハート家などはなおさら帝国の崩壊を望まない。

破綻を回避するための追加投資。商人ならば苦々しげにそう表現するだろう状況だった。

盛夏の頃、約70万の兵力で帝国領に侵入したテクサカ軍に対峙する帝国軍歩兵連隊は、書類上は新旧織り交ぜた271個連隊（ほとんどは農機具を武器代わりにした民兵レベルの連隊）を数えたが、実質的には70個連隊程度しか実戦に投入できない状況だった。

テクサカに劣る戦力で敵に正面から野戦を挑むのは無理がある。

密集して進撃するテクサカ軍からはぐれたモンスターを襲撃したり、補給路を断つなどの作戦が立案された。

しかし、それらの作戦に着手することはなかった。なぜなら、帝国東部辺境アムール領を中心にする反乱軍が帝国各地に起ったからだ。

帝国東部 - アムール・フアンガレイ・シントロン
帝国南部 - ライオネル・カハール
帝国北部 - バードガース

他にも5領が蜂起を計画していたようだが、計画に齟齬を来たし未遂に終わった。だが、蜂起に成功した6領だけでも由々しき問題だった。

特に、辺境領東部タイル軍第1軍の集結拠点であったアムール領の造反は、6000名余りの歩兵がアムール領の支配下に落ちたことを意味していた。

各地の帝国軍が反乱軍に戦力を割かれたそのとき、テクサカ軍は帝国西部国境を食い破った。帝国は内乱と外敵の二つの敵を相手にせざるを得なくなった。

辺境領北部のバードガースは小領主だった。

周辺領と合同でやっと1個連隊を拠出できる程度の規模しかない。

ここは今や帝国領に浮かぶ反乱軍の小島のような状態ではあったが、それは帝国北部に刺さった棘のようなもの。

なぜなら、1000人足らずの兵と市民が立て籠もるバードガース城下の包囲に帝国軍4000名が拘束されるからだ。

その数は、北部辺境領が拠出する帝国軍歩兵の1割以上に相当する数だ。

包囲する帝国軍が反乱軍の規模より薄ければ、反乱軍は城壁の外に展開し、野戦で帝国軍歩兵連隊を撃破するだろう。

そうなれば、反乱軍は北部边境領を荒らし放題にできる。

反乱軍に籠城を決意させるには、帝国軍は4倍の数を用意するしかなかったのだ。

また、一般に攻城戦は防御側の3倍以上の攻撃側兵力が必要といわれているが、帝国軍に攻城を成功させる力はない。

なぜなら、バードガース領は先の侵攻作戦アニバーサリーにおいて魔術師のかなりの部分を温存していたからだ。

帝国軍は4倍の数的有優位にあるが、魔術戦力補正を加えれば実質的な戦力差はそれほどないものと考えてよい。

北部タイル司令部の作戦立案に当たる職業軍人は頭を抱えていた。

バードガース領包囲に4000、さらに北部边境領に残置する治安部隊が最低でも3000。これだけで北部边境領が動員できる兵数の2割が食いつぶされているのだ。

東部・南部边境領がほとんど兵を拠出できる状況にないことを考えれば、実質的に帝国中央と北部だけが対テクサカ防衛戦に兵を拠出するという極めて心細い状況だった。

ただでさえテクサカ軍の圧迫により右往左往していた帝国軍連隊はさらに右往左往するはめになったわけだ。

西部国境では兵力を小出しにしては敗北し、徴兵をいくら厳しく実施しても十分な兵力の蓄積ができないうちに優勢な敵に再び挑まれ敗北、という負のスパイラルに落ちようとしていた。

帝国はこのまま滅び去ってしまうのか？ 極めてフェータルなこの局面で転機となったのが、帝国辺境領北部の安定化であった。

北部においては反乱の火の手は小さく、他の地域に比べれば反乱軍征討は容易であっただろう。その尖兵となったのが、北部辺境領屈指の大領主、ヒレンブランド歩兵連隊であった。

だが、彼らはどうやって城に籠る反乱軍を短時間で撃破できたのだろうか？

バードガース反乱軍は帝国軍を撃退し続けていた。

魔術師もろくにいない帝国軍歩兵連隊に対し、バードガース側には15人に1人の割合で魔術師がいる。

いかに数的に4倍の歩兵連隊といえど、バードガースの優位は歴然としていた。

8月半ば。暑い日が続いているために伝染病の発生は危惧していたが、バードガース領主は過去半月の戦いで帝国軍4000を相手によく防戦していた。

近寄る帝国軍歩兵は城壁に手を触れる前にモノプティックかサン

ダーで撃退できた。

逆に帝国軍が遠方から及び腰の魔法攻撃を仕掛けてきたこともあったが、いかんせん魔術師の絶対数が足りず城壁を破壊することはできなかった。

- - -あるバードガース監視兵の個人的戦闘記録 - - -

8月14日。

敵連隊が後退した。当監視所からは視認できない。

8月17日。

南方街道沿いのキマン教会の鐘楼から、オーレオールによる夜間照射を受ける。敵襲なし。

8月18日。

敵の監視塔のようなものが西方のズニー丘陵に建設されているのを発見。城壁から1トエル余り。木立で偽装され発見が遅れる。

この監視塔からサnderの射撃音を確認、詳細確認の要ありと認む。

8月20日。

本日もサnder射撃音がかすかに聞こえる。

我が魔法攻撃中隊はモノプティック攻撃数度で引き揚げる。実害がないから仕方ないのか。

敵のサnder射撃音はしばらくして復活。

8月24日。

気分が悪いと訴える兵が4人。監視位置間隔を再検討する。

8月27日。

城内の市民にも倒れる者が増える。体に赤い斑点が現れている者多数。部下の手首、顔にも赤い斑点が現れる。アーマーで覆われている部分には斑点が少ない。とても奇妙。

8月29日。

何かがおかしい。体に水泡ができる者多数。私も唇に潰瘍ができる。部下の半数は立ち上がることもできない。魔術師の多くも同様。いま敵が攻めてきたら、有効な魔法攻撃ができるか疑問。

8月31日。

城主様のお姿を見た。私よりはましたが、赤い斑点が顔に散らばっていた。治癒魔法も効かない疫病なのだろうか。メトセラ処置を受けている魔術師も多くが床に臥せている。

何が起きているのだろう。

遠雷のようなサンダー射撃音が聞こえる。いつも、いつも、聞こえる。何か不吉な感じがする音だ。

どうもこのところ一つのこと意識を集中できない。文字を書くのも一苦労だ。明日はペンを持てるだろうか。

個人的戦闘記録はここで終わっている。

ヒレンブランド歩兵連隊の1200人が槍を手に突撃する。

彼らが攻めるのは高い木の城壁が巡らされたバードガース城。小さな市街を囲う城壁は、守る範囲が小さいが故に極めて頑丈に作られている。

歩兵の一隊が城壁にタッチしたが、以前はあれほど激しく防戦したバードガース兵の姿は見えない。やがて、工兵が巨大な破城槌で城門を叩く音がかすかに響いた。

いま、ヒレンブランド連隊を中心とする北部タイル軍は勝利を手にしようとしていた。

バードガース城下を一望にできる小高い丘。

その頂上に設置された”放射砲”の傍らでは黒髪の男が解体工事の指揮をしている。

彼はオムニ氏族連合帝国辺境領北部タイル防衛軍ヒレンブランド連隊本部付武器掛少尉ニシミヤ・ヨウ。現在はヒレンブランド歩兵連隊本部付臨時中尉でもある。

「中尉、ここにいたのか。攻城戦を見てなくていいのか」

ヨウは汗を拭い、まだ20代の若い大尉に笑みを浮かべた。敬礼のような定式化した表敬方法は存在しない。

「ベルモント大尉、ご足労ありがとうございます。しかし私には攻城戦は専門外ですし、将校の邪魔をしないようにひっこんでいます」

「ああ、そういえば中尉は7月の攻城戦からこっち、ぜんぜん観戦していないな。気遣いは無用なのに」

「お気遣いありがとうございます」

本当のところ、ヨウは作戦の途中で気分が悪くなり、みっともなく倒れる寸前だったのだ。自分のやろうとしていることの恐ろしさ、じわじわとヨウをさいなんでいたがゆえに。

そんな醜態を兵の前で見せることは最低の行為だと、親切な同僚が教えてくれた。なかなかどうして、身分制社会の将校にもいいやつがいた。

ヨウは何も考えずに済むように、一日中休むことなく働いていた。

働くことで、広島や長崎のことを考えずにいられた。わずか18歳にして、ヨウは”後悔先に立たず”という言葉が身の隅々まで行き渡る気分だった。

「バードガース攻略の手柄は中尉の貢献に帰せられよう。臨時中尉から中尉に昇進は間違いないぞ」

そう笑つベルモント大尉が、何気なく”放射砲”の小屋に近づいた。

「大尉、柵を超えてはいけません！」

慌てて制止する。

小屋を囲むように定間隔で地面に刺さる槍、その内側には限られた者以外は入ることを禁じていた。

小屋は、内部から目に映らない毒が外に漏れるのを防ぐために中古の方盾で隙間なく覆われている。今では、それらの方盾も毒を帯

びているから廃棄しなくてはならない。

「大尉も”毒”に侵されてしまいました」

大尉は飛びのくようにあとじさる。

「そうなのか。中尉、君も危ないんじゃないのか」

「注意しています。それにごく短時間なら問題ないですよ」

”放射砲”の小屋の内部では、危険を冒して職人たちがターゲットを電導線から切り離している。

小屋に付属した冷却水配管を切断するのは次の工程になるが、放射線に曝される時間を最小化するために、今は小屋の近くで待機していた。

小屋の中にあるのは数百キログラムの純金の塊、そしてサンダーの電気を外に逃がすための極太の銅線の束。銅線の先端は丘のふもとを流れる小川に浸してあった。

「にしても、あのからくりは何だったんだ」

「放射砲ですよ」

「違う、どういう仕組みなんだ」

ヨウは失礼にならないように説明できない、と思った。地球の少なくとも中学レベルの教育がなければ理解することは難しいに違いない。

「神の見えざる手、ではいけませんか？ 私にも充分に説明することができないのです」

心底残念そうに語るヨウ。

この”放射砲”は、地球では19世紀末に発見された”X線”を利用した兵器だ。

80年代のスターウォーズ計画では潰えた未来兵器。フィデス母艦のX線レーザー砲と同じようなものといえる。地球人類には実用化できていないハイテク兵器だ。

それが、このファンタジー世界では”サンダー”のような攻撃魔法があるおかげでごく簡単に実現してしまった。地球だったら、巨大な電子加速器が必要だっただろう。

サンダーを斜めに切断した金塊にブチ当て、強烈なX線ビームを生み出す。

このアイデアの元になったのは、ヨウが高校1年の頃のある会話クラスメートだったあるミリタリーオタクと仲が良かったおかげだった。

2007年11月の昼下がりに。

東京都立川市にある都立高校1年3組。

「雷ってX線が出てるらしい。ってことはさ、雷が鳴ってるとき

俺たち被爆してんじゃねえか？」

唐突なのはこの友人の悪い癖だった。

もつとも、この悪癖にヨウはとっくに慣れていた。

「雷の電位差って、たしか数ギガ電子ボルトだったよな。でも、空気分子みたいな軽い元素からX線なんか発生すんのか」

友人いわく。

「窒素原子の電子軌道の最外殻はL殻だろ。特性X線が発生してもおかしくない。それに原子核の質量が小さくても連続X線は発生するだろ。ああ、制動放射かわいいよ制動放射」

最後のほうの意味不明だが、とりあえず言いたいことは理解した。物理は得意分野だから友人には負けたくなかった。

「なるほど。でも大気による減衰があるだろう。強度 I_0 の線源から出た線の距離 x での強度 I は、 $I = I_0 e^{-\mu x}$ になる。つまり距離に対して指数的に減衰するはずだ。地表まで仮に2kmあるとすれば、地表でのX線照射密度は……」

そんな会話をする変わり者だったけど、ヨウも友人も楽しんでそんなキャラクターを演じていた。

そうやって訓練していた成果がついに表にでるときが、信じがたいことになってしまったのだ。

あの日以来、ヨウの支援者となっていた領主フレート・ヒレンプランドとの会話の中で、攻撃魔法サンダーの話になった。

その夜、ヨウはサンダーが切り裂いた空気分子からX線が出ているのか疑問が湧いた。

かつて高校時代に友人との会話を思い出してのこと。完全に変人の考えではあるが、これが兵器に使えるのではないかと思ったのだ。

空気中での絶縁破壊は一般的に30kV/cm。ということは、60mの飛距離があるサンダーの電位差は180MeVになるだろう。

つまり、そこから生まれる電子は電子加速器並みの180メガ電子ボルトということになる。まさしくミニ雷だ。

こんな高エネルギーの電子を魔法が作り出していることは驚異だが、とりあえず魔法の原理はおいておくしかない。現実に応用できるならば、原理などこの際どうでもよかった。

原子番号も大きい金をターゲットにすれば、サンダーによって強烈なX線を効率よく生み出してくれるはず。熱伝導性が高いから、排熱も容易なはずだった。

ヨウの依頼により、領主がみつけてきたのが、とある教会に飾られていた”フェニックス黄金胸像”だった。

悪趣味の極みといえるそれは、台座に接する部分が平らになっていて、ターゲットとしておあつらえ向き。

こうして、かつて有志によってつくられたが、アンバーサリー作戦のみじめな失敗と共にその魅力を失った黄金の胸像がバードガース討伐戦の切り札となったのだ。

胸像は中がくり抜かれて冷却水の配管が接続された。

ターゲットからのX線放射角を40°として、X線ビームが城壁の上からバードガース兵（と市民）の頭上に降り注ぐように設置され、周りに雨風を防ぐほったて小屋が建設された。

もちろん、放射面に正対する方向に壁は作られていない。小屋からはバードガース城がよく見えた。

そして、ターゲットの至近からローテーションでサンダーを放つ魔術師を放射線から守るために、厚さ10cmもの鉛板で遮蔽板を設置した。

8月17日夜、バードガース城に近い寺院から強烈なオーレオールを照射して城兵の目を眩ませているスキに、突貫工事で建設した”放射砲”の試射を実施した。

魔術師がフェニックスの胸像にサンダーを放った瞬間、バードガース城の方向に小屋から、ぼんやりとした蛍光が夜空に伸びた。

フェニックスの胸像から、凶悪な怨念のごとく放たれたX線によって、イオン化した空気が発光しているのだ。

このかすかな軌跡を利用して照射角度を修正、後方散乱線も考慮に入れた立ち入り禁止区域を設定。翌日からは休みなくサンダーが放たれることになった。

狡猾なある将校の発案で”放射砲”と同じ外見の小屋がダミーとして建設され、城からの遠距離魔法攻撃に備えた。

もつとも、数百エルも離れてモノプティックを任意の目標に命中させるのは至難の業なのだが。

何も知らないバードガス兵に推定4〜8グレイの重度被爆線量を浴びせるのに約2週間。これは半数致死量LD50に近い線量だ。

いくら迅速な勝利のため、そして帝国存続のためとはいえ、バードガス城下の数千の人々の半数をゆつくりとした苦痛の多い死に至らしめることになったのは許されるのか。

誰もがヨウを賞賛するなか、ただ一人ヨウだけが、自分の非情な行いに恐怖していた。

バードガスの人々を襲う死神は時間差で訪れるだろう。体中の穴という穴から血を垂れ流し、瞳は白濁し、髪は抜け落ちる。

そして、若い兵士もつら若き少女も等しく、体の奥深くをえぐった傷によって子を成すことは永久にできないだろう。

最悪のタイミングで被爆した妊婦のことなど考えたくもなかった。

ヨウは確かに北部辺境の反乱平定に活躍した。中尉にも昇進するだろう。それでも、自分がした行為に恐れおののいていた。

流れる汗もそのままに働くヨウ。

ズニー丘から望むバードガース城の内部では、どんな地獄絵図が展開されているのか。考えたくはないが、それでも考えてしまう。これは人間である以上、仕方のないことだ。

この兵器は神の見えざる手なんてものじゃない。これは、いや、俺は悪魔の見えざる手なんだ。

そして、ふと思い出した。

このファンタジー世界では、“悪魔”とは魔王とその手下を指す言葉であるということを。

古今軍隊における階級・指揮システムが似通っているのは、軍隊というものが人間本来の生きたい、楽をしたいという欲求を押さえつけ、かなりの確率で死が待ち受ける戦場に向かい進軍させるといふ困難極まりない事業に立ち向かわせる必要性から普遍的に導かれる一種の形式があるからだ。

軍隊においては、兵士は敵よりも鬼のような上官を恐れ、血をわけた兄弟よりも濃い絆で戦友を結びつける。

そのような人間本来の心理的本質が、軍隊の本質的に変わらない階級・指揮システム上の特徴を形作る。

時代ごとの技術レベルや軍隊が拠って立つ社会基盤、思想宗教、さらには時代の要請といった無形の大きなうねりにも左右されるが、軍隊における人間の心理はあまり変わっていないのだ。

そのような事情は、ほんの数ヶ月だけ軍隊にいたことがあるだけで戦場に立った経験がないヨウにはわからないことだったが、この世界においてヨウに求められているものの性質からして、そのような兵士の心理がわかる必要はないのだった。

もっと言えば、ヨウには古代から連綿と継承される軍隊の伝統を学ぶ時間など一切なかった。

ヨウは、北部タイルの安定化の功労者として（というよりは、軍

の損耗が余りにも激しく、同時に拡張も急激なために）ヒレンブランド歩兵連隊の武器掛り中尉を拝命していた。

彼が久しぶりにヒレンブランド城に戻ると、さっそく領主フレート・ヒレンブランドからのお呼びがかかった。

戦功のお褒めの言葉もそこそこに、領主は本題に移った。

「バードガースを始末する前に加工を命じた“黒色火薬”の試作品ができています」

顔をほころばせ、「貴重な人員を割いてまで、私が手がけた作業の後を引きついで頂き、ありがとうございます」などとおべんちゃらを言おうとした矢先、領主はそれを遮った。

「礼ならよい。それより帝国西部の焦土作戦については作戦会議で聞いただろう。皇帝陛下は刈り入れが間に合わない小麦畑を焼き捨てた。教会領のものも含めて広大な面積をだ」

この話は何度もヨウも聞いていた。幸い北部諸領は寒冷なために小麦の刈り入れ時期が帝国内で最も遅く、全ての小麦を収穫することができた。

だが西部はそれほど幸運ではなく、魔王軍に収奪された分を含めて収穫は全滅だろうという話だった。

「皇帝陛下は大規模な土地改革と増税を計画しておいでなのようだ。なに、民が今以上に困ることなどない。搾り取るうとしていいる対象は、専ら既存の既得権益者のようだからな」

まるで自分がその“既得権益者”ではないかのように、他人事の口調だった。領主は片頬をひきつらせるようにして嫌な笑い声をあげた。

「この国難に際して、何十年もできなかった改革を全部済ませる気らしい。学生のような顔をして大したものだよ、皇帝陛下は」

その後の説明は割愛するが、ドゥーガル皇帝が考える改革はザックリとこういうものらしい。

- ・ 臨時軍事費として、直接耕作する目的以外の収益用土地、退蔵正貨、債権に財産税55%を課す。
- ・ 教会領は上記に加え、登録教区人口10名毎に1000セツルの人頭税を課す。
- ・ 無産市民に公有地を提供し、代償として2年間の労役を課す。
- ・ 全ての都市居住者に戦時防衛税を課す。

ポイントは の部分だ。

「あの坊や、やってのけた。念願の改革をやったわけだよ。ニシミヤ中尉、わかるか」

これほど興奮した領主を目にするのははじめてだった。

公有地を貧民にあてがって、代わりに軍役を課すというやり口は、昔から多くの国や地域でみられた方法論なのだろう。でも、その効果は折り紙つきに思えた。

これまでトラクトの原料になるか小作人で一生を終えたはずの帝国民が、自分の土地を耕して生きてゆけるのだから。

魔術師も激滅し、混乱した今の状況だからこそできることなのかもしれなかった。

「これで大量の歩兵を動員できますね。この歩兵に火器をあてがえば……」

濁した語尾は共犯者の笑みを誘った。

領主もうれしそうにしている。

「そういうことだ。先の大動員でも集め切れなかったほどの歩兵が湧き出すぞ」

その数は数十万人にもなるだろう。

しばし沈黙したのち、領主はこう切り出した。

「ところで本題だ。ニシミヤ中尉はスリミアを訪れたことはあるかな。実はスリミアで一仕事してきてもらいたい」

「は、はあ」

領主は手元に置いた木箱の蓋を取り去り、嚴重に収められた黒光りする物体を手を取った。

パイプというには余りにも肉厚の鉄の棒を、これまた鉄のバンドで強引に束ねたような無骨な物体。極めて原始的なものではあった

が、それは明らかに連発式の火器だった。

「もう出来ていたんですか。すごい」

領主はほとんど表情を変えずに、別の箱を開けた。

「量産タイプは、こっちの単発式だ」

何度も領主と会っているヨウには、自前で造った武器に領主が誇りを抱いているのが察せられた。

本来はあまりしてはいけなかったのかもしいないが、ヨウは無遠慮に立ち上がると、領主の手から“銃”を受け取った。

地球では16世紀レベルの、原始的なマスケット銃。

とても、大きい。

そして重い。

重い方が良いのだ。強度と加工精度の問題から、このファンタジー世界においての銃は必然的に大口径にならざるを得ない。そして、重い銃弾を十分な初速で飛ばすためには、銃本体も重い必要があるのだ。

なぜなら、仮に軽く造れば発射時に銃身が破裂する危険性があるし、更に言えば銃弾発射時の反動は射撃する兵の手に負えないほど強烈なものになるからだ。

「中尉がない間に試射を済ませておいた。いや、実に見物だった」

「銃身の強度が心配だったので成功しましたが。素晴らしい。あとは肉厚をどこまで減らせるか再設計の基礎データが必要です。明日からでも実験をしたいと思います」

領主はまあまあ、とでもいうように掌を振る。

「それは武器掛の優秀な将校に任せておきなさい。それより重要な任務がある。ニシミヤ中尉、君にはスリミアでドゥーガル皇帝に面会して欲しい。この銃の試作品と火薬製造仕様書を献上にしいこう」

皇帝？ 面会？

「え、俺が？」

「そう、君が。私と一緒に来るのだ。皇帝陛下も君に興味があるそうだ」

「ええと、それは光栄？ です。はい」

混乱の余り、ついつい語尾が疑問形になってしまつのを抑えることは、ヨウには到底できなかった。20世紀末の日本に生まれて、“皇帝陛下”に謁見できる人間がどれだけいるだろう？

このままでは、数奇な運命と書いてヨウと読むようになるのではないかと、彼は思った。

そういえば日本国の天皇は対外的にはエンペラーだったような気がするから、皇帝に会うのは意外と難しくはないのかもしれないが。

そんなことはどうでもいい。気を引き締めて領主の言葉に意識を集中させた。

「これからの仕事は、この小邦でやるにはちと荷が重い。そこで、皇帝陛下に中尉を預けることにした。国の力ネで存分に暴れてくるがいい」

領主は笑って言った。

自分がバードガースで成した怖気をふるうような業績は、ヨウの名声を高めてはくれた。荒削りな科学がファンタジー世界にとっては強烈な刃となることも十分にわかった。

だが、刃のもたらす影響の全てを見通すことは、神ならぬヨウが到底知りえないことであった。

かつて単身で訪れた……というか通過したときには、とても遠くに感じられたスリミア。

今回はターパンを乗り継いでの移動だったからか、そこはとても近く感じられた。

6 - 6 ベッセマー法

地平線を這うゆらめきは、塵気楼によるものではなかった。

それは、テクサカの無数の軍勢が生み出す土ぼこり。それに加え、もしかしたら勝利への強烈な決意が、ゆらめきとなって立ち上っていたのかもしれない。

テクサカ軍がスリミアに迫るに従い、恐れおののいた避難民が大量にスリミアに流入し、市内の人口は大幅に増大していた。

幸いにして夏の暑さは過ぎ去りつつあり、人口の過度の集中による疫病の蔓延は抑制できそうだったが、食料の不足はどうしようもなかった。

東部アムール領では反乱軍が頑強に戦い続け、帝国国内の物流に悪影響を与えていた。

ヨウの発案した“放射砲”は、帝国の商都クワナの防衛戦に投げられた際に最初は効果を上げたが、ある日……魔王の使い竜が闇夜に急襲して放射砲は粉々に破壊されたという。ヨウがそのことを知ったのはかなり後になってからだった。

ヨウは、その事実に含まれた重大な含意を見逃すほどに忙しく働いていた。

帝国中からかき集めた銅像が溶かされ、銅線の代用品として無線機製造に向けられた。時には銀の食器が使われた例まであった。

ヒレンブランド工廠で着手した製鉄法の改良についても進展があった。

鉄の製造についてはじっくり腰をおちつけて技術開発するのが本来の姿だったのだろうが、とりあえずこの世界では一般的な、鉄鉱石と木炭を混ぜて加熱するだけの原始的な製鉄法からは早急にオサラバする必要があった。

帝国産の炭素分が多い鉄鉱石は、各地の製鉄所の木炭炉で加熱される。

木炭炉は加熱されたまま密閉状態にされ、木炭から一酸化炭素が発生する。この一酸化炭素と酸化鉄中の酸素が結合して、鉄鉱石は還元されるのだった。

この過程で木炭炉の温度を更に上げれば、半熔融状態の鉄ではなく、地球における高炉のように熔融状態の鉄を作ることも可能だった。

だが、熔融状態になった鉄は炭素をよく吸収するため、木炭炉の炭素を吸収してすぐに炭素分の多い鑄鉄（銑鉄）になってしまう。

いちど鑄鉄になってしまうと、それを鎚で叩きながら脱炭するのは多くの工数が必要な作業になった。だから、鉄を完全に熔融させてしまうことは、地球でも中世までは嫌われてきたのだ。

地球では19世紀にベッセマー法が開発されたことで、高炉で生産された鑄鉄を簡単に鋼に変えられるようになった。これは非常に重大な製鉄技術の飛躍だった。

ふいごでベッセマー転炉に空気を送りこむことで、鑄鉄中の炭素を二酸化炭素に酸化し、同時に酸化熱で溶融状態を保つ。

この製法によって、鋼鉄の値段は従来の六分の一まで下がったのだ。

この製法が誕生するまでに地球では何世紀もの時間が必要だったわけだけど、ヨウはそんなに時間をかける気はさらさらなかった。

ドゥーガル皇帝が帝国造兵廠の改良をヨウに命じたのは、今すぐに大量の鋼鉄が必要だったからだ。

実際のところ、地球にあったようなベッセマー転炉を製造する時間も技術もない。だが、人海戦術でベッセマー転炉と同じ原理を用いた製鉄設備を造るのはそう難しくはなかった。

従来型の木炭炉は、簡単に高温化してミニ高炉にすることができた。造兵廠の製鉄技術者……というか鍛冶職人が最も気をつかっていたのは、もともと木炭炉の温度が上がり過ぎないようにすることだったのだから、簡単なことだった。

出来上がった銑鉄は、蒸気機関を用いた送風機ではなく、代わりに何十人もの人足がふいごを踏むことで作動するミニベッセマー転炉で鋼鉄に変えられた。

溶けた状態の鋼鉄を大量生産する。この19世紀レベルの技術をモノにするのにわずか2ヶ月で成功したことは、ヨウにとっても驚くべきことだった。

溶けた鋼鉄があれば、型に流し込むことで思い通りに大口径の大

砲を鑄造することもできる。マスケット銃を鑄造で作ることも可能かもしれない。

新しい製鉄法は“ニシミヤ法”として、帝国各地の鉄加工業者に無料でライセンスが提供された。

この新しい技術の吸収にあたっては、帝国西部に点在していた帝国都市同盟の鉄ギルドの職人が、戦火に追われて大勢スリミア周辺に流入していたことが幸いした。

彼ら腕利きの職人たちはヨウが説明する鉄の秘密を吸収し、ヨウが期待した通りに、次々と新しい実用的な製造技術を生み出していた。

ヨウが彼らに耳打ちしたのは、ごく基本的な鉄の秘密……即ち、鉄に炭素を浸み込ませれば鋼となり、鋼から炭素を奪えば鉄になるという事実だった。

そして、鍛造とは鑄鉄や錬鉄の表面を加工して、炭素の含有率や結晶構造を変えること。

言葉にすればほんの数行の知識を得るまでに、地球では十世紀ものかかりがかったのだ。

帝国の首都までテクサカが押し寄せてくるなど、この百年なかったことなのだから仕方ないのかもしれないが、避難民たちは落ち着きなく周りを気にしている。

彼らの不安が伝染したのか、元々のスリミア市民もどこか浮き足立って見えた。

避難民が町に流入したために、皇帝は数度にわたって一般市民に空いている部屋の供出を命令していた。

当然、どこの馬の骨とも知れない薄汚れた避難民が家に上がることを快く思う市民などいない。元々のスリミア市民の不満は相当なものだった。

避難民たちは、食料配給クーポンと引き換えに塹壕や仮設トイレの建設に動員された。

また、健康な若い男女は根こそぎ歩兵連隊に編入された。

今やスリミアは雑多な歩兵が150個連隊（約20万人）たむろする軍事都市に変貌した。

10月。

帝都スリミアだけを目指して槍のように突進してきたテクサカ軍はスリミアの外郭要塞を包囲するに至っていた。

スリミアという都市は、大きな川の屈曲部に建設されている。東側を川、西側を強固な街壁で守られており、ここに都市の基礎が置かれた年代は記録に残るよりも遙かに過去に遡る。

つまり、いつから人が住んでいるのかは歴史の闇の中ということ

だ。

この古い都市が陥ちれば、帝国の命運は決まったも同然だ。同心円状に広がったオム二帝国の、交通と経済の結節点であり、政治と宗教の中心地なのだから。

外郭要塞から等間隔で聳える監視塔には、射程2トエルの改良型放射砲が設置されている。そのため、監視塔の上部には冷却水を蓄えた木樽と放熱用の銅管が絡み合うように増設されていた。

街壁の内側には、石造りの壁から十分な距離を置いて仰角が固定された大口径の臼砲、そのプロトタイプが数門設置されている。

西側を向いたその巨大な砲は、ニシミヤ法で鑄造された最初の大砲であった。

もちろん、従来型の攻城砲　カタパルトも多数設置されている。

こちらは貴重な黒色火薬ではなく人間の筋力だけが動力源だから、玉切れの心配はない。一門につき100人がロープを引くことで、10kgの砲弾を150エル程度飛ばすことが可能だ。

街壁の上には、魔術師が攻撃魔法を詠唱している間に敵の攻撃から身を守るように、十分な空間と等間隔に置かれた切り石が配置されている。

今や城壁の上には、量産がはじまったマスケット銃を構えた歩兵……銃兵が待機していた。

川に面した船着場には、河川ネットワークを通じて続々と歩兵や

避難民、軍需物資が運び込まれている。

ドゥーガル皇帝が居城に使っている建物の尖塔には、木炭を用いた熱気球が結わえ付けられ、間近に迫ったテクサカ軍の航空偵察に出動しようとしている。もちろん、この熱気球もヨウの発案だった。

すぐ近くに聳えるオムニ教会の尖塔には、にかわで保護された空中線が渡され、まだ帝国の旗の下で戦う諸領からの火花通信を受信していた。

数々の新しい仕掛けの中には、あきらめなければならぬものもあった。

鉛 - 硫酸電池を直列でつなぎ、15ボルトの電圧を食塩水にけることで電気分解する。マイナス極から生成する水素で爆轟手榴弾を、プラス極から生成する塩素で毒ガス兵器が実現するはずだった。

しかし現実には甘くはなく、水素や塩素のような気体を大量に蓄える容器の製造に不具合が発生したのだ。

塩素の方はともかく、水素を閉じ込めておくのは容易じゃない。

試作していた地雷は燃焼速度が速い雷管の製造がどうしてもできず、諦めざるを得なかった。

ないにもかかも足りないファンタジー世界で何ができて何ができないのか。できないことなど多分ないだろう。十分な時間と資金さえあれば。だが、今は時間がどうしようもなく足りなかった。

ヨウ発案のホライズン作戦は皇帝によって直接裁可され、軍の将校が詳細を詰めて実行に移された。

ホライズン作戦の骨子はこのようになっている。

？放射砲でテクサカ軍を城壁から2トエル以上遠ざける。

？街壁に近づいたテクサカ軍を火器で攻撃する。魔法攻撃も併用。

？内郭防衛線で歩兵を投入。

作戦の成否は、ひとえに防御火力にかかっている。

テクサカ軍前衛と外郭要塞の間を隔てる2トエル。この空間でテクサカ軍を少しでも減らさねばならない。

一度テクサカ軍がスリミア攻略に着手したら、もう放射砲は無用の長物だ。わずかな時間では放射砲のX線ビームは敵を傷つけられないからだ。

秋の色も濃くなったその日、テクサカ軍陣地の奥深くで動きがあった。

決戦がはじまるのだ。

ドゥーガルが御前会議を開かなくなって久しい。近頃では、皇帝に親しく接するのは、ほぼ側近の数人に限られていた。

帝国行政府や等族議会からは度々面会の要請があったが、それらはほとんど謝絶されていた。

愚鈍の仮面は、非常時には邪魔過ぎるからだ。

やるべきことはうずたかく積みあがり、片時もドゥーガルの心が休まる時はなかった。

「今朝の戦時法に基づく簡易裁判の結果です。夜間外出禁止令違反の罪で処刑21人。買収溜めの罪で処刑8人。特別防衛税未納の罪で処刑4人。暴行や盗み等の重犯罪による処刑36人になります」

「……………」

ドゥーガルはサクス・ブランクの報告を全く聞いていないかのように、戦域地図をにらんだままだ。

もちろん、皇帝陛下が一言逃さず理解し、数字を吟味していることに、サクスが疑問を挟む余地はない。

「明日から処刑はなしだ」

唐突にドゥーガルが処刑の中断を命じた。

規律の維持のために、積極的に犯罪者を処刑するように命じたのはドゥーガルのはずだった。例えば空腹に耐えかねてコーン一個をくすねた少年でも、容赦なく縛り首にするようにと。

その効果か、膨大な避難民が押し寄せているにも関わらず、市内の治安は今のところ保たれていた。

サクスの躊躇を感じ取ったのだろう、ドゥーガルは地図から視線を話さずに説明した。

「明日からは街壁の外に放り出せ。射撃訓練の的くらいにはなる

だろう」

サクスは肩をすくめた。

「確かに、その方が縛り首よりみせしめになりますな……
そういえば、明日の裁判で都市同盟の豪商が特別防衛税未納が裁か
れるはずですが」

ドゥーガルは、今日のはじめてサク스에振り返った。

「クワナから逃げてきた商家だ。戦争を待ち望んでいた連中の一
人だよ」

「ははあ、なるほど。執念深いですね」

苦笑交じりにサクスが評価した。

「記憶力は良い方だからな。さて、今日はあの青年の新兵器をみ
せてもらっただったか」

「さようです。正午までの3時間を確保しています」

「そうか。よしもう出発するぞ。朝食は歩きながらで良い」

サクスがあからさまに嫌そうな表情をみせた。市内に張り巡らさ
れた汚泥でべたべたした地下トンネルは、ドゥーガルお気に入りの
移動路だ。

どういいうわけか、薄暗いトンネルにいるときの皇帝陛下は上機嫌
になる。

しかし、そこを移動しながら食事までもとなると、もはやサクスの常識の外にあるとしか言いようがない。

トンネルの天井といわず床といわず、びっしりはびこるカタツムリが、サクスの脳裏にフラッシュバックした。

「たまには輿で移動しては？」

「なぜだ。暗殺者に狙われるのは嫌だぞ」

「薄暗くて逃げ場がないトンネルの方がよほど危険だと思いますが……」

「いいではないか。議論している時間はないぞ」

そう言い放つと、ドゥーガルは常にない機敏さでテーブルの質素な鶏肉のコーン包みをひつつかみ、地下通路に続く階段へと走っていった。

6 - 7 スリミア攻囲戦

テクサカ軍の3人の上級ノードのうち、スリミアの外郭要塞線に最も近づいているのはアケチの中央軍だった。

彼がそこにいるのは、アケチ自身が強く望んだからだけではない。彼が、かつてこの街に住んだことがあるからだった。

テクサカ軍の主力は知性の限られたモンスターたちだったが、彼らはアクターボ 突然変異原から何百トエルも隔たったオム二帝国中心部では目に見えて弱りつつある。

魔王自身による傀儡化を施してもなお、モンスター種族の意気は上がらなかった。

それに、食料も不足していた。

既にどれだけ抑えこもうとしても、広く拡散したテクサカ軍占領地のあちこちでは、モンスターが人を食べたという報告が上がっていた。

決戦を急がねばならない。

この認識は、知性あるどのノードも感じていることだった。

その日、テクサカ軍60万のうち、アケチの中央軍33万が遮蔽物から飛び出し、スリミア外郭要塞に向かって突進した。

魔王支配下のモンスターたちは一瞬遅れて、人族・ドワーフ・エルフたちが続く。

こうした混成突撃は、バーサーカー状態のモンスター種族の突進に巻き込まれる可能性があるために、通常はとても危険とみなされていた。

だが、戦場にあっては特に気になるほどの危険度ではなかった。今日の食べ物もないのに、明日着る服を気にするようなものだ。

遠雷が散発的に響き、敵監視塔の放射砲が目に映らない毒を垂れしているとあつては、多少の危険など誰も気に留めないだろう。

放射砲の有効範囲の内側に滑り込むために、全テクサカ兵は必死に走っていた。

大柄なために、他の種族を置き去りに突出していたギガスが地面にめりこんで怒りの叫びをあげる。

ほぼ同時に、あちこちで落とし穴に落ちるギガス。

彼らがひっかかったトラップを迂回して、なお街壁に迫るテクサカ軍。

その雑多な集団は、灰色の奔流のように、かつては農地だった茶色の大地をふみつけてゆく。

と、低い地響きのような音響が戦場を駆け抜けた。

街壁の上に広がる青空に、小さな黒点が生まれた。その点は急速に大きく成長して、テクサカ兵が充満する地面に激突した。

土くれが飛び散り、それでも運動エネルギーを失わない弾丸は後続するテクサカ兵をなぎたおす。

街壁まであと1トエルほど。まだ攻撃魔法の射程ではないと油断していた。敵の新兵器だった。

次々と飛来する砲弾の着弾と同時に、土砂やかつては生き物だった破片が飛び散る。

砲弾はテクサカ兵が満ちた場所を狙って落下する。落とし穴によってテクサカ兵の進路が変わることを予測して、着弾点が計算されていた。

スリミア周辺は平坦な土地柄で、丘陵もほとんどない。

アケチがいる魔王軍本陣からは、突撃する自分たちの兵の状況がつかめなかった。

臆病なフェンリルはとくに逃げ散っているため、通信の方法はない。今は最前線で駆ける下級ノードたちが、独自の判断で健闘していることを祈るしかなかった。

一方スリミアの街では、さらに次のガジェットが動き出していた。

貴重な綿織物のきれっ端で作られた巨大な熱気球が、聳える塔の先端から解き放たれて西に向かって漂ってくる。

テクサカ兵は緊張した。空に浮く奇妙な球体が、彼らにとって友好的な存在であるはずがなかったからだ。

太陽を翳らせテクサカ兵の頭上に浮く気球は、地上に大きな影をつくった。

そして、気球のゴンドラに重し代わりに搭載された、大きな酒瓶に似た物体が地上にばら撒かれた。

地上に落ちた瓶の割れ目から緑色のガスが噴出する。塩素ガスだ。

猫の目のようなきれいな緑色。木々の緑とは異なる禍々しい色の塊はゆっくりと形を崩してゆく。

塩素ガスは空気より重い。なかなか風に吹き散らされず、地面を這うように、ガスは広がっていった。

ガスに犯され視力を失い、苦痛でパニックになったモンスター種族が手当たり次第に周りの友軍をぶん殴っている。

一方、毒ガス弾を投下して重しを失った気球は、留めようもなく空気が薄い領域目指してぐんぐん昇っていった。

街壁まで200エルまで接近したそのとき、おなじみの魔法攻撃がはじまった。

一人の魔術師が防御魔法を唱え、一人が攻撃魔法を準備する。テクサカへの亡命者から成る魔術師も、同様に攻撃魔法を構成した。

その間もテクサカ兵は街壁をひたすらに目指す。

そして、あと100エルに近づいたところで、轟音と共にマスケット銃が火を噴いた。

すぐに後方で待機していた第二列が、街壁の上から射撃を加える。

質の悪い黒色火薬が燃焼したことによる白煙が、高い街壁を覆い隠した。

射撃する銃兵の幾人かは、銃身が暴発したことで悲鳴をあげて転げまわった。加工技術に問題があるようだった。

テクサカ軍のドワーフが放つ弓矢が命中して倒れた銃兵は後ろに引きずられてゆき、彼の銃をすぐさま別の者が手に取った。銃一丁に対して5、6人の予備銃兵が待機しているのだ。

予備の銃兵たちは、陶磁器製の容器にアルコールと硫黄を詰め、布で栓をしただけの“テクサカ・カクテル”を街壁の向こうに投擲していた。

このお手軽な焼夷手投げ弾は、地上で割れてテクサカ兵を効率よく火達磨にする、何とも厄介な贈り物だった。

花火と食用油脂を組み合わせた消火困難な焼夷弾も、折をみては敵の集中した場所に投下された。

いまや、監視塔からもモノプティックと思われる攻撃魔法が火を噴いている。背後からは臼砲とカタパルトの砲弾が街壁を超えてテクサカ兵の頭上に降り注いでいた。

いつもなら洗濯物を干してある窓々は鎧戸を閉め、街路には数人の歩兵以外に誰もいない。

皇帝の居城近くだというのに、どこかうらぶれた路地の奥に、ヨウの作業場である、木造の古びた倉庫があった。

名目上は帝国造兵廠スリミア第二工廠という大層な名前がついているが、それはおそらく予算獲得上の必要性からなのだろう。

倉庫には、つい先ほどまで塩素ガスが詰まった危険な瓶が積んであったが、今それが確かにあったことを示すのは、地面に刻まれた円形のくぼみだけだった。

ヨウの目の前には、帝国の優秀な職人の手を借りて造った急造の電解ガス製造設備が天井近くまでそびえている。

異臭を放つ鉛電池や硫酸貯蔵設備、倉庫の片隅にある小さな鍛造炉、ガラス加工設備。ほとんど全て、あり合わせの材料で作り上げたものだった。

戦争はいよいよ首都スリミアにまで押し寄せてきた。

事ここに至り、ついに何もすることがないという状況におかれて、ヨウは落ち着かない気分をかみ締めていた。

ここ数ヶ月ではじめての手持ち無沙汰。長い間、剃る暇もなかったために無精ひげだらけのアゴは、機械油で汚れている。

いま、工廠の職人たちの大部分は市内の家族のもとへ帰っている。

一方、肩書き上は副工廠長であり、軍制上はなんと大尉であるヨウには、行くべき場所がどこにもなかった。

生真面目な職人たちや、国家防衛の念に燃える将校たちと親しくつきあう余裕もなかったから、誰かの家に誘われることもなかった。

ヨウはデスクの引き出しから、汚れたバックパックを引きずり出した。

木箱に腰かけて、日本から履いてきたブーツに視線を落とす。そしてポケットから携帯を取り出し、懐かしい世界の断片をディスプレイに呼び出した。

妹の千華。一昨年、高尾山で撮影した写真だった。

追憶にふけるうとするのを邪魔したいかのように、携帯がしつこくピーピーと警告音を発している。電池が切れかけているのだ。

パチンと携帯を閉じ、仕方なく遠く響く臼砲の射撃音に耳を傾ける。

定期的な射撃音は、聞きようによっては眠気を誘う単調さだ。どうやら、ヨウが伝授した黒色火薬は立派に仕事をしているらしい。

「ふんふんふんふんふんふんふん」

それは、うる覚えの交響曲第九のへたくそな鼻歌。

第四楽章部の特徴的なパートを繰り返し口ずさむ。

r Ja , wer auch nur eine Seele
s ein nent auf dem Erdenrund!
U nd w ers nie gekont , der steh
le we inend sich aus diese m Bun
d .

市内で防衛にあたる男女20万人。対するテクサカ軍は60万は下らない。

さて、どちらが勝つだろうか？

帝国軍には、ヨウが製造を手伝った数々の新兵器がある。一方のテクサカ軍は魔王本人が前線まで来ているらしい。皇帝陛下本人からの情報だから、おそらく間違いないのだろう。

ふと、ヨウの耳が聞きなれない音響を拾った。

それは、鉄や火薬が織り成す遠雷のような重低音　クラシックの落ち着いたアルトやテノールに似たそれではない。もっと、こっ、鋭く磨かれ、物質の限界を試すテクノロジーの、切れ味鋭い音響だった。

そう、例えるならプライベートジェットの甲高いエンジン音に似ていた。

しばし固まったあと、ヨウは顔を上げた。

倉庫に落ちた影によって、正面入り口に誰かが立っていることがわかったからだ。

視線を向けると、そこには見覚えのあるシルエットが入り口のドア枠に背中を預け立っていた。

シルエットは手を掲げた。

「よっ。有名人」

「はい？」

「はい？ じゃないだろ。もっと感動しなよ」

「あ、ああ、そうだな。ごほん、ワオ、驚いた！」

「30点」

「低いな、ずいぶん」

そこには、懐かしいアーマーをまとった傭兵がいた。

「やっぱり生きてたのか、カリカ」

「当たり前じゃない。で、ここには……………」

カリカの背後から、エリアスが現れた。

「ご無沙汰してます」

そう微笑むエリアスは少し痩せたようだった。

「よかった、二人ともやっぱり生きてたんだな。ぜんぜん死んだ予感がしなかったもんなあ。今までどこにいたんです？」

エリアスはその質問に表情を硬くした。

「あれ？　なんか変なこと言ったかな、俺」

「いいえ。正直に伝えないといけないわね」

もじもじするエリアスの代わりに、カリカが答えた。

「あたしらテクサカに亡命したの」

ヨウは疑わしげな目つきでカリカの表情を観察して、次いでエリアスの顔に視線を向けた。

「まさか、本当に？」

「ええ」

ヨウにはとても信じられなかった。あのいろんなものへの忠誠心の塊のようなエリアスと　まあ、さほど予想外でもないカリカが　帝国を裏切るなんて。

「で、お願いがあるわけ。あんたテクサカでも有名人なんだけど、あっちに亡命しない？」

ちよっとお茶しない？　とでも言うように親指で背後を指すカリ

カ。

チャラ過ぎだろ。

「断る。カリカも、エリアスまで、どうしたんだ一体。帝国が滅びてもいいというのか？」

エリアスは哀しげに首を振った。

「いいえ、いいえ、そんなことは。でも、帝国が存続する限り……いえ、正確にはスリミアの大神殿を自由にできない限り、私たちの世界は滅びてしまうのです」

「滅ぶって……」

ヨウが混乱していると、別の声が割り込んできた。

「もつと詳しい説明が聞きたいか？」

エリアスとカリカの背後の空間がゆらめいて、長身の女が現れた。

あからさまに悪者風の黒のボンテージ、同色のタイトスカート。用途不明のベルトにはトゲトゲが生えている。

「えっと、どこかでお会いしたような気が」

「ええ、会ってるわね」

毒々しくルージュを引いた唇が微笑みを形作った。

女は左手に巻いた腕時計のような装置を撫で、上を見上げる。

天井が高い倉庫の何も無い空間に、映像が現れていた。

そこには、誰かの視点から見た暗い路地が移っている。その視点は、歩いているかのように上下にゆれていた。

と、突然、ヨウが視界に飛び込んできた。髪の高さから察するに、数ヶ月前の映像のようだった。

「思い出した。あのときの」

「そう、あのときの美女がわたし。あのときは手に風穴あけてくれてありがとうね」

「いや、あれは」

言葉に詰まるヨウを無視して、美女は倉庫の中を見渡した。

異臭を放つバッテリーの群れを目にすると、ふんと鼻を鳴らした。

「あれは電解装置？　ずいぶんと苦勞してつくったみたいね」

ヨウは息を呑んだ。

装置の原理があっさりと解るなんて、このファンタジー世界の間では初めてだった。

「あんだ、一体なんなんだ」

気付けば、エリアスとカリカは跪いて頭を垂れていた。

女は計算された一拍の間を挟んで、こう答えた。

「わたしは並び立つ魔王、サインと呼ばれている」

「あんたが邪魔してくれなければ、今頃スリミアはテクサカの占領下だったでしょうね。まったく、このマッドサイエンティスト！」

マッドサイエンティスト……その響きにしばし陶然とするヨウに、サインは少々怯んだ。

「ちょっと、念のために警告しとくけどほめてないわよ。この世界の魔法をあんな風を利用するなんて、とんでもない悪い子だって言ってるのよ」

「あ、すいません」

「すいませんじゃない。まったく、最初に会った時点で始末しとくべきだった」

ヨウの背筋を冷たいものが走った。

その戦慄を察知したのか、サインは言葉を足した。

「ふん、今更殺したりしないわよ。その代わり、あんたには一緒に来てもらおうわよ。色々聞きたいこともあるし。特に“地球”についてね」

「どつやらヨウに拒否権は無いようだった。」

サインはエリアスに命令した。

「あんなたち、この坊やを竜に乗せて見張ってなさい。わたしは皇帝を始末してくるから」

そう言い残して、サインの姿は光の揺らめきと共に見えなくなつた。

ヨウはエリアスにたずねた。

「マジで皇帝を暗殺するんですか？」

エリアスは眉根を寄せ、苦しげな表情だ。

「そいつにあまり厳しい質問するなよ。あたしが答えてやるよ」

「どつちでもいい、説明してくれ」

「あんとと皇帝、どつちもテクサカにとって本当に危険な存在だと魔王様はみなしているんだろつよ。あんならのどちらかが居なければ、この戦争はとつくにテクサカの勝利に終わってただらつからな」

カリカは続けた。

「皇帝がいなくなれば、指揮系統が混乱する。あたしも全然知らなかつたけど、あのドゥーガルとかいう男は恐ろしくヤリ手らしい」

じゃない」

「ああ、そうだよ。多分そうだ。とぼけた顔して、あの人は全部把握していると思うよ」

「じゃあ、やっぱり始末しないとな」

カリカは冷酷に言い放った。

「ヨウ、あなたにもすぐわかる。それよりスリミアが陥落したら、ここも地獄になる。今から魔王様の使い竜で脱出するぞ」

「ちよつと待ってくれ、そんなことしないでくれ。この工廠の間はみんな市内にいるんだ」

カリカ、エリアスは視線をさまよわせた。

「仕方ないんだ。傀儡化はスイッチを切るように簡単には収まらないから。この際、大神殿のアルトウリ・ムンディだけでも無事に手に入れば御の字だよ」

カリカの説明に、ヨウは奥歯をくいしばった。

そして、巨大な電解装置のガラス容器が目についた。

「わかった、ついていくよ。その使い竜ってのはどこにいるんだ？」

明らかにほつとした様子で、エリアスは手首のバンドをそつと撫でた。

ビリビリという不協和音が倉庫の屋根から響いた。

「屋根の上？」

エリアスはうなづいた。

屋根の上に使い竜は待機しているらしい。屋根のどのくらい上空なのか？

これはかなり分が悪い賭けだ。

「そうか。ところで、いま魔術は使えるかい？」

余りにも静かなヨウの口調が不安を呼び起こしたのだろうか、エリアスが何か言おうとして眉をしかめた。

瞬間、ヨウは足下に落ちたバツクパツクに手を伸ばし、グロツクをつかみ取った。

「ヨウ、あんた」

驚愕の声をあげるカリカに向けて銃弾を放つ。

いや、正確にはカリカの背後にある電解装置の陰極側に。

そこにはアセチレンに次ぐ広い爆轟範囲を有する危険な気体が詰まっている。水上置換によって濃度99%でトラップされた水素ガスが。

16発の残弾全てを打ち尽くす。

ヨウたちが苦勞して造った電解装置は崩れ、内部のガスが噴出した。

倉庫の近くには、衛兵の詰め所もある。鋭いパンパンという音を聞きつけて、すぐに人がやってくるだろう。

彼らを巻き込んでしまう前に決着するはずだった。

ガラス容器から漏れた水素は空気と混合して水素爆鳴気になっている。ここに僅かでも火気があれば……。

因みに、部屋の片隅の鍛造炉の木炭は、まだ赤く燃えている。

「防御魔法！」

ヨウは呆然とする二人に叫んだ。

ここでヨウは、重大な事実思い至った。エリアスとカリ力は魔法で無事だけでも。

「あ、俺死んじゃうじゃん」

そうつぶやいたヨウの顔が白く輝いた。彼の顔だけではない。カリカも、エリアスも、倉庫に存在する全てが。

理想的な水素爆鳴気は燃え上がり、超音速の衝撃波によって木造倉庫は内側から膨れ上がり爆散した。

抱きついている人物に、ヨウはお願いをした。

「あー、ごめん。正直悪い気はしてないけど、そろそろ離してください」

抱きついたカリカの頭は、シャンプーなど使ってるわけないから自然な髪の毛の香りがした。

「何てったつけ、この防御魔法。デフレクト？」

「馬鹿野郎、何やってんだ、無茶苦茶だ」

カリカは押し殺したような声でつぶやいた。

強固なデフレクトをかすめて、灰色の航空機 おそらくVTO
機 が燃えながら墜落してきた。

金属的な残響が、足下の土を通して伝わってくる。

ついさつきまでスリミア第二工場があった土地は、すっかり更地になっていた。僅かに倒壊しそねた柱が、何か巨大な動物の骨のように突っ立っばかりだ。

「なんで、あんたはこんなに行動力があるんだよ。無茶苦茶だよ」

空高く吹き飛ばされた屋根や梁が雨のように降りしきるなか、カリカと二人だけのデフレクトの中は、静寂に包まれていた。

「ヨウ」

そのとき、デフレクトの片側が猛烈に輝き、波打った。

「うわあ！」

皮膚が焼け焦げるような熱気に、ヨウは飛び退った。

「な！？」

攻撃魔法。

強烈な光輝がカリカのデフレクトで四方に飛び散り、近隣の建物を焦がす。

熱気の塵気楼の向こう、荒廃した通りの先に人影が現れた。

サインだ。

彼女がとんでもなく怒っていることは容易に想像できた。

「ちよ、違います、魔王様」

カリカが必死で叫ぶが、デフレクトの外に届くはずはない。

「貴重なAPを壊したわね。裏切り者ども」

突然、サインの言葉がヨウのいるデフレクトの内部にも響いた。これも、サインの操るワザの一つなのだろうか？

「デフレクトを解きなさい、まとめて殺してあげるから！」

カリカが慌てて補充用のトラクトを探して、舌打ちする。

「クソ、持ってないんだった」

今度は、強烈な攻撃魔法がエリアスのデフレクトを直撃した。

サインの放つ攻撃魔法は、他の魔術師のモノプティックとは異なる紫色だった。しかも、トリプティックを超えるほどの威力のよう
だ。

更に、三度目の攻撃魔法がヨウたちのデフレクトを直撃する。

「クッ」

カリカの苦し気なうめきが、サインの強さを物語っていた。

あの強烈な攻撃魔法を三連発。それもMP補充なしで！

「ウォルカをブートしてた気配があるから、あたしたちのと同じ
系統の魔法のはずなのに。化け物か」

悠然と歩いて近づく魔王は、四度目の攻撃魔法を放つために手の
ひらをヨウたちに向けた。カリカが絶望の色をまごつたうめきを漏
らす。

「もう………これ以上は………」

サインはエリアスとカリカのどちらを先に片付けるか決めたようだ。彼女はヨウたちに体を向けた。

「とどめだ！」

ヨウは走馬灯が走るのを待ったが、一向にそんなものは現れなかった。それどころか、「とどめだ！ とかいうセリフは敗北フラグなんだよなあ」などと悠長にも考えていた。

果たして、やはり敗北フラグだったのかもしれない。

カリカとエリアスが同時に一点に視線を向けた。

濃厚な土ぼこりに霞む街路の一角に、人影と魔術発動時特有の感覚が出現したからだ。

サインの背後、皇帝の居城の方角だった。

サインは瞬時に攻撃魔法を中断し、逆に真紅の防御シールドを立ち上げる。

サインの注意がそれた僅かな隙に、エリアスがデフレクトを解いてカリカと合流した。二人の魔術師。これは攻防備えた魔術戦闘の基本形だ。

カリカが感嘆したように、サインのデフレクトに視線を固定したまま言っ。

「まるでブートしてないみたいだ」

聞き耳を立てたヨウに、カリカが続けて言う。

「あんなに早く切り替えられるはずがないんだ。まるで、魔王様ははじめからウォルカとテルミスとを両方ブーツしていたみたいだ」

「デュアル・ブーツってわけか」

「え？」

「いや、大した意味はない」

サインを挟んで向こうが現れたのは、長身で金髪碧眼の男。平和だった頃の90年代日本だったら、「王子様」とか呼ばれてアイドルになっていそうな美男子だった。

遠くてよくわからないが、サインと男は何か喋っているようだった。

男が手を一振りすると、素早く攻撃魔法をブーツした。

「わたくしが」

エリアスが進み出る。

カリカはうなづいて、デフレクトを解いた。

男がどれほどの攻撃魔法を放つかはしらないが、これに便乗するしかなかった。このチャンスを逃せば、とりあえず魔王に誤解されたまま殺されるに違いない。

驚いたことに、カリカも攻撃魔法の準備に入っていた。

ウインクして、傭兵らしく簡潔に説明した。

「この一撃を逃せば、MP残す意味なんてないでしょ」

エリアスの腕先、その空間から三条の光がほとばしる。トリプティックだ。

遠くの男の方からも、同じくらい強烈な光輝が漏れる。おそらく向こうも　トリプティック。

そして、カリカは……一瞬迷った拳句、悲鳴をあげながらのトリプティック。

無理して張り合う必要はないのだが、それが彼女のアイデンティティといえばアイデンティティなのだろう。

三条ずつの光輝が、互いに蛇のように巻きつきながら、サインに集中する。

カッ。

爆風がヨウの服を引きちぎるうっとうかのように吹き過ぎた。

焦げ臭い匂い、喉の奥がチリチリ痛む窒素酸化物の異臭。

いた。

「チッ」

カリカが舌打ちした。

赤いデフレクトは変わらぬ真紅の光を放っている　　が、様子が
おかしい。

赤い球体は震え、おぼろげなサインの影がその中で倒れた。

デフレクトはすぐに明滅して消えた。

「やった………のか？」

爆発の熱風冷めぬ爆心地に横たわるサインから、細く白煙が上が
った。

「まずいっ」

ヨウは走った。

「ちょ、待て！」

制止するカリカの腕をはねのけ、ヨウはサインのもとに走った。

近づけば、サインの怪我が相当にヤバイものなのは一目瞭然だっ
た。髪は焦げ、皮膚は赤く腫れている。

僅かばかりの合成皮革製つばいエナメルのコスチュームは、焼け
てボロボロになっていた。

重度のやけどだ。

ヨウは叫んだ。

「こっちに来てくれ！ 回復魔法をかけてくれ」

「しゃーねえなあ」

カリカが面倒くさそうに指をポキポキ鳴らしながら近づいてきた。

「お前MPカラッケツだろ。向こう行ってる」

「ぐうっ」

カリカが喉からカエルがつぶされたような音を発生させる。

「では、わたくしが」

進み出るエリアス。

エリアスがサインの傷ついた体に意識を集中するのを確認すると、ヨウは金髪の男の方に注意を向けた。

男も気がついてヨウたちに歩を進める。

「あなたは……」

ヨウに向かって自然な笑みを浮かべ、男は優しそうな声音で話しかけた。

「やあ、ニシミヤ青年。先日はどうも」

「ブランクさん？ でしたね」

彼は確か、皇帝陛下がヨウの新兵器を見学に来た際に、汚物まみれで現れた人だった。皇帝が汚れ一つない衣服なのに対して、酷い有様だったのが記憶に残っていた。

そのサクス・ブランクは、面白そうにヨウを頭からつま先まで眺めた。そして、サインを見下ろした。

「おかしいわ」

焦りが混じるエリアスの声。

カリカも不安そうに見下ろしている。

「治癒魔法が効かない。こんなに手ごたえがないなんて、まるでヨウの時と……」

エリアスの声が騒音に掻き消された。

突然の熱風がヨウたちの間近を通り過ぎたからだ。

街路に並ぶ建物の輪郭が歪み、そこに銀色のV.T.O.L機が現れた。ほぼ同時に轟々という逆噴射炎が耳を聳した。

地面の小石を吹き飛ばし、ヨウの顔にビシビシ当たる。

その突然の出現は光学迷彩、そして、おそらく逆位相波を利用したアクティブ消音テクノロジーが使われていると、ヨウは直感した。

「サイン、無事かつ」

拡声器を通した野太い男の声。

機体のコクピットに、赤ヒゲのごついオッサンが垣間見えた。身を乗り出して、サインの名を呼び続ける。

「サイン、サイン。貴様ら、何をした」

カリカがサクスを指差して、あっさりと言う。

「あいつが攻撃魔法でやりました」

赤ひげオヤジがらんだ方向に、翼面下部のガンポッドも連動して鋭く動く。

目を丸くして“使い竜”を見上げていたサクスは、一步後ずさつた。助けを求めるように左右を見回すサクスの視点が一箇所で静止する。

皇帝居城の衛兵たちが、ワラワラと集結していた。でも、それ以上は飛行物体に近づけないでいるらしい。

見たこともないシロモノなのだから当然だろう。

ガンポッドが衛兵たちの方向に首を巡らすと、彼らはたじろいだ。そして、ヒューンというかすかな回転音と同時に、衛兵たちは赤い蒸気を残して瞬きする間に消滅した。

一拍置いて、後方の建物一階が内側から爆散する。

赤ヒゲの操るV T O L機は、くるくると生き物のように滑らかな動きで向きを変えては、周囲の建物に弾丸を浴びせる。いや、実体弾ではないのかもしれないが。

緑青がふいた教会の屋上に現れた人影　おそらくヴィア魔道教会の魔術師　が、サンダーをお見舞いする　しようとした瞬間、巨大な赤いゆらめきがV T O L機を包んだ。

それは、デフレクト。

ヨウの隣でサクスが口笛を吹いた。

「あのシロモノは魔法が使えるのか」

ヨウも同感だった。

紫電がデフレクトと教会の尖塔の間にひらめいた。その放電の直後、デフレクトは現れたときと同じようにあっさり消え失せ、ガンポッドがひときわ激しく唸った。

爆発の炎が教会の窓という窓から噴出する。

教会の屋根は陥没し、サンダーを放った勇敢な魔術師もそこに転落して消えた。

一方、どさくさに紛れて誰かが放ったマスケット銃の弾丸が、V T O L機の下部に命中して火花を散らす。

それをデフレクトで防がなかったのは、弾丸が低威力で防御に値しなかったからか、それとも気付かなかったからなのか。

もし後者だとしたら、このVTOL機も破壊できるということだった。実際に不意をついた水素爆発で、ヨウは一機を撃墜している。この魔王の使い龍を始末することはそれほど難しくなさそうだった。

映画の“戦国自衛隊”において先進兵器がすぐにその力を失ったように、オーバーテクノロジー兵器がわかりあっていたところで歴史の流れは変わらない。そのような兵器が役立つのは、今回魔王がしたような、強襲降下のごとき奇策においてだけだろう。

戦争の最もフェータルな局面まで待った上で、帝国の中枢に殴り込んで皇帝暗殺を企てる。見事な作戦だったが、どういうわけか失敗しつつある。

主にヨウのせいだ。

全ての脅威を排除したと判断したのか、VTOL機は燃え盛る建物を背景にして、ゆっくりとヨウの方を向いた。

「危ない！」

エリアスの甲高い叫び声。

だがしかし、恐怖を張り付かせたその顔は、VTOL機を方を向いてはいなかった。

自分の周囲が暗くなって、はじめてそれに気付いた。

見上げれば建物の崩れ落ちた壁がおそろしくゆっくりと迫り、
ヨ
ウの視野一杯に広がって

そして世界はブラックアウトした。

7-1 目覚め

冬の夜に凍える寒さで目を覚ましたことが、誰にでもあるだろう。

まさしく、それだ。

だが、その寒さのレベルは尋常ではなかった。心臓を締めつけるような寒気が手足の先から流れ込んで、目覚める気力さえ阻喪させる。

痺れたように無感覚な腕に、何かが触れた。肘の内側を圧迫する何か。

瞼をこじ開けると、七色の光彩がぼんやりと踊っていた。

ここは？

耳元で柔らかな声が何かを囁く。その声は何を意味しているのかに集中しようとしても、含意は指の隙間をすり抜けて去ってしまう。

再び肘の内側を何かが圧迫する。

今度は、腕から何か硬い金属が抜けていくのを感じることができた。

目の前に迫ったガラスのような透明な板には霜が降り、そこに映されたシンプルなグラフやデータの羅列をにじませていた。

よくわからない言葉でさっきから耳元に何事か呟いていたのは、

おそらくこのデータの説明なのだろうと、ヨウは悟った。

「ううん……」

ここはどこだ、と言ったつもりが、喉から漏れたのは怪物のようなしわがれた声。

幾度か喉をごろつかせて、やっとまともな声を出せた。

「誰かいるのか」

返事はない。警告音と中性的な落ち着いた声が、耳の裏から話しかけてくるばかりだ。

やげて、ガラスに映されたインジケーターがグリーンの色を示した直後、ヨウを閉じ込めていた箱が音もなく開いた。

箱内部の冷たい空気が暖かい空気と触れ合い、重たい霧が漂う。

ヨウは上半身を持ち上げようとして、背中全体が髪の毛のように細い繊毛で箱とつながっていることに気付いた。

「なんだ、これ」

腕にも、首にもそれは生えていた。

ちよつと力を入れるとそれは苦もなく千切れ、糸は力なく箱の底に落ち着いた。

記憶があいまいなことに苛立ちながらも、ヨウは体を点検し、す

ぐにおかしなことに気付いた。

歯の詰め物がない？

子供の頃に治療したはずの歯にあった、ホンモノの歯と詰め物の僅かな違和感は消えていた。

だが、箱の滑らかな表面に反射する顔は、記憶にあるヨウの顔とまったく同じだった。いや、同じじゃない。中学の頃に傷ついた手のかすかな古傷もきれいさっぱり消えていた。

とりあえず箱の外に出て、自分に何が起きたのか確かめようとして、唐突に自分が全裸であることに気付いた。

何か隠すものを探すために棺のような箱の脇に立って周囲を確認する。その白い空間には、同じような棺が数十個も並んでいた。

と、そのとき、ヨウの左右にある箱が冷気を漏らしながらゆっくりと開いていった。

ほんの1エルほどの距離を隔て、薄れゆく白煙の中から現れたのは、上半身を起こした　カリカだった。

小麦色だったはずの肌が余りにも白くなっていたために、一瞬混乱してしまった。

彼女はぼんやりと曇った瞳をヨウの方に向け、かすかに微笑みを浮かべた。

ヨウがゆっくりと反対方向を向くと、案の定と言うべきか　エ

リアスもヨウの存在に気付いたところだった。

「……………どうも」

ヨウは股間を両手で押さえながら、二人に月並みな挨拶をした。

「なんだ、もう動いてるのか」

その声の主はサイン。いつの間に入室したのか、黙ってヨウに病院着のような服を差し出し、ニヤニヤ笑いを浮かべていた。

両手を離せないヨウの状況を楽しんでいるようだった。

次の瞬間、エリアスとカリカが自分の格好を自覚し、盛大な悲鳴が沸き上がった。

「なんで同じ部屋にしたんですか！」

相手が魔王だというのに、カリカは怒りと恥ずかしさに任せて噛みついた。

「使える装置があれしかなかったんだから仕方なかったんだよ」

サインは落ち着いて答えた。

「それじゃあ、ヨウと覚醒時間をずらしてくれてもよかったのに……………」

なおもブツブツ言い募る。

「まあいいじゃないの、裸くらい」

「よくありません！」

「よくない！」

エリアスとカリカは同時に否定した。

「そもそも、人の体の細胞は2年程度で全部入れ替わるだろう。

細胞レベルで見れば、昨日と今日のお前たちは別人だろう。恥ずか
しさも明日までさ」

「そんな境地にはたどり着けません」

ヨウの突っ込みにエリアスとカリカは頷いた。

「カリカはともかくエリアス、お前100歳超えてんだろ？ わ
たしはその歳の頃には羞恥心なんかとつくになくなってたぞ」

「確かに100歳は100歳ですけど……」

エリアスはもじもじするばかりだ。

「そんなことより、お前たちを起こした理由を聞きたくないのか
？」

「あの、ヨウの治療が済んだから起こしたのではないのですか？」

サインは鼻を頭を掻いた。

「まあ、それもある」

「治療？」

ヨウは首をひねった。

治療ってことは何か怪我でもしたのだろうか？ 確か俺はスリミアの工廠にいて………「ああ！」

カリカがその大声に驚いた。

「びっくりした。どうした急に」

「確か。そうだ、サインとエリアスたちが対決して、俺はあのとき」

サインが肩をすくめて言う。

「ニシミヤ青年よ、それはわたしの大切なAPを壊した日だな」

「ああ、あれはその………」

「いいさ、別に。もう40年も前ことだしな」

「はい？」

ずんずん歩いていたサインが立ち止まり、ヨウを振り返った。

「ああそうだ。お前がスリミアで大怪我して40年以上過ぎてい

7 - 2 全的实现

サインが案内してくれたのは、何もない草原だった。ゆるやかな丘陵の間を川が流れ、足下には黄色い小さな花が風に揺れている。

自分たちが通ってきたトンネルは、振り返ってみれば丘陵の中腹に開いた岩の隙間だった。

サインが無造作に草原に座つたのを確認して、ヨウたち三人も腰を下ろした。

エリアスとカリカは顔を見合わせ、ヨウにするべき話をどちらが受け持つのか推し量ろうとしているようだった。結局、エリアスが先に口を開いた。

「ヨウ、あなたはスリミアのことをどれだけ覚えていますか？」

エリアスの表情は真剣なものだった。

数瞬の沈黙の後に答える。

「さつき思い出したよ。サインが怪我をして、それを助けるために使い竜が降りてきて。そして建物が俺たちに崩れてきたんだ」

エリアスは小さくうなづく。

「そうね。あの崩落にわたくしたちは巻きこまれた。あのとき魔力を使い果たしていたから防御できなかったのよ」

続けて、「カリカは大怪我をして、あなたは………死んだわ」

死んだ!?

ヨウは自分の首に手を当てて、何気なく脈を確認した。

「俺が死んだ?」

「ええ。治癒魔法はあなたには効かないし、そもそも治癒できるような怪我じゃなかったわ」

エリアスが痛みに耐えるかのようにぎゅっと目をつぶる。

「だから魔王様に頼んで ああ、エルモ様の方ね。彼に頼んでヨウもテクサカの魔王城に運んでもらったのよ」

サインがいたずらっぽい笑みを浮かべ、余計な事を口走る。

「わたしの怪我也酷いものだったけど、あんたはいわば挽肉だったわよ。だからウチのコールドスリープ装置でフル・メディカルを受けさせたわけ」

「そんなに酷い怪我だったんですか」

「お前は幸運はだった。わたしの機嫌がもうちょっと悪かったら生ゴミとしてダストシユートに捨ててたわ。ああそうそう、フル・メディカルのお代はツケにしておくから」

と、ヨウにウィンクする。

ここでカリカも話に加わる。

「で、あたしとエリアスは、ヨウが“棺”に入って半年後に、眠りについたの」

「わたしが特別にコールドスリープ装置を使わせたのよ。お前が目覚める時に一緒にいたいだなんて訴えるもんだからさ、ついついウルツときちゃってね。実に健気じゃないの」

「あ、あたしは別に、もうできることがなかったから眠ることにしただけで……」

三人の語った内容によると、十分な医療素材が底をついていたために、ヨウの体が分子レベルで再構築されるのに何年かかるかわからなかったらしい。

そして、テクサカに居る限りエリアスたちは寿命延長用のトラクトが手に入らない。エリアスも老いる一方。だから、冷凍睡眠を使って未来にジャンプすることにした。

エリアスたちの様子から察するに、彼女たちもヨウが目覚めるまでに40年もかかるとは想像していなかったようだ。

涼やかな風が草々をさざなみのように渡る草原にいと、どこか別の世界の話に思えた。

「つてことは、今年は聖暦3736年なんですか？」

「3737年だ」

サインが簡潔に言う。

「あの後、オムニ帝国を滅ぼすことはできなかった。そして、二度目のチャンスは再び訪れなかったの。あんたが連中に余計なことを教えたせいで、わたしたちがアルトゥリ・ムンデイを手にするとは叶わなかった。この40年で、帝国は魔法と銃で武装してしまっただから」

ヨウの遺産が帝国を救った。そのことを耳にして、ヨウは喜びがこみ上げてきた。

彼が残した高校レベルの地球でいうところの19世紀レベルの知識を記した冊子があれば、蒸気機関くらいは数年で作れるだろう。

彼が想像した通りのことが帝国では起こっているらしい。

「お前の手書きのノートは、今ではクワナの大学でガラスケースに保存されてる。大切なコピーの原本としてな。お前のノートは蒸気エンジンやライフル銃や地雷を生み出す悪魔の書だ。いまいますい」

「あのあと、帝国とテクサカの戦争は終わらなかつたんですね」

「そうだ。ドゥーガルは今でも健在でせっせと軍備を蓄えている。ヤツは戦争準備はしても戦争をする気がないから、暗殺するわけにもいかん。あいつのせいでせっかく帝国に築いた諜報ネットワークもパーになるし、まったく食えないやつだよ」

ヨウは男爵イモのような　良く言ってもメインクーンのような、
皇帝陛下の顔を思い出した。

不死の帝国貴族は、今も大勢生き残っているのだろう。エリアス
の父親もまた。

「質問してもいいですか？」

「ああ」

「俺が眠りから起こされたのは、単に治療が終わったからですか？」

「いい質問だな。答えはノーだ。治療そのものは数年前に終わっている。わたしたちがお前を起こしたのは、重大な危機が迫っているからだ」

サインは指を空に向けた。

三人はつられて空を見上げた。

エリアスとカリカが同時にあえぎ声をもらした。

ヨウには40年前と何も変わらない空に見えた。

「どうしたの？」

カリカは厳しい表情でヨウに向き直った。

「月が増える」

熱月、凍月、重月、見月。この四つが、テクサカとオム二帝国の領域から見える月の全てなのだそうだ。

それに地球にもあるお馴染みの大月も加えれば五つだ。

目覚めてから数日、エリアスやカリカが魔王城で学んだのと同じように、「世界の真実」を学んだ。

サインの気遣いなのか、ファンタジー世界向けにアレンジした童話のような“真実”ではなく、ヨウにだけは、テクノロジーに馴染んだ人々向けの無修正版“真実”をみせてくれた。

この世界の厳しい歴史、そしてサインたちの来歴をも包み隠さず。

サインとエルモは、かつて栄華を極めた文明が送り出した恒星間探検隊の一員だった。

片道数十年もの快適な旅のために、一つの街に等しい規模の恒星船を建造し、それを光速に近い速度まで加速させる。この一点だけ切り取っても、ヨウの世界が石器時代に見えるほどのテクノロジーが使われていたのだろう。

そして、巨大な恒星船を駆動するために開発されたのが、ワームホール・エネルギー転送技術、即ちワームトランス・テクノロジーだった。

太陽表面の6000 に達する高温のプラズマまでμmサイズのワームホールをくり抜き、熱を汲み出す永久機関。

クリーンで無限、そしてどこにでも簡単にお届けできるとあっては、恒星船の動力源だけではなく、社会のあらゆる面にワームトランス・テクノロジーが普及するのは時間の問題だった。

はじめは専ら宇宙船の動力に使われたワームトランス。やがてもっと簡便なワームトランスが惑星の中心核から簡単にエネルギーをむさぼるようになる、各地の発電所、航空機、船に搭載された。

更に技術が進んでワームトランス・デバイスが小型化すると、最終的に人々は極小のワームホールを体の中で無数に飼うようになっていた。

惑星をリングのように巡る月から、生体インターフェイスにワームホール転送されるエネルギー。ワームトランス動力を備えた無数のナノマシンが、人々を病気や寿命から解放し、永久の繁栄を約束してくれた。

サインとエルモが参加した恒星間探検隊は、この繁栄の時代の後期に出発したものの一つだった。

目的地の恒星系を探検し、小さな記念碑を建て、母星への帰還の途についた。だが、順調にワームトランス機関が働いていたのは帰途の半ばまでだった。

船に備え付けられたワームトランス即時通信は、孤独な恒星船と故郷をつなぐ情報の架け橋だった。

探検隊が数十年も旅を続けるうちに、画期的な科学上の大躍進を報じるニュースに紛れた些細な情報の断片から、故郷が少しずつ変容し、奇怪な文化を形成しつつあることが察せられるようになった。

強力なナノテクと生物工学が融合し、新たな人類や人工的な奴隷が生み出されていた。自己増殖するAIマシンが星系中の資源を母星に供給することにより、無限の富と永久の休暇が労働を過去のものとした。

この時代の人々は、あり余る時間をもてあまし、ケガも死も恐るるに足らず、精神すら思い通りに抑揚をつけ、もはや魔法としか思えない力を指先一つで操る存在となっていた。

ワームトランステクノロジーは暇な人類の格好のオモチャになった。

手のひらに出現させた巨視的ワームホールから火炎を呼び出した。生まれでは消えてゆくワームホールを球形に配置し、攻撃から身を守ったり。エンテレケイア、全的实现。

魔法のようなこのテクノロジーがそのように呼ばれたのも無理のないところだった。

やがて地道な科学的探究や恒星間探査が時代遅れのロマンとして人々から失笑されるようになったのは、労働なき時代の必然の流れだった。

ある日、ワームトランスされた母星からのニュースは、AIマシンたちが次々と自殺しはじめたことを伝えた。やがて何の前触れも

なくワームトランス機関が停止した。

母星からの通信は、それ以後一切途絶した。

エネルギーの外部供給を絶たれたことで、このままでは探検隊はスピードを落とすこともできずに母星を通り過ぎてしまう事態となった。

だが、こうしたトラブルに対処するために、恒星船の設計者は多重バックアップを用意していた。

恒星船は自らを原子レベルで改造し、自らの体を少しずつ削ってそれをエネルギーに転換し、船を減速させた。

母星への直線コースではなく大きく湾曲した放物線にコースを変え、ゆっくりとした加速度で減速するために、母星への帰還予定は1500年遅れることになった。

サインたちがやつとのことで母星の暖かな光の下に帰還したとき、そこは廃墟と化していた。

第四惑星や小惑星帯には、低重力に適應した人々が住み着いていたはずだが、それらの居住地は消え失せ、あらゆる文明の産物が消滅していた。

出発時の質量の数十分の一にまで縮んだ恒星船が、貴重なエネルギーをチビチビ使いながら第三惑星に接近する。

希望を込めて惑星表面を観察した恒星船クルーたちは落胆した。彼らの母星は無人と化していた。ほとんど。

わずかに、粗末な服を着た異形の人々が地表に住み着いていた。

母星を巡る軌道上の衛星　即ちワームトランスシステムの転送機は、いずれも太古の昔と変わらずに存在していた。サインたちが出発したときほとんど変わらぬ姿で。

これからどうすべきか悩んだ恒星船クルーたちが、全体会議を開催していたために無防備になっていたそのとき　そのとき大月の北極付近に高エネルギー反応が出現、突然恒星船を攻撃した。

目に見えないビームに挟られ、恒星船は母星の大気圏に叩き落とされた。

動力が不足しているために、大気との摩擦をワームホールバリアで逃がすこともできない。ひたすら頑丈な船殻も暗赤色に鈍く輝く。

だが恒星船の集合知性は立派な仕事を成し遂げた。人間には到底不可能な正確さで姿勢制御ジェットをきらめかせ、縮んだとはいえ今なお巨大な恒星船を地表に着地させたのだ。

残念だったのは、着陸時の衝撃はすさまじさから、結局生き残ることができたのはエルモとサインの二人だけだったということだ。

「増えてる？」

このファンタジー世界に来てから1年が経過しようとしていたけど、ヨウは未だにどの月がどれなのか忘れてしまうことがあった。

まして、一個くらい増えていても全然気付かなかった。

一方、生粋の住人たるエリアスたちは呆然としている。

まあ、月が増えてたら普通は驚くわな。

そんな様子を、サインはあまり感情のない目つきで眺めていた。

「俺が起こされた理由は、あの月と関係が？」

うなづき、小さいにも関わらずやけに白く輝く月を見るサインの目つきは、どこか哀しげだった。

「あの球体が現れたのは一月ほど前のことだ。どうやら、軌道上に」

軌道上と言ったとき、サインの表情が僅かに歪んだ。

「お客さんがいるらしい。しかもわたしたちの月にも何か手出ししてるようだ。サジタリウスのセンサーでわかったのはそこまでだ」

「誰だと思えます？」

「わからん。迷信深い連中は、あれを天人の乗り物だとか、古のアイ神の再臨だとか勝手に憶測しているようだ」

「んなわけないですね。だって、あなたの教えてくれた歴史が正しいならアイは単なる人工知性のようだし」

古代の人類にかしずいていた忠実なAIマシンたち。それらがど

うしてアポトーシスしちゃったのかは、サインにも謎のようだった。

「そうだな。で、わたしたちはあの白月の連中が何者なのか、相手の出方を観察していたわけだ。先日、動きがあった」

「通信があつたんですか？」

「いいや、もっとダイレクトだった。オムニ帝国に軌道上から飛行物体が舞い降りた。わたしたちは大気高層からあれを探知していたが、手出しのしようがなかった」

「ファースト・コンタクトだ」

ヨウの記憶にあるそれは、地球人類にとって不幸のはじまりでしかなかった。そんな先入観からだろうか、ヨウには帝国と白月の接触が不吉なことのように感じられた。

サインは大きな溜息を吐く。

「どうやら白月の連中は友好的なビジターではないらしいぞ。昨日のことになるが、センサーが電磁バーストと地震波を捉えた。オムニ帝国が核攻撃されたようだ」

絶句するヨウを、エリアスたちが不思議そうに見ていた。

「ニシミヤ青年、お前は白月の連中の見当がつかないか？」

「なぜに俺が!? 知らないですよ。そんな凶悪な知り合いいません!」

「そうかな？ 船の集団知性が白月の無線を解析したところ、お前との関連性を指摘してきた。特にお前の元々の言語との相関性は“偶然性の一般的閾値を超えている”そうだ。まあ、わたしもよく意味はわからないのだが」

「それでだが。お前たち三人で帝国の様子を探ってもえないか。」
エリアスが最初に賛意を示した。

「帝国がどうなっているか、この目で見てみたいわ」
ヨウも大きく変わっただろう帝国の様子が見てみたかった。

カリカが遠慮がちに言う。

「じゃあ、あたしも」

「40年の空白のおかげで、お前たちの顔を覚えている者はほとんどいないだろう。理想的な密偵だよ」

「でも、亡命者がいるでしょう。彼らの方が安全なんじゃあ・・・」

「最近少ないのよ。それに、帝国に追われる立場の人も多い」
「なるほど」

「白月の連中は何者なのか、オムニ帝国に接触した理由は何か。そして、連中は大神殿の」

ヨウ以外の三人が視線を交わした。

「アルトウリ・ムンディに気付いているのか」

アルトウリ・ムンディ。それは唯一生き残ったタップ。強大な過去の遺産。

それは、この惑星中心核からエネルギーを汲み出せる現存する唯一の装置なのだそうだ。

「何度か聞いた覚えがあるんですが……そのアルトウリ・ムンディってのは何です？」

「スリミアの地下に眠るポンコツの機械よ。わたしたちの悩みの種類。ああ、まだそこんとこ教えてなかったわね。あんたたちもまだニシミヤ青年に教えてないのね？」

「はい魔王様、その機会に恵まれました」

「そう。じゃあ教えない。彼女たちに教えてもらいなさいな」

「はあ」

「あ、そうだ」

「はい？」

「ニシミヤ青年、あんたの体内にインプラント埋めこんどいたから使えるようにしといてね」

「えっ!？」

眠っている間になんか変なものを体に埋め込まれたと聞かされるのは心臓に悪かった。

「なんですかそれ、勝手にいじらないでくださいよ」

「いいじゃないか、どうせミンチ状だったんだしさ」

「そんなあ」

こうして、ヨウはほんの数日前まで住んでいたような気がする帝国にとんぼがえりすることになった。

7-3 行きて戻りし国

ヨウが操縦するAP 大気圏航空機は、地球における自動車のように、いやそれ以上に扱いやすいものだった。

インターフェイスのおかげで、ほとんど考えるだけで操縦できる。適当に場所を思い浮かべて、「ここらへんで下ろして」と命じればOKだ。

ヨウを治療する過程で体に埋め込まれた……というより、新たに“生成”されたインターフェイスというものは、とんでもない代物だ。人間の能力を拡張するための機能なのだが、その拡張範囲は広範だ。

情報処理能力 これはパソコンの出現によって、ヨウの故郷でも人間の情報処理能力拡大は実現しつつあったが、インターフェイスの持つ情報処理能力は格別だ。

その他に体調の管理、寿命延長、身体能力の強化、マン・マシン接続のような精神能力の拡張、そしてワームトランステクノロジーを用いた“魔法”能力の獲得。

インターフェイスを構成するのは、今やヨウの体を血肉と同等の存在として体の中を縦横無尽に走り回っているナノマシンたちだ。

この無数の下僕たちのそれぞれが、ヨウの世界なら大学に設置されているような大型コンピューター並みの演算能力を内臓しているらしい。

こいつらが実行する分散コンピューティングの結果、ヨウの体は今や地球の全計算資源の合計量を上回る演算能力を内臓しているそうだ。恒星船サジタリウスの集合知性が語った内容から推測すれば、そういうことになる。

インターフェースの通信機能で集合知性ともリンクしているから、インターネットが仮に海ならば、その深遠さと広大さで宇宙にも例えられる集合知性のライブラリから、知識を引き出すこともできる。

もつとも、不要な知識にはアクセスできないように制限がかかってはいたが。

サインたちがヨウをそこまで信用する道理はないだろう。

APはサインたちから見れば、自転車のように素朴な工業製品のようだった。ヨウからすれば、途方もないハイテク製品だということ。

小ぶりの両翼から湧き出す白炎は、アクティブ消音のおかげでほとんど蠟燭のように静かだ。

サジタリウスに残された最後のAPを駆り、ヨウたちが向かうのは帝都スリミア。

音もなく視界から消え去る森の向こうから、次々と耕された畑や白っぽい街が迫っては背後に過ぎ去る。

コクピットに映される映像は、まるで外が真昼間であるかのよう
に補正されていた。

「アルトウリ・ムンデイはエネルギーの栓よ」

突然の告白に驚いて、ヨウはAPの速度を音速以下に落とすとした。

「サイン様の説明はわたくしたちにはよくわからなかった。それで良ければ説明しますよ」

それでも全然かまわない。

どうしてテクサカが、サインたちがスリミアの地下にあるアルトウリ・ムンデイとやらにそんなに執着するのか。それは、テクサカと帝国の戦いの、そもそもの発端である。

「大昔…….といっても150年ほど前に魔王様たちは地上に降り立った」

おおまかな歴史については、ヨウも魔王城　つまり恒星船サジタリウスで、ごく短時間ではあるが学んでいた。

サジタリウスが地上に不時着したのは聖暦3582年のことだった。

「そして、当時のオムニ王国を魔王様たちが訪問して、オムニ教会にアルトウリ・ムンデイの開示を求めました。まあ、後から考えると無謀の極みですね。でも、当時のアルトウリ・ムンデイは地表に一部をのぞかせたまま、誰でも手を触れられる状態だったそうです」

「で、オムニ教会はサインたちを門前払い。その後は一切アルトウリ・ムンデイに近づくこともできなくなった。それでいいんだよ

ね

「そうですね。だから魔王様はテクサカを建設して力づくでスリミアを奪おうとした。その後は歴史にある通りです」

そして、エリアスの記憶にもある通り、ということか。

「私たちの魔力の源泉は空に常におわす十三の月が源になります。そして、十三番目の月……ええと、ジュンテンチヨウエイセイと呼ばれているそうなのですが、この月がアルトゥリ・ムンデイからの力を受けられずに、地上に落下するのです」

「月が落下する？」

あの直径何キロもある月が落下するとすれば、地上は地獄絵図になるだろう。

「はい。わたくしたちには見えない月ですが、地上に落ちれば何年も闇が地上を覆い、帝国・テクサカ双方が滅びる……」

おそらく、この星を巡る月には自動的に軌道を維持できる仕組みが備わっているのだろう。

その仕組みは何千年も壊れずに動き続ける設計だった……でも、実際に数千年が経ってしまったのだ。

「そんな理由があったのか」

エリアスは長い睫毛をパチパチさせた。

「ずいぶんすんなりと理解するんですね。わたくしは月が神様の御座所だと教わってきました。そして魔術師の力の源泉だとも。実際は、わたくしたちが知っていたのは真実の半分でしかありませんでした」

「習慣を変えるのは難しいものですよ。常識も同じです」

「齢のせいで頭が硬くなっているのかも」

「そ、そんなことは」

「おお、自虐ネタ」

カリカがおどけた声で茶化した。

「年齢ネタ解禁か？」

「まだ厳禁です！　そういうあなただってもう2　」

「みなまで言うな！」

ヨウ自身も、考えてみるともう19歳だ。それとも、40年間眠っていたんだから59歳なのだろうか？

「まあ、どっちでもいいんじゃないか？　あんたはインターフェースのおかげで不死になったんだから」

そう、カリカは軽く言う。

トラクトによって割と簡単に不死が実現した社会に育った者らし

い割り切り方だった。

エリアスはヨウたちに何か言いたそうに腕を上げて、すぐ下ろした。

長寿の代償を知らぬ若者にかけるべき言葉はなかった。

雑草が生え、半ば朽ちた煉瓦積みの上に寝ている猫がついと空を見上げた。

この気まぐれで幻想的な生き物が、何も無い部屋の隅を見上げる挙動をすることは良く知られている。何か人には見えない存在の痕跡を嗅ぎとっているかのよう。

空の一点に三角形の耳を向け、じつと目をこらす。

熱風が煉瓦積みに押し寄せると、猫は耐えきれず一目散に逃げ去った。

熱風が収まって数分後、空気のゆらめきの中から三人の男女が現れた。

エリカと呼ばれる背の低い雑草が荒地を覆い、絶え間ない風がそれを波打たせているその場所は、オム二帝国中央部の一角を占める貧しい土地だった。

つい最近　といってもゴールドスリップしていた期間を含めれば半世紀は経つはずだが　開発されはじめた人口希薄な地域だっ

た。

その荒地に領主が配され、小さな城下町が形成された。そして先日消滅した。

ヨウの手首にはめられたバンドがモニターする放射線値が、ヨウの意識にのぼる回想のように、ポツと現れては消える。

典型的な核分裂生成物のストロンチウム90やセシウム137が検出できないことは、白月の用いた兵器が核分裂反応を用いた原始的な核爆弾ではないことを示していた。

おそらく、使われたのは小出力の純粹水爆だろう。

いまヨウたちが立つ場所も、もとは農村の中心部だった。

屋根付きの井戸を中心に道路が放射状に伸び、石造りの建物がゆったりと間隔をとって配置されている。

「無人みたいだ」

「そうだな」

「白月の連中は、故意に人口が少ない地域を核攻撃したのかな」

「帝国中央部で未だに荒地の地域はあまり残されていません。偶然ではないと思います。きっと彼らもあまり人を殺したくはなかったのでしょうか」

「そうだといいがな」

カリカが素っ気なく言う。

スリミアに近いこの地域なら、爆発のキノコ雲が帝都の市民からも見えただろう。

核攻撃はおそらく、計算されたデモンストレーション……。

ヨウは試しに、インターフェースが実現してくれる新しい能力、エンテレケイアを試してみることにした。

意識を集中すると、エンテレケイアを可能にするワームトランス機能が目を覚ました。

体内を巡る極微のマシンのうち、適切な物理的構成位置にあったナノマシンが選択的に時空の穴からエネルギーを受け取り、魔法のようなテクノロジーの奇跡を披露する。

エリアスたちがヨウに注目した。ヨウがエンテレケイア エリアスたちにとっては“魔法”を行使する気配を感じ取ったのだ。

「これはシレノス？ ブートしているのですか？」

彼女たち魔術師が人探しなどに使うシレノス。それはワームトランステクノロジーの表現で言い直すならば“ワームホール遠隔サーチング”だろうか。それはこの惑星を巡る衛星の一つが提供するサービスの名前。

インターフェースのAIがヨウの体感的感覚速度を加速したこと

で、彼を見つめるエリアスたちは物言わぬ彫像のように静止した。

体内のナノマシンが受信機と送信機を形成し、ヨウの体は臨時のリーダーとなる。

一瞬で終わったサーチの結果、ヨウの半径10トエル以内に主要4種族に分類される知的生命体が存在しないことがわかった。

感覚加速が解除されると共に、エリアスたちがゆっくりと動き出した。

「これはシレノス？ ブートしているのですか？」

「ええ。いま終わりました。このあたりに住民は残っていませんね」

「すごい早業だな」

「そうか？」

カリカがしきりに感心している。魔術のブートの早さに自信があるカリカは、少し口惜しそうだった。

実は、彼女たち帝国生まれの魔術師が操れる魔術は、かつての人々が扱えたエンテレケイアのごく一部に過ぎない。ほとんどの技は忘れ去られているのだ。

ワームトランス経由で重力波を発生させ、相手を地面に釘付けにするグラヴィティや、グラヴィティを自分の頭上で発生させた飛翔術フーガ、相手に意識を割り込ませて自由を奪うアバターなどなど。

科学の裏づけがある魔術は、ほとんど万能だ。エンテレケイアと呼ばれるだけのことはあった。

「とりあえずここは理想的な隠し場所みだいだ」

「そうだな。向こうの森にでも隠しておこう」

いかに自己修復機能があるとはいえ、幾星霜を経たAPはいい加減老朽化している。ずっと頭上をホバリングさせておくわけにもいかないから、この村のそばに隠すことにした。

静寂に包まれたこの見捨てられた土地なら、誰かが偶然みつけることもあるまい。

ヨウの指示によりAPは静かに森の中に降下して、光学迷彩と人払い用の心理干渉帯の中心で休息に入った。

三人に与えられた指示は、帝国の内情視察と、何よりも白月との接触だった。

そして、白月の連中の顔を拝めるとすれば、おそらくスリミアの大聖堂付近だと当たりをつけていた。

「こっちです。行きましょう」

インターフェイスのナビゲーション機能が示す方向に、三人は歩いていった。

7-4 ありえない結婚

帝国都市同盟所属 ウルビス・フルメントム市

城下町と違い、シンプルで共通した法律で守られた都市同盟は自由な空気がある。例え怪しげな余所者だろうと、何の文句もなくサービスを提供してくれる自由放任主義の街。

その自由さ加減は、自己責任の厳しい伝統をも物語っている。城壁を見れば明らかだ。

街壁の縁には点々と物干し竿のような鉄の枝が生えて、支払いに窮した者がどのような仕打ちを受けることになるかを暗示していた。

浅い堀に渡された跳ね上げ橋の脇に、入市税を徴収する関所があった。市内で商品を扱う者は、入市税の支払い領収書が発行される。

もし商売をしていて、市内を巡回する徴税請負人に領収書を提示できなければ、その商人にどのような運命が待ち受けるのかは、知らない方が良いだろう。

ウルビス・フルメントム市に至る街道にて、シレノス系魔術のアーネステジアを罪のない旅人に食らわし、うまい具合に移動許可証をゲットしていた。

新しい名前と出身領地、そして目的地を答えた三人は市内に足を踏み入れた。

市中心部まで真っ直ぐ続く通りは、雑踏が生み出す土ぼこりで霞んでいた。いや、霞の原因はそれだけではない。市内のあちこちから立ち上る黒煙もその原因だった。

ヨウは地面に落ちた、黒々とした艶やかな切断面をみせる石に気がついた。

石炭だ。

帝国内から炭鉱が掘られたのだろうか。広大なアクターボのどこかに、未活用の広大な泥炭層があっても驚くほどのことではない。

鉄を叩く音、鉄骨を積んだ荷車の行き交う交差点、そして建設中の鉄とレンガの巨大な塔。

エリアスは、空白の40年で街に生じた大きな変化を察知していた。

「ガラスがこんなに使われてるなんて信じられない」

そうだった。街の民家の窓には透明なガラスがはめこまれ、お洒落な感じの店先は大きなショーウィンドウから中が見渡せるようになっていいる。

ヨウはガラスに顔を近づけ、板ガラスの内部に気泡があまり含まれていないことを確認した。

「これは圧延された板ガラスだ」

蒸気動力の圧延機で量産されたガラスなのだろう。

変化はそれだけではない。街の板張りの家屋に使われている板材は、人間がかなで削ったにしては余りに平滑で、その上に純白のペンキが塗られている。

田舎者のようにキョロキョロしながら通りを進むうち、西の空はすっかり黄金色に染まった。

宿屋の入り口に掲げられた大きな炭素灯が、ぶうんと音をたててまばゆい光を放つ頃には、エリアスは屋台で買い込んだ大量の商品を抱えて疲れきっていた。

「今日はここで休みましょうか」

「そうですね」

壁に書かれた宿屋の料金メニューは、40年前には考えられなかったような数字を当然のように記している。

「6000セツルか。ずいぶん高くなつたもんだね」

カリカが呆れたように言う。

「さつき屋台で売ってた“季節野菜とチーズのカリカリコーン包みウィズ全部乗せトッピング”なんか2800セツルもしたわよ」

「あんたなに買ってたんだよ」

「だって物価の調査もしたいから……」

「完全に私欲のままに行動してるようにしか見えないな」

エリアスは、えへへと笑った。

なんだから、そうやって若い外見にふさわしい軽薄な行動を楽しんでいるようだった。不死だった頃にできなかったことを、いままとめて取り返そうとでもいうように、エリアスは華やいでいた。

「まあいいけど。お金はあるし」

サインから偽造帝国通貨を金貨でたんまり頂いていたから、しばらくお金に困ることはない。

ヨウはカウンターに近づき、揉み手でニコニコしているオヤジに言った。

「一番いい部屋を頼む」

「ありがとうございます！ お客様のお美しいお連れ様も一緒に？。」

「彼女たち二人にもツインの部屋を」

「承知致しました」

慇懃に礼を述べ、なんやかやと煩く聞いてくる支配人を追い払うと、宿の部屋から外を眺めた。

きれいな壁紙に包まれ、白いシーツに覆われたベッド。

純白のシートは苛性ソーダによる漂白を、壁紙が貼れるような板材は、機械動力による製材所が消費社会を裏方から支えていることを示していた。

窓の外には、ヨウが残したメモ書きが変えてしまった世界が広がっていた。

その変貌の量的規模と裾野の広がりには驚きを覚えていた。

原始的な炭素灯のまばゆい輝きが、夜の通りを明るく照らしている。眼下を行き交う人々が遮った真っ白な光は、人々から伸びる影をくつきりと際立たせていた。

夕食まではまだ間がある。この世界の不満の一は温泉がないことなのだが、それを補おうとするように、酒場だけは充実している。

この酒場も40年前とは若干変化が訪れていた。

透明な酒が増えている。ひと口なめてみて、新しい種類の液体が蒸留酒だということははっきりした。蒸留酒はアルコール度数は高いが、製造にコストがかかる。金属製の蒸留器や凝縮器はとても高価だし、熱源も必要だ。だが、ふんだんに鋼鉄を利用できるならどうだろうか？ アルコール度数が高い酒を庶民が飲めるのは、ベッセマー転炉の遠い波及効果の例だった。

ヨウたちが上機嫌で妙な雑味のある蒸留酒をたしなんでいると、夜が深まると共に酒場の人も増えてきた。

何か違和感があるのか、ヨウたち一行はこの空間で浮いていたから三人だけでテーブルを独占していた。

が、やがて数人の商人風の男たちが酒場を見回しヨウたちのテーブルに近づいてきた。

義理で聞いているのは明らかだったが、相席よろしいですかねと一応声をかけて、男たちが席につく。

「ゴライアスの香味焙煎リッパーひとつ、あとは、とりあえずアグアビット人数分」

しばらくしてやってきたゴライアスの香味焙煎リッパーとやらは、ケンタッキーフライドチキンのカリッと揚げられた皮の部分だけ集めたような酒のつまみだった。

それを目撃したカリカが、同じものを注文した。

これの美味しいのなんの。地球に持って帰って売り出したら一財産築けそうな味だった。

カリカとヨウがつまみをモリモリ食べていると、商人風の男たちが話しかけてきた。

「両手に花でうらやましいねえ、兄ちゃん。この街に住んでるのかい？」

ヨウはとりあえずの設定である「北部タイルからスリミア見物の旅の途中」という作り話を男に聞かせた。

「このキナくさい時期に旅行とはねえ。俺たち商人だって渋々出歩いてるっていうのに。聞いたかい、ウルビス・フルメントムの東方街道で商人が襲われて移動許可証だけ奪われたらしいよ」

男はヨウたちが年下だと思ったのか、親しげに喋る。

「ふーん、そうなんですか」

「街道沿いの兵隊さんがすっかりいなくなったから、君たちも気をつけるんだね」

「兵隊はどうしたんですか？」

「ええっ、どうしたって、そりゃ天人が帰ってきたからに決まってるでしょうが。昔々の神話だと思ってた連中が、今更当然のようにこの地上に降りてくるなんて、これからどうなっちまうのか」

三人は目配せし合った。

「その“天人”についてどんなことを知っていますか？」

「……ってなわけで、皇帝陛下が天人の要求を断った腹いせに、連中はでっかい火の玉であの辺りを焼いちゃったって寸法なわけ」

こちらが奢るタダ酒を両手に持ち、商人の男から話を聞きだした。

それによると、帝国では“天人”と呼ばれている白月の連中は、

奇妙ないでたちではあるが人間の姿をしていたらしい。

そして、空から降り立つと、真っ直ぐ皇帝の居城に侵入したそう
だ。恐ろしい魔術を使って衛兵を寄せ付けず、皇帝に直談判した。

天人と手を結び、帝国に軍事基地を設営させてほしいと。そして、
食料や基地労務者の提供を要求した。

当然ながら、怪しい連中の無礼な要求は拒否されたらしい。

噂だがね、と前置きして、商人が更に語ったところによると、こ
んなやりとりがあったようだ。

「我々の要求を拒否なさるのは、あなた方とは懸絶した力を見て
からでも遅くはないでしょう。皇帝、あちらを」

そのように皇帝に指図した直後、指差した窓の外がパツと輝き、
地平線にかかる雲が数秒間、白々と照らされた。

「回答期限は一週間。その間に意思統一して我々の要求に自ら従
うか、強制的に従わされるか決めて頂たい」

天人たちはそのように言い放つと、来た時と同じように旋風のよ
うに去っていった。

その出来事があったのは、今から6日前のことらしい。

「つまり、明日が回答期限ですか」

「そういつことになるね」

事もなげに核攻撃してくるような敵を相手に、せいぜい19世紀レベルのテクノロジーしか持たない帝国が勝てるはずない。白月の足下にひれ伏すしか道はないだろう。

それとも……。

考えていたそのとき、テーブルの木目に焦点を合わせていたヨウの視野に着信イメージが点灯した。インターフェース経由で送られてきたメッセージだ。

サインからだった。

ヨウは音声モードで通話を選択した。

サーツというホワイトノイズの奥から、サインのやや低く深みのある声流れ出た。

「ニシミヤ青年、聞こえる？」

地球からファンタジー世界に流されて以来、久しぶりの通話だった。もつとも、携帯電話のような原始的なデバイスを用いない、脳内通話なのだが。

脳内通話は考えたことが発信されるから、余計な雑念が混ざらないようにするには若干のコツが必要だった。

「こちらニシミヤ青年ですが」

緊張してヨウは返答する。

「あら、緊張してるの？」

まるで写真を撮られたら魂を抜かれると思ひ込む田舎者と皮肉られた気がして、かすかに赤面する。

「そんなことないです」

「まあいいわ。それより、何かわたしに報告することがあるなら、いまこの場で手短かに報告してちょうだい」

「はい、わかりました」

ヨウは、今さっきまで商人から聞きだしていたことをかいつまんでサインに伝えた。

「……………なるほど、天人ね。実は、こっちがちょっと面白いことになってるから連絡しようと思ったのよ」

サインは効果的に言葉を切って、ヨウの期待を高めた。

「帝国の使者が同盟を結びたいんですって」

「はい？」

同盟。同じ目的のために盟すると書いて同盟？ そんなこと……それは“ありえない結婚”だ。

「帝国が、テクサカに対して？」

「その通り」

「で、いま目の前に落ち着いたフリをしてるけど、実際すっかり怯えた使者がいるわけ」

サインは含み笑いを漏らした。

「本当に大した皇帝だね。手ひどく脅されたくせに、まだ戦う気とはね」

確かにドゥーガル皇帝なら、逆境を逆手にとって、テクサカと手を結ぶというようなウルトラC級はなびら大回転な外交をやっている。けてもおおかしくない気がした。

「わかった。そっちがその気なら、皇帝の提案に乗るわ。ニシミヤ青年、エルモのAPに命じてテクサカまで返してもらえる？ 偽装解除したらあとはこっちで操作するから」

「はい、了解です。APをどうするつもりなんですか」

APはヨウたちがテクサカに帰るために必要だった。皇帝の使者がテクサカまで移動するのに一週間弱しかかからなかったのは、実はものすごく早い。使者は、おそらくターパンを乗り継いで飛ばしてきたのだろう。

徒歩でテクサカまで帰るなど、ヨウは願い下げだった。

「使者を連れて、私も帝国に顔を出すの。返事は一刻も早い方がいいでしょ。それに、あのブ男は私が直接スリミアに乗り込んでくることが当てにしているのよ、間違いなく」

「そうかもしませんね。帝国の使者がテクサカの返事を持ち帰るには時間が足りないし」

「そういうこと。それじゃあんたらも明日までにスリミアに着いてね」

「ちょっと、間に合いませんて！」

通話は切れていた。

うつむいて静かになったヨウを心配そうにのぞきこんでいたエリアスは、ヨウの瞳が生氣を取り戻すのを確認して安堵した。

「どうしたのですか」

「あ、いえ。サインから連絡がありました」

「どのような」

ヨウは困ったように頭をかいた。

「あそれが、明日サインがスリミアに来るそうです」

明け方の帝都スリミアは雨が上がったばかり。互い違いに置かれた石畳同士の隙間には、まだ雨水が残っている。

まだ多くの人は寝静まっているが、道路には荷車や出勤する人がちらほらと現れはじめ、街はまた活気に溢れる一日に向かって動き出していた。

市内のあちこちでは新しい建物が、天を目指して毎日のように伸びている。また別の場所では膨張する市街を収めるために外壁の拡張工事や橋の建設が進んでいた。

ヨウがもらたしが技術のおかげで帝国の農業生産はこの30年で大きく伸び、農村では人口爆発がはじまっていた。

農家の次男や三男は実家を離れて都会に流入し、労働集約型の軽工業に豊富な労働力を提供していた。新しく開発された鉱山は大勢の鉱夫を要求したし、活況を呈する建設業界は出稼ぎ労働者の受け皿となった。

かつて農家の余った子供たちは、傭兵になるかトラクトの原料になるかの二択を迫られる時代が続いた。だが新しい時代の帝国人民は、より優れた選択肢から自分の将来を選ぶようになっていたのだ。

先の戦争では、貴族たちが軒並みアンバーサリー作戦で失われたために、一般市民や農民が銃を手に戦った。その結果、平民階級の発言力は大幅に伸張し、今や帝国等族議会にも平民の議席をよこせ

と主張するまでになっていた。

ヒトの命の価値が重視されるようになると、当然の結末だが、メトセラ処置用のトラクトはもとよりMP補充用のトラクトすら高騰した。

こうして魔術の戦力価値は主に市場原理によって低下し、費用対効果の面では通常戦力 即ち火力化した歩兵の有利に転換しつつあった。

戦術的にも、近年登場した狙撃銃を使えば、デフレクトを解除した無防備な瞬間に魔術師の頭を吹き飛ばすことだってそう難しくないのだから、相対的に魔術の価値が低下しつつあることは間違いないかった。

魔王城の、もともとは恒星船の一部だった平坦な装甲板に着陸したAPを、サインが出迎えてくれた。

「なんだ、あんたたちまで戻ってきたの？」

「そうですね。ウルビス・フルメントムからスリミアに明日までに来いなんて無茶ですから。何トエルあると思ってるんですか？」

ヨウが魔王に対して、余りにも馴れ馴れしい口をきくのをエリアスが感心したような、それでいて不安気な表情で見守っている。

「そうだったか。まあいい、無賃乗車は咎めない。帝国の使者の見張り役が欲しかったから丁度良かった」

サインの後ろを、帝国風の正装をした外交官がついて歩いていた。外交官のヨウたちを見る目は冷ややかだ。

それもそうだろう、帝国からの亡命者を快く思う帝国外交官がいるはずもない。

サインは、付き従う魔王付きの衛兵　つまり親衛隊に銃を要求した。三丁のステルス銃を、ヨウたち三人に手渡す。

「これを使ってね」

「俺たちには攻撃魔法がありますよ」

そう言おうとして、ヨウはためらった。攻撃魔法は容易に補充できないMPを使う。しかも出力調整は難しい。鶏を絞めるのに牛刀を使う必要はないということだろう。

もう失くしてしまっただけで、地球から持ってきた荒い仕上げの安物の銃とステルス銃では質感が全く違う。ステルス銃には、プラチナの塊から彫り出したような高級感があった。錆とは永久に無縁そうに見える光沢のある金属でできており、見た目よりずっと軽い。

滑らかな銃把に触った瞬間、インターフェース越しに操作方法が頭の中に流れ込む……というより、はじめからあったかのように、その知識がヨウの中に存在していた。

エリアスはオモチャのように軽い銃を、不思議そうにいろんな角度から眺めていた。カリカも同様だ。

「ヨウの銃とぜんぜん違うな」

カリカはステルス銃に銃口がないことを指摘した。

「神経に作用する武器だからな」

「ふーん」

カリカは本当に人を倒せる武器なのか疑っているようだった。真実のところ、ヨウのグロツクよりもよほど恐ろしい武器なのだ。

サイン、外交官といつもの三人組みが乗ったAPは、静かに宙に浮き、機首を東に巡らせた。

機内のコクピットにはほとんど何も無い。そのシンプルさが、逆に洗練されたテクノロジーの存在をヨウに感じさせた。

サインは腰掛けた椅子を巡らせて背後のヨウたちに寛ぐように命じ、椅子をリクライニングモードにして瞼を閉じた。

帝国の外交官も覚悟を決めたのか、だいぶ寛いでいるようだった。

ヨウは壁の窪みに仕込まれた給水マシンで水を汲んでみせ、外交官にも手振りで勧めた。外交官は首を振り、無言のままカーゴスペースの小窓から外を眺める。

ヨウは外交官が聞き耳を立てているのを承知の上で、エリアスたちと同盟の件で話しかけた。

「帝国とテクサカの同盟なんて、想像もできないわ。白月がどれ

ほど恐ろしい人たちだとしても、帝国貴族が納得するわけないですもの」

カリカも同調する。

ヨウはまた別の意見を持っていた。

「そもそも、帝国とテクサカが同盟したところで、白月には到底歯が立たないよ」

心もち声を低めて付け足す。

「いくら魔王がサジタリウスのテクノロジィを使えるといっても、軌道上の敵には手が届かないと思うよ。核攻撃されたら、魔王城だって消し飛んでジ・エンドだろうし」

そのくらいのごときは、白月の連中ならあっさりやってのけそうな予感がした。

「たった一度のカクコウゲキである魔王城が粉微塵になるのか？」

カリカはまだわかっていないらしい。

「ああ。まあ、恒星船の形は残るかもしれないけど、誰一人生き残らないと思う。トリプティック1万発が一度に押し寄せるようなものだからな」

それとも100万発だろうか。

「それでも、何とかしないと」

「ドゥーガル皇帝は宿敵テクサカと手を結んで、そこまでして帝
国を救おうとしています」

そう、皇帝にあれだけの柔軟性が備わっていないければ、どの馬
の骨とも知れぬヨウを使おうとはしなかっただろう。

「さすがの皇帝陛下も、彼我の力量差までは読み切れないでいる
のかもしれませんが。もし俺がアドバイスできる立場なら、白月の要
求をまず飲んで、それから反撃の機会を探りますね」

「そう……」

エリアスが無念そうにつぶやく。

帝国に加えて、テクサカの命運まで心配しなくてはならないのに、
これ以上悩みを増やしてもらいたくなかった。特に真面目なエリア
スの心配事は。

仮眠をとっているかのように装っていたサインが、背中を見せた
まま振り向かずに割り込む。

「ひよつとすると、余計な心配かもね」

全員がサインに注目した。

「白月のやつらがどんなに間抜けだとしても、13番目の衛星が
あと39年足らずで地上に落下することくらい目をつぶっていても
わかる。あいつらがアルトゥリ・ムンディに興味があるのだとした
ら、放置した方がいいのかもしれない」

しかし、それは幾重にも重なった仮定が正しければの話だ。もし白月が悪意を持つ連中だったら、帝国もテクサカも地獄行きだ。地球に来たフィデスのような極悪異星人ではないという保証もない。

ヨウの考えに、サインは賛意を示した。

「その通り。だからわたし自らが動いているの。潜在的な脅威には、直接的に接触してみるのが戦略的な最適解」

サインが急に押し黙った。ヨウもまた同じように黙る。

ほぼ同時にAPのコクピットが粘菌の一種であるかのように変形していく。

サインが座る椅子も変形し、体を包むような形状で落ち着いた。

「全員座って。急加速するかもしれない」

コクピットに映る抽象化された画像は、ハイテクに慣れていない者の目にも明らかなくらい、何か良くないことが起こっていることを暗示していた。

「未確認飛行物体が近付いてる」

ヨウもAPのAIが提供するデータを感じながら、まどろっこしく感じられる自然言語でエリアスたちに状況を説明した。サインは全然説明する気はないらしい。

サジタリウスに残ったエルモの思考もヨウの頭に浸透してくる。

エルモの方が先に軌道上から降下する飛行物体を探知して、サインに教えてくれたのだ。

「加速！ 席について！」

獲物を探すスライムのように蠢き、守るべき人間を探る椅子に驚いたのか、帝国の外交官がひつとうめいて飛びのいた。

「早く！ 白月のミサイルが近づいてる！」

鋭い警告の叫びに気付いた外交官とヨウの視線が合ったそのとき、外交官は巨人に殴られたような勢いでカーゴスペースの奥に飛ばされ、何かがぶつかる湿った音がした。

アクティブ消音を止めたのか、それとも消音しきれないのか、轟音が周りじゅうから押し寄せてくる。

エリアスたちが無事かどうか確かめることもできない。指先を上げることにすままならない程に重くなった身体が悲鳴をあげる。

警告音が響くと同時に、座席から投げ出そうという意図すら疑われる大加速がヨウの身体を左右に揺さぶった。

狂ったようなAPの機動は、永久に続くように感じられた。

ミサイルの接近警報と同時に、戦闘時反射機構がサインの意識を生体のそれよりも遙かに高速な機械のそれに近づけた。脳が処理す

る問題の多くがAPのコンピューターに移管され、サインの意識の大部分がコンピューターの中に再構成された擬似生体脳環境で働きます。

本来苦痛の多いプロセスであるが故に、感情コントロールサブリーチンが働き、擬似的なエンドルフィンがサインの意識を妙にハイな多幸状態に遷移させた。

サインが好戦的な幸福感に浸されたせいで両手の指を興奮気味にワキワキと動かすのと連動して、APの可変角エンジンが生き物のようにのたうつ。

(もっと速く)

サインの要求に機体は応えた。

熱月から導かれたエネルギーがじゃぶじゃぶ投入されたエンジンは、ほとんど超音波に近い作動音を撒き散らして機体を前へと推進する。上空から迫るミサイルは、赤外線軌跡を残して地上に激突した。

満足感がサインの心に閃いた直後、すぐに第二波がAPの頭上に迫る。

今度は4発。これはミサイルではない。APの予想進路上と被さるように、低軌道から放たれた小さな矢。

サジタリウスのセンサーが低軌道の赤外線マップを転送してきた。巧妙に隠された低軌道衛星が矢の発射台だ。

APは音速の3倍余りの速度で高度をとる。

包囲するように迫る白月の矢が突如分裂し、霧に似た無数の二ードルに変化した。

サインは　　というよりサインと半ばは一体化したAIは急降下しつつUターンし、背面飛行を経て最初の進行方向とは270度の角度で離脱した。

APの構造上最も弱いエンジン接合部の応力が限界近くまで上昇した事が、焦燥感を伴ってサインの意識に通知される。

サインが警告に気づいた時には、カーゴルームの生命反応が3人に減っていた。

悔やむ間もなく、今度は機体背面の温度が異常値を示した。何らかの電磁エネルギー兵器だ。

光速で照射される電磁波を避けることは、狭苦しい大気圏内ではほとんど不可能。窮余の策として、空気による干渉を避けるために針のように長大なワームトランス・シールドがAPを包む。

高速で機動するAPをピタリとつけ狙う電磁波のビームがシールドを構成する無数のワームホールの泡に飛び込み、エネルギーのゴミ捨て場とも言うべき空月に転送された。

サインは忙しい機動の合間で敵を評価した。

（こんな骨董品のAP相手に手間取るなんて、白月はわたしたちよりテクノロジー的に劣っているのか。いや、悔るのは禁物。あま

りこつという戦いに慣れていないと仮定すべきね)

果たして、やはり敵の、白月のテクノロジは侮れない水準にあることがはっきりした。APの進行方向に天から降ってきたのは、キラキラと光の粒をまとったワームホルの柱　ワームトランス・シールドでできた長大なカッターだった。

(馬鹿な、宇宙戦闘用の兵器を大気圏で使うなんて……)

絶望に駆られながら、耐久限度を越えた機動で破滅から逃れようとあがき　いきなり何の抵抗もなくAPの小さな翼がエンジンごと失われた。

エンジンは、ゆっくり離れながら本体と並行して飛び、視界から消え去った。

絶望を知らぬ戦術プログラムが、こういったケースの対応を編み出した。ワームホル・シールドの形状が変化し、片肺でもバランスを崩すことなくAPは体勢を立て直した。

しかし……このダメージでは白月の攻撃から逃れられない。

(次ので、もう　)

サインは心を満たす多幸福感が煩わしかった。ついに死ぬというのに、幸せの内にだなんて、最後の経験を無駄にしているように思えた。

光と音で人間の操縦者にうるさく催促するヤツがいた。戦術プログラムだった。

視野の中心にでかでかと、戦史で記録された大昔の戦闘記録が表示されていた。

サインは笑いたい発作に襲われた。

(こりゃあいいね、AI、これを試してみる)

間髪を入れずに転送機能をオフにしたワームトランス・シールドが傘のように広がり、APはつんのめるようにして減速する。

機体の奥の方　おそらくワームトランスデバイスの本体がある辺り　が伝達された応力に耐え切れず、恐竜のわめき声に似た破壊音を放出した。

(あ、ヤバイかも)

強烈な減速に恐れをなしたあと、およそフトエルも飛んで、APは木々の茂る谷に墜落した。ワームトランス・シールドが最後まで生きていたことは、とりもなおさず幸運なことだったと言えよう。

7 - 6 超重っ

自分がサンドイッチの具になった気分を味わうハメになる日が来るとは夢にも思わなかった。こうでもしなければ、ヤワな血肉でできた肉体しか持たない人間は、強烈な加速に耐えられなかった。

それがわかっていても、イジメに近い仕打ちの印象は拭えないところだ。

急に緩んだ座席から這い出して、斜めの床に腰を下ろす。

後ろの壁の赤黒い染みは見なかったこととして、エリアスたちの方に這い寄る。そしてカリカの振り乱された髪をかきあげ、彼女が無事なことを確認した。エリアスはいま意識を回復した。

「首が……」

うなじを押え、エリアスも床に座った。

次いで、カリカが小さな叫び声と共に目覚め、すぐに眉間に皺を寄せて首をひねった。

「いったた」

カリカの様子にエリアスがクスクス笑う。

「死ぬかと思った」

カリカの呟きに、ヨウも笑う。

カーゴルームの四隅が割れ、心なしか歪んだ室内を眺めて、ヨウの笑いは更に大きくなった。死が肌をかすって去っていったときに笑うなどおかしな話だが、抑えられなかった。

エリアスたちも同じ衝動に駆られているようで、片や口許を押え、片やニヤニヤ遠慮のない笑みを浮かべていた。

室内の照明が赤に変わり、人を急き立てるような緊張を孕んだ人工音声が生内に響いた。

「警告。本機から直ちに離れてください。警告」

機体の壁が軋みながら開き、草と土の香りがどつと機内に流れ込む。漏れ入る陽光は、外がまだ早朝であることを教えていた。

大破した機首からも光が漏れる。

カリカが床を器用に滑り、サインの座席に手をかけて止まった。座席の中をのぞき込み、ヨウに視線で助けを求めた。

「気を失ってる」

ヨウは座席の隙間から滴る赤い液体に気付いた。

「まずいな」

サインの体内のインターフェイスがヨウのと同じものだとしたら、インプラントが速攻で覚醒を促しているはずだ。それなのに目覚めないということは……。

座席から引きずり出そうにも、どこにもそれらしいレバーがない。しばらく探しまわって、ようやくインターフェースでAPのAIに命じることを思いついた。

サインの座席が緩むのを見て、ヨウはほっとした。カリカと協力して座席から引きずり出そうとする。

「ううん……」

サインのうめき。

いくらかほっとして、カリカと視線を交わす。

「せーのっ」

ずるり、とサインが床に落ちる。破片がかすったのか、むき出しのふとももに傷を負っていた。

カリカがサインの傷口に直接触れないように注意しながら、そこを開くようにして探り、傷の奥に破片が突き刺さってないことを見て取った。

「何も残ってない」

「あ、ああ。痛そう」

ヨウには直視し難い光景だった。

「警告。本機から直ちに離れてください。警告」

執拗に繰り返される警告。

「ああうるさい。ヨウ、そっちを持ってもらえる？ 外に運び出そう」

お姫様抱っこなど到底無茶としか思えない、重量たっぷりの体を引きずって機体の外に運び出した。

「重っ、超重っ」

「そう重い重い言うなよ……」

たしなめるカリカ。

「まあいいじゃん気を失ってるし。いくらデカ女だからって重すぎだろ」

カリカはひきつった苦笑いを浮かべた。

因みにカリカも大柄な方だ。

そのとき、ヨウの手首ががっしりとつかまれた。

「重くて悪かったな」

「あ……」

ヨウは顔を青ざめさせる。

「違うんです。誤解です」

ヨウの言い訳を無視し、サインは立ち上がろうとして顔をしかめた。

足の傷を軽く点検して大した損傷ではないことを見て取ると、あとはリペアー機序に任せてしまおう。

魔王様はヨウに向かって怖い顔をする。

「本来なら懲罰房で“カムサツカの青年体操”を無限ループで味わってもらいたいところだけど 緊急事態だから後でいいわ。逃げるわよ」

「APが爆発するんですか？」

サインは首を振り、「白月が追ってきてる。あの森まで走るわよ！」と言った。

雑草だらけの荒野は足下が悪い。ヨウはフーガで飛んでいけないものかと提案する。

「だめ。エンテレケイアは奴らに探知されるかも きっと探知されるから。それに、初心者がフーガを使いこなすのはかなり難しいわよ」

サインはインプラントに命じたのだから、もう痛みを感じていないようだった。

競歩ほどのスピードで森の端にたどり着いた頃、サジタリウスの

エルモから音声モードで通信が入った。

「やっと繋がった。隠れているか？ APの着陸地点付近に飛行物体が着陸した。なんだって？」

「正確な位置はわかる？」

「わからん。降下途中で見失った。集合知性の推定だと、すぐに白月がいる。気をつけてくれ」

肩に手を置いたのはカリ力だった。

「なに？ いまエルモと通信」

「しつ。聞いて」

カリ力は人差し指を立て、耳を澄ます。

強く弱く、耳鳴りのように響く重低音。それは、消音の気遣いをしていないAPの轟音に似ていた。

大破したAPの方に注目していると、インターフェースが光学迷彩では消せないエンジンの赤外線を捉えた。白月の航空機が残骸を調べに来たのだ。

ヨウたちが息をつめて見守るなか、地面が焦げ、何かを着陸したことが察せられた。

やがてAPの残骸が滲んだように歪み、そこに人の形が現れた。すぐに二人目も出現する。二人目は最初のより一回り小柄だった。

「あれが白月？」

「頭が大きい。与圧服でしょ」と、サインが短く言った。

白月は、大きな白い頭部を揺らしてAPの残骸に足を踏み入れていった。

A Pの残骸に白月が侵入した。彼らが機体に残された死体を見れば、すぐにそれが帝国人の骸だということに気付くだろう。

ヨウはサインにA Pを遠隔で爆破できないのか聞いてみた。

「結論から言つとできるけど」

サインはA Pとの距離を目測して、「無理ね」と断る。

「今なら俺たちを襲つた白月に一泡吹かせられますよ」

「それはそうだけど、爆発威力が予想以上に大きいかもしくないの。ワームトランス・デバイスを暴走させたら、わたしたちだってタダじゃすまないかもしれないってこと」

「……じゃあ止めときましようか」

「でも閉じ込めることはできる」

サインがインターフェイスに何事か命じた。

残骸のようなA Pは忠実に命令を受領し、カーゴルーム側面の開口部が閉じる。

白月の航空機が光学迷彩の隠れ蓑から姿を現し、いくらか離れた位置まで移動した。その航空機は白を基調とした優美なフォルムを有してはいたが、ところどころ汚れがにじんでいる。

サインは一瞬の沈黙の後に、心配を煽る事実を披露した。

「あんな形式の航空機はリストにないわね。サジタリウスの集合知性は、白月の航空機がわたしたちの文明の産物ではないと結論付けたみたい」

「つてことは異星人？」

「いいえ、あの与圧服みたいなの見たでしょ？ わたしたちの人間のフォームをしていた点から、奴らは異星人じゃない。わたしたちはいくつかの恒星系で顕微鏡レベル以上まで進化した生物を発見したけど、一つとして見慣れた形の種はいなかった」

「じゃああいつらは……………」

「たぶん……………いや、わからない。とりあえず、連中はしばらく外に出てこれない。今のうちに移動するわよ」

サインが先頭に立ち、森の奥へと進路をとった。

森の中では、下生えが邪魔になったせいで驚くほど距離をかせることができなかった。歩き続けて3時間あまり、近くに小さな滝がある川のほとりに到着した。

誰も口をきかないが、ここで休憩すべきだということは全員がわかっていた。

大きな一枚岩の上に腰掛け、ヨウは高く上った太陽を見上げた。白月に探知される恐れがあるから、魔術の使用は一切厳禁。煮炊きの火を点けることすら満足にできない有様になっていた。

川の水で喉を潤し、ヨウはサインに話の続きを求めた。

「そう、奴らは人間。少なくともヒューマノイドに分類されることは間違いない」

サインも疲れているのか、口調はいつも以上にぶっきらぼうだった。

「わたしは、白月の連中がわたしたちと同じ恒星間探検隊の生き残りだと思っていたの。でも、彼らは決まった符丁に返信してこなかった。それでもなお、もしかするとわたしたちの時代よりも少し後の時代の探検隊なのかもしれないと、淡い期待を抱いていた。それなら、通信方式や符丁が異なってもおかしくないものね。……ええ、わかっているわよ、そんなことほとんどあり得ないって。何世紀ものスパンで実行される恒星間探検事業において、共通の通信基盤を放棄するなんて考えられない」

サインは続けた。

「じゃあ、連中は何なの？ ひよつとすると、母星を見物に来たどこか遠くの植民星の子孫？ それならいきなり核攻撃で母星を傷つけたりするものかしら？ いやいよ信じがたいことだけど、サジタリウスの集合知性の言うとおりなのかもしれない」

サインはヨウの目を見て言った。

「彼らはお前の」

轟ッ。

すさまじい衝撃が走り、苦痛をこらえて爆風に叩かれた体を起こすと、頭上を圧するように航空機が浮かんでいた。

白月の航空機だ。

正面から見るその航空機は、どこか昆虫を連想させた。

エリアスとカリカはヨウの前に進み出て、デフレクトの詠唱に入る。どうやら、今のヨウがエンテレケイアの使い手だということに失念しているらしかった。

「無駄なこと」

その声の主は背後の絶壁　滝崖の上から降り注いだ。

そこには、APを調べていたのと同じ、白い与圧服……というより、ボディスーツと呼ぶべき装備まとった白月が立っていた。

ヨウは戦闘時反射機構が発動しようとするのを封殺した。それでも、右手がステルス銃の脇でピクピク震えるのを抑えられない。

「一ヶ所に固まらないで。あたしはエリアスと組む。ヨウは魔王様と組んで」

強力な攻撃魔法で一網打尽されないように分散して、攻防揃った

二人組みを最小単位に敵に相對する。これは帝国における魔術戦術の基本形だ。

傭兵出身のカリカがみせる落ち着きぶりに、ヨウは感嘆した。

ボディースーツの白月が、まるで階段を下りるように何気なく、ス
トンと滝崖から落下した。高さ20エルはあるというのに。足のバ
ネを利かせての着地だったが、そんな芸当までもな人間にできるは
ずはなかった。

白月を間近で観察できたのははじめてだ。

明るい陽の下に立つ白月は 女性だった。体にフィットしたボ
ディースーツの形からして、サインより、いやエリアスよりも小柄な
女。頭の部分はフェイスシールドに覆われた上に逆光になって、中
の顔は確認できない。

白月の女は、風鈴が鳴るような涼やかな声で言う。

「念のために聞くけど、あんたらフィデスとお友達じゃないわよ
ね」

返答を聞くまでもなく、女は既に自分の答えを持っているように
思えた。

「なんだって？」

ヨウは空耳かと疑った。

サインが一步前に出る。

「そんな友人は記憶にないわね。それはいいけどさ、お前たちこそ何者だ。我々になぜ干渉する」

「我々は軍事基地の設置を求めているだけ　　と言っても信じてもらえないでしょうね」

「当たり前だな。お前らもワームトランスを知ってる以上、アルトウリ・ムンデイのことを知らないはずがない」

白月の女は、高慢そつに腰に手を当て答えた。

「アルトウリ？　ああ、タップのことね」

「やはり知っていたか」

「あんたも知ってるのね。そつちこそ何者なの？　オムニ帝国とかいうローテク連中とは、ずいぶんかけ離れたご大層なテクノロジーをお持ちのようだけど」

「アルトウリ・ムンデイをどうする気だ」

白月の女は肩をすくめる動作をした。

「さあ、どうするんだらうね」

「力づくで聞いてやるうか」

サインは両足を肩幅に開き、凶暴な眼つきでボディスーツの白月の力を押し量っているようだった。

何かに躊躇するように左右に揺れながら浮遊する航空機から、男の声が降ってくる。

「おい、やめろ。命令違反だぞ」

小柄であるにも関わらず、ヨウたちを睥睨するように仁王立ちになった白月の女は、同僚らしい男に向かって叫んだ。

「命令？ 命令は5thEの潜在的未活用資源の調査でしょ？
いま実地検分中だから黙っていて！」

「悪い癖だぜまったく。俺は上空に退避する。下手打つなよ」

「さつさとケツまくりなさいよ。わたし一人で充分なんだから」

白月の航空機は、その言葉通りに上空に離脱した。

「大した自信じゃないか、白月のお嬢さん。念のために教えとくが、わたしら四人ともエンテレケイア使いだ」

正確にはそのうち二人は魔術師なのだが。

4対1だと聞いても、白月の女は動じた素振りもみせない。

「ほー。なるほど、エンテレケイアか。ギリシャ語とは、マケドニア文明の末裔にはお似合いね」

「貴様……そうか、月のライブラリを読んだな」

「ええそう。大したものね、あなたたちの文明。感動しちゃったわよ。だって、わたしたちのローマ文明より2000年も先に蒸気機関を発明したんですもの」

「ローマ。聖歴1800年頃に滅びた都市国家の名だな。それが何だというんだ」

「まあいいわ。あなたたちが足踏みしている間に追いつけたんだから。あんた、恒星間探査の生き残り、そうでしょう？ だったら味あわせてくださいな、最盛期の5th E文明の力を」

白月の女の周りが同心円状の光に満ち、蛇のように地を這う電撃が走った。

すんでのところで、ヨウの周りに真紅のワームトランス・シールドが展開される。

戦闘時反射機構がヨウの意識に作用することで、ヨウをとりまく空気が粘性を持つようにすら感じられた。インターフェースの機能は、時間が相対的な存在だと実感させてくれる。

「カリカとエリアスを頼む」

言われるまでもなく、ヨウは彼女たちをシールド内部にかくまっていた。攻撃担当にサインが立候補してくれたのを、ヨウは感謝の気持ちで眺める。

サインが加速状態のままステルス銃を放つ。インターフェースの作用により、視野に合成されたステルス銃のビームは、空しく白月の女が直前まで居た空間を切る。

突如、サインの睫毛に触れるほど近くに白月の女の顔があった。

「そのおつきな体じゃ、わたしの加速倍率についてこれるわけないじゃない」

舌打ちし、とっさに地を蹴ったサインに向かい、白月の女は滑るように平行移動してついてきた。

サインは重月にアクセスしてグラヴィティを呼び出す。同時に自分の頭上にも重力波を導き、重量ゼロになった身軽な体で垂直に上昇した。飛行を司るエンテレケイアのフーガだ。

頭上高く飛び上がったサインに向かい、白月の女がホルスターから抜いた銃を向けた。発砲とほぼ同時にサインの周囲は真紅のシールドが開く。それは帝国の魔術師がテルミヌスの力を借りて生み出す結界と本質的に同じものだ。

サインは長い間練習してこなかったことを後悔する時間すら惜しみ、矢継ぎ早に次のエンテレケイアを構成した。

フーガに代わってグラヴィティ。

サインの体は地上に向かい石のように落下して 彼女の伸ばした掌から光芒が地に降り注いだ。熱月から得られたエネルギーが、ワームトランスを通して全てを焼き尽くす業火を成した。

ヨウの網膜に映ったサインの攻撃は、紫色の残像になって目に残った。

爆煙に覆われた地上に落下したサインは、戦闘態勢のまま油断なく左右を見回している。そして、直撃したはずの彼女の攻撃が、白月の女に何のダメージも与えていないことを悟った。

爆煙を割って、真紅の球体が姿を現した。それは明らかに　サインやヨウのものと同じワームトランス・テクノロジーの産物だった。

フェイスシールドからのぞく白月の女の唇が、笑みの形になっているのをサインは目撃した。

「じゃあ、今度はわたしの番ね」

身構えたサインの背後から、強烈な一撃が襲った。

周囲の空間から、次々と火炎が“湧き出し”てサインを襲った。

目の前で展開される激しい戦いに、ヨウは手を出すこともできない。ちよつとでも攻撃しようとするれば、うるいさい八工でも払うように蹴散らされることだけははつきりしていたからだ。

その気持ちはエリアスたちも同じだったらしく、厳しい眼つきで戦闘を観察していた。

ひとときわ大きい火球が、サインを包むシールドを飲み込んだ。というより、シールドの内側から破裂すると、エリアスがあえぎ声をあげた。カリカは歯軋りして指を曲げ伸ばししている。

同時多方向からの攻撃魔法飽和攻撃　そんな芸当が可能だということすら、ヨウは想像もしていなかった。

すると、ほつとしたことに、先ほどの攻撃から生還したらしいサインのシールドが、炎の隙間に垣間見えた。あの攻撃からどうやって助かったのだろうか。

「ヨウ、わたしたちも助太刀しないと」

カリカは居ても立ってもいられないというような早口だ。

「だめだ。俺たちにはとても太刀打ちできないレベルだよ、あれは」

そのときヨウの耳に、雑音混じりの通信が届いた。

「悔しいけど、こいつハツタリかましていたわけじゃないみたいだ。わたしのシールドが壊れるのを見ただろう？ あの女、どうやってかわたしのシールドの内側にフォームホールをくり抜けるんだ。そんなこと不可能なのに！」

サインの荒い息が、苦境を物語っていた。サインは切羽詰ってヨウに助けを求めた。

「こんなべらぼうな敵があつていいものか！ 何か案はないか？」

案・・・・・・・・案・・・・・・・・。

残念ながら、ヨウはエンテレケイアのような超ハイテクに触れるようになつたばかりの原始人に過ぎず、そんなもの思いつくはずもない。

それでも必死に頭を捻って困難な課題に挑戦した。

「では、サイン、俺が敵をシールドで固定するから、三人でトリプティックを」

「何を相談しているのかな？」

その声は、同じ規格で守られているはずのインターフェース越しに、耳元での囁きに似た鮮明さで届いた。

その声音ににじむ冷酷さに、心臓が縮み上がる。

「きさま……どうやって割り込みしてきた？」

白月の女は含み笑いを漏らした。

「ふふっ。まだ気付いていないのね。あんたたちのテクノロジーに開いた重大な欠陥に。ところでサインさんとやら、あなたのインターフェースは脇がから空きね。しっかり肘を脇につけないと、インターフェースにウィルスお見舞いしちゃうわよ」

白月の声は相変わらず涼やかだ。

だが、どうしてだろう。ヨウはその声に胸の奥がざわつくのを感じていた。

この声、どこかで聞いたことがあるような。

そのとき、コツンと木槌で石を叩くような音が、ヨウのシールド内部で生まれた。頬を撫でる風は熱した金属の臭い。

前を見ると、白月の女が銃口をヨウたちのシールドに向けて近づいてきていた。

ポコン。

トリガーにかけた指が僅かに動くのと、ヨウのシールドが何かに貫かれるのは同時だった。

「力の差がわかってもらえたかしらね」

シールドが放つ赤い光が、シールドの直前まで歩を進めた女のフェイスシールドを照らした。シールド越しに銃口がヨウの方を向いたそのとき、弾かれたようにヨウには、銃をつきつける女がまさに飛び上がったように見えた。

影になったフェイスシールドの奥が一瞬だけ赤い光に照らされた。その赤と黒が織り成すモノトーンの表情は、紛れもなく驚きを示していた。

その顔は もしかすると ひょっとして まさか。

ヨウは一步、また一步と白月の女に近づいた。

そのまさかだ。

白月の女がグローブをはめた無骨な手でフェイスシールドを外すと、はらりと両肩に黒髪が落ちた。

赤い光に照らされているのは、小柄な黒髪の少女。

少女の手からフェースシールドが地面に落ちた。

ヨウも少女の顔を信じられないという表情で見詰め、心の中で夢をみている可能性を検討し、ついには目の前の少女を現実と認めた。

ワームトランス・シールドを隔て見詰めあう二人に、エリアスもカリカも、そしてサインもただならぬ気配を察した。

目尻に涙を湛え、少女は囁いた。

「お兄ちゃん？」

8 - 1 再会

「千華・・・・・・・・」

あの日、ヨウがこの世界に飛ばされてきたあの日、届かなかった手。

いつしか、ヨウの目尻にも光るものがあつた。

シールドを消し、ヨウが震える指先を伸ばすと、千華が伸ばした指先と触れ合った。

「お兄ちゃん！」

「千華、お前・・・・・・・・生きてたのか」

あの日、妹は生屍の群れに突っ込んでいった。あの状況からして、妹が無事などまず考えられなかった。

ヨウの胸から顔を上げた千華は小指で大粒の涙を取り去って、「お兄ちゃんこそ、よく生きていたわね」と微笑んだ。昔のままの笑顔がまぶしくて、ヨウは言葉に詰まる。

そして妹は首を傾げた。

「あれ？ そついえはお兄ちゃんもつすぐ還暦でしょ？ ずいぶん若いじゃない」

「いや、お前こそな」

「わたし？ ああそうね。24で不老化処置を受けたもの」

「じゃあ、お前ってやつぱり実年齢57歳!？」

妹はヨウのみぞおちを軽くパンチした。

「うるさいわね!」

昔のままの妹だった。

サインが不審そうに表情を曇らせ、千華の後ろに居心地悪そうに立った。

「ニシミヤ青年？ お兄ちゃんって……もしかしてお前の家族なのか？」

「そうです」とヨウが答える前に妹が生き生きと輝く顔で答えた。

「ええそう、わたしは西宮千華。西宮耀生の妹よ」

「妹って……じゃあ、ヨウの世界からあなたも？」

エリアスに向かって、千華は遠慮とは無縁の口調で答えた。

「もちろん出身は地球よ。でも、この5thE世界にわたしの故郷から直接来たわけじゃないわ」

「5thEって?」

「はあ? 5番目の地球って意味に決まってんじゃない。わたしは故郷から平行世界伝いに4thEから“転移”してきたの」

「どうやら、ヨウが去ったあとの地球では色々なことがあったらしい。」

ヨウは祈るような気持ちで妹に尋ねた。

「クソツタレのフィデスはどうしたんだ?」

「ああ、あの血吸い連中なら1stEからとつくに叩き出したわよ。その代わり、地球は放射能まみれクソまみれの泥タマになっちゃったけどね」

妹の口の悪さにたじろぐヨウ。それを恐るべき勘で察知した千華が言う。

「今更この口は治らないわよ。それにわたし宇宙軍の異星技術将校(AT)だから、しょっぱい宇宙船で平行世界から平行世界へ飛び回ってるうちにお口も***もすっかりお下品になっちゃたっわけ」

クククと笑う千華に、エリアスどころかカリカまで閉口していた。

「あんたたちも悪かったわね。フィデスの航空機かと思って過剰防衛しちゃったみたい」

千華はてへつとアニメキャラじみた恣意的拳動で謝った。

その余りにも適當過ぎる態度に、サインも怒りを通り越して呆れていた。

退避していた白月の航空機が、頃合良しと判断したのか、地上に舞い降りてくる。千華がそれに気を取られた隙に、サインはヨウに顔を寄せてたずねた。

「お前の世界ではみんなあなののか？ それともお前たち兄妹だけの特質か？」

千華があっけらかんと語ったところによると、千華は貴秀叔父さんの研究所であっさり生屍になってしまったそうだ。まあ、のちに逆ソワー化技術が開発されたことで治療されたわけだが。

2009年頃から人類とフィデスの戦争は激化の一途をたどり、ハイテクを駆使するフィデスに一時は敗北寸前まで追い詰められたらしい。

人類滅亡までのカウントダウンが刻まれていたそのとき、貴秀叔父さんもその一端を担っていた研究が実を結んで、2ndEと呼ばれるようになる平行世界に助けを求めたそうだ。

2ndEの地球は、フィデスがいないことを除けば、戦前の地球とほぼ同じ歴史をたどった世界だった。

フィデスとの厳しい戦いで傷つき、フィデスから奪ったテクノロジィで武装する残忍なハンターになっていた1stEの人類は、無

邪気で温和な文明しか持たない2ndEを同盟相手とは見なさず、ただ相手が“弱い”という理由で侵略した。

首尾よく占領した2ndEの豊富な資源を湯水のように使い、ついには1stEを完膚なきまでに破壊する形でフィデスを太陽系から追い払った。

以後、人類はフィデスを追って戦線を地球近傍から恒星間空間に移し、さらにはフィデスの量子テクノロジーを磨いて平行世界にまで戦線を拡大した。

次に訪れた平行世界3rdEでは、魔法のようなテクノロジーの高みで突然死したかのうように、無人の美しい世界が広がっていた。

4thEは西暦1962年に歴史が止まった死の世界だった。

人類はフィデスや3rdEから得たテクノロジーを素早く吸収し、広大無辺な宇宙と、それ以上に広大な平行世界で存分に暴れられるだけの知識と技術を手に入れた。

今や人類はフィデスを追いつめ、奴らの母星を見つけ出し、大量破壊兵器で“消毒”することだけを生きがいにする復讐者になった。

人類にとつての聖戦は、いまこの瞬間もで続いている。

フィデスが後悔と恐怖をこめて、人類を“追跡者”と呼ぶようになったのも、故なきことではないのだった。

千華は望外の幸運に陶然とした表情でヨウに語った。

「わたし、生屍から人間に戻れたとき、自分の体を見て泣きに泣いたわ。一度は死のうとまでしたのよ。でも、ちょうどその頃に平行世界への扉が開いた。わたしこう考えたの。どこかの平行世界できつと、お兄ちゃんは生きていると。信じてた。信じるしかなかった。だからいくつもの世界を超えて、お兄ちゃんを探し続けたの」

そして、ヨウの耳元でささやいた。

「今回のミッションはスリミアのタップをこじあけるまで。あのエネルギーがあれば、5thEの開発もどーんと進むわ。そしたらまとめて休暇をとるから、わたしの“家族”に会ってよ。きつと驚くわよ」

「そうか、お前結婚したの？」

千華は首を振る。

「してないわよ」

「でも“家族”って……」

妹はかわいらしく「秘密はくと」とはぐらかした。

「2ndEのオーストラリア東海岸に家があるの。いいところよ、あの世界は。まあ、誰も彼も軟弱なのが玉に瑕だけだね。信じられる？ わたしたちが2ndEにお邪魔したとき 確か2012年だったかしらね。大陸中国が日本を追い抜いて世界第二位の大国になつてたのよ」

ヨウは適当に相槌をうつ。そのとき、ふと重大な問題を思い出した。

「そうだ、お前に知らせておかないと。聖歴3767年に衛星が落

ヨウに全部言わせず、千華は話の腰を折った。

「あの衛星なら気にしないで。いま宇宙軍工兵が修理しているところだから。ニューズによるとあの衛星の不調はタップのせいじゃなくて、衛星の内部機構の問題らしいわよ」

「そうだったんだ。アルトウリ・ムンデイ側の問題じゃなかったのか……じゃあさ、テクサカがこれまで1世紀以上してきたことって……」

千華は何か興味深い諧謔でも発見したかのように笑みをみせた。

「まあ、人生そんなもんよね」

あの準天頂衛星の軌道高度維持機能が修理できそうになれば、公転軌道にポイしちゃえばいいんだから。

そう事もなげに言い放つ千華は、そんな些細なこととどうでもいいと思っっているようだった。

「あの衛星がどうなるにせよ、わたし来月には2ndE行きの連絡船で家に帰るから、一緒についてきてよ。もしそれに間に合わないくても、これから宇宙軍が大挙して5thEにやってくるから、軍の連絡艦で帰る機会はいくらでもあるし。一緒に来てくれるでしょ

「？」

「ヨウは頬の内側を噛んだ。」

千華の表情が若干曇る。

「どうしたの？」

「これから、この世界はどうなってしまうか知っているのか？」

「ええまあ。公式工程表だと、来年早々には5th艦隊が編成されて、最初の報復艦隊がフィデスを探しに出るわ。この世界は宇宙軍の寄港地として整備されるでしょうね。大丈夫大丈夫、汚染が酷い工場なんかは、ほとんど月に建設するから。」 たぶん

「そうか………帝国とテクサカはどうなる？」

「ああ、惑星ローカルの国家はわたしたち地球連邦に統合するわよ。なに、そんなこと気にしてるの、ひよっとして」

心配していることが顔に表れていたようだ。千華はフォロー試みた。

「大丈夫だつて。地球連邦もローカル国家の文化にまでは手を出さないから。欲しいのは専ら人的資源と軍事協力なの。まあ、連邦税と戦時特別税はもってかれるけど、わたしたちのテクノロジーの恩恵に比べたら屁みたいなもんよ。他には デメリットといえば、学校で事あるごとに連邦国家を歌わされることくらいね。The Earth Federation which extends over the many world! ってやつ」

徴税権を奪われ、基地を設営され、人的資源を好き勝手に利用される。これ以上ないくらい完璧属国じゃん。

サインやエリアスも聞いているというのに、よくも言えたものだった。

ヨウの知っている、活発だけど優しかった妹はどこにいつてしまったのだろうか。

「地球連邦とやらは、血も涙もないように聞こえるな。国も、その国民も」

「あら。ああ、そうかお兄ちゃんはその地獄ライクな時代を経験してないから 軟弱にもなるのかな。わかった、兄妹のよしみよ、正直に言っわ。帝国もテクサカも近日中に地球連邦の管理下におかれる予定よ。それに月のいくつかは軍が接收して、軍艦に改造されるはず」

「月を？」

「そうそう。あんだだけの鉄の塊がおあつらえ向きに軌道上にあるんだもの。利用しないとモッタйнаアイ！」

「13の月はエンテレケイアに必要なものなの？ っってことは、魔術師はもう魔法を……」

エリアスとカリカが腰を浮かした。

「そんなことする気なのか！」

千華は蔑むような視線を彼女たちに向けた。

「全ては戦争に勝つため。嫌なら滅びなさい」

8 - 2 変化の配当

産業活動に伴う副産物に汚されていない空はどこまでも青く澄み渡っている。夜になれば、帝国人が“乳”と呼ぶ天球上の光の帯即ち“天の川”が、内側から光る雲のように地上を見下ろしている。

もつずいぶん昔のことだが、天にかかる乳が“銀河”であることを教えてくれた人物がいた。

ニシミヤ・ヨウ。

それが謎めいた人物の名だ。

異世界から流されたと自称した青年。

最初はこれまで嫌というほど見てきた、いかがわしいペテン師の一人かとも思ったが、ヒレンブランドの御仁の推薦だから謁見した。

ペテン師という先入観は予断だった。実際のところ、大当たりだったと言える。

帝国が先の大戦を辛くも生き延びる上で、彼が果たした役割は大きい。今もなお帝国は彼の恩恵に与っている。もちろんそうだ。ニシミヤが残したノートがなければ、蒸気機関や電磁誘導理論の完成に何百年かかっていたかわかったものじゃない。

夜空を切り裂いて黒々と伸びるいくつもの塔は、製鉄工場や製紙工場の煙突。遠くにひとときわ高く伸びつつある塔は、大金が投入さ

れた驚異のハイテク、その名も石炭火力発電所だ。

ドゥーガル皇帝は、珍しく半円形のバルコニーにお出ましになると、夜空を見上げ苦笑を漏らした。

既得権益を奪われ不平を漏らす貴族階級や、過酷な労働と独裁的な政治体制を嘆く一般国民から常に命を狙われ続けの毎日。皇帝なのに窓から外を眺めるのにも不自由するとは、なんたる皮肉。しかもこんな状態が半世紀近く続いているとなれば、乾いた笑い声を立てる以外にどんな反応をすればいいのやら。

40年前に魔王の襲撃で第一の側近を失ってからは、胸襟を開ける相手もない。

………思い返せば、あの頃は楽しかった。

ドゥーガルのどんよりした半眼に、夜空を流れる星の光が映る。

一つ、二つ、連続して三つ。

あれは流れ星なんかじゃない。明らかに、天から続々と舞い降りつつある、あの連中の仕業だ。

天空に居座るあの連中を“天人”と呼ぶ帝国人は、不死の皇帝による圧制を打倒する天からの遣いだとか、社会の急激な変化に怒り天罰を下しに来たとか、勝手なことをぬかしているようだ。

民衆とは常に勝手なものだとはいえ、もう少し自分の頭で考えろ、とドゥーガルは叱責したい思いに駆られることもしばしばだ。

突然居城の壁をぶち破り、無遠慮の概念を改革する勢いで目の前に現れた天人　地球連邦渉外官とやらと言葉を交わしたことがある。

それは宮廷専属の魔術師や衛兵の敵意を前にしても一向に動じない、それどころか、手を出せるものなら出してみると言わんばかりに余裕の薄笑いを浮かべた男女たち。

ドゥーガルは新しい真つ白な月を眺め、それを取ろうとするかのように手を伸ばした。

かつて、殺された先代の代わりに、毒にも薬にもならない人物としてあてがわれた皇帝の座。その後、飽くことなく続いた後ろ暗い行いの数々。

政敵を、仲間を、そして息子をも必要だからという理由で消し去ってきた。皇帝の交代劇に伴う流血に比べれば、一人が長く居座るほうがマシだと、自分を誤魔化しながら。

もう十分だ。

短期間で誇るに足る発展を遂げたことに自負を抱き、懸命に育んできたこの国を、まるで小器用なサル芸のごとくにせせら笑うのが天人の流儀ならば……連中による支配は過酷なものになるだろう。

しかし、新しい主人を民が、国民の大部分が望むなら　よろしい、くれてやろうじゃないか。もとより、そろそろ限界だったのだ。

民が要求する共和主義というものが言うほど素晴らしい物ならば、

私は自ら玉座を降りよう。天人の来訪は、同族相食む死の連鎖を断ち切る良い機会かもしれない。

無責任な人間にとっても、皇帝の地位は心をすり減らす過酷なものだ。少しでも責任感や希望を持っているなら、皇帝の地位は地獄にもなる。

天人の要求に対する返答期限は、今日の昼だ。

ドゥーガルは夜空の向こうで忙しく謎めいた活動をする天人への返事を、大きな喜びと奇妙な喪失感に満ちた心で温めていた。

またもや流れ星がスリミアの上をよぎる。

今夜はとても眠れそうになかった。

「嫌なら滅びろ」と言い放った千華のことを、エリアスとカリカは厳しい表情で睨む。

千華は他人の感情など全く気にかけてはいないようだった。

おもむろに現在時刻を声に出して読み上げ、ニヤリとする。

「ああ、もうとっくに時間切れね。オムニ帝国はわたしたちのものよ」

もう昼をかなり過ぎていく。天人による帝国への最後通牒の期限は過ぎていた。

千華がどこからか棒状のものを取り出すと、鮮やかな立体映像が肩の高さに出現した。現れたのは、幾つもの尖塔がそびえる大都会。宙に浮く映像には、“スリミアから実況中”と、なんと日本語で記されている。

スリミアの上空には大小の白い飛行物体が浮かぶ。青空をバックにしたその非現実的な光景は、ヨウにマグリットの絵画を連想させた。

いくつかの角度からの映像がせわしなく切り替わり、アナウンサーが早口でまくしたてる。

「ついさきほど、5thEローカルのオムニ帝国が連邦への帰順を表明！ どうするどうなる5thE世界の投資戦略！ 先日“マルチワールド資産運用術決定版”の出版で超話題の投資アグレッシヴアイザー、トーマス・金田さんにお話をうかがいます」

千華が「チャンネル4、11、19、33」と言うと、映像が分裂して幾つもの放送が映し出された。

中には、帝国や謎めいたテクサカ、それにモンスター種族のことが面白おかしくパロディされている番組も見受けられた。

5thEとの接触の様子は、2ndEでも報道されているようだ。

このようなスレた商業主義の極致にある文明がファンタジー世界に流入すれば、この世界はいつたいていどうなってしまうのか。ヨウの胸に宿る不安がみるみる膨れ上がる。

映像の一つには、地上から笑顔で手を振る三つ編みの少女が映っていた。質素な衣服を着た純朴そうな人族の少女。

あんな子を、カメラの向こうにいる何百万人もの金に飢えたすれっからしの人々が見たのかと思うと、背筋が寒くなった。

でも……あの少女を守ることはできない。

歴史は巡り、天地は変わるのが世の理だ。ヨウの故郷だってフィデスに蹂躪され、ある意味ではフィデスがもたらす苦境が、人類を早々と幼年期から卒業させてくれた。

テクサカとの戦争によって変わらざるを得なかったオム二帝国も同様、ヨウが端緒となった変化によって、多くの帝国人が苦痛に苛まれたことは疑問を差し挟む余地もない。

だが、工業化に向けてリフトオフしつつある現在の帝国の雄姿は、皆が耐えたその苦しみの配当だ。

個々人にとっては耐えかねるほどの悲劇が襲い、住み慣れた環境を追われても……苦しみの末にたどり着いた場所には、これまでとは異なる地平が広がっているだろう。

より遠く、より高い場所はたぶん理想郷ではないけど、そこにはより大きな展望が開けているはずだ。

ヨウは決断した。

転移してきてからずっと守ろうとしてきたこの世界を、仲間を守

り続けるのだ。それこそが一貫した行動と言えるだろう。

この選択が後悔すべき結果　デッドエンドに連なる分岐点だったとしても、それを後悔しない。

最終的な責任を取る覚悟があるのならば、いや、ある場合に限り、自分のやりたいことをやる資格がある。これは誰の言葉だったか

「人には自恃があればよい。その余は全てなるがままだ」

選択の結果は時が来ればおのずとわかるだろう。焦ることも後悔することも無い。

ヨウは千華に声をかけ、はっきりと一緒に行かない旨を伝えた。そして、状況の急変に困惑するエリアスたちに、したたかさを感じさせる笑顔を向けた。

「俺たちの居場所に戻りましょう。そして見届けるんです、歴史が変わる瞬間の故郷を」

「ヨウ……」

ヒレンブランドの堆肥臭い城はどうなっているんだろう。自分が残してきた工廠や、鍛冶屋のアインプロック夫妻、城のメイド……ああ、もうメイドというよりは市原悦子ばりの家政婦に近い存在になってるのかな？

すっかり変わっているであろうヒレンブランドの様子が、ヨウの心に浮かんだ。

きつと、エリアスも同じ気持ちだろう。

「さあ行きましょう、今回のパーティーが終わったとき、俺たちが最も必要とされる場所へ！」

8 - 2 変化の配当（後書き）

最後の方は早足でしたが、本編はこれで終わります。

次は登場人物のビフォーアフターアフターです。

より遠く、より高く（前書き）

最終話になります。

後日談的挿話です。

より遠く、より高く

聖暦3774年（西暦2087年）。この年は13番目の月が落下するとされた年だった。

地上の破滅が予定されていたこの年が明けるのを、サインはエルモと一緒に迎えていた。

サインたちがもう30年余り住んでいる狭い住居は、5thEでも最高の物件というわけではなかったが、サインにとってはこの上ない我が家だ。

サインたちはいま幸せだった。幼い頃から星の世界を夢見て、大人になると恒星間探検隊に参加した。

つまり、根っからの真空好き。

だから、地上に縛り付けられて魔王をやっていた150年余りの時間は得がたい体験だったとはいえ、彼女たちにとって不満な時期でもあった。

今はエルモと一緒に系内貨物船の住み込みクルーとして、一年のほとんどをたった二人で過ごしている。

それに不満はない。それどころか、近年では5thE太陽系がどんどん騒々しくなるのが煩わしく思えて、できれば近所の無人星系まで飛んでいってしまいたいほどだった。

先日のニュースで、地球連邦5thE政府主導の居住可能星系開

拓計画が発表された。願わくば第一期移民団に参加したいとエルモに相談したら、あの人はこう返してきた。

「すぐに植民星系も人でいっぱいになるさ。行くべきは サイン、昔のサジタリウスの探検で見つけた、素晴らしい星系を覚えて
いるか？」

サインの脳裏に、大昔の思い出が蘇った。

「もちろん。あそこね」

「ああ」

地球連邦がサジタリウスから接收した航宙データから、エルモ前がもって意図的に削除していたらしいある星系。

「わたしたちに自前の恒星船があれば」

ほう、と吐息をもらしたサインに、エルモは窓の向こうの真空をみつめたまま言った。

「いずれ手に入る。いずれ……」

窓の彼方には小さく輝く太陽。それは、発展を続ける内惑星系が位置する方向でもある。

彼は静かだが決然とした口調で続けた。

「俺たちは2000年近く生きてきた。あと数百年くらい待ってやるぞ」

登場人物のその後をちょっと紹介しよう。

エリアスはヒレンブランドに戻り、封建制度の崩壊で混乱する故郷の安定回復に尽力した。

苛烈な資本主義社会に突然投げ込まれた人々を救うために東奔西走する日々。

崩れ去る領主制度に別段惜しいという感情を持っていなかったのが幸いしたのか、やがて数々の業績を成し遂げ、生きた伝説になった。

数年前には、際限なく膨張するスリミア都市圏に飲み込まれた旧ヒレンブランドを去り、母子ともども除染された自然豊かなアクターボで暮らしている。

母子、というのは間違いではない。

他の世界で作られた高価な薬のおかげでメトセラ処置のダメージを癒し、今では二児の母になっている。

彼女の心にずっと暗い影を落としていた不死Ⅱ不妊化の呪縛は、ついに解けたのだ。

カリカはといえば2nd Eの学校で学び直し、聖暦3742年進

発の報復艦隊に強襲降下要員として採用された。

地球連邦方式のエンテレケイアで武装した彼女の相手をする事になるフィデスのご愁傷様だ。

ついでに、報復艦隊の進路上に偶然いるかもしれない異星種族を間違って攻撃しないよう心から祈りたい。

弱いと思つて気軽に痛めつけた種族に逆襲され得ることは、よくわかつているはずだから。

先日届いた彼女からのワームトランス経由の便りには、太陽系から43光年余り離れた名も知れぬ地味な恒星の写真が添付されていた。

その赤色矮星は、カリカの髪を思わせる色をしていた。そういえば、彼女が以前から送ってくる写真は、どれも地味な赤色矮星ばかりだった気がする。

ドゥーガル皇帝は猛勉強して生物学の学位と遺伝子工学の修士号を取得したそうだ。

数年前には、核戦争で荒れ果てた4thE世界で広大な地所を買い取り何か怪しい実験をしているようで、近頃ニュースにも取り上げられている。

決して好意的な感じで編集されていたわけではないニュースを見るとき、ひじょーに悪い予感がしたものだが、自分が自意識過剰に

なっていただけだと信じたい。そうであってくれ。

妹の千華は安住の地を探し続けている。

1stEが歩んできた歴史とほとんど変わらない2ndEにも、西宮家がちゃんと存在している。

ヨウの前では気を張って強がってみせていた千華も、実は両親や叔父のそばで普通の生活をしたかったようだ。

残念だし不幸なことだけど、妹はどうしても両親と折り合わず、結局は宇宙軍のすさんだ軍生活戻ってしまう。

休暇の折々2ndEの両親のもとを訪れているようだが、受け入れてもらえずに悩んでいた。

その悩みを溜め込まないで兄にも相談してくれればいいのに、千華にはそれがどうしてもできないようだった。

因みに2ndEのヨウは、大学浪人したあと大学在学中に1stEの戦争に巻き込まれ、不幸にも徴兵された直後に行方不明に。

どこまでも続く赤茶けた荒野に、粉雪に似たフォールアウトが降り続けるばかりの凍てついた1stEのどこかで、静かに眠っているのだろう。

因みに2ndEの千華は2030年に結婚して、90歳を超えた

今では孫に囲まれて暮らしているそうだ。

西宮耀生、この俺は先日誕生日を自宅で祝ったばかりだ。96本もロウソクを点けるもんじゃないね。せっかくの生クリームケーキが蠟だらけになってしまった。

この30年ほどは教師をやっている。教師としての自分の能力もそろそろ頭打ちのようだし、あと数年したら次のライフワークを探そうと思う。

いま考えているのは、ある異世界に飛ばされた青年の物語を文字にすること。

今や誰にも関心を払われない歴史となった感のある5th Eと地球連邦の接触と、その後の発展についての年代記も書いてみたい。この作業には、妻も大いに力になってくれるだろう。

広い庭の上では、近所のエルフ族の少年とヨウの子供たちがフーガを器用に操り、アクターボ固有種の極彩鳥を追いかけている。

ごく小さな点重力源を操って、空を自在に“落ちて”いる様はまるで天使のごとくだ。

柔らかな陽光に照らされたテラスで、ヨウは目を細めて子供たちを見守っていた。上空の三次元道路の方に子供が飛び出していかなないように、注意を払わなければならない。

まあ、インターフェースの安全システムが引き戻してくれるから、

交通事故が起こるはずないのだが。最も心配なのは、あのイタズラっ子たちが、ひどい迷惑をご近所様にかけてはしないかということだった。

ふと気がつくとき、妻に似て淡い金色の髪をしている次女がヨウに駆け寄る。そして腕をいつぱいに伸ばし、編みこんだクローバーでできた冠を頭に載せてくれた。

そして、安心と親しみが生み出す甘い声で、ナンセンスな散文に慣れない大人を困らせる。

「あのねパパはコビトの王様なの。だからフンコロガシなのねっ」

「ありがとう」

ヨウは優しく微笑んだ。次女の言葉の意味は少しもわからない。

まあいいさ、とヨウは考えた。

次女がもう少し成長したら、自分の経験を話してやろう。もしかするとその前に、小学校の授業なんかで知ってしまうかもしれないけど。

ヨウが残したボロボロのノートやマスケット銃、それにニシミヤ転炉なんかは、オムニ州政府歴史博物館のワームホール断層ケースに陳列されている。

博物館なんかは小学校の遠足の定番コースだろうから、早めに教えとくべきかもしれない。

次女が急にヨウの足下で小さく丸まると、バツと両手足を広げて友達の方へ飛び去った。

空気抵抗で次第に失速してゆき、止まる寸前にお姉ちゃんが手をつかんで引き上げることで友達の前に加わった。

かん高い笑い声が空の高みから地上に注がれる。

ヨウから分岐したブランチ……系統樹に追加された最も新しい小枝たちは、大人の心配をよそにより遠く、より高い場所に飛翔していった。

より遠く、より高く（後書き）

後日談終了。

最後に年表をUPします。

5thE 歴史年表

ブランチ・デッドエンド 5thE 歴史年表

オムニ帝国及びテクサカの歴史

聖暦・西暦

0年・B・C・1687

オムニ教の原型がつくられる。

1000頃・B・C・700頃

マケドニア王国建国

1389・B・C・298

アレクサンドロス3世がローマに大勝し、ヨーロッパからインド亜大陸までを統一。

1500頃・B・C・200頃

地中海沿岸で疫病発生。人口の半分が失われる

1600頃・B・C・100頃

イタリア北部で産業革命がはじまる

1766・79

新大陸開発による蜜月期が終わり、世界大戦勃発。その後50年間に3度の世界大戦を記録

1900頃・200頃

繁栄の時代。初の無人恒星間探査機の打ち上げその後半世紀余りは第二の大航海時代と呼ばれる恒星間有人探査の時代

1950頃・250頃

エンテレケイアの実現

2000頃・300頃

“分裂”により、天人と人の系統が分かれる。以後、人は更にリモデルドとナチュレに分裂する。
同時期、天人のはじめた戦いにより、地上は焼かれ暗黒時代を迎える。

3000頃・1300頃

人族が系統的魔術体系を構築し、次第に諸族のなかから頭角を現す。

3174・1487

スリミア大教国の教化兵団が中心となり、オムニ王国を建国。

3189・1502

オム二王国は周辺の九大教国を併合し、人族随一の大勢力となる。

3 2 7 5 ・ 1 5 8 8

炎系、治癒系、防御系魔術の基本が完成し魔道教会が技術の伝承の中心となる。

3 3 3 2 ・ 1 6 4 5

アクターボ浄化法が施行され、アクターボへの布教が促進される。また、異教徒と人族以外の異形の者から土地を奪うことが奨励された。

3 3 5 6 ・ 1 6 6 9

貴族と教会の縄張り争いの結果、魔術同盟が発足。

3 4 0 0 頃 ・ 1 7 0 0 頃

リーオ・アケチの祖先が現れ、オム二王国の軍制に影響を与える。

3 4 4 0 ・ 1 7 5 3

異形の者の英雄、セレスが率いるエルフ軍がオム二王国軍に勝利。魔法戦においてはじめて人が敗北した。

敗戦の報はオム二王国の内紛を招き、異形の者たちがアクターボにおいて独自の国家群を建設する時間的余裕を与えた。

3 4 5 1 ・ 1 7 6 4

エルフ女王セレスを中心にまとまった三氏族連合軍とオム二王国軍の小競り合いが続く。

このころ、最強の攻撃魔法トリプティックが三氏族連合軍の秘密兵器として開発された。

魔法が使えるのは、神に選ばれたるオム二教信者だけだと考えていた人族にとって、魔術レベルにおいて他族に遅れをとるのは痛手だった。

3 5 6 6 ・ 1 8 7 9

三氏族連合とオム二王国が講和。以後、両勢力間の交流が進む。

3 5 8 2 ・ 1 8 9 5

サジタリウスが帰還し、地上に降下。エルモ・サインが目覚める。現状を把握し衛星の墜落阻止を検討する。

3 5 8 5 ・ 1 8 9 8

治癒魔法の研究により、寿命を延長する魔術”メトセラ”が完成。貴族など富裕層を中心に利用が進む。

当初は貴族の世代交代と資産の相続に悪影響があると懸念されたが、メトセラ処置をすると繁殖能力を失うことが判明し、相続にまつわる問題の半分は解決した。

しかし、持てる者と持たざる者の対立が先鋭化する問題への解決策はなかなか見つからなかった。

3 5 8 5 ・ 1 8 9 8

サジタリウスクルーのエルモ、サインがオムニ王国に密かに潜入し、情報収集をはじめ。オムニ王と接触を試みるが、オムニ教会がこれを拒否。

3586・1899

地上に手足として動かせる国家テクサカを建設。

3597・1910

テクサカの斥候とオムニ氏族連合帝国がファーストコンタクト。オムニ-テクサカ戦争勃発。

3605・1918

テクサカとオムニの戦争は、テクサカ優勢であった。

オムニ氏族連合帝国が成立し、主要四氏族が協力してテクサカに当たることになる。テクサカとの戦争が激化。

3696・2009

戦争100年目の節目を控え、オムニによるテクサカ大攻勢が計画される。ヨウの転移。

3697・2010

テクサカ大攻勢は無残な失敗に終わった。

3737・2050

地球連邦宇宙軍が5thEに出現。

3774・2087

13番目の月落下予定年。

5 t h E 歴史年表（後書き）

皆さん、お読みくださり有難うございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6793o/>

ブランチ・デッドエンド

2011年9月20日21時40分発行